宮垣外遺跡（みやがいといせき）

高屋遺跡（たかやいせき）

一般国道153号飯田バイパス（３工区）建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

２０００年 3月

長野県飯田市教育委員会

１３教文　号　外
平成１４年２月

各　位

長野県教育委員会
文化財・生涯学習課長

埋蔵文化財発掘調査報告書について（送付）

時下益々御清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、このたび刊行された下記の発掘調査報告書を各　1　部送付しますので御活用ください。

記

1	宮垣外遺跡高屋遺跡	2000年3月	長野県飯田市教育委員会
2	恒川遺跡群他市内遺跡	2001年3月	長野県飯田市教育委員会
3	黒田垣外遺跡・ミカド遺跡 増田遺跡・見城垣外遺跡	2001年3月	長野県飯田市教育委員会
4	高松原遺跡	2001年3月	長野県飯田市教育委員会
5	大門原遺跡Ⅱ	2001年3月	長野県飯田市教育委員会
6	妙前遺跡	2001年3月	長野県飯田市教育委員会

文化財・生涯学習課埋蔵文化財係
直通電話　(023)235-7441

宮垣外遺跡（みやがいとい せき）

高屋遺跡（たかやい せき）

一般国道153号飯田バイパス（３工区）建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

２０００年 3月
長野県飯田市教育委員会

宮垣外遺跡・高屋遺跡調査区全景（南東から）

序

飯田市では、一般国道153号飯田バイパス建設に先立つ発掘調査を継続して実施しており、平成７年度までに松尾地区における調査を終了し、平成８年度から上郷地区について順次行ってきました。本書は、この上郷地区にあります宮垣外遺跡・高屋遺跡の発掘調査報告書です。

飯田市内には多くの遺跡がありますが、その中で注目されているものの一つとして、前方後円墳をはじめとする数多くの古墳の存在があげられます。当地域の古墳を知る上で、欠かすことのできない資料として、故市村咸人先生による『下伊那史』第二巻・第三巻があげられますが、近年の発掘調査によりさらに数は増加し、現在700基程が知られています。

県内のみならず、全国的にも注目される当地域の古墳は、当地域が古墳時代において中央と深いつながりを持っていたことの証左となっています。

特に上郷地区には、県史跡の指定を受けている飯沼天神塚古墳が所在しています。これは全長74.5ｍと伊那谷でも最大級の前方後円墳であり、今回の発掘調査地はこの古墳に程近い所にあり、周辺には他にも古墳が存在したとされています。

このような背景の中で、宮垣外遺跡・高屋遺跡が、古墳時代を中心とする時期に墓域としての性格を有していたことが発掘調査により確認され、当地域の古墳時代の様相を知る上でのいくつかの新たな貴重な資料を提供してくれることとなりました。

また、これらの遺跡の調査と併行して実施されました溝口の塚古墳は、当初比較的小さな円墳と考えられていましたが、調査の結果、50ｍ程の規模をもつ前方後円墳であることがわかり、「埋蔵されている文化財」の発掘調査の難しさを強く感じさせられることともなりました。

遺跡の記録保存としての本報告書が、その役割を十分になし得たかという問題は若干ありますが、文字として後世に残すことで、今後私たちが住むこの地域の歴史を考える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護に深い理解をいただき、ご協力いただきました関係者の皆様に深く感謝し、刊行の辞とさせていただきます。

平成12年３月

長野県飯田市教育委員会
教育長　冨　田　恭　啓

例　　言

1．本書は飯田市上郷地区における一般国道153号飯田バイパス（３工区）建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地宮垣外遺跡（溝口の塚古墳を除く）・高屋遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は建設省中部地方建設局の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は平成８年10月から平成11年２月まで実施し、整理作業及び報告書の作成は平成10・11年度に実施した。

4．調査実施にあたり、基準点測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。

5．発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号を宮垣外遺跡はＭＧＴ、高屋遺跡はＴＫＹとした。

6．本書では、以下の遺構番号を用いている。竪穴住居址－ＳＢ、掘立柱建物址－ＳＴ、周溝墓－ＳＭ、土坑・土壙墓－ＳＫ、溝址－ＳＤ、集石－ＳＩ、その他－ＳＸ

7．本書は、宮垣外遺跡・高屋遺跡のそれぞれについて遺構ごとに記載し、遺構図、遺物図、写真図版は本文末に掲載した。

8．本書の遺構図の中に記した数字は、遺構検出面・床面からの深さ（単位㎝）を表している。土層の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
石器実測図の表記←Ｓ→は研磨を、←Ｔ→は刃潰し加工を示す。

9．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により澁谷恵美子が行った。なお、金属製品のうち、馬具及び靱金具については、國學院大学大学院博士課程片山祐介が実測・記述を行った。

10．本書の遺構写真は吉川豊が撮影し、遺物写真のうち、土器・鉄器は西大寺フォト杉本和樹氏、石器は株式会社ジャステックに委託した。

11．現地での発掘調査は吉川・佐々木嘉和が行い、本書の執筆と編集は調査員の協議により澁谷が行い、小林正春が総括した。

12．ＳＫ10の馬骨については、群馬県立大間々高校教諭宮崎重雄先生に分析をお願いし、原稿を賜った。

13．本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、遺物については飯田市考古資料館、写真については飯田市上郷考古博物館が保管している。

目　　次

本 文 目 次

序

例言

目次

第Ⅰ章　経　過 …… 1

1．調査に至るまでの経過 …… 1

2．調査の経過 …… 1

3．調査組織 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 4

1．自然環境 …… 4

2．歴史環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の結果 …… 8

宮垣外遺跡 …… 8

1．調査の方法と概要 …… 8

2．基本層序 …… 8

3．遺構 …… 13

(1) 竪穴住居址 …… 13

(2) 掘立柱建物址 …… 16

(3) 周溝墓 …… 16

(4) 土坑及び土壙墓 …… 23

(5) 集石 …… 37

(6) 溝址 …… 37

(7) 周辺ピット …… 37

4．出土遺物 …… 38

(1) 土器・陶器類 …… 38

(2) 金属製品 …… 39

(3) 石製品 …… 43

(4) 石器 …… 44

(5) 馬歯骨 …… 45

5．遺構外出土遺物 …… 46

高屋遺跡 …… 48

1．調査の方法と概要 …… 48

2．基本層序 …… 48

3．遺構 …… 48

(1) 竪穴住居址 …… 48

(2) 掘立柱建物址 …… 50

(3) 周溝墓 …… 51

(4) 土坑及び土壙墓 …… 52

(5) 溝址 …… 58

(6) その他の遺構 …… 59

4．出土遺物 …… 59

(1) 土器・陶器類 …… 59

(2) 金属製品 …… 60

(3) 石製品 …… 60

(4) 石器 …… 60

(5) 馬歯骨 …… 61

5．遺構外出土遺物 …… 61

第Ⅳ章　まとめ …… 62

附編 …… 70

1．ＳＫ10出土馬骨について …… 70

2．ＳＭ03（ＳＫ64）出土馬具について … 71

3．ＳＫ18出土鉄製鞦金具について …… 78

図版目次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図 … 7
挿図2　ＭＧＴ基本層序 …… 8
挿図3　基準メッシュ図区画調査位置 …… 9
挿図4　宮垣外遺跡・高屋遺跡調査位置 … 10
挿図5　宮垣外遺跡・高屋遺跡遺構分布図 … 11
挿図6　ＴＫＹ基本層序 …… 48
挿図7　弥生～古墳時代遺構分布図・馬歯骨出土位置図 …… 65
挿図8　ＳＫ64出土馬骨遺存部位 …… 70
挿図9　面繋復元図 …… 71
挿図10　鐙・尻繋復元図 …… 72
挿図11　伊那谷出土ｆ字鏡板付轡 …… 75
挿図12　伊那谷出土鐙 …… 76
挿図13　胡籙金具参考資料 …… 79

宮垣外遺跡（ＭＧＴ）遺構図版 …… 85
第1図　ＳＢ01～04
第2図　ＳＢ05・09～13
第3図　ＳＢ14～17
第4図　ＳＴ01～04・06
第5図　ＳＴ07～09
第6図　ＳＭ03・ＳＫ64
第7図　ＳＫ64遺物出土状況
第8図　ＳＫ64馬具出土位置図
第9図　ＳＭ04
第10図　ＳＭ06
第11図　ＳＭ07
第12図　ＳＭ07遺物出土状況
第13図　ＳＭ08・11
第14図　ＳＭ10・12
第15図　ＳＭ15
第16図　ＳＭ15遺物出土状況
第17図　ＳＭ16・17・20
第18図　ＳＭ18
第19図　ＳＭ18遺物出土状況
第20図　ＳＭ19・同遺物出土状況
第21図　ＳＭ21・22・同遺物出土状況
第22図　ＳＫ01～09
第23図　ＳＫ10・11・68
第24図　ＳＫ12～17・19・20・22
第25図　ＳＫ18・同遺物出土状況・21
第26図　ＳＫ23～30
第27図　ＳＫ31～36・38・39
第28図　ＳＫ42・45～52・56
第29図　ＳＫ53～55・57～62
第30図　ＳＫ63・65～67・69～75
第31図　ＳＫ76～82・ＳＩ01
第32図　ＳＤ01・02・04
第33図　ＳＤ03・05・09・10
第34図　Ｖ区グリットピット（1）
第35図　Ｖ区グリットピット（2）
第36図　Ｖ区グリットピット（3）
第37図　Ｖ区グリットピット（4）
第38図　Ｖ区グリットピット（5）
第39図　Ｖ区グリットピット（6）
第40図　Ｖ区グリットピット（7）
第41図　Ｖ区グリットピット（8）

高屋遺跡（ＴＫＹ）遺構図版 …… 126
第42図　ＳＢ01～04
第43図　ＳＢ05～09
第44図　ＳＴ01～04
第45図　ＳＴ05～08
第46図　ＳＭ01・02
第47図　ＳＭ08
第48図　ＳＭ09・10
第49図　ＳＫ01～11
第50図　ＳＫ12～14・21・22・24～27
第51図　ＳＫ28～33・35～38
第52図　ＳＤ03・05・06
第53図　ＳＤ04
第54図　ＳＤ07～09・11～14

第55図　ＳＤ15・16・ＳＸ01

宮垣外遺跡遺物図版 …… 143
第56図　ＳＢ04・12・15・ＳＭ03出土土器・陶器
第57図　ＳＭ04出土土器
第58図　ＳＭ06・07・10・15出土土器
第59図　ＳＭ07出土土器
第60図　ＳＭ18出土土器
第61図　ＳＭ19～21出土土器
第62図　ＳＭ22出土土器
第63図　ＳＫ04・20・24・29・31・51・54・55・57・63・77・82出土土器・陶器
第64図　ＳＭ04・遺構外出土土器・陶器
第65図　ＳＭ03出土金属製品
第66図　ＳＭ03・04・07出土金属製品
第67図　ＳＫ64出土馬具
第68図　ＳＫ64出土馬具
第69図　ＳＫ64出土馬具
第70図　ＳＫ18出土金属製品
第71図　ＳＫ18出土金属製品
第72図　ＳＭ19・21・ＳＫ19・遺構外出土金属製品　ＳＭ04出土石製品
第73図　ＳＭ07出土石製品
第74図　ＳＢ03・ＳＫ54・76・81・遺構外出土銭貨
第75図　ＳＢ04・15・ＳＫ13・34・36・57出土石器
第76図　ＳＭ03・04出土石器
第77図　ＳＭ04出土石器
第78図　ＳＭ04・06出土石器
第79図　ＳＭ07・12・15・18出土石器
第80図　ＳＭ22・ＳＫ82・ＳＤ01・09出土石器
第81図　遺構外出土石器
第82図　遺構外出土石器
第83図　遺構外出土石器

高屋遺跡遺物図版 …… 171
第84図　ＳＢ01・08・ＳＭ08・ＳＫ25・29～31・ＳＤ06・11出土土器・陶器
第85図　ＳＤ04出土土器・陶器
第86図　ＳＸ01・遺構外出土土器
第87図　遺構外出土陶器　ＳＢ08・ＳＤ04・06出土金属製品・石製品
第88図　ＳＭ08・ＳＫ21・24・32・36・ＳＤ04出土石器
第89図　ＳＤ04・06出土石器
第90図　ＳＤ11・12・遺構外出土石器

写真図版目次

巻頭　宮垣外遺跡・高屋遺跡調査区全景（南東から）

宮垣外遺跡遺構写真図版 …… 181
図版１　宮垣外遺跡東側調査区・西側調査区
図版２　ＳＢ02・04・09
図版３　ＳＢ10・12・13
図版４　ＳＢ14～16
図版５　ＳＢ11・17
図版６　ＳＭ03・同東側周溝上層・出土遺物
図版７　ＳＫ64・同出土馬歯・出土馬具
図版８　ＳＭ04・同出土遺物１，２・同南東側
図版９　ＳＭ06・08・10
図版10　ＳＭ07・同出土遺物１，２
図版11　ＳＭ07出土遺物３，４，５
図版12　ＳＭ11・12・16
図版13　ＳＭ15・同出土馬歯・同南東側
図版14　ＳＭ18・同出土遺物１，２
図版15　ＳＭ17・19・同出土遺物
図版16　ＳＭ20～22（つくね塚古墳）
図版17　ＳＫ10出土馬骨・04・07
図版18　ＳＫ12・13・15

図版19　ＳＫ11出土馬歯・18・同出土鉄鏃群
図版20　ＳＫ19・21・22
図版21　ＳＫ23・24・45
図版22　ＳＫ46～48
図版23　ＳＫ50・55・61
図版24　ＳＫ65～67
図版25　ＳＫ68・69・74
図版26　ＳＫ77・同出土遺物・78
図版27　ＳＫ80・81・ＳＩ01
図版28　ＳＤ01・05・09

高屋遺跡遺構写真図版 …… 209
図版29　ＳＢ02・08・ＳＴ04・06・ＳＤ11
図版30　ＳＴ02近景・ＳＭ01・02
図版31　ＳＫ01～03
図版32　ＳＫ04・09土層・14
図版33　ＳＫ21・27～29
図版34　ＳＫ30～32
図版35　ＳＫ33・36・37
図版36　ＳＤ04・09

宮垣外遺跡出土遺物写真図版 …… 217
図版37　ＳＭ03・04出土土師器・須恵器
図版38　ＳＭ04・07出土土師器・須恵器
図版39　ＳＭ07・15・18出土土師器・須恵器
図版40　ＳＭ18・19・21・22出土土師器・須恵器
図版41　ＳＭ22・ＳＫ24・31・77・82・遺構外出土土師器・陶器、ＳＫ19出土帯金具
図版42　ＳＭ03・04・07・19・21・ＳＫ18・遺構外出土鉄製品
図版43　ＳＭ03・遺構外出土鉄製品、ＭＧＴ・ＴＫＹ玉類・金環・石製品
図版44　ＳＫ64出土馬具類（保存処理前）
図版45　ＳＫ64出土馬具類（保存処理後）
図版46　ＳＢ04・15・ＳＫ13・34・36・57出土石器
図版47　ＳＭ03・04・06出土石器
図版48　ＳＭ07・12・15・18・22・ＳＫ82出土石器
図版49　ＳＤ01・09・遺構外出土石器　銭貨
図版50　遺構外出土石器
図版51　ＳＫ10出土馬骨（保存処理後）
図版52　ＳＫ10出土馬骨（保存処理後）

高屋遺跡出土遺物写真図版 …… 233
図版53　ＳＢ01・04・08・ＳＫ30・ＳＤ04・遺構外出土須恵器・陶器
図版54　ＳＭ08・ＳＫ21・24・32・ＳＤ04出土石器・石製品
図版55　ＳＤ06・11・12・遺構外出土石器・石製品
図版56　重機作業風景　調査風景

第Ⅰ章　経　　過

1．調査に至るまでの経過

一般国道153号飯田バイパス建設に先立ち実施してきた埋蔵文化財発掘調査は、平成元年度までに、２工区である飯田市鼎地区まで終了した。

３工区は、バイパス建設工事の最終工区であり、飯田市松尾地区と上郷地区が該当する。発掘調査は、松尾地区から順次用地買収の状況に従って実施していった。平成２年度は八幡原遺跡、平成４年度は松尾北の原遺跡、茶柄山古墳群、平成５年度は茶柄山古墳群、平成６年度は上の城跡、平成７年度は茶柄山古墳群について実施し、松尾地区の現地での発掘調査を終了した。

続く上郷地区においても、建設予定地が埋蔵文化財包蔵地宮垣外遺跡・高屋遺跡の範囲内になることから、その保護について建設省飯田国道工事事務所、長野県教育委員会文化課、飯田市教育委員会の３者による現地協議を実施した。宮垣外遺跡には溝口の塚古墳ほか数基の古墳が所在し、高屋遺跡には番神塚古墳がかつてあったとされる。こうした状況から、本発掘調査を実施することとなった。

2．調査の経過

上郷地区でも松尾地区と同様に、発掘調査が用地取得済みの箇所から順次入るという状況のため、溝口の塚古墳と宮垣外遺跡・高屋遺跡それぞれについての調査を並行して実施している。従って１つの遺構をいくつかに分けて何度かにわたって調査をしている場合もある。調査区番号は、宮垣外遺跡・高屋遺跡それぞれについて設定している。

年度別の調査状況は次のとおりである。

平成８年度は、溝口の塚古墳の墳丘測量と写真撮影を行い、宮垣外遺跡では平成８年10月29日に資材を搬入し、溝口の塚古墳の周溝にあたる箇所を調査した。高屋遺跡では平成９年２月３日から番神塚古墳があったとされる場所に隣接する上郷別府1695－１番地において、番神塚古墳の周溝と想定される部分についてトレンチを掘り、３月３日に表土剥ぎを行い、３月18日まで現場作業を行った。

平成９年度は、溝口の塚古墳が二重の周溝をもつ前方後円墳であることが確認されたことから、主体部を中心に集中的に調査を行った。宮垣外遺跡では平成９年５月16日から表土剥ぎを行い、平成９年度は12月26日まで、平成10年度には１月８日から３月19日まで現場作業を行った。高屋遺跡では平成９年５月６日から掘り下げを行い、６月24日まで現場作業を行った。

平成10年度は、宮垣外遺跡では平成10年７月７日から９月８日、12月18日から25日、平成11年１月６日から２月12日まで作業を行い、現場作業を終了した。高屋遺跡では平成10年７月22日から30日、11月30日から12月18日、平成11年２月２日から５日まで実測調査を実施した。整理作業は宮垣外遺跡・高屋遺跡について行った。

平成11年度は整理作業のみを行い、溝口の塚古墳を除いた宮垣外遺跡・高屋遺跡について報告書を刊行した。

3．調査組織

調査主体者　飯田市教育委員会　教育長　小林恭之助（～平成11年12月）
冨田　泰啓（平成11年12月～）

調査担当者　吉川　豊　佐々木嘉和
上沼由彦（長野県埋蔵文化財センター派遣　平成７～８年度）

調　査　員　小林正春　山下誠一　馬場保之　澁谷恵美子　吉川金利　下平博行　伊藤尚志
福澤好晃　坂井勇雄
西山克己（長野県埋蔵文化財センター派遣　平成10年度）
藤原直人（長野県埋蔵文化財センター派遣　平成11年度）

作　業　員　新井幸子　新井ゆり子　池田幸子　伊坪　節　伊藤孝人　伊東裕子　井上恵資
太田沢男　岡田直人　岡田紀子　片山祐介　金井照子　金子裕子　唐沢古千代
北沢富久男　北原　裕　木下早苗　木下正史　木下力弥　木下玲子　熊谷義章
熊谷三代吉　小池千津子　小島康夫　小平晴美　小平不二子　小平まなみ　小林千枝
斉藤徳子　佐々木一平　佐々木文茂　佐々木真奈美　佐々木美千枝　佐藤知代子
清水三郎　下澤和央　下平由美子　代田和登　杉山春樹　関島真由美　瀬古郁保
高木純子　高橋恭子　竹本常子　橋千賀子　田中　薫　田中博人　筒井千恵子
中沢温子　仲田昭平　中田　恵　中平けい子　中平隆雄　仲村　信　中山敏子
鳴海紀彦　服部光男　羽生俊郎　林勢紀子　林ひとみ　原　昭子　原田四郎八
樋本宣子　平栗陽子　福沢育子　福沢幸子　福沢トシ子　藤田浩明　古林登志子
牧内　修　牧内喜久子　牧内八代　正木実重子　松下省吾　松下省三　松下成司
松下博子　松下光利　松島直美　松本恭子　三浦厚子　三浦照於　南井規子
宮内真理子　森藤美知子　森山律子　柳沢謙二　吉川悦子　吉川紀美子　吉川正実
米山俊輔

指　　導　奈良国立文化財研究所
長野県教育委員会文化財・生涯学習課
長野県立歴史館

事　務　局　飯田市教育委員会
関口和雄　（教育次長）
横田　穆　（社会教育課長　～平成８年６月）
小林正春　（　〃　文化係長　～平成８年６月）
吉川　豊　（　〃　文 化 係　～平成８年６月）
山下誠一　（　〃　〃　〃　）
馬場保之　（　〃　〃　〃　）
吉川金利　（　〃　〃　〃　）
下平博行　（　〃　〃　〃　）
伊藤尚志　（　〃　〃　〃　）

福澤好晃　（　〃　〃　〃　）
岡田茂子　（　〃　社会教育係　～平成８年６月）

矢沢与平　（博物館課長　～平成８年度）
小畑伊之助（　〃　平成９年度～）
麦島博晴　（　〃　庶務係長　平成11年度）
小林正春　（　〃　埋蔵文化財係長）
吉川　豊　（　〃　埋蔵文化財係　～平成10年度）
山下誠一　（　〃　〃　～平成10年度）
馬場保之　（　〃　〃　）
澁谷恵美子（　〃　〃　平成11年度～）
吉川金利　（　〃　〃　）
下平博行　（　〃　〃　）
伊藤尚志　（　〃　〃　）
福澤好晃　（　〃　〃　）
坂井勇雄　（　〃　〃　平成11年度～）
牧内　功　（　〃　庶務係　平成８年７月～平成10年度）
松山登代子（　〃　〃　平成11年度～）

第Ⅱ章　遺跡の環境

1．自然環境

長野県飯田市は、長野県南部を南北に並走する伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷の南端に位置し、天竜川はその中央部を南流する。

伊那谷の地形は、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴う盆地と大きな段丘崖とによって構成された複雑な段丘地形であり、さらに天竜川の浸食によって形成された河岸段丘とによって特徴づけられている。この段丘は、『下伊那の地質解説』によると、火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱの５段階に編年されている。

飯田市上郷地区は、飯田市街地の北隣りに位置し、北は飯田市座光寺、東は天竜川を挟んで下伊那郡喬木村、南は飯田市松尾地区と境を接する。

上郷地区は、木曽山脈の支脈、通称野底山塊の標高1500ｍ程を最高点に飯田松川が天竜川に合流する380ｍ程に至るまでの間に位置し、その比高差は1200ｍ程になる。

山間部を除いた地形は、標高500～650ｍ前後のローム層に覆われた台地である高位段丘と、地区内を南北にのびる断層によって形成される比高差約50ｍの大きな段丘崖を境として俗に上段（うわだん）と呼ばれる洪積層の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積層の低位段丘Ⅱとに分けられ、特に低位段丘Ⅱにおいては模式地となっている。前者には黒田地籍が、後者には別府・飯沼地籍が該当する。

低位段丘Ⅱは標高380～430ｍ程度で、段丘崖下から天竜川までの間を占め、豊かな利水を活用した水田地帯が展開する。この中に５～６面の小段丘があり、それぞれ２～５ｍの比高差がある。それぞれの段丘面の広さは一様でないが、いずれも南北方向の段丘崖が確認できる。しかし段丘崖からの小河川により、小扇状地が形成されている場合があり、その部分では段丘崖の把握は困難となっている。これらの小河川や段丘崖直下には湧水起源の湿地帯を有する場合が多い。

さらに、低位段丘Ⅱは天竜川現河床よりやや高い海抜398ｍ～405ｍの南条面、さらに海抜407ｍ～418ｍの別府面、その上段の飯沼面に大別される。また、海抜398ｍである天竜川の現河床面との比高差３～30ｍを測り、段丘崖下を中心に湧水が豊富である。そのため、かつての沼沢の窪地は、現在も水田地帯となっている。この低位段丘Ⅱの中央部を国道153号が、突端部を農免道路が南北に走行する。

気候面でみれば、平均気温は13℃、年間降水量も1,600㎜程度で、温和な土地柄といえる。特に低位段丘Ⅱ一帯は、南北にのびる段丘崖によって、冬の西風から守られる格好になっていることも温暖な要因の一つにあげられる。

宮垣外遺跡・高屋遺跡は、飯田市上郷別府地籍に所在し、地質的には飯田松川の氾濫原を南に見下ろす標高427ｍの低位段丘Ⅱ飯沼面にあたる。この下の南条面から天竜川にかけては現在多くが水田地帯となっており、東に生産域をひかえた段丘上に所在する遺跡といえる。

2．歴史環境

上郷地区の遺跡を概観すると、天竜川・野底川の氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、大正13年鳥居龍蔵博士が『下伊那の先史及び原始時代　図版』を編纂するのに先立ち、市村咸人氏と郡下を探訪してから特に知られるようになった。戦後は市村・大澤和夫両氏を中心に『下伊那史』第二・三巻、『信濃史料』第一巻、『全国遺跡地図　長野県版』を刊行する過程で、上郷地区内の遺跡や古墳を明確にしてきた。昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興氏が『上郷史』で、また岡田正彦氏が『長野県史　考古資料編』で遺跡分布図一覧表の作成にあたった。昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり遺跡詳細分布調査を実施し、平成５年度に飯田市との合併後、平成７年度に飯田市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査が行われている。

上郷地区の遺跡を概観すると、その大半が複合遺跡であるが、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていない。当地区最古の文化は、上段の姫宮遺跡や黒田大明神原遺跡出土の表裏縄文土器と、黒田柏原遺跡（柏原Ａ遺跡）出土の石器剥片、宮垣外遺跡出土の有舌尖頭器などにより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。縄文時代早期になると、比較的山麓部に位置する八王子遺跡など５遺跡から、押型文土器・繊維を含む条痕文土器・撚糸文土器が出土しており、黒田大明神原・西浦遺跡の発掘調査において概期の住居址が確認されている。

縄文時代前期の遺跡は、姫宮・日影林・高松原・黒田大明神原遺跡などがある。以前は、遺跡の分布域は野底山系の山麓部から低位段丘Ｉにあり、下段の飯沼・別府地籍から発見されず、沖積地帯への進出はなかったと考えられてきた。しかし、昭和62年度に実施された矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が確認されたことで、段丘地形の大半に人々の営みのあったことが窺える。

縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱの南条面下段を除き、上郷地区全域に遺物の散布が確認されており、人々の生活の舞台が拡散したことを示している。これまで調査された主なものとしては黒田大明神原・平畑・増田・垣外・丹保遺跡などがあげられる。

縄文時代後・晩期になると遺跡は極端に減少し、特に後期では上段を中心として日影林遺跡でまとまった資料が得られているが、晩期については矢崎遺跡に該当資料があるほかは詳細は不明である。

弥生時代は、稲作を主体とする文化であり、飯田・下伊那地方へは東海地方から東漸したものと考えられる。その始まりの時期として、矢崎遺跡から出土した条痕文土器は文化の波及を考える上で貴重な資料といえる。稲作が定着する中期になると、丹保・堂垣外遺跡など下段地帯に遺跡が拡大する。南条面に立地する飯沼棚田遺跡では、弥生時代の水田址が発見されている。概期の遺跡の大半は、低位段丘Ⅱの飯沼・別府地籍に集中することから、この一帯にみられる湿地帯を利用しての稲作が類推される。

弥生時代後期になると、低位段丘面上の遺跡はより発達し、さらに高位段丘面まで遺跡が拡大し、水田による稲作ばかりでなく、雑穀類の畑作も生業の一翼を担ったと考えられる。調査された遺跡も多く、上段の高松原・垣外・原の城遺跡、下段の丹保・兼田遺跡などがある。なかでも、丹保遺跡は後期全般にわたる拠点集落の一つといえる。

古墳時代においては、上郷地区の古墳は現在のところ消滅した古墳を含めて３５基が確認されており、その多くは別府地籍の台地端に立地する。中でも、県史跡に指定されている飯沼天神塚古墳は、全長74.5ｍの伊那谷最大級の前方後円墳として知られており、細長い羨道部を特徴とする横穴式石室を有する。

また、雲彩寺古墳の南東約180mに位置する溝口の塚古墳が、平成8・9年度に実施した発掘調査によって、竪穴式石室を有する墳丘長約50mの二重周溝をもつ前方後円墳であることが確認されたことで、5世紀後半から6世紀にかけての上郷地区の首長墓系列を追うことができ、当地区の重要性も再認識されることとなった。集落そのものの調査例は少なく、実態は不明であるが、低位段丘においては段丘端部を墓域とし、豊かな経済基盤の想定される下段の地域を中心に展開していたものと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は60数カ所を数え、ほぼ地区内全域に分布する。特に、低位段丘Ⅱに位置する堂垣外遺跡は古墳時代から平安時代までの集落であるが、遺物・遺構から伊那郡衙との強い結びつきが考えられる。また矢崎遺跡では、平安時代の住居址が確認されるとともに、大規模な鍛冶遺構と大量のフイゴ羽口や鉄滓が検出され、その役割が注目されている。この低位段丘Ⅱ一帯は、古代伊那郡衙址である座光寺地区の恒川遺跡群と同一段丘面にあたり、古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測され、古代史研究上注目すべき地域であるといえる。また、海抜410mラインは都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地である。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』などの文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末には近衛家の郡戸庄であった。今回調査地の所在する別府地名がそうした荘園等に関わるものであることも考えられる。

このように、低位段丘Ⅱの一帯は、上郷地区でも密に遺跡が立地する箇所といえ、縄文時代以降、生産域をひかえた生活域として、あるいは墓域として連続して人間の足跡を追うことができる。

宮垣外遺跡は、縄文時代から中世にわたる遺物が表面採集され、以前から遺跡の存在は知られていた。平成7年度の飯田市教育委員会による遺跡詳細分布調査でも多くの遺物が採取され、かなりの密度での遺構の分布が改めて予想された。また、『下伊那史』第二巻によると、同遺跡内には、溝口の塚（水口の塚）古墳、つくね塚古墳、宮の前垣外古墳が所在するとされる。一般国道153号飯田バイパス建設予定地内には溝口の塚（水口の塚）古墳、つくね塚古墳が含まれており、これにかかわる遺構の存在が想定された。

高屋遺跡は、宮垣外遺跡の北側にあり、かつては湿地であったと考えられる窪地を挟んで接している。上郷町教育委員会で実施した詳細分布調査では、平安時代の遺物が多く採集されており、概期の遺跡としてはかなりの規模のものと考えられた。また古墳時代の遺物も多く、『下伊那史』第二巻によると、同遺跡内には前方後円墳とされる番神塚古墳、円墳の弓矢古墳が所在するとされ、建設予定地は、番神塚古墳があったとされる一画に隣接している。

1．宮垣外遺跡　2．高屋遺跡　3．溝口の塚古墳　4．天神塚（雲彩寺）古墳　5．宮の前垣外古墳
6．中井遺跡　7．化石遺跡　8．古城跡　9．堀尻遺跡　10．芝崎遺跡　11．北浦遺跡
12．飯沼南遺跡　13．高松原遺跡　14．見晴城跡　15．飯沼棚田遺跡　16．高屋下遺跡　17．矢崎遺跡
18．兼田遺跡　19．久保古墳　20．上溝遺跡　21．上溝羽場遺跡

挿図１　調査遺跡および周辺遺跡位置図

第Ⅲ章　調査の結果

宮垣外遺跡（ＭＧＴ）

１．調査の方法と概要

道路用地の取得状況に応じて調査を実施したため、調査区はⅠ～Ⅷ区に分かれている。よって、同一遺構が複数の調査区にまたがっている場合もある。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については、１：5000大縮尺地形図（国土基本図）の区画に準ずる。（社団法人日本測量協会1969『国土基本図図式　同適用規程』参照）。

本調査地の区画は挿図２で示したようにＬＣ－85、２－28、35、36、43、44である。

一般国道153号飯田バイパス建設にかかわる調査と並行して、バイパス建設地の隣接地で補助金（市内遺跡緊急調査）による調査と民間開発に伴う調査を実施している。これらの調査を合わせて宮垣外遺跡において検出された遺構は以下のとおりであるが、そのうち本報告書に記載のないものは、上述の補助事業及び民間開発に伴う発掘調査によるものである。

検出された遺構数は以下のとおりである。

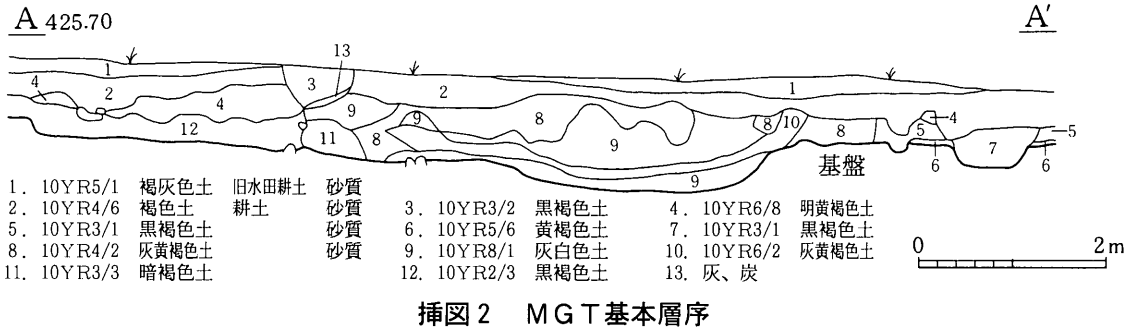
竪穴住居址（ＳＢ）	１７	土坑（土壙）（ＳＫ）	８２
掘立柱建物址（ＳＴ）	９	集石（ＳＩ）	１
周溝墓（ＳＭ）	１６	溝址（ＳＤ）	１０

このうち、ＳＢ08、ＳＫ40・41・43・44、ＳＤ08は個人住宅建設（補助事業）に先立つ調査、ＳＢ06・07、ＳＴ05、ＳＫ37、ＳＤ06・07は民間開発に先立つ調査のものである。

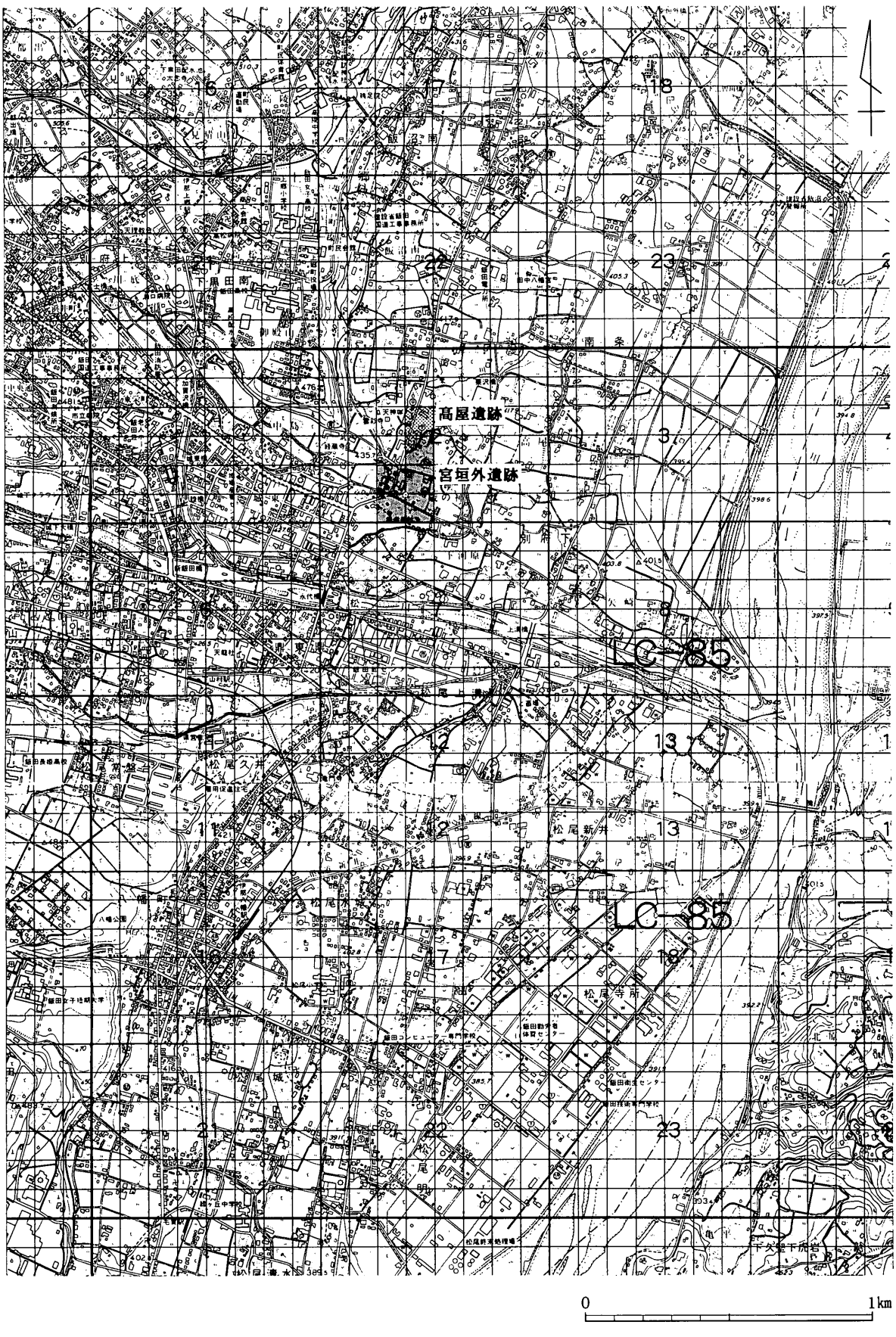
２．基本層序

基本層序を挿図２で示した。

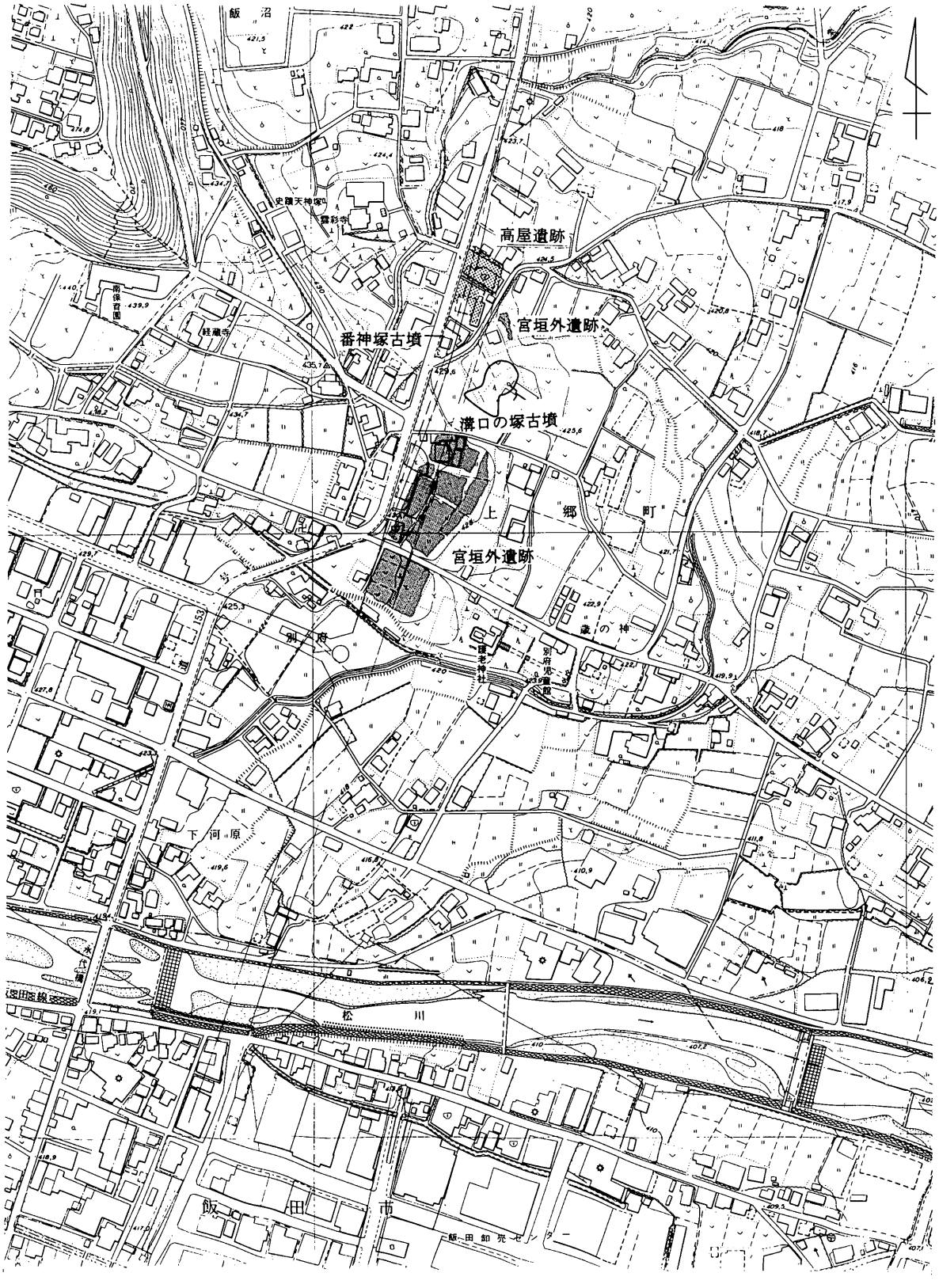
地表下の水田耕土以下は、0.8～1.2ｍの厚さで黒色土系の砂質土が複数堆積する。その下部に基盤となる比較的粗粒な黄色砂土があり、部分的に礫石が混じる箇所がある。これは野底川起源の堆積土といえ、自然堤防もしくは扇端部といった地形形成も類推される。大半の遺構は、黒色土と基盤の黄色砂土との境で検出した。



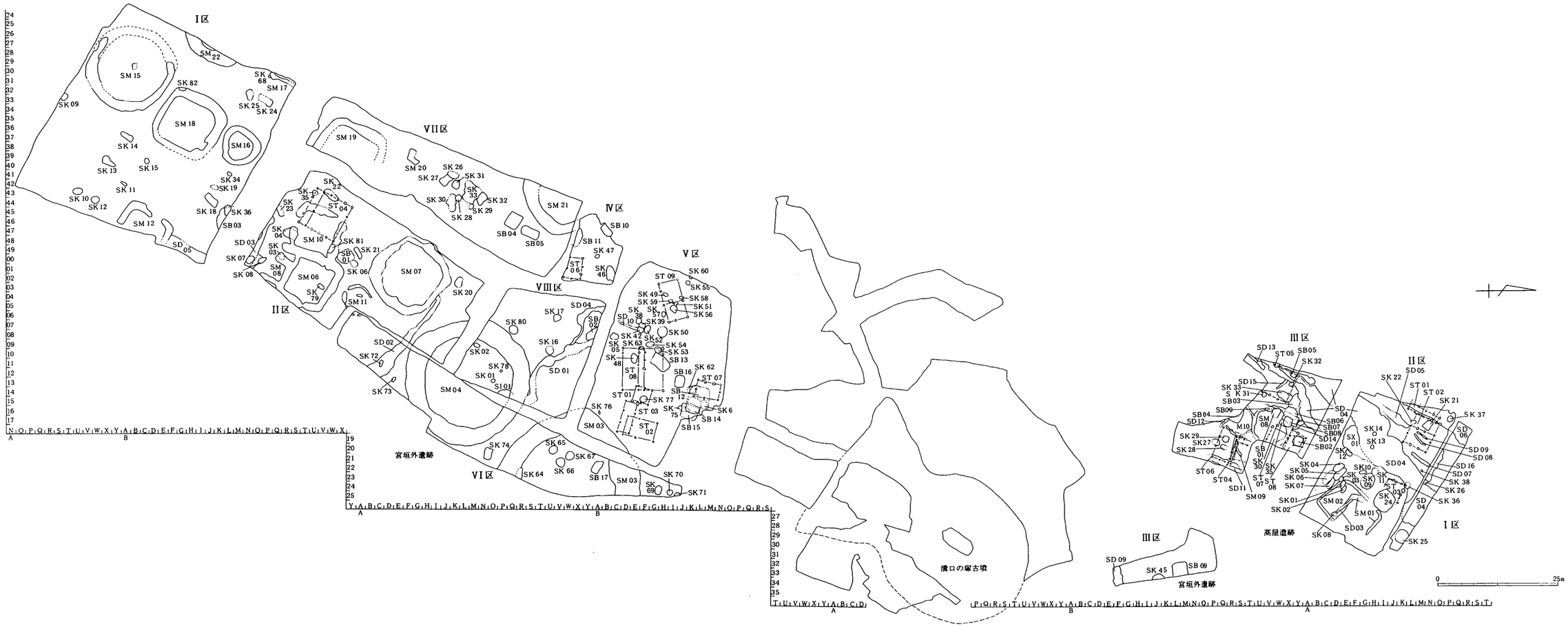
挿図２　ＭＧＴ基本層序



挿図３　基準メッシュ図区画調査位置



挿図４　宮垣外遺跡・高屋遺跡調査位置



挿図５　宮垣外遺跡・高屋遺跡遺構分布図

3．遺構

(1) 竪穴住居址（ＳＢ）

住居址としてとらえたものは14軒あるが、遺物が少なく、時期決定の根拠に乏しい。多くは中世のいわゆる方形竪穴といわれるものとみられ、住居址というより建物址という名称の方が適切といえる。後述する掘立柱建物址との関連が考えられる。

① ＳＢ01（第１図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＸ00を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ06に切られる。3.3×3.05ｍの不整方形を呈し、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ30°Ｗを示す。壁高は４～14㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴と考えられる。

遺　　物　なし

時　　期　不明

② ＳＢ02（第１図、図版２）

遺　　構　Ⅷ区ＡＹ08を中心に検出し、全体の２/３程を調査した。ＳＤ01に切られる。北側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で2.8ｍの方形を呈し、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ28°Ｗを示す。壁高は８～14㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

③ ＳＢ03（第１図）

遺　　構　Ⅰ区ＢＫ46を中心に検出し、一部を調査した。ＳＫ36に切られる。北側の大部分が調査区外となることから、規模・プランは不明である。主柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は５～13㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　覆土中から、銅銭「元豊通宝」が出土している。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

④ ＳＢ04（第１図、図版２）

遺　　構　Ⅶ区ＡＱ45を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。3.26×2.9ｍの方形を呈する。長軸方向はＮ40°Ｅを示す。壁高は７～24㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。東側隅を除くほぼ床面全体に石が敷かれたような状態がみられる。それらを取り除いた下にはいくつかのピットがあったが、主柱穴・炉址等は確認できなかった。覆土は自然埋没の状況を示す。形態から方形竪穴とみられる。

遺　　物　石の間から大平鉢、常滑甕片、石臼が出土している。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

⑤　ＳＢ05（第２図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＳ47を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。3.96×2.04ｍの不整長方形プランで、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ30°Ｅを示す。壁高は12～22㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥　ＳＢ09（第２図、図版２）

遺　　構　Ⅲ区ＢＭ32を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。東側が調査区外となることから、規模は現状で短軸3.15ｍになり、方形を呈するものとみられる。床面にいくつかのピットがあったが、主柱穴と考えられるものは確認できなかった。炉址等も確認できず、主軸方向は不明である。壁高は８～15㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺　　物　なし

時　　期　遺構の形態から中世とみられる。

⑦　ＳＢ10（第２図、図版３）

遺　　構　Ⅳ区ＢＢ47を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。北側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で短軸3.0ｍになり、方形を呈するものとみられる。主柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は５～37㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑧　ＳＢ11（第２図、図版５）

遺　　構　Ⅳ区ＡＸ48を中心に検出し、一部を調査した。重複する遺構はない。南側の大部分が調査区外となることから、規模は現状で3.9ｍになり、方形を呈するものとみられる。主柱穴・炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は９～14㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑨　ＳＢ12（第２図、図版３）

遺　　構　Ⅴ区ＢＬ15を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ62を切り、ＳＢ14・ＳＫ61・ＳＴ07に切られる。重複する遺構が多いため、残りは良くないが、4.87×4.35ｍの方形プランを呈する。主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ15°Ｅを示す。壁高は３～15㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　覆土中から古瀬戸の陶器（Ⅲ）が出土しており、ＳＢ15からのものと接合する。

時　　期　中世か

⑩　ＳＢ13（第２図、図版３）

遺　　構　Ⅴ区ＢＧ11を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ53に切られる。3.99×2.75ｍの隅丸長方形を呈し、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ42°Ｅを示す。壁高は４～14㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺　　物　なし

時　　期　遺構の形態から中世以降とみられる。

⑪　ＳＢ14（第３図、図版４）

遺　　構　Ⅴ区ＢＫ16を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ12・ＳＢ15・ＳＫ61・ＳＫ75を切る。3.21×2.85ｍの隅丸方形を呈し、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ20°Ｅを示す。壁高は８～30㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。南西隅にたたき状の硬化面が確認された。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑫　ＳＢ15（第３図、図版４）

遺　　構　Ⅴ区ＢＫ16を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＢ14・ＳＫ75に切られる。3.87×2.83ｍの隅丸長方形を呈し、主柱穴・炉址等は確認できず、長軸方向はＮ58°Ｗを示す。壁高は９～32㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　覆土中からＳＢ12のものと接合する古瀬戸の陶器（Ⅲ）、砥石が出土している。

時　　期　中世か

⑬　ＳＢ16（第３図、図版４）

遺　　構　Ⅴ区ＢＪ13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。2.45×2.08ｍの隅丸方形を呈する。長軸方向はＮ80°Ｗを示す。壁高は55～105㎝を測り、壁面はやや傾斜をなす。壁面直下に10本の柱穴が２間×３間で並ぶ。柱間は、梁行0.5～0.7ｍ、桁行は0.6～0.7ｍになる。炉址等は確認できなかった。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺　　物　なし

時　　期　遺構の形態から中世とみられる。

⑭　ＳＢ17（ＳＫ68）（第３図、図版５）

遺　　構　Ⅵ区ＢＡ22を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ03を切る。規模は3.07×1.57の長方形を呈する。長軸方向はＮ55°Ｗを示す。壁高は96～99㎝を測り、壁面はやや傾斜をなす。壁面直下に６本の柱穴が１×２間で並ぶ。柱間は梁行0.93～1.09ｍ、桁行0.8～0.92ｍになる。炉跡等は確認できな

かった。北西側に出入口施設として、階段状に傾斜する張り出し部を有する。覆土は自然埋没の状況を示す。方形竪穴とみられる。

遺　　物　なし

時　　期　遺構の形態から中世とみられる。

(2) 掘立柱建物址（ＳＴ）（第４・５図）

掘立柱建物址に明確に伴う遺物はなく、時期決定の根拠となるものはほとんどないが、周辺の状況等からほとんどが中世以降になるものとみられる。

遺構No.	検出位置	重複関係	間　数	規　模（m）（梁行×桁行）	柱　間（m）	柱の深さ（cm）
０１	Ⅴ区ＢＦ14	－	１×２	3.2×3.5	梁3.0～3.2 桁1.7～1.9	23～50
０２	Ⅴ区ＢＥ17	－	１×２	4.0×6.5	梁2.5～4.0 桁4.0	11～25
０３	Ⅴ区ＢＥ16	－	１×３	2.6×6.7	梁2.5～2.6 桁1.9～2.6	６～67
０４	Ⅱ区ＢＷ44	ＳＫ22を切る	４×３	6.6×8.2	梁4.5 桁1.5～1.6	15～36
０６	Ⅳ区ＡＸ02	－	２×３	4.4×3.7＋	梁1.7～2.0 桁1.0～1.8	９～41
０７	Ⅴ区ＢＭ14	ＳＫ12・62を切る	２×３	3.7×5.2	梁1.6～2.0 桁1.7～2.9	13～39
０８	Ⅴ区ＢＦ13	－	３×２	8.7×9.0	梁1.0～4.0 桁0.9～7.7	16～46
０９	Ⅴ区ＢＨ04	－	２×３	4.0×8.5	梁1.5～2.5 桁1.7～3.8	13～64

(3) 周溝墓（ＳＭ）

ここで取り上げる周溝墓は、上部が削平されており墳丘盛土の状況が確認できず、周溝のみを検出したものを一括している。主体部が確認できないため、時期決定の根拠としては不十分な面もあるが、主に、周溝内出土遺物から時期を決定している。

なお、調査時に墓としたものにＳＭを符して作業進行したが、土坑（土壙）をＳＫで統一したため、ＳＭ01・02・05・09・13・14は欠番となる。

①　ＳＭ03・ＳＫ64（第６～８図、図版６・７）

遺　　構　Ⅵ区ＡＵ21を中心にⅤ・Ⅷ区にまたがって検出し、全体の西側１/２を調査した。周溝の内側にある４基の土坑との前後関係は、ＳＫ65・66・67がＳＭ03築造以前のものであり、ＳＢ17はＳＭ

03築造後のものである。ＳＫ64は南側周溝部の墳丘端部を掘り込んでおり、古墳に伴うものである。

墳丘及び周溝覆土は土層図に示した状況である。周溝内側と外側とで類似した土層の水平堆積が連続するかにみえたが、詳細に観察すると、いくつかの相違点が認められた。周溝内側の基盤層上に黄褐色土・褐灰色土・黄橙色土があり、このうち褐灰色土が築造時の地表層で、黄橙色土は盛土と判断された。また、周溝外側に認められた黄橙色土は本来盛土であったものが、削平時周囲に地均しされたものと推定される。なお、周溝内の埋土状況から、削平時には既に埋没しており、その上に地均しされたことも判断される。以上から、ＳＭ03は本来盛土を有する墳墓で、全体規模・高さの確定はできないが、径20ｍの円墳と判断される。また、本墳の削平時期は周溝内側で検出されたＳＢ17の存在から、中世段階にあたるといえる。

周溝は幅3.9～5.2ｍ、深さ0.62～0.88ｍで舟底形を呈し、西側半分の部分的な調査のため、全体の規模が明確でないが、現状で確認できる南北方向の外径は30.4ｍで、方形に近い円形を呈する。上部削平により埋葬施設は確認できなかった。

ＳＫ64は、南側周溝の墳裾に掘り込まれた土壙で、規模は長軸2.4ｍ、短軸1.12ｍ、深さ1.17ｍの隅丸長方形を呈する。周溝覆土の状況は、周溝掘削後の残土（13層）の上に土壙掘削土と判断される黄橙色土（11層）の一部が認められることから、周溝掘削後ほとんど時を経ずして掘り込まれたことを示している。また、土壙埋土も基盤層と判断困難な程で、他の土とほとんど混じることなく、掘削後時を経ずに、意図的に埋め戻されたことがわかる。ここから馬歯骨の痕跡と馬具一式が出土しており、馬は本墳被葬者への随想として埋葬されたものといえる。ＳＭ03と密接なかかわりをもつ土壙である。

遺　　物　遺物は、周溝内及びＳＫ64から出土している。

周溝内からは、土師器を中心に鉄器等が出土している。

南側周溝内のＳＫ64の南西側より鉄刀と鉄鏃が出土した。直刀はほぼ底部から、鉄鏃は底部より20～30㎝程浮いている。鉄刀は切先を東側に向けて置かれ、鉄鏃はそれより西側１～３ｍ離れて18本が分散しており、束にして置かれたという状態ではなかった。出土状況からみて、主体部の破壊による遺物の散乱ではないとみられるが、この場所における埋葬施設等の存在は確認できなかった。また、ＳＫ64の南側からも土師器（高坏・甕）が出土しているが、原位置を留めるものではない。鉄製品との関連も考えられ、ＳＫ64との関係も検討すべきといえる。

南西側周溝からは土師器（壷）が、北側周溝内からは土師器（小型壷）が底部より浮いて出土している。西側周溝内からは、土師器片が出土している。いずれも周溝内における何らかの祭祀行為にかかわる可能性が考えられる。

ＳＫ64からは、馬歯骨と馬具一式が出土している。

馬骨は、中央部と南北両端に骨の痕跡が認められる程度で、それぞれが骨格のどの部位にあたるかを確認できる残存状態ではなかった。唯一部位が確認できるのは南西隅にあった馬歯のみであり、頭部を南側に鼻先を北に向けた状態で確認した。土壙の規模から馬一頭を埋めたものとみられ、頭部が南西隅にあるという状況から、脚部を北側にして横倒しにした状態が考えられるが、他の骨が痕跡程度でそれぞれの部位が特定できないため明確ではない。

馬具は、鉄製ｆ字形鏡板付轡と面繋の金具類・鞍（鞍金具と鞍の一部とみられる漆被膜）・木芯鉄板張輪鐙・鉄製環状雲珠・鉄製剣菱形杏葉が出土した。いずれも、唯一部位が確認できた馬頭部の位置と

は反対の北側壁面際に、東側から雲珠と杏葉のセット、轡、鞍、鐙をそれぞれ確認した。出土位置からみて、轡は馬に装着されたものではない。その他の馬具も馬骨のレベルと比較すると、馬骨と同レベルかそれよりも高い位置から出土しており、轡と同様に本来装着されていたものではなく、馬を土壙内に安置した後に、馬具を置いた可能性が高く、その位置は腹部付近と考えられる。鞍については鞍金具が確認されているが、漆被膜の存在から、有機質（木製か）の鞍が本来はあったとみられる。漆の残存状態から、鞍の覆輪部分の厚さは１㎝程になる。轡は面繋金具と共に出土していることから、面繋の紐が付いた状態で一括して置かれ、雲珠・杏葉・鞍・鐙はそれぞれの位置関係から、鐙は鞍に付けられ、雲珠と杏葉を含めた尻繋も組まれた状態であったと判断され、いずれも本来はこの馬に装着されていたものを、埋葬に際して副葬品としたと考えられる。

この他に、打製石斧が周溝覆土から出土している。

時　　期　周溝内出土遺物とＳＫ64出土馬具から古墳中期（５世紀後半）とみられる。

②　ＳＭ04（第９図、図版８）

遺　　構　Ⅵ区ＡＬ12を中心にⅡ区、Ⅷ区とにかかって検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＩ01に切られる。墳丘及び周溝覆土は土層図によるが、墳丘盛土部分は削平されており、盛土の痕跡は確認できず、周溝を検出したのみである。周溝規模は南北方向外径26.5ｍ・内径18.8ｍ、東西方向外径26.4ｍ・内径18.5ｍで円形を呈する。周溝は幅3.1～4.75ｍ、深さ0.45～0.86ｍで舟底形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。周溝形状、規模などＳＭ03より若干小規模ではあるが、大方は共通しており、本墳もまた、本来墳丘を有する古墳であったと判断される。なお、本墳の削平時期の特定は困難であるが、近世火葬墓ＳＫ78が周溝内側に存在することから、ＳＭ03と同時期位には墳丘を留めなかった可能性がある。南側周溝内で確認された石は葺石の転落とみられる。

遺　　物　遺物は、周溝内から出土している。

東側周溝内より土師器（甕）、北側周溝内よりほぼ完形の土師器（小型壷）と逆位に置かれた須恵器（瑕）及び石製品（剣）が底部より出土しており、周溝内における何らかの祭祀にかかわるものと考えられる。また、南東側周溝内の上層～中層にかけて土師器（甕）が出土している。鑿や石製紡錘車も出土しているが、周溝覆土中からであり性格は不明である。

なお、周溝覆土上層より須恵器（坏）、灰釉陶器（皿）が出土していることから、周辺に平安時代（９世紀）の遺構の存在が想定される。

打製石斧、有肩扇状形石器等の石器類が周溝覆土から出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

③　ＳＭ06（第10図、図版９）

遺　　構　Ⅱ区ＢＵ03を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＭ06の周溝は、南側の一部をＳＭ08と西側の一部をＳＭ10と共有する。周溝覆土の状況から、３基の周溝墓の前後関係としてはＳＭ06が最も古い。周溝規模は北東・南西方向外径11.7ｍ・内径8.1ｍ、北西・南東方向外径13.5ｍ・内径8.2ｍの方形を呈する。周溝は幅0.85～2.07ｍ、深さ0.31～0.72ｍで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ60°Ｗを示す。南東側周溝の中央部に1.7ｍの土橋部

を有する。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　周溝覆土から弥生土器（甕底部片）と打製石斧が出土したのみである。

時　　期　出土遺物はわずかであるが、弥生時代後期とみられる。

④　ＳＭ07（第11・12図、図版10・11）

遺　　構　Ⅱ区ＡＦ02を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ02を切る。周溝規模は北東・南西方向外径15.5ｍ・内径11.9ｍ、北西・南東方向外径16.6ｍ・内径12.2ｍの方形に近い円形を呈する。周溝は幅1.03～2.92ｍ、深さ0.12～0.7ｍで舟底形を呈する。北西側周溝内中央付近に、遺物が集中して出土しており、その位置から若干ずれて周溝がふくらむ箇所がある。そこは長楕円形を呈し、溝底からさらに４～９㎝深くなっており、二次的埋葬があった可能性もある。

上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ137°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　遺物は周溝内の３箇所から出土している。

特に北西側周溝内では、周溝に沿って約2.5ｍの範囲に土師器（小型壷・甕片・甑・坏２点・高坏４点）、須恵器（甕・甑）、玉類（臼玉40点、管玉２点、勾玉１点）、石製模造品（有孔円板２点）、鉄器（刀子・鑿・ヤリガンナ３点・鎌・鉄鏃片）が集中して出土している。南端に須恵器類があり、その北側に土師器・玉類・鉄器類が混在している。前者の一群は、近接する土師器（高坏）よりも高いレベルから出土しており、土師器が置かれた後に完形の須恵器（甑）と破砕された須恵器（甕）が配されたものと考えられる。後者の一群は、周溝底部からの出土である。ほぼ完形の状態で残っているもの、一個体がそのまま潰れた状態で出土しているものがあることから、土器類はほぼ原位置を保っているものとみられ、これらは一括遺物として捉えられる。高坏の上に小型壷がのるもの、完形で底部に据え置かれたもの、破砕されたものなどがある。玉類は、高坏の周辺に集中している。土師器と須恵器の配置には若干の時期差があると考えられるが、その差は遺物の時期からみてもごく短期間のものであり、ほぼ同時期といえる。性格については周溝内での何らかの祭祀にかかわる可能性が考えられる。

南西側周溝内では、須恵器（蓋坏身）が底部から単独で出土しているほか、南東側周溝内では、覆土から土師器（壷）が出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

⑤　ＳＭ08（第13図、図版９）

遺　　構　Ⅱ区ＢＱ02を中心に検出し、南西側の一部を除き調査した。ＳＭ08の周溝は、北東側の一部をＳＭ06と共有する。ＳＭ06のセクション図によれば、ＳＭ08はＳＭ06の周溝幅の約半分が重複する。両者の前後関係としてはＳＭ08の方が新しい。さらに、ＳＫ03に切られる。南西側周溝が確認できず、全体の規模は明確でないが、現状で北西・南東方向外径6.3ｍ・内径3.5ｍの方形を呈する。周溝は幅1.03～2.0ｍ、深さ0.28～0.43ｍで逆台形を呈する。南西側周溝が切れているかのようであるが、この部分は周溝が確認できていないため、状況は不明である。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ58°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　ＳＭ06、ＳＭ10との関係から、弥生時代後期に属する可能性がある。

⑥　ＳＭ10（第14図、図版９）

遺　　構　Ⅱ区ＢＵ47を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＭ10の周溝は、南東側をＳＭ06と共有し、両者の前後関係としてはＳＭ10の方が新しい。さらに、ＳＫ04を切り、ＳＭ14（ＳＫ81）に切られる。周溝規模は北東・南西方向外径11.7ｍ・内径7.6ｍ、北西・南東方向外径11.7ｍ・内径8.0ｍの方形を呈する。周溝は幅0.7～2.37ｍ、深さ0.12～0.63ｍで逆台形を呈する。南西側周溝の中央部と北西隅にそれぞれ2.3ｍと1.7ｍの土橋部を有する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ30°Ｅを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　周溝覆土から弥生時代中期の壷片、後期の甕片が出土したのみである。

時　　期　周溝内出土遺物はわずかであるが、ＳＭ06との関係から弥生時代後期とみられる。

⑦　ＳＭ11（第13図、図版12）

遺　　構　Ⅱ区ＡＡ04を中心に、一部Ⅵ区にかけて検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は、現状で南北方向外径5.9ｍ・内径5.1ｍの円形を呈する。周溝は、３箇所に北側からそれぞれ1.0ｍ、1.5ｍ、1.6ｍの土橋部を有する。周溝は幅0.3～0.87ｍ、深さ0.07～0.28ｍで逆台形を呈する。上部は削平されていたが、埋葬施設１基を確認した。規模は1.2×0.6ｍで、長方形を呈する。棺材の痕跡はなく、棺構造は不明である。主軸方向はＮ10°Ｅを示す。この埋葬施設は西に寄っているため、約２ｍ程東側の中央寄りに別の埋葬施設が存在した可能性がある。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑧　ＳＭ12（第14図、図版12）

遺　　構　Ⅰ区ＢＣ46を中心に検出し、全体の１/２程を調査した。ＳＤ05を切る。南東側周溝の１/２は未調査のため、規模は明確でないが、現状で北東・南西方向外径11.4ｍ・内径8.7ｍの方形を呈する。北西側周溝の中央部に3.6ｍの土橋部を有する。上部は削平されており、埋葬施設は確認できなかった。周溝は幅0.87～1.77ｍ、深さ0.19～0.33ｍで逆台形を呈する。形態的には、SM10に類似する。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　打製石斧が周溝覆土から出土している。

時　　期　形態から弥生時代とみられる。

⑨　ＳＭ15（第15・16図、図版13）

遺　　構　Ⅰ区ＢＣ29を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は南北方向外径18.7ｍ・内径14.8ｍの円形を呈する。周溝は幅0.99～2.57ｍ、深さ0.19～1.02ｍで舟底形もしくは逆台形を呈する。上部は削平されていたが、埋葬施設の一部を確認することができた。しかし、大部分が攪乱を受けており、長軸方向で1.5ｍ程を確認したのみであり、形態及び棺構造は不明である。主軸方向はＮ64°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。東側周溝内で確認された石は、葺石（貼石）が

転落したものとみられる。

西側部分がかなり削平され、周溝の残存状況は痕跡程度であるにもかかわらず、埋葬施設の痕跡が認められたことから、ほとんど盛土を有しない墳墓である。墳丘を有する古墳とは異なり、円形周溝墓とすべきものである。

遺　　物　周溝内からは、土師器・須恵器及び馬歯の一部が出土している。

土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（甕）は、周溝内各所から出土しているが、いずれも破片である。葺石とみられる石の間からの出土であり、周溝内の祭祀行為にかかわるものか、墳丘部分に置かれていたものが、葺石と共に転落した可能性が考えられる。

馬歯も土器類と同様、周溝内の石の間から出土している。馬歯はごく一部で、残存状態はかなり悪い。出土状態から本址に伴う可能性はあるが、本来馬がどのような状態にあったかは明確でない。

打製石斧等が、周溝覆土から出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

⑩　ＳＭ16（第17図、図版12）

遺　　構　Ｉ区ＢＭ38を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。周溝規模は南北方向外径8.1ｍ・内径5.1ｍ、東西方向外径8.0ｍ・内径6.1ｍの不整円形を呈する。周溝は幅0.93～1.79ｍ、深さ0.04～0.37ｍで逆台形を呈する。上部の削平及び撹乱のため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ14°Ｅを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑪　ＳＭ17（第17図、図版15）

遺　　構　Ｉ区ＢＱ31を中心に検出し、東側周溝のうち5.2ｍ程を確認したのみである。ＳＫ68に切られる。周溝が西と北側に延びることから、周溝墓本体は確認された周溝より西側にあり、本来は方形プランを呈するものとみられる。周溝は幅0.53～1.03ｍ、深さ0.16～0.39ｍで逆台形を呈する。ほとんどが調査区外となるため、埋葬施設は確認できなかった。

遺　　物　周溝内から土師器片がわずかに出土しているのみである。

時　　期　古墳時代の可能性が高い。

⑫　ＳＭ18（第18・19図、図版14）

遺　　構　Ｉ区ＢＨ36を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複するＳＫ82（ＳＭ23）に切られる。周溝規模は北東・南西方向外径13.4ｍ・内径9.9ｍ、北西・南東方向外径14.1ｍ・内径10.4ｍの方形を呈する。周溝は幅1.02～2.47ｍ、深さ0.04～0.46ｍで逆台形を呈する。周溝東隅が攪乱を受けているが、土橋部を有するタイプではないとみられる。上部は削平され、墳丘部分の中央が墓地となっていたため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ32°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。周溝の北から西側にかけて確認された石は、ＳＭ15と同様に葺石（貼石）の転落したものとみられる。

遺　　物　遺物は周溝内から出土している。

北西側周溝内から土師器（小型壷、甕、高坏、坏）、須恵器が出土している。いずれも葺石とみられる石の間からの出土であり、何らかの祭祀行為にかかわって墳丘上に置かれていたものが、葺石と共に転落した可能性が考えられるが、他例と比較すると、本来周溝内にあった可能性も否定できない。周溝からは赤色顔料が出土しているが、これよりやや離れて出土した土師器（小型壷）内に赤色顔料の痕跡が認められることから、本来はこの中に入れられていたものといえる。

打製石斧が周溝覆土から出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

⑬　ＳＭ19（第20図、図版15）

遺　　構　Ⅶ区ＡＡ40を中心に検出し、全体の１/３程を調査した。重複する遺構はない。北西側周溝が確認できただけなので、全体規模は不明であるが、現状で周溝規模は北東・南西方向外径16.7ｍ・内径13.7ｍの方形を呈する。周溝は幅1.05～2.4ｍ、深さ0.29～0.81ｍで逆台形を呈する。南東側半分が調査区外となり、上部も削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ32°Ｅを示す。周溝覆土は土層図による。北西側周溝内で確認された石は、葺石（貼石）が転落したものとみられる。

遺　　物　遺物は周溝内から出土している。

北西側周溝から破砕した須恵器（甕）が出土している。甕はほぼ完全に復元できるが、葺石とみられる石と混在していることから、周溝内に置かれたか、墳丘上に置かれていたものが葺石とともに転落したかの双方の可能性が考えられる。この甕と共に須恵器（坏）も出土しているが、平安時代のものであり、周辺部における概期の遺構の存在も考えられる。

また、上述の須恵器（甕）より約２ｍ北東で刀子が出土しているが、周溝覆土からの出土である。南西側から土師器（坏）等の破片が出土しているが、いずれも小破片である。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

⑭　ＳＭ20（第17図、図版16）

遺　　構　Ⅶ区ＡＧ39を中心に検出し、周溝の南隅を確認したのみである。重複する遺構はない。周溝の南側隅を確認しただけなので、全体規模は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。周溝幅0.99～1.37ｍ、深さ0.31～0.43ｍで逆台形を呈する。上部はかなり削平されており、攪乱も受けていることから、埋葬施設は確認できなかった。

遺　　物　遺物は周溝内から出土している。

覆土から土師器（坏）、土師器（手捏ね）が出土している。

時　　期　周溝のごく一部を確認したのみのため、出土遺物が本址に伴うか問題があり、時期は不明である。

⑮　ＳＭ21（第21図、図版16）

遺　　構　Ⅶ区ＡＶ45を中心に検出し、南側周溝の１/４程を調査した。重複する遺構はない。部分的な調査のため、規模は不明であるが、円形を呈する可能性もある。周溝は幅2.03～3.35ｍ、深さ0.3

～0.54mで舟底形を呈する。上部は削平されており、北側の大半が調査区外のため埋葬施設は確認できなかった。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　周溝内から遺物が出土している。

東側周溝内から土師器（高坏）が出土している。破砕しているが、3個体がまとまって出土している。周溝の内壁際からの出土であり、完形品が置かれていたというよりも何らかの祭祀行為にかかわって破砕されてまかれたものか、墳丘からの転落の可能性もある。

周溝覆土から鉄鏃が出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

⑯ ＳＭ22（第21図、図版16）

遺　　構　Ｉ区ＢＫ29を中心に検出し、南東側周溝の一部を調査した。重複する遺構はない。北西側の大半が調査区外になり、現在墓地のため部分的な調査しかできず規模は不明であるが、推定で直径16m以上の円墳になるとみられる。周溝は幅1.19～2.49m、深さ0.28～0.88mで舟底形を呈する。西側が調査区外のため、埋葬施設は確認できなかった。周溝覆土は土層図による。周溝内で確認された石は葺石の転落とみられる。

本址は、溝口の塚古墳を除いては周溝墓の中では唯一古墳として認識されていたものである。

『下伊那史』第二巻によると、本址はつくね塚（庚申塚）古墳があったとされるところにあたる。これによると、大正11年頃には「直径五間高一丈の封土」があったが、一部は宅地になったという。また、もともと18.2m程ある大塚であったが、地主が土を売るために掘り崩したところ、人骨・鏡・刀の破片・鉄冑などがたくさん出たという。つくね塚の名の由来は、それらをつくねて埋めたことからとも、昔多勢の武士が討死したのでそれをつくねて埋めたからだともいうことである。

また、現在の建物を建てる以前には木の生い茂った丘と、そこに観音を祀る小さなお堂があったこと、そして造成した際に玉類が出土したらしいことが伝わっている。

今回の調査によって、その存在が確認されたことになるが、前述のとおり現状では墳丘部分はほとんど残っていなかった。

遺　　物　周溝内から遺物が出土している。

周溝内から土師器（壷・坏・鉢）が出土している。葺石とみられる石と混在しており、本来は墳丘に置かれていたものが、葺石と共に転落したものか、周溝内に置かれたものと考えられる。壷形土器のうち3個体は底部が開口している。壷形土器とはやや離れて土師器（鉢）が出土している。

打製石斧が周溝覆土から出土している。

時　　期　周溝内出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

(4) 土坑及び土壙墓（ＳＫ）

調査時に墓と認めたものの一部については、当初ＳＭで番号を符していたが、報告書作成段階では、土坑（土壙）はすべてＳＫとする基本方針から、ＳＫで番号を付け直している。ただし、調査時にＳＭで遺物を取り上げている関係上、旧ＳＭ番号も付した。遺構の性格については、出土遺物もなく不明なものもあるが、墓と考えられるものについては土壙墓の名称を用い、それ以外については土坑を用いた。

① ＳＫ01（第22図）

遺　　構　Ⅷ区ＡＯ13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8ｍ、短軸0.76ｍ、深さ0.6ｍの円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

② ＳＫ02（第22図）

遺　　構　Ⅷ区ＡＭ09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.55ｍの楕円形を呈する。土坑内に握り拳大の石が入れられている。

遺　　物　なし

時　　期　不明

③ ＳＫ03（第22図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＱ00を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ08を切る。規模は長軸1.28ｍ、短軸1.04ｍ、深さ0.41ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　縄文土器片が覆土からわずかに出土しているのみである。

時　　期　切り合い関係から、弥生時代以降とみられる。

④ ＳＫ04（第22図、図版17）

遺　　構　Ⅱ区ＢＳ47を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ10を切る。規模は長軸3.2ｍ、短軸2.2ｍ、深さ0.44ｍの不整形を呈する。

遺　　物　覆土から土師器（甕底部）片がわずかに出土している。

時　　期　出土遺物と切り合い関係から弥生時代以降、古墳時代とみられる。

⑤ ＳＫ05（第22図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＣ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76ｍ、短軸1.44ｍ、深さ0.2ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥ ＳＫ06（第22図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＹ00を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ01を切る。規模は長軸1.6ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.64ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑦　ＳＫ07（第22図、図版17）

遺　　構　Ⅱ区ＢＮ00を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ03を切る。規模は長軸1.84ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.57ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑧　ＳＫ08（第22図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＯ00を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.84ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.55ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑨　ＳＫ09（第22図）

遺　　構　Ⅰ区ＡＳ33を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.56ｍ、短軸1.16ｍ、深さ0.47ｍになる。南西側が調査区外になるが、土坑底部の形態から方形になるとみられる。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑩　ＳＫ10（第23図、図版17）

遺　　構　Ⅰ区ＡＵ43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.64ｍ、短軸1.04ｍ、深さ0.28ｍの楕円形を呈する。馬一頭分の骨が出土しており、馬を埋葬した土壙墓である。

遺　　物　馬骨の遺存状態は良好であり、ほぼ全身の状態を確認することができた。馬はやや中心部がくぼむ土壙底部に頭部を南西側に向け、脚を折り曲げて馬体の左側を下にした横臥姿勢で出土した。土壙規模は馬一頭がちょうど入る大きさであり、馬は廃棄されたものではなく、意図的に埋葬されたものである。馬に伴う遺物はない。馬骨の詳細については、「附編１」に記載がある。

時　　期　出土遺物がなく時期決定の要因に乏しいが、覆土及びＳＫ64の出土例や周辺の遺構分布から古墳時代中期とみられる。

⑪　ＳＫ11（第23図、図版19）

遺　　構　Ⅰ区ＢＡ42を中心に検出し、全体を調査した。本址の下部には長軸0.3ｍ、深さ0.15ｍの小土坑がある。本址はこの小土坑を切っている。規模は長軸1.02ｍ、短軸0.42ｍ、深さ0.2ｍの不整形を呈する。

遺　　物　下部にある小土坑の上から馬歯のみが出土している。ＳＫ10やＳＫ64の規模と比較しても、一頭全部を埋めたとするには小規模である。馬に伴う遺物の出土はない。

時　　期　不明

⑫　ＳＫ12（第24図、図版18）

遺　　構　Ⅰ区ＡＷ44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.52ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑬　ＳＫ13（第24図、図版18）

遺　　構　Ⅰ区ＡＱ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.4ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.12ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　打製石器が覆土から出土している。

時　　期　不明

⑭　ＳＫ14（第24図）

遺　　構　Ⅰ区ＢＶ37を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はないが、攪乱を受けているため、規模は推定で長軸2.88ｍ、短軸0.88ｍ、深さ0.46ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑮　ＳＫ15（第24図、図版18）

遺　　構　Ⅰ区ＢＣ40を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.32ｍ、短軸0.96ｍ、深さ0.6ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑯　ＳＫ16（第24図）

遺　　構　Ⅷ区ＡＵ09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.92ｍ、短軸1.64ｍ、深さ0.29ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑰　ＳＫ17（第24図）

遺　　構　Ⅷ区ＡＶ06を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.27ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑱　ＳＫ18（第25図、図版19）

遺　　構　Ⅰ区ＢＪ44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸3.16ｍ、短軸1.24ｍ、深さ0.72ｍの不整楕円形を呈する。出土遺物は、類例の少ないものであり、これらから土壙墓の可能性がある。

遺　　物　土壙の南東側壁際の底部より10㎝程浮いたレベルから鉄製靫金具と鉄鏃26本が出土している。

調査中、まずコ字形金具を検出したが、当初はその性格がわからなかった。さらに掘り下げたところ、コ字形金具が出土した地点よりも土壙の壁面寄りから、鉄鏃群が出土した。鉄鏃は、土壙の長軸方向に平行して一括して置かれ、いずれも切っ先を南西方向に向けている。この鉄鏃群と共に２点の鉄製短冊形金具が出土しており、有機質の矢を入れる容器に付けられた吊手金具とみられる。２点の吊手金具は、１点は鉄鏃の横から表を上にした状態で、もう１点はそれと平行して２㎝程度離れて鉄鏃群の矢柄のある方から、表を西側に、側面を上に向けて出土した。出土状況から、容器に矢を入れた状態で置かれたものとみられる。これをいわゆる胡籙とするか、靫とするかについては、西側から出土した吊手金具の一端には紐を通すための鉸具が残存しており、その位置から想定される矢を入れる容器に対して、鉄鏃は切っ先を上にして入れられていたとみられることから、本例は靫であると考えた。なお、詳細は「4.出土遺物」に記載がある。

時　　期　出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

⑲　ＳＫ19（第24図、図版20）

遺　　構　Ⅰ区ＢＪ42を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.08ｍ、短軸1.0ｍ以上、深さ0.51ｍの不整形を呈する。出土遺物から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　覆土から銅製帯金具（巡方）が２点出土している。

時　　期　出土遺物から奈良時代とみられる。

⑳　ＳＫ20（第24図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＬ03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.4ｍ、短軸1.48ｍ、深さ0.24ｍの不整形を呈する。

遺　　物　底部から灰釉陶器（瓶）破片が出土している。

時　　期　出土遺物から平安時代とみられる。

㉑　ＳＫ21（第25図、図版20）

遺　　構　Ⅱ区ＡＡ49を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.64ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.4ｍの楕円形を呈する。覆土は土層図による。出土遺物から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　北側壁際底部より鉄鏃３本が出土している。

時　　期　出土遺物から古墳時代中期（５世紀）とみられる。

㉒　ＳＫ22（第24図、図版20）

遺　　構　Ⅱ区ＢＷ44を中心に検出し、全体を調査した。ＳＴ04に切られる。規模は長軸3.44ｍ、短

軸1.36m、深さ0.24mの楕円形を呈する。覆土中に礫が混在する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉓　ＳＫ23（第26図、図版21）

遺　　構　Ⅱ区ＢＱ45を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.68m、短軸1.08m、深さ0.5mの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉔　ＳＫ24（第26図、図版21）

遺　　構　Ⅰ区ＢＰ33を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はないが、攪乱を受けているため、推定で規模は長軸3.12m以上 、短軸1.4m以上 、深さ0.58mの方形を呈する。覆土は土層図による。形状及び遺物出土状況から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　土坑底部より約40～50cm上から、土師器（坏・高坏）が出土している。坏の下からは炭化物が検出されている。

時　　期　出土遺物から古墳時代中期（５世紀後半）とみられる。

㉕　ＳＫ25（第26図）

遺　　構　Ⅰ区ＢＮ32を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.36m、短軸1.4m、深さ0.49 mの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉖　ＳＫ26（第26図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＫ42を中心に検出し、東側の１/２を調査した。ＳＫ27を切る。規模は長軸2.48m、短軸1.08m以上 、深さ0.37mの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉗　ＳＫ27（第26図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＪ42を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＫ26に切られる。規模は長軸2.24m以上 、短軸1.44m、深さ0.28mの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉘　ＳＫ28（第26図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＫ44を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ30を切る。規模は長軸1.32ｍ、短軸1.28ｍ、深さ0.31ｍの円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㉙　ＳＫ29（第26図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＬ44を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16ｍ、短軸0.88ｍ、深さ0.17ｍの不整形を呈する。

遺　　物　覆土から土師器（坏）が出土している。

時　　期　出土遺物から平安時代とみられる。

㉚　ＳＫ30（第26図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＫ44を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ28に切られる。重複する遺構が多く、攪乱も受けているが、規模は長軸3.68ｍ、短軸2.04ｍ、深さ0.36ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　中世以降か

㉛　ＳＫ31（第27図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＫ43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.84ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.25ｍの不整形を呈する。

遺　　物　覆土から須恵器（坏）、灰釉陶器（碗）が出土している。

時　　期　出土遺物から平安時代（９世紀）とみられる。

㉜　ＳＫ32（第27図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＮ44を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ33を切る。規模は長軸2.76ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.42ｍの不整形を呈する。

遺　　物　漆被膜が出土している。

時　　期　不明

㉝　ＳＫ33（第27図）

遺　　構　Ⅶ区ＡＭ43を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ32に切られる。規模は最大長で4.0ｍ、深さ0.36ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉞　ＳＫ34（第27図）

遺　　構　Ⅰ区ＢＬ41を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。攪乱を受けているた

め、現状規模は長軸1.76m以上 、短軸0.48m、深さ0.45mの楕円形を呈する。

遺　　物　打製石器が覆土から出土している。

時　　期　不明

㉟　ＳＫ35（第27図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＵ43を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.16m、短軸1.12m、深さ0.45mの円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊱　ＳＫ36（第27図）

遺　　構　Ⅰ区ＢＬ45を中心に検出し、北側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体を調査した。ＳＢ03を切る。規模は長軸2.0m、短軸1.2m以上 、深さ0.33mの不整形を呈する。

遺　　物　砥石が覆土から出土している。

時　　期　出土遺物は少ないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊲　ＳＫ38（第27図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＥ07を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ39に切られる。規模は長軸1.28m、短軸1.08m、深さ0.32mの隅丸方形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊳　ＳＫ39（第27図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＦ07を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ38、ＳＫ42を切る。規模は長軸1.28m、短軸1.0m、深さ0.69mの隅丸方形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊴　ＳＫ42（第28図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＦ07を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ39に切られ、ＳＤ10を切る。規模は長軸1.32m、短軸1.08m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺　　物　覆土から馬歯がわずかに出土しているのみである。

時　　期　不明

㊵　ＳＫ45（第28図、図版21）

遺　　構　Ⅲ区ＢＪ33を中心に検出し、東側の大部分が調査区外となるため、一部を調査した。重複する遺構はない。現状規模は長軸2.52m、短軸1.08m以上 、深さ0.64mの不整形を呈する。覆土に砂

の堆積がみられることから、貯水機能があったものとみられる。

遺　　物　なし

時　　期　近世以降か

㊶　ＳＫ46（第28図、図版22）

遺　　構　Ⅳ区ＢＢ01を中心に検出し、北側の一部が調査区外となるが、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸3.04ｍ、短軸1.64ｍ、深さ0.48ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊷　ＳＫ47（第28図、図版22）

遺　　構　Ⅳ区ＢＡ00を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.76ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.16ｍの不整形を呈する。人骨が出土していることから土壙墓とみられる。

遺　　物　底部に石が据えられ、人骨片が出土している。

時　　期　人骨等が残存することから、近世以降とみられる。

㊸　ＳＫ48（第28図、図版22）

遺　　構　Ⅴ区ＢＥ11を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.36ｍ、深さ0.54ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　中世か

㊹　ＳＫ49（第28図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＨ04を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2ｍ、短軸0.68ｍ、深さ0.4ｍの隅丸長方形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　中世か

㊺　ＳＫ50（第28図、図版23）

遺　　構　Ⅴ区ＢＨ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.0ｍ、短軸2.0ｍ、深さ1.06ｍの円形を呈する。形態から井戸跡の可能性がある。

遺　　物　覆土からＳＤ01と接合する青磁片が出土している。

時　　期　中世か

㊻　ＳＫ51（第28図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＩ05を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ56に切られる。東側をＳＫ56に切られているため、現状で規模は長軸1.04ｍ以上 、短軸0.56ｍ、深さ0.58ｍの不整形を呈する。

遺　　物　覆土から陶器（碗・小瓶）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

㊼　ＳＫ52（第28図）

遺　　構　Ｖ区ＢＦ07を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.76ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.46 ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊽　ＳＫ53（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＧ10を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ13を切る。規模は長軸1.6ｍ、短軸1.12ｍ、深さ0.73 ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

㊾　ＳＫ54（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＧ09を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.68ｍ、短軸1.12ｍ、深さ0.52ｍの楕円形を呈する。出土遺物から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　銅銭「寛永通宝」、陶器（碗）、磁器（合子蓋）が出土している。

時　　期　出土遺物から近世以降とみられる。

㊿　ＳＫ55（第29図、図版23）

遺　　構　Ｖ区ＢＫ03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.84ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.43ｍの円形を呈する。

遺　　物　陶器（皿・擂鉢）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

51　ＳＫ56（第28図）

遺　　構　Ｖ区ＢＩ05を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ51を切る。規模は長軸1.32ｍ、短軸1.28ｍ、深さ0.56ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　出土遺物はないが、切り合い関係から中世以降とみられる。

52　ＳＫ57（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＨ06を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.12ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.72ｍの隅丸長方形を呈する。

遺　　物　覆土から陶器（皿）、内耳鍋片が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㊸　ＳＫ58（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＪ04を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8ｍ、短軸0.56ｍ、深さ0.42ｍの隅丸長方形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊹　ＳＫ59（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＨ05を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.88ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.46ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊺　ＳＫ60（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＫ03を中心に検出し、西側半分が調査区外となり、一部を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.56ｍ、短軸0.2ｍ以上 、深さ0.27ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊻　ＳＫ61（第29図、図版23）

遺　　構　Ｖ区ＢＬ15を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ14に切られる。規模は長軸1.92ｍ、短軸1.36ｍ、深さ0.66ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㊼　ＳＫ62（第29図）

遺　　構　Ｖ区ＢＬ13を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ12に切られる。南東側規模は長軸2.08ｍ、短軸1.68ｍ、深さ0.37ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　出土遺物はないが、切り合い関係から中世かそれ以前とみられる。

㊽　ＳＫ63（第30図）

遺　　構　Ｖ区ＢＦ10を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.8ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.48ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　覆土から縄文土器片がわずかに出土しているのみである。

時　　期　縄文時代か

⑲　ＳＫ64

ＳＭ03にて記載。

⑳　ＳＫ65（第30図、図版24）

遺　　構　Ⅵ区ＡＵ20を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ03築造以前に掘削された土坑である。規模は長軸1.84ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.84ｍの円形を呈する。覆土は土層図による。ＳＫ66、67と同時期で、同様の性格を有するものとみられる。

遺　　物　なし

時　　期　ＳＫ67の状況から、弥生時代とみられる。

㉑　ＳＫ66（第30図、図版24）

遺　　構　Ⅵ区ＡＶ22を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ03に切られる。規模は長軸1.64ｍ、短軸1.64ｍ、深さ0.18ｍの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　ＳＫ67の状況から、弥生時代とみられる。

㉒　ＳＫ67（第30図、図版24）

遺　　構　Ⅵ区ＡＷ21を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ03に切られる。規模は長軸1.68ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.18ｍの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　覆土中からわずかに弥生土器片が出土しているのみである。

時　　期　出土遺物から弥生時代の可能性がある。

㉓　ＳＫ68（第23図、図版25）

遺　　構　Ⅰ区ＢＰ31を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ17を切る。規模は長軸0.51ｍ、短軸0.49ｍ、深さ0.08ｍの円形を呈する。本址は、ＳＭ17の周溝掘削後に掘り込まれているが、ＳＭ17に直接伴うものか明確ではない。

遺　　物　底部より10cm程上から馬歯の一部が出土している。土坑の規模からすると、頭部のみの可能性も考えられるが、本来の状況は不明である。

時　　期　馬歯以外の遺物は出土していない。切り合い関係にあるＳＭ17もほとんど遺物の出土がなく、古墳時代の可能性もあるが、時期を決めがたい。そのため、本址の時期も不明である。

㉔　ＳＫ69（第30図、図版25）

遺　　構　Ⅵ区ＢＧ24を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.36ｍ、深さ0.24ｍの隅丸長方形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥⑤　ＳＫ70（第30図）

遺　　構　Ⅵ区ＢＨ24を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.18ｍの円形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥⑥　ＳＫ71（第30図）

遺　　構　Ⅵ区ＢＩ25を中心に検出し、東側約１/３が調査区外となり、一部を調査した。重複する遺構はない。一部が調査区外となるため、現状で規模は長軸1.2ｍ、短軸0.8ｍ以上 、深さ0.19ｍの不整形を呈する。底部に石が据え置かれていた。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥⑦　ＳＫ72（第30図）

遺　　構　Ⅵ区ＡＣ11を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ02を切る。規模は長軸1.6ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.22ｍの長方形を呈する。花崗岩を削り出して掘り込まれており、墓の可能性がある。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥⑧　ＳＫ73（第30図）

遺　　構　Ⅵ区ＡＤ13を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.92ｍ、短軸0.76ｍ、深さ0.29ｍの円形を呈する。底部よりやや浮いてはいるが石が据え置かれている。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥⑨　ＳＫ74（第30図、図版25）

遺　　構　Ⅵ区ＡＮ20を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.36ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.37ｍの隅丸長方形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑦⓪　ＳＫ75（第30図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＪ16を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ14に切られ、ＳＢ15を切る。規模は長軸2.52ｍ、短軸0.84ｍ、深さ0.49ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　切り合い関係から中世以降とみられる。

⑪　ＳＫ76（ＳＭ01）（第31図）

遺　　構　Ⅴ区ＢＡ16を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.6ｍ、短軸0.32ｍ、深さ0.29ｍの楕円形を呈する。銅銭の出土から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　覆土から銅銭「皇宋通寶」「元符通寶」「紹聖通寶」各１枚及び「皇宋通寶」「嘉祐通寶」とみられる３枚が出土しており、いわゆる六道銭である。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

⑫　ＳＫ77（ＳＭ02）（第31図、図版26）

遺　　構　Ⅴ区ＢＦ15を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.36ｍ、短軸1.28ｍ、深さ0.24ｍの円形を呈する。上部に握り拳から人頭大の石が置かれており、土壙墓の可能性がある。

遺　　物　石の下から瀬戸陶器（Ⅲ）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（15世紀中）とみられる。

⑬　ＳＫ78（ＳＭ05）（第31図、図版26）

遺　　構　Ⅷ区ＡＰ12を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.12ｍ、短軸1.08ｍ、深さ0.35ｍの円形を呈する。土壙内に人頭大の石が積み重ねられていた。人骨の出土から土壙墓と考えられる。

遺　　物　最下部の石の下から人骨片（火葬骨）、陶器（Ⅲ）が出土している。

時　　期　出土遺物から近世とみられる。

⑭　ＳＫ79（ＳＭ09）（第31図）

遺　　構　Ⅱ区ＢＶ03を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4ｍ、短軸0.84ｍ、深さ0.43ｍの不整長方形を呈する。底部には石が据え置かれており、遺構の状況から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑮　ＳＫ80（ＳＭ13）（第31図、図版27）

遺　　構　Ⅷ区ＡＱ08を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸2.8ｍ、短軸1.64ｍ、深さ0.4ｍの不整円形を呈する。土壙内全体に握り拳大の石が入れられており、人骨の出土から土壙墓と考えられる。

遺　　物　北西隅から人骨が出土しているほか、古瀬戸陶器小片、擂鉢破片がある。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

⑯　ＳＫ81（ＳＭ14）（第31図、図版27）

遺　　構　Ⅱ区ＢＷ49を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ10を切る。規模は長軸1.68ｍ、短軸

1.0m、深さ0.19mの不整形を呈する。銅銭の出土から土壙墓と考えられる。

遺　　物　覆土から銅銭「景祐元寶」が出土している。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

㊼　ＳＫ82（ＳＭ23）（第31図）

遺　　構　Ｉ区ＢＧ32を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ18を切る。規模は長軸2.0m、短軸1.08m、深さ0.64mの不整形を呈する。土壙墓の可能性がある。

遺　　物　西側壁際の底部から底部に「田中」の墨書のある灰釉陶器（小瓶）が出土している。覆土から打製石斧、横刃型石器が出土している。

時　　期　出土遺物から平安時代（９世紀後半）とみられる。

(5) 集石（ＳＩ）

①　ＳＩ01（第31図、図版27）

遺　　構　Ⅷ区ＡＰ15を中心に検出し、一部を調査した。ＳＭ04を切る。北側はＳＭ04との重複、東側半分は調査区外となっているため全体規模は明確でなく、確認できたのは南北方向で2.6m、深さは0.3mである。南側隅で握り拳大から人頭大の石の集石が確認された。性格は不明である。

遺　　物　なし

時　　期　不明

(6) 溝址（ＳＤ）（第32・33図、図版28）

溝址からは遺物の出土がほとんどないため、時期および周辺の遺構との関係は明確にできなかった。

遺構No.	検出位置	重複関係	規　模（m）（長さ×幅×深さ）	時　期	出土遺物
０１	Ⅷ区ＡＶ11	ＳＤ04を切る	21.2以上×2.4～0.6×0.15	不明	陶器(Ⅲ) 石器
０２	Ⅱ区ＡＦ08	ＳＭ07に切られる	20.9以上×3.5～0.6×0.18	不明	－
０３	Ⅱ区ＢＰ47	ＳＫ07に切られる	11.6以上×0.8～0.6×0.31	不明	－
０４	Ⅷ区ＡＹ06	ＳＤ01に切られる	11.2以上×1.5～0.4×0.12	不明	－
０５	Ⅰ区ＢＧ49	ＳＭ12に切られる	9.2以上×－×0.24	不明	－
０９	Ⅲ区ＢＦ33	－	3.76以上×－×0.29～	不明	埴輪片
１０	Ⅴ区ＢＤ07	ＳＫ42に切られる	4.4以上×0.3～0.6×0.12	不明	－

(7) 周辺ピット（第34～41図）

Ⅴ区では、中世の方形竪穴及び同時期とみられる掘立柱建物址が複数検出されている。掘立柱建物址

については今回の調査で6棟を確認したが、柱穴とみられる小ピットが多数検出されており、6棟以外にも掘立柱建物址が存在した可能性があることから、グリットピットとして掲載した。

4．出土遺物

出土遺物については、以下の項目にそって、基本的に遺構番号順に記述している。遺物の性格によって、一覧表による遺物観察表と文章による記述を併用した。

(1) 土器・陶器類

土器・陶器類観察表（第56～64図、図版37～41）

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	手法 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	断面	内面	残存
SB04	56－1	陶器	大平鉢	－	－	10.6	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰褐色	灰褐色	灰褐色	1／4残
SB12	56－2	陶器	皿	15.1	－	－	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰釉	2／3残
SM03	56－3	土師器	壷	11.5	19.2	4.0	17.1	ヘラミガキ、口縁ヨコナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	赤褐色	赤褐色	ほぼ完
	－4	土師器	小型壷	－	14.1	－	－	ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1／2残
	－5	土師器	小型壷	14.5	15.6	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ残
	－6	土師器	高坏	19.0	－	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1／3残
	－7	土師器	高坏	17.1	－	－	－	ヘラミガキ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ほぼ残
	－8	土師器	高坏	17.2	－	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
	－9	土師器	高坏	15.8	－	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	明褐色	赤褐色	ほぼ残
	－10	土師器	高坏	－	－	11.8	－	ヘラミガキ、ヨコナデ／ヨコナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
	－11	土師器	高坏	－	－	11.2	－	ヘラミガキ後ナデ／ヨコハケ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
	－12	土師器	高坏	－	－	10.4	－	ヨコナデ／ヨコハケ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
	－13	土師器	高坏	－	－	11.6	－	ヘラミガキ、ヨコナデ／ヨコハケ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
	－14	土師器	高坏	－	－	11.6	－	ヘラミガキ、ヨコナデ／ヨコハケ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	赤褐色	ほぼ残
SM04	57－1	土師器	小型壷	8.1	10.4	3.4	8.3	ヘラミガキ、ヨコナデ／ヘラミガキ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ完
	－2	土師器	甕	14.0	14.1	－	－	ナデ／ナデ（ススス）	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ残
	－3	土師器	甕	16.9	26.4	－	－	ナデ／ナデ（ススス）	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／2残
	－4	土師器	甕	17.5	26.7	8.0	28.0	ナデ、ハケ(ススス)／ヘラミガキ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	明黄褐色	灰褐色	褐灰色	ほぼ完
	－5	土師器	甕	18.0	28.8	－	35.2	ヘラミガキ、ヨコナデ／ヘラミガキ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	暗褐色	1／3残
	－6	土師器	坏	13.8	－	－	6.4	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	1／2残
	－7	須恵器	甑	9.4	11.2	－	10.0	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰色	灰色	灰色	ほぼ完
SM04	64－1	須恵器	坏	－	－	7.2	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	小石粒	良	明灰色	褐灰色	明灰色	ほぼ残
（覆土）	－2	須恵器	坏	11.8	－	8.8	4.2	ロクロナデ、糸切り底／ロクロナデ	小石粒	良	黒褐色	暗褐色	暗褐色	1／3残
	－3	灰釉陶器	皿	－	－	7.2	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰色	灰釉	1／4残
	－4	灰釉陶器	皿	－	－	8.2	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰色	灰釉	1／4残
	－5	陶器	大平鉢	－	－	12.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	明灰色	明灰色	明灰色	1／4残
SM06	58－1	弥生土器	壷	－	－	7.2	－	ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
	－2	弥生土器	壷	－	－	5.8	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
	－3	弥生土器	壷	－	－	5.0	－	ヘラケズリ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
SM07	58－11	土師器	壷	－	24.2	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／2残
	－12	土師器	小型壷	11.2	12.1	5.2	8.5	ナデ、ヨコナデ／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ完
	－13	土師器	甑	10.0	17.5	－	17.4	ヘラミガキ、ヨコナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	褐色	暗褐色	ほぼ完
	－14	土師器	坏	10.6	－	－	6.3	ヘラミガキ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	内黒	ほぼ完
	－15	土師器	坏	12.0	－	－	－	ナデ／ヘラミガキ（暗文）	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	赤褐色	1／3残
	－16	土師器	坏	9.6	－	4.4	3.8	ナデ、ハケ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	完形
	59－1	土師器	高坏	17.3	－	－	－	ナデ／ミガキ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
	－2	土師器	高坏	17.8	－	12.7	10.9	坏部ナデ／ナデ・脚部ヘラミガキ／ヘラナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ完
	－3	土師器	高坏	17.6	－	12.4	10.7	坏部ナデ・脚部ヘラミガキ／ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ完
	－4	土師器	高坏	16.8	－	11.8	11.7	坏部ナデ／ナデ後ヘラミガキ・脚部ナデ／ヘラナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	褐色	赤褐色	4／5残
	－5	須恵器	甕	17.4	－	－	－	タタキ／ナデ	砂粒	良	灰色	灰色	灰色	1／4残
	－6	須恵器	甕	－	－	－	－	タタキ／ナデ	砂粒	良	灰色	灰色	灰色	－
	－7	須恵器	蓋坏(坏身)	10.9	－	－	5.4	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	ほぼ完
	－8	須恵器	甑	9.8	12.3	－	11.3	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	ほぼ完
SM10	58－4	弥生土器	壷	－	－	－	－	ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤彩	明褐色	明灰色	－
	－5	弥生土器	甕	－	－	6.4	－	ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／2残
SM15	58－6	土師器	甕	－	－	6.2	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	明灰色	褐色	ほぼ残
	－7	土師器	甕	－	－	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	褐色	ほぼ残
	－8	土師器	坏	10.8	－	－	4.5	ヘラケズリ後ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	褐色	ほぼ完
	－9	土師器	高坏	－	－	9.1	－	ミガキ／ケズリ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	褐色	ほぼ残
	－10	土師器	高坏	－	－	9.0	－	ミガキ／ケズリ	雲母・小石粒	良	褐色	灰褐色	坏部内黒	ほぼ残

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	手法 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	断面	内面	残存
SM18	60－1	土師器	甕	16.6	28.1	－	－	ハケ(ススス)／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ残
	－2	土師器	甕	－	27.7	－	－	ナデ(ススス)／ナデ	小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
	－3	土師器	小型壺	12.9	12.7	5.9	8.6	ヘラケズリ、ヨコナデ（ススス）／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	3／4残
	－4	土師器	坏	14.1	－	－	4.8	ヘラケズリ後ナテ、ヨコナデ／ナデ	小石粒	良	褐色	黒褐色	黒褐色	完形
	－5	土師器	高坏	12.8	－	10.0	10.4	坏部ヨコナデ/ヘラミガキ・脚部ヘラミガキ/ヘラケズリ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	暗褐色	完形
	－6	土師器	高坏	－	－	11.8	－	ヘラミガキ／ヘラケズリ	小石粒	良	褐色	灰褐色	褐色	ほぼ残
	－7	土師器	高坏	－	－	9.2	－	ヘラミガキ、ヨコナデ/ヘラミガキ、ヨコナデ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	ほぼ残
	－8	須恵器	甑	－	10.8	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰色	褐灰色	褐灰色	1／4残
SM19	61－1	須恵器	甕	25.6	44.6	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰色	灰色	灰色	3／4残
	－2	須恵器	坏	12.1	－	5.2	3.7	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	4／5残
SM20	61－3	土師器	手捏ね	5.2	－	4.8	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ残
	－4	土師器	坏	15.0	－	7.0	5.1	ロクロナデ、回転糸切り底／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	内黒	ほぼ残
SM21	61－5	土師器	高坏	15.8	－	－	－	ヨコナデ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	赤褐色	褐色	赤褐色	1／3残
	－6	土師器	高坏	15.7	－	12.8	12.3	坏部ヨコナデ/ヨコナデ・脚部ヘラミガキ/ヘラケズリ	雲母・小石粒	良	赤褐色	褐色	赤褐色	ほぼ完
	－7	土師器	高坏	16.6	－	12.6	－	坏部ナデ／ヘラナデ・脚部ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	褐色	赤褐色	ほぼ残
SM22	62－1	土師器	壷	－	18.1	5.1	－	ヘラナデ、ヨコナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	暗褐色	ほぼ残
	－2	土師器	甕	15.0	－	－	－	ハケ／ハケ（ススス）	雲母・小石粒	良	黒褐色	黒褐色	黒褐色	1／3残
	－3	土師器	坏	12.4	－	－	5.3	ヘラナテ後ヘラミガキ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	赤褐色	暗褐色	赤褐色	3／4残
	－4	土師器	底部穿孔壷	20.4	25.0	－	－	ナデ／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	2／3残
	－5	土師器	底部穿孔壷	－	－	6.6	－	ハケ後ナデ／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	ほぼ残
	－6	土師器	底部穿孔壷	－	25.9	7.2	－	ナデ／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／2残
	－7	土師器	鉢	32.2	－	－	－	ハケ後ナデ／ハケ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／4残
SK04	63－1	土師器	甕	－	－	7.0	－	ヨコナデ／器面荒れ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	3／4残
	－2	土師器	甕	－	－	7.4	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	ほぼ残
SK20	63－3	灰釉陶器	瓶	－	－	6.7	－	ロクロナデ、回転糸切り底／窯印	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	2／3残
SK24	63－4	土師器	坏	14.4	－	－	4.9	ヘラケズリ後ヘラミガキ／ミガキ	雲母・小石粒	良	褐色	黒褐色	褐色	ほぼ完
	－5	土師器	高坏	－	－	11.8	－	ヘラミガキ／坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	黒褐色	褐色	1／4残
SK29	63－6	土師器	坏	－	－	3.4	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	黄橙色	黄橙色	黄橙色	1／2残
SK31	63－7	須恵器	坏	12.4	－	5.2	4.4	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	3／4残
	－8	須恵器	坏	－	－	8.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	黒灰色	灰色	灰色	1／4残
	－9	灰釉陶器	碗	－	－	8.1	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	明褐灰色	明褐灰色	明褐灰色	1／2座
SK51	63－10	陶器	碗	－	－	4.2	－	削り出し高台	砂粒	良	鉄釉	灰白色	褐灰色	ほぼ残
	－11	陶器	瓶	－	－	4.8	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	褐灰色	褐灰色	3／4残
SK54	63－12	陶器	碗	11.8	－	11.8	5.5	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	鉄釉	灰白色	鉄釉	1／4残
	－13	磁器	合子（蓋）	7.3	－	－	3.0	ロクロナデ／ロクロナデ	－	良	浅黄色釉	灰白色	浅黄色釉	4／5残
SK55	63－15	陶器	皿	10.5	－	6.0	2.5	ロクロナデ、削り出し高台／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	黒褐色	暗褐色	1／2残
	－16	陶器	擂鉢	28.0	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	鉄釉	灰白色	黒褐色	1／4残
SK57	63－17	陶器	皿	－	－	5.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	灰白色	鉄釉	1／2残
SK63	63－19	縄文土器	深鉢	－	－	8.0	－	－	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／4残
SK77	63－18	陶器	皿	10.4	－	5.0	2.1	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰釉	ほぼ完
SK82	63－14	灰釉陶器	小瓶	3.8	7.2	4.8	9.4	ロクロナデ、回転糸切り底、墨書／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	－	灰色	完形

（2）金属製品

① ＳＫ64出土遺物（第67～69図、図版44・45）

ＳＭ03に伴うＳＫ64より１頭分の馬骨と共に馬具１セットが出土している。

ａ．鉄製ｆ字鏡板付轡（第67図６）

関節部分はやや錆膨れが進むが、おおむね状態は良好で、欠損はほとんどない。

鏡板の最大長13.0cm、引手と銜を鏡板外部で連結する外接式である。銜長16.5cm（片側9.5cm）、引手長13.5cmと、やや小振りで寸詰まりの印象を受ける。

鏡板　鏡板の立聞は小方形で、レントゲン写真によって本体とは別作りであることが確認された。銜通し孔に銜留めを鍛接するが、左右で構造が異なる。右鏡板では立聞孔の下で止まり、孔下縁形状に合わせて裁断してある。左鏡板では立聞の上端まで延び、立聞に鍛接されて一体化し、銜留めにも立聞孔が開けられてある。銜通し孔は径1.5cmほどの丸孔を２つ合わせた、最大長2.1cmの∞字形である。

引手　銜と引手は別に遊金を仲介させて連結する。したがって銜先は、銜留めと遊金の両者を中に入れている。遊金の径は、確認できる右鏡板側で2.5cm。引手壷は一体型で、引手に対して約90°曲がっている。

面繋吊金具　面繋吊金具は６鋲長方形板を使用する。最大長5.5cm、最大幅は2.0cmだが、立聞へ向かうほど広がる。上端は角を裁断し、丸くおさめてある。立聞との連結は、表側に鍛接した鉤による。面繋金具下端は、やや立聞にかぶさる。鋲は径4.5mm、裏側で上方へ90°曲がる。

ｂ．面繋

４鋲方形板辻金具、鉸具と半円形留金具の組み合わせである。

４鋲方形板辻金具（第67図３～５）

４鋲方形板辻金具は３点、責金具は５点出土している。やや錆膨れが進んでおり、鋲は軸を残した欠損が認められる。辻金具１・辻金具２の組み合わせと、辻金具１・責金具１の組み合わせからなる。

４鋲方形板辻金具は１辺1.7cm、鋲径0.4cm。裏面に、おそらく革と思われる有機物が付着している。責金具は無装飾の鉄製である。内側は平らで、断面半円形に整えてある。

小型鉸具（第67図１）

やや錆化は進むが、全体的に残存状態は良好である。輪金左端を折り曲げて横棒を作り出したもので、横棒を差し込む個所は平らに潰されている。最大長5.8cm、最大幅3.0cm。

１鋲半円形留金具（第67図２）

小型鉸具とセットで使用されたものと思われる。中央に径不明の１鋲を留めたもので、鋲の裏面は欠損している。最大長1.4cm、最大幅1.4cm。

ｃ．鐙

木で作った鐙本体の一部を、鉄で覆った木芯鉄張輪鐙である。鉸具、柄、輪の組み合わせが、左右１組出土している。柄と輪は、左右で大きさが若干異なる。北側鐙には、柄と輪の間に最大長4.0cmの釘が付属する。

鉸具（第68図７）

残存状態は良好で、錆膨れも少ない。鉸具は最大長6.6cm、刺金長6.5cm、横棒長3.6cm。輪金は、横棒を通す個所で平らに潰してある。

柄（第68図８）

左右側面のみに鉄張りを施したものである。残存状態は良好で、錆膨れも見られない。木質が残っており、南側のものは吊り下げ孔も認められる。柄は中央が狭く、上下端ほど幅広の鉄板を、頂部方形の柄形状に合わせて折り曲げて制作する。さらに正・背面側端部は、心持ち断面コ字形に整えてある。北側が若干大きく、最大長7.0cm、幅3.3cm。南側は小さく、最大長6.5cm、幅3.0cm。鉄板最大幅は、２点とも1.4cm。下端隅は裁断して、半裁六角形状をしている。径0.3cmの釘を上下２本貫通させており、１本は上から1.2cm、もう１本は下から1.2cmの個所に打ち込んである。頭は潰してあるが、北側のものは、径が小さく整った形状をしている。内部の木質は目が縦方向に流れている。南側の柄内部木質には、吊り下げ孔が確認できる。吊り下げ孔は上部釘の直下、柄上端から1.5cmほどの個所に横長方形で開口する。推定1.7×0.8cm。

輪（第68図10）

柄の付け根付近内面と正背面を、補強するため鉄張りにしたものである。残存状態は良好で、錆膨れも認められず、南側のものには木質が残存している。輪鐙上部形状に合わせてゆるく湾曲させ、さらに正・背面側は木質を包むように断面コ字形に整えてある。南側が若干大きく、断面が半裁台形に近い。

最大長6.5cm、最大幅2.5cm、高さ0.7cm。北側は小さく、最大長6.0cm、幅2.2cm、高さ1.1cm。いずれも左右端から0.8cmほどの個所に2本、長さ2.0cmの鋲を留めてある。鋲は鉄板側から打ち込み、木質を突き抜けて反対側は細環で留めてある。南側に残存している木質は、木目方向が鉄板方向に等しく、柄の木目とは直交する。

釘（第68図9）

北側の柄と輪の中間にのみ付属する。断面横長方形の短い鉄棒で、最大長3.5cm、径0.4cm、左右端部径0.6cm。木質が銹着しているが、木目方向は約80°の角度でハ字形に開いている。

d．鞍金具（第68図11）

輪金と脚が一体化した鞍である。やや錆化が進み、1点は脚先端が、1点は脚間の釘が欠損している。

鉸具　最大長は2点とも6.0cm、輪金幅は1点が3.5cm、もう1点は3.2cmで若干小さい。輪金の一部は5.0mmほど瘤状に膨らんでおり、そこへT字形刺金を差し込む。瘤は正面方向のみ飛び出し、左右と背面方向への突出はなく、鍛接痕もない。おそらく裁断の際に、刺金を差し込む部分を残して瘤状に仕上げたものと思われる。座金より下側にあたる脚は、ゆるく外反する。また、左右に開かず、座金から2.0cmほどの個所で、脚同士をつなぐ釘を打ち込んでいる。

座金　座金は空豆形で、脚を通す部分は長方形に穿孔している。断面の盛り上がりは低い。最大長4.0cm。

e．尻繋

3鋲半円形留金具をともなう7脚鉄製環状雲珠と、3点の剣菱形杏葉の組み合わせである。

環状雲珠（第69図13）

雲珠は断面長方形の鉄環で、留金具が1点銹着している。残存状態は良好だが、環の鍛接個所は不明である。径5.6cm、厚み0.4cm。通有の鉄地金銅張環状雲珠とは異なり、留金具は固定装着されていない。

3鋲半円形留金具（第69図12）

全体的に錆膨れが進み、鋲頭と鋲裏ともに欠損が多い。1点は鋲裏の鉤先端までよく残っている。

留金具は、半円形板の表側に責金具を鍛接、一体化したものである。最大長1.9cm、責金具の正面幅2.3cm、前後幅1.3cm。責金具は面繋金具とは異なり、断面が平たい。半円形板に径4.0mmの鋲を3点打ち込むが、裏側で各々中央へ向かう方向へ90°曲がる。

剣菱形杏葉（第69図14）

おおむね残存状態は良好だが、吊金具は錆膨れが進んでいる。

杏葉は、剣菱の先端へ向かうカーブはあまり顕著ではない。1点は、円形部分と剣菱部分の中間点が左右非対称のゆがみを持つ。3点とも最大長12.0cm、頭部最大幅6.0cm。吊金具は、1点は最大長2.5cmの4鋲方形板を使用し、2点は最大長1.8cmの3鋲半円形板を使用する。いずれも表側より鉤を鍛接し、鉤端部はやや平らに潰されている。鋲は径4.0mm、裏側で各々中央へ向かう方向へ90°曲がる。

②　SK18出土遺物（第70～71図、図版42）

a．鉄鏃（第70図、第71図1～8）

26本のすべて逆刺付片刃長頸鏃で、平根系や尖矢はない。サイズはおおむね整えられている。

なお、SK18出土鉄鏃のうち、茎に矢柄が残存している1本（第70図－17）についてパリノ・サーヴェ

イ株式会社により分析を行った結果、材質はイネ科タケ亜科であることが確認された。さらに、内部の中空部分に薄い植物質の物質を四角に巻いたものが入れられている様子が観察された。植物質の物質は、その特徴から樹皮などと考えられるが、詳細は不明であるということである。

b．靫金具

鉄鏃の上左右より、吊金具１対とコ字形金具が出土している。吊金具の鉸具の方向が鉄鏃の鋒と一致しているため、矢を上向きにして入れる「靫」とした。

吊金具（第71図９・10）

吊金具は片側端部に鉸具が装着され、もう一端が半円形に裁断調整された、短冊形である。吊金具の鉸具には刺金がなく、単に輪金が通されているのみである。１点は鉸具が残存し、もう１点は鉸具の大半が欠損する。幅は両者とも2.0cmで同じだが、鉸具が残存するものは長さがやや短い。短い方の全長は14.8cm。短冊形鉄板長は、短いものは13.7cm、長い方は14.5cm。両者とも、左右縁と中央軸に沿って３列の鋲が打たれている。短い方は各列７鋲ずつだが、長い方は短いものよりも各列１鋲多い。また、長い方は鉸具輪金の長さが左右で異なるため、もっとも鉸具に近い位置の鋲は、鉸具に合わせて左右不均衡に並んでいる。鉸具を取り付けるため、上端は左右の縁を切り欠き、残った中央部分を表から裏へ回して軸通しを作成している。輪金に鍛接痕はなく、軸通しに左右からはめ込んだものと思われる。

コ字形金具（第71図11）

コ字形金具は、細長鉄板を曲げたもので、片側の端部は欠損する。縁は内側へ返り込んでおり、内面には木質が残存している。木目方向は、鉄板長軸と一致する。端から1.0cmの位置に、径0.6cmの鋲を打ってある。端部ほど幅広く、中央の辺は幅が狭い。端部側の辺は長さ5.5cm、中央辺は長さ3.0cm、端部幅1.5cm、中央幅1.0cm。

③　金属製品観察表（第65・66・72図、図版41～43・49）

遺構No.	図版No.	形態	法量（cm）								
			刃部			頸部			茎部		
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
SM03	65－1	逆刺付片刃長頸鏃	2.9	0.9	0.3	9.5	0.5	0.35	5.5＋	0.3	0.25
	－2	逆刺付片刃長頸鏃	3.4	0.9	0.9	10.1	0.6	0.4	3.5＋	0.4	0.3
	－3	逆刺付片刃長頸鏃	3.1	0.8	0.2	9.5	0.5	0.3	3.4＋	0.35	0.2
	－4	逆刺付片刃長頸鏃	3.3	0.8	0.2	9.5	0.5	0.35	3.3＋	0.4	0.35
	－5	逆刺付片刃長頸鏃	3.2	0.8	0.2	10.4	0.5	0.35	2.0＋	0.4	0.3
	－6	逆刺付片刃長頸鏃	－	0.8	0.2	－	0.5	0.35	1.6＋	0.4	0.3
	－7	逆刺付片刃長頸鏃	3.1	0.9	0.2	9.8	0.55	0.3	1.7＋	0.45	0.25
	－8	逆刺付片刃長頸鏃	3.0	0.8	0.2	9.8	0.5	0.35	2.0＋	0.4	0.3
	－9	逆刺付片刃長頸鏃	3.3	0.8	0.2	8.7	0.5	0.4	2.0＋	0.4	0.4
	－10	逆刺付片刃長頸鏃	3.1	0.8	0.2	8.3	0.5	0.4	3.2＋	0.35	0.25
	－11	逆刺付片刃長頸鏃	3.2	0.8	0.2	8.2	0.45	0.4	3.6＋	0.4	0.25
	－12	逆刺付片刃長頸鏃	1.9＋	0.8	0.2	9.3	0.45	0.35	1.2＋	0.4	0.3
	－13	逆刺付片刃長頸鏃	1.9＋	0.85	0.25	－	0.5	0.4	－	－	－
	－14	逆刺付片刃長頸鏃	3.7	0.85	0.2	5.2＋	0.5	0.4	－	－	－
	－15	逆刺付片刃長頸鏃	3.2	0.8	0.2	7.2＋	0.5	0.3	－	－	－
	－16	逆刺付片刃長頸鏃	－	－	－	5.3＋	0.5	0.3	3.2＋	0.3	0.25
	－17	逆刺付片刃長頸鏃	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	－18	逆刺付片刃長頸鏃	－	－	－	8.1＋	0.5	0.4	2.7＋	0.45	0.3
SK18	70－1	逆刺付片刃長頸鏃	2.2＋	0.7	0.2	－	0.45	0.3	2.3＋	0.35	0.3
	－2	逆刺付片刃長頸鏃	2.5	0.8	0.25	7.5	0.5	0.35	5.9	0.35	0.3
	－3	逆刺付片刃長頸鏃	2.1＋	0.9	0.2	7.9	0.5	0.4	5.9	0.3	0.3
	－4	逆刺付片刃長頸鏃	2.6＋	0.75	0.2	7.4	0.5	0.35	2.7＋	0.3	0.3
	－5	逆刺付片刃長頸鏃	2.5	0.75	0.2	7.8	0.35	0.3	4.4	0.3	0.3
	－6	逆刺付片刃長頸鏃	2.2＋	0.8	0.2	8.1	0.45	0.4	3.4＋	0.3	0.3
	－7	逆刺付片刃長頸鏃	2.6	0.7	0.2	6.9	0.5	0.3	6.75	0.3	0.3
	－8	逆刺付片刃長頸鏃	1.3＋	0.65	0.2	7.7	0.4	0.3	5.2＋	0.25	0.25
	－9	逆刺付片刃長頸鏃	2.4	0.65	0.2	6.9	0.4	0.3	5.1＋	0.35	0.35
	－10	逆刺付片刃長頸鏃	2.2＋	0.65	0.2	－	0.4	0.4	－	0.25	0.25
	－11	逆刺付片刃長頸鏃	2.7	0.6	0.2	7.25	0.4	0.3	4.5＋	0.2	0.2

遺構No.	図版No.	形態	法量(cm) 刃部 長さ	刃部 幅	刃部 厚さ	頸部 長さ	頸部 幅	頸部 厚さ	茎部 長さ	茎部 幅	茎部 厚さ
SK18	70－12	逆刺付片刃長頸鏃	1.9＋	0.65	0.2	7.5	0.4	0.3	4.3＋	0.25	0.2
	－13	逆刺付片刃長頸鏃	－	0.6	0.2	－	0.4	0.3	3.6＋	0.25	0.2
	－14	逆刺付片刃長頸鏃	－	－	－	7.2＋	0.4	0.35	2.1＋	－	－
	－15	逆刺付片刃長頸鏃	1.6＋	0.7	0.2	6.9	0.45	0.3	2.8＋	0.3	0.25
	－16	逆刺付片刃長頸鏃	1.8＋	0.7	0.2	6.85	0.4	0.3	3.8＋	0.3	0.25
	－17	逆刺付片刃長頸鏃	1.9＋	0.7	0.2	6.8	0.4	0.3	3.0＋	0.3	0.25
	－18	逆刺付片刃長頸鏃	2.6	0.6	0.2	6.3	0.35	0.25	4.6＋	0.3	0.3
	71－1	逆刺付片刃長頸鏃	2.0	0.65	0.2	7.1	0.4	0.3	6.5＋	－	－
	－2	逆刺付片刃長頸鏃	2.5	0.65	0.2	7.1	0.4	0.3	6.7	0.2	0.2
	－3	逆刺付片刃長頸鏃	2.1＋	0.7	0.2	6.7	0.5	0.3	6.1	0.3	0.25
	－4	逆刺付片刃長頸鏃	2.1	0.75	0.25	6.6	0.45	0.3	6.0＋	0.3	0.3
	－5	逆刺付片刃長頸鏃	1.8＋	0.7	0.2	6.7	0.4	0.3	5.8＋	0.2	0.2
	－6	逆刺付片刃長頸鏃	2.2	0.85	0.2	6.6	0.45	0.4	6.3	0.3	0.25
	－7	逆刺付片刃長頸鏃	2.5	0.7	0.2	6.8	0.45	0.3	4.4＋	0.4	0.4
	－8	逆刺付片刃長頸鏃	－	－	－	7.7＋	0.4	0.3	5.8＋	0.35	0.35
SK21	72－2	有頸腸抉三角形鏃	5.7	1.9	0.2	1.1＋	0.6	0.3	－	－	－
	－3	長頸三角形鏃	2.1	1.2	0.2	4.2＋	0.5	0.4	－	－	－
	－4	長頸三角形鏃	2.3	1.2	0.2	3.7＋	0.6	0.4	－	－	－

遺構No.	図版No.	材質	形態	法量(cm) 全長	刃部 長さ	刃部 幅	刃部 厚さ	茎部 長さ	茎部 幅	茎部 厚さ
SM03	66－1	鉄	直刀	79.7	63.0	3.3	0.65	16.7	1.8～2.8	0.5
SM04	66－2	鉄	鑿	17.7＋	－	0.9	0.2～0.5	－	0.4	0.4
	－3	鉄	不明鉄製品	全長4.6＋　径1.3						
SM07	66－4	鉄	刀子	11.3＋	8.7	1.1～2.0	0.2	2.6＋	1.05	0.2
	－5	鉄	鑿	15.2＋	10.6	1.0～1.1	0.5	4.6＋	0.5	0.5
	－6	鉄	ヤリガンナ	22.7＋	3.0＋	0.5～1.0	0.2	19.7＋	0.7～0.8	0.4
	－7	鉄	ヤリガンナ	13.6	1.8	0.65	0.2	11.8	0.5～0.6	0.4
	－8	鉄	ヤリガンナ	15.0＋	--	－	－	－	0.3～0.6	0.2～0.4
	－9	鉄	鏃	9.1＋	8.8＋	2.4～3.0	0.35	－	－	－
SM19	72－1	鉄	刀子	11.8	7.3	0.7～1.2	0.2	4.5	0.9	0.2
SK19	72－5	銅	帯金具（巡方）	全長2.4　幅3.1　厚さ0.5						
	－6	銅	帯金具（巡方）	全長2.3　幅2.9　厚さ0.5						

遺構No.	図版No.	材質	銭貨名	時代 初鋳年	法量(cm) 径	法量(cm) 厚さ	備考
SB03	74－1	銅	元豊通寶	北宋　1078	2.4	0.1	
SK54	74－2	銅	寛永通寶(新寛永)	1668	2.8	0.15	3枚
SK76	74－3	銅	皇宋通寶	北宋　1038	2.5	0.15	
	－4	銅	皇宋通寶か		－	0.15	
	－5	銅	皇宋通寶か		－	0.15	
	－6	銅	元符通寶	北宋　1098	2.25	0.15	
	－7	銅	紹聖通寶	北宋　1094	2.35	0.2	
	－8	銅	嘉祐通寶か	北宋　1059	2.3	0.15	
SK81	74－9	銅	景祐元寶	北宋　1034	2.4	0.1	

(3) 石製品

石製品観察表（第72・73図、図版43）

遺構No.	図版No.	形態	法量(mm) 直径	法量(mm) 最大長	法量(mm) 孔径	穿孔方向	材質
SM07	73－3	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－4	臼玉	4.5	2.0	2.0	片側	滑石
	－5	臼玉	5.0	3.5	1.5	片側	滑石
	－6	臼玉	5.0	3.0	1.6	片側	滑石
	－7	臼玉	4.5	2.5	2.0	片側	滑石
	－8	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－9	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－10	臼玉	4.5	3.0	2.0	片側	滑石
	－11	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－12	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－13	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－14	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－15	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－16	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－17	臼玉	5.5	3.0	2.0	片側	滑石
	－18	臼玉	5.5	3.5	2.0	片側	滑石
	－19	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－20	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－21	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石

遺構No.	図版No.	形　態	法　量（mm）			穿孔方向	材　質
			直　径	最大長	孔　径		
SM07	73－22	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－23	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－24	臼玉	5.0	4.5	2.0	片側	滑石
	－25	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－26	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－27	臼玉	5.0	2.0	2～2.5	片側	滑石
	－28	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－29	臼玉	5.0	3.0	2.0	片側	滑石
	－30	臼玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	－31	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－32	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－33	臼玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	－34	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－35	臼玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	－36	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－37	臼玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	－38	臼玉	5.0	4.0	2.0	片側	滑石
	－39	臼玉	5.5	2.0	2.5	片側	滑石
	－40	臼玉	5.0	2.5	2.0	片側	滑石
	－41	臼玉	5.0	3.5	2.0	片側	滑石
	－42	臼玉	5.0	1.0	2.0	片側	滑石
	－43	臼玉	－	3.0	2.0	片側	滑石
	－44	管玉	4.0	17.5	1.5～2	片側	碧玉
	－45	管玉	4.0	23.0	2.0	片側	碧玉
	－46	勾玉	8～10.5	26.5	2～3.5	片側	オパール

遺構No.	図版No.	形　態	法　量（cm）			石　質
			長　さ	幅	厚　さ	
SM04	72－9	石製品(剣)	7.8	1.7	0.3	凝灰岩
	－10	石製紡錘車	4.4	4.5	1.0	滑石
SM07	73－1	石製模造品(有孔円板)	2.5	3.0	0.5	滑石
	－2	石製模造品(有孔円板)	2.4	3.0	0.5	滑石

(4) 石器

石器観察表（第75～80図、図版46～50）

遺構No.	図版No.	形　態	法　量（cm）			石　質
			長　さ	幅	厚　さ	
SB04	75－1	石臼	8.9＋	16.3	8.1	花崗岩
SB15	75－2	砥石	5.9＋	2.75	1.6	－
SK13	75－3	打製石斧	8.0＋	5.1	1.3	硬砂岩
SK34	75－4	打製石斧	9.0＋	4.3	1.5	硬砂岩
SK36	75－5	砥石	14.0	6.4	5.0	流紋岩
SK57	75－6	敲打器	10.4	4.0	2.9	硬砂岩
SM03	76－1	打製石斧	18.4	8.0	3.2	硬砂岩
	－2	打製石斧	11.5＋	6.6＋	3.0	硬砂岩
SM04	76－3	打製石斧	14.6	7.2	2.1	硬砂岩
	－4	打製石斧	18.7＋	9.3	4.3	硬砂岩
	－5	打製石斧	21.0＋	8.6	2.8	硬砂岩
	－1	打製石斧	17.1＋	7.6	4.0	硬砂岩
	－2	打製石斧	18.3	8.25	3.4	硬砂岩
	－3	打製石斧	13.6	6.7	2.0	硬砂岩
	－4	打製石斧	11.9	5.8	1.4	硬砂岩
	－5	打製石斧	12.1	4.9	1.8	硬砂岩
	－6	打製石斧	11.1	5.2	1.6	硬砂岩
	－7	打製石斧	8.8＋	5.8	1.45	硬砂岩
	－8	打製石斧	10.1	4.1	0.7	緑色片岩
	－9	打製石斧	9.9	4.35	1.5	硬砂岩
	－10	打製石斧	9.8	4.3	1.5	硬砂岩
	－11	打製石斧	8.9	4.3	1.3	緑色片岩
	78－1	打製石斧	9.6	4.6	1.7	硬砂岩
	－2	打製石斧	11.2	4.3	1.8	緑色片岩
	－3	打製石斧	8.2＋	4.6	1.0	硬砂岩
	－4	打製石庖丁	3.8	8.9	0.9	硬砂岩
	－5	有肩扇状形石器	8.4	11.7	2.0	緑色片岩
	－6	有肩扇状形石器	9.2	15.4	2.1	硬砂岩
	－7	磨製石斧	6.5＋	3.55	1.3	凝灰岩質チャート
	－8	磨製石斧未製品	10.4＋	7.2＋	3.5	緑色片岩
SM06	78－9	打製石斧	13.6＋	7.2	2.8	硬砂岩
	－10	打製石斧	10.6＋	6.2	2.4	硬砂岩
	－11	打製石斧	8.3＋	4.8	1.7	硬砂岩

遺構No.	図版No.	形　態	法　量（cm）			石　質
			長　さ	幅	厚　さ	
ＳＭ07	79－１	打製石斧	11.8＋	7.1	3.7	硬砂岩
	－２	打製石斧	8.0＋	14.8	1.7	緑色片岩
	－３	横刃型石器	6.6	9.45	1.4	硬砂岩
ＳＭ12	79－４	打製石斧	11.6	5.2	2.7	緑色片岩
ＳＭ15	79－５	打製石斧	16.0	6.3	2.6	緑色片岩
	－６	打製石斧	5.8＋	4.7	2.0	緑色片岩
	－７	打製石斧	8.0＋	5.3	2.1	硬砂岩
	－８	打製石斧	11.2	4.0	1.8	緑色片岩
	－９	打製石庖丁	4.2	10.1	1.7	硬砂岩
ＳＭ18	79－10	打製石斧	17.2	9.45	2.2	硬砂岩
	－11	打製石斧	14.1	7.8	2.1	硬砂岩
ＳＭ22	80－１	打製石斧	11.5＋	14.9	1.6	硬砂岩
ＳＫ82	80－２	打製石斧	12.7＋	8.4	3.45	硬砂岩
	－３	打製石斧	9.4	5.6	2.3	硬砂岩
	－４	横刃型石器	6.9	10.2	1.75	硬砂岩
ＳＤ01	80－５	打製石斧	10.4	3.8	1.3	硬砂岩
	－６	砥石	1.9＋	1.0	0.7	流紋岩
ＳＤ09	80－７	横刃型石器	7.4	6.2＋	1.5	硬砂岩

（5）馬歯骨

馬歯骨は、以下の６ヶ所で確認された。

①　ＳＫ64

規模は2.4×1.12ｍのＳＭ03の周溝に掘り込まれた土壙。馬歯および骨の痕跡を検出した。骨の遺存状態は極めて悪く、唯一部位がわかるのは、切歯および臼歯が確認できた頭部のみである。これは、土壙の南西隅にあり、北側を向いていることがわかる。それ以外は、部位を特定することはできなかった。頭部の位置および土壙の規模からみて、本来は馬一頭の全身があったものとみられる。共伴して馬具一式が出土している。ＳＭ03に伴う馬を埋葬した土壙である。

②　ＳＭ15

南東側周溝内の転落した葺石の間から土器類と共に出土している。遺存部位は馬歯残片のみである。遺存状態は悪い。出土状態からＳＭ15に伴うものである可能性が高いが、葺石が転落している状況からみても、馬歯は原位置を保っているとは考えられない。本来の状況および位置は明確ではない。

③　ＳＫ10

規模1.64×1.04ｍの単独の土壙。馬骨一体分が確認された。遺存状態は良好であり、各骨の部位も確認できる。馬骨の詳細については「附編１」によるが、横臥姿勢で一体分をそのままの状態で埋めている。共伴遺物はないが、出土状態から馬は埋葬されたものとみられる。

④　ＳＫ11

規模1.02×0.42ｍの単独の土坑。切歯・臼歯および下顎骨の一部が出土したが、遺存状態はあまり良くない。規模は、ＳＫ64、ＳＫ10と比較しても若干小規模であり、本来馬一頭分があったかどうかは不明である。

⑤　ＳＫ42

規模1.32×1.08ｍの土坑。馬歯の一部残片が出土したのみで、遺存状態も悪い。本来の状態は不明である。

⑥　ＳＫ68

規模0.51×0.49ｍでＳＭ17を切る土坑である。馬歯が確認されたが、臼歯の残片のみで遺存状態は悪い。土坑の規模からみて、本来一頭分の全身があったとは考えられない。ＳＭ17が一部を調査したのみ

のため時期が特定できず、ＳＫ68との関係も明確ではない。

最も遺存状態の良好なＳＫ10については、宮崎重雄氏に性別・体高等について鑑定を依頼した。それ以外については、いずれも馬歯の一部のみのため、馬が本来どのような状態にあったのかを判断することは難しい。

馬の帰属時期については、ＳＫ64が共伴する馬具の年代から古墳時代中期（５世紀後半）の年代が与えられる。また、ＳＭ15出土例が周溝墓に伴うものであるとすれば、やはり古墳時代中期のものである。ＳＫ10は、ＳＫ64出土例との形態等の類似から、古墳時代の可能性が高い。それ以外は、時期は明確でない。

５．遺構外出土遺物

遺構外出土遺物には、土器・陶器類、金属製品、石器がある。

陶器類は、平安時代の灰釉陶器と中世の陶器である。平安時代については、今回の調査では土壙墓であるＳＫ82のほか土坑が３基確認できたが、さらなる該期の遺構の存在が推定される。また、今回の調査地がある一帯は、中世に大きく削平されていることが確認されており、中世以前の遺構はこの際に削平または破壊されている可能性が考えられる。中世の遺物は擂鉢等があり、該期の集落域として捉えられる。

金属製品は、鉄剣（第72図８）がグリットＡＦ30から出土している。周辺の周溝墓群又は溝口の塚古墳との関連が考えられる。ほかは中世の遺物であり、集落あるいは墓域にかかわるものである。

石器については、第81図１～４に特筆すべきものがある。いずれも出土状況は明確でないが、石器の形態等から、旧石器時代最終末から縄文時代草創期に属する可能性があり、該期の資料の少ない中で、貴重な資料といえる。

① 土器・陶器類観察表（第64図、図版41）

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量（cm）				手法	胎土	焼成	色調			残存
				口径	胴径	底径	器高	外面／内面			外面	断面	内面	
遺構外	64－6	土師器	甕	20.5	－	－	－	ハケ／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	2／3残
	－7	土師器	坏	12.6	－	5.4	4.3	ロクロナデ、回転糸切り／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	黄褐色	暗褐色	黄褐色	2／3残
	－8	須恵器	坏	12.8	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	1／4残
	－9	灰釉陶器	坏	－	－	5.0	－	ロクロナデ、回転糸切り／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	1／3残
	－10	灰釉陶器	皿	－	－	6.6	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－11	灰釉陶器	皿	－	－	5.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－12	灰釉陶器	皿	－	－	8.0	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－13	灰釉陶器	皿	－	－	6.4	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	明灰色	明灰色	明灰色	1／3残
	－14	陶器	皿	7.4	－	3.3	1.6	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	褐色釉	褐灰色	褐色釉	2／3残
	－15	陶器	皿	－	－	4.8	－	ロクロナデ、削り出し高台／ロクロナデ	小石粒	良	鉄釉	灰白色	灰白色	完形
	－16	陶器	碗	－	－	4.6	－	ロクロナデ、削り出し高台／ロクロナデ	小石粒	良	灰釉	灰白色	灰白色	ほぼ残
	－17	陶器	碗	－	－	10.0	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰釉	黄褐色	黄褐色	1／4残
	－18	陶器	擂鉢	－	－	9.5	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	鉄釉	焦茶色	鉄釉	1／2残
	－19	陶器	擂鉢	－	－	10.4	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	黄褐色	黄褐色	1／5残
	－20	陶器	皿	15.6	－	11.2	4.2	ロクロナデ／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	灰色	灰色	灰色	1／4残
	－21	陶器	灯明	4.6	－	3.5	3.3	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	灰色	鉄釉	2／3残

② 金属製品観察表（第72・74図、図版42・43・49）

遺構No.	図版No.	材質	形態	法量（cm）						
				全長	刃部			茎部		
					長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ
遺構外	72－7	鉄	鑿	20.2＋	5.2	1.8～2.1	0.8	15.0＋	0.8	1.1～1.6
	－8	鉄	剣	43.6＋	39.6＋	2.2～3.5	0.4	3.4＋	1.6	0.35

遺構No.	図版No.	材質	銭貨名	時代 初鋳年	法量(cm)		備考
					径	厚さ	
遺構外	74－10	鉄			2.25	0.15	
	－11	鉄			2.3	0.15	
	－12	銅	祥符通寶	北宋 1008	2.4	0.1	
	－13	銅	淳化元寶	北宋 990	2.35	0.1	
	－14	銅	祥符元寶	北宋 1008	2.4	0.1	
	－15	銅	祥符元寶		2.45	0.15	

③ 石器観察表（第81～83図、図版49・50）

遺構No.	図版No.	形態	法量（cm）			石質
			長さ	幅	厚さ	
遺構外	81－1	掻器	8.3	3.3	1.2	凝灰岩
	－2	尖頭器	4.7＋	2.5	0.7	チャート
	－3	有舌尖頭器	7.1	2.5	0.6	凝灰岩
	－4	尖頭器	13.6	4.0	1.2	緑色片岩
	－5	石鏃	2.2＋	1.4	0.5	黒曜石
	－6	石鏃	2.9＋	1.2	0.5	チャート
	－7	石鏃	2.3＋	1.2	0.5	黒曜石
	－8	石鏃	2.2＋	－	0.3	黒曜石
	－9	石鏃	1.8	1.4	0.4	黒曜石
	－10	石鏃	1.4＋	1.5	0.3	黒曜石
	－11	石鏃	1.2	1.5	0.2	黒曜石
	－12	剥片	2.4	2.5	0.3	黒曜石
	－13	剥片	1.8	1.9	0.5	黒曜石
	82－1	打製石斧	17.5＋	6.6	3.1	硬砂岩
	－2	打製石斧	15.15＋	7.6	2.3	硬砂岩
	－3	打製石斧	12.7	6.6	2.0	硬砂岩
	－4	打製石斧	8.9＋	5.95	2.5	硬砂岩
	－5	打製石斧	10.9＋	5.1	1.4	緑色片岩
	－6	打製石斧	10.3＋	4.45	1.4	硬砂岩
	－7	打製石斧	9.3	5.0	1.8	硬砂岩
	－8	打製石斧	9.9	4.4	1.4	硬砂岩
	－9	打製石斧	10.8	4.1	1.45	緑色片岩
	－10	打製石斧	9.3	4.7	1.2	硬砂岩
	－11	打製石斧	8.5	4.4	1.85	硬砂岩
	－12	打製石庖丁	4.25	7.8	1.0	硬砂岩
	－13	有肩扇状形石器	8.1	9.1＋	1.75	硬砂岩
	83－1	砥石	3.8＋	2.2	1.55	－
	－2	砥石	11.65	5.1	1.4	流紋岩
	－3	敲打器	17.55	7.8	5.0	硬砂岩
	－4	敲打器	9.3＋	5.1	3.0	硬砂岩

高屋遺跡（ＴＫＹ）

１．調査の方法と概要

宮垣外遺跡と同様、道路用地の取得状況に応じて調査をしており、Ⅰ～Ⅲ区に分かれている。基準杭設置は、宮垣外遺跡と同様である。本調査地の区画は挿図３で示したように、ＬＣ－85　２－20、28である。

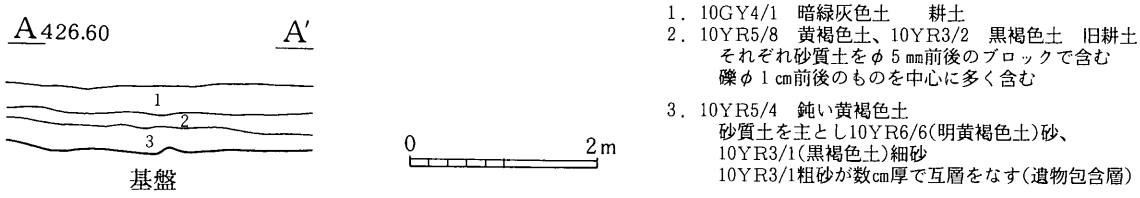
検出された遺構数は以下のとおりである。

竪穴住居址（ＳＢ）	９	
掘立柱建物址（ＳＴ）	８	
周溝墓（ＳＭ）	５	（ＳＭ03～07は欠番）
土坑（土壙）（ＳＫ）	３０	（ＳＫ15～20・23・34は欠番）
溝址（ＳＤ）	１３	（ＳＤ01・02・10は欠番）

２．基本層序

基本層序を挿図６で示した。

地表から基盤層の黄色砂土までの深さは、１～1.5ｍと隣接する宮垣外遺跡より深い。基本的な堆積土も宮垣外遺跡と共通するが、調査地が傾斜地を含むこともあり、砂粒が粗い傾向にある。



挿図６　ＴＫＹ基本層序

３．遺構

(1) 竪穴住居址（ＳＢ）

住居址としてとらえたものは９軒あるが、遺物が少なく、時期決定の根拠に乏しいが、多くは中世のいわゆる方形竪穴といわれるものであるとみられ、住居址というより、建物址という名称の方が適切といえ、後述する掘立柱建物址との関連が考えられる。

①　ＳＢ01（第42図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＷ17を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ08を切る。2.67×1.52ｍの不整方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ65°Ｗを示す。壁高は25～32㎝を測り、壁面はやや

緩やかな傾斜をなす。形態から方形竪穴とみられる。覆土は土層図による。

遺　　物　覆土から陶器（Ⅲ）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

②　ＳＢ02（第42図、図版29）

遺　　構　Ⅲ区ＢＹ20を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。2.1×1.9ｍの方形を呈し、内部に主柱穴は確認できなかったが、外側に軸のずれた４本の柱穴が確認できた。床面中央に炭化物があり、その上に10～15㎝浮いた位置に粘土が敷かれていた。さらにそれらを取り除くと北西側と南東側の床面直上に握り拳大の集石がみられた。床面の中央にはたたき状の硬化面が確認できたが、炉址等はなかった。長軸方向Ｎ63°Ｗを示す。壁高は10～34㎝を測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺　　物　住居址の南隅と北西隅より馬歯の一部が出土しているが、覆土からの出土であり、本址に直接伴うものかは明確ではない。西側のＰ１より擂鉢片が出土している。

時　　期　出土遺物から中世とみられる。

③　ＳＢ03（第42図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＹ16を中心に検出し、全体の３/４程を調査した。ＳＢ06、ＳＫ33、ＳＤ04に切られる。北西側の一部がＳＤ04に切られているため、規模は不明であるが、現状で2.15×3.3ｍの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ65°Ｗを示す。壁高は６～24㎝を測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　切り合い関係から中世とみられる。

④　ＳＢ04（第42図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＳ17を中心に検出し、全体の１/３程を調査した。ＳＤ12を切る。西側の大部分が調査区外となるため、規模は不明であるが、3.03ｍの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、主軸方向は不明である。壁高は76～79㎝を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑤　ＳＢ05（第43図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＹ13を中心に検出し、全体の２/３程を調査した。ＳＤ04に切られる。北西側をＳＤ04に切られるため、規模は不明であるが、現状で短軸方向1.1ｍの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ67°Ｗを示す。壁高は16～29㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥　ＳＢ06（第43図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＸ17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＢ03、ＳＢ07を切り、ＳＢ08に切られる。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、長軸方向2.72ｍの不整形を呈し、遺構内にいくつかのピットが確認できたが、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ30°Ｅを示す。壁高は18～35㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　切り合い関係から中世とみられる。

⑦　ＳＢ07（第43図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＸ17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＢ06、ＳＢ08に切られ、ＳＭ08、ＳＤ14、ＳＫ35を切る。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、長軸方向3.35ｍの方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ30°Ｅを示す。壁高は27～49㎝を測り、壁面は緩やかな傾斜をなす。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　切り合い関係から中世とみられる。

⑧　ＳＢ08（第43図、図版29）

遺　　構　Ⅲ区ＢＸ17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＢ06、ＳＢ07、ＳＭ08、ＳＫ35を切る。重複する遺構が多いため、規模は明確でないが、2.03×1.65ｍの隅丸方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ73°Ｗを示す。壁高は13～50㎝を測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。北側床面に焼土と炭化物が確認され、火を受けたものとみられる。床面より20㎝程浮いた位置から集石が確認された。

遺　　物　覆土から、内耳鍋、天目茶碗、擂鉢、銅銭「永楽通寶」が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

⑨　ＳＢ09（第43図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＶ16を中心に検出し、北側の一部を調査した。ＳＭ08を切る。南側が攪乱を受けているため、規模は不明であるが、現状で短軸方向1.2ｍの隅丸方形を呈し、主柱穴、炉址等は確認できず、長軸方向はＮ25°Ｅを示す。壁高は40～51㎝を測り、壁面はやや緩やかな傾斜をなす。覆土は自然埋没の状況を示す。

遺　　物　なし

時　　期　不明

（2）掘立柱建物址（ＳＴ）（第44・45図、図版29・30）

掘立柱建物址に明確に伴う遺物はなく、時期決定の根拠となるものはほとんどないが、周辺の状況等から、ほとんどが中世以降になるとみられる。

遺構No.	検出位置	重複関係	間数（）は確認数	規模（m）（梁行×桁行）	柱間(m)	柱の深さ（cm）
01	Ⅱ区AN18	SK21を切る	(1)×4	7.7×1.3	梁1.3 桁1.6～1.8	19～67
02	Ⅱ区AM20	－	3×3	6.8×5.5	梁1.6～2.0 桁1.7～2.7	27～50
03	Ⅱ区AJ26	－	4×(4)	3.9×4.0＋	梁0.4～1.2 桁0.7～1.4	15～56
04	Ⅲ区BS21	－	2×(2) 庇付か	3.7×2.4＋	梁1.7～1.9 桁1.0～1.1	27～42
05	Ⅲ区BX13	－	3×(3)	6.3×5.6＋	梁1.8～2.3 桁1.7～1.9	13～67
06	Ⅲ区BR20	SD11を切る	2×3	6.7×4.3	梁1.2～1.9 桁1.9～4.5	23～49
07	Ⅲ区BV19	－	1×(2)	4.2×3.2＋	梁4.2 桁1.1～1.8	15～75
08	Ⅲ区BY20	－	2×(1)	3.4×2.0＋	梁1.4～2.0 桁2.0	22～47

(3) 周溝墓（SM）

ここで取り上げる周溝墓は、上部が削平されているため、主体部及び墳丘盛土が確認できず、周溝のみが確認されたものを一括している。周溝墓に伴う遺物もほとんどなく、遺構の切り合いによる前後関係は把握できるものの時期決定の根拠には極めて乏しい。

なお、調査時に墓と認めたものについてSMを符して対応したが、土坑についてはSKに統一したためにSM03～07は欠番になる。

① SM01（第46図、図版30）

遺　構　Ⅱ区AF28を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。SM02、SD03、SK08を切る。南東側周溝が確認できなかったので、規模は不明であるが、現状で南西・北東方向外径8.0m、内径6.9mの方形を呈する。周溝は幅0.37～1.1m、深さ0.11～0.37mで舟底形を呈する。北西側周溝も攪乱等により全体を確認することはできなかったが、中央部付近に土橋部を有する可能性がある。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はN52°Wを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　物　なし

時　期　不明

② SM02（第46図、図版30）

遺　　構　Ⅱ区ＡＤ26を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＭ01、ＳＫ01、ＳＫ03に切られる。北東側周溝が確認できなかったので、規模は明確でないが、北西・南東方向で外径9.1ｍ、内径7.8ｍの方形を呈する。周溝は幅0.35～0.67ｍ、深さ0.09～0.38ｍで舟底形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ40°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

③　ＳＭ08（第47図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＶ18を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＭ10を切り、ＳＢ01、ＳＢ06、ＳＢ07、ＳＢ08、ＳＢ09に切られる。南側周溝の一部をＳＭ09、ＳＭ10と共有し、両者との前後関係はＳＭ08が最も古い。規模は南北方向で外径8.6ｍ、内径7.0ｍ、東西方向で外径8.2ｍ、内径6.2ｍで円形を呈する。周溝は幅0.27～1.35ｍ、深さ0.14～0.48ｍで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ20°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　周溝覆土から弥生土器（甕）破片、灰釉陶器（皿）、打製石斧が出土している。

時　　期　本址に確実に伴う遺物がなく、時期は不明である。

④　ＳＭ09（第48図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＴ19を中心に検出し、周溝の一部を調査した。北西側周溝の一部をＳＭ08、ＳＭ10と共有し、両者との前後関係はＳＭ08より新しく、ＳＭ10とほぼ同時期となる。周溝の一部を確認しただけなので、正確な規模は不明であるが、北西・南東方向外径5.4ｍ、内径4.1ｍの円形を呈する。周溝は幅0.2～0.51ｍ、深さ0.12～0.48ｍで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ27°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑤　ＳＭ10（第48図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＳ17を中心に検出し、全体の２/３を調査した。北東側周溝の一部をＳＭ08、ＳＭ09と共有し、両者との前後関係はＳＭ08より新しく、ＳＭ09とほぼ同時期となる。南西側周溝が調査区外のため正確な規模は不明であるが、北西・南東方向外径6.25ｍ、内径5.45ｍの隅丸方形を呈する。周溝は幅0.4～0.7ｍ、深さ0.14～0.2ｍで逆台形を呈する。上部が削平されているため、埋葬施設は確認できなかった。長軸方向はＮ42°Ｗを示す。周溝覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

（4）土坑及び土壙墓（ＳＫ）

調査時に墓と認めたものの一部については、当初ＳＭで番号を符していたが、報告書作成段階では、土坑（土壙）をＳＫとする基本方針から、ＳＫで番号を付け直している。ただし、ＳＭで遺物を取り上

げている関係上、旧ＳＭ番号も付した。遺構の性格について、出土遺物もなく明確ではないものもあるが、墓と考えられるものについては土壙墓の名称を用い、それ以外については土坑を用いた。

① ＳＫ01（第49図、図版31）

遺　　構　Ⅱ区ＡＥ23を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ02を切る。規模は長軸1.6ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.17ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

② ＳＫ02（第49図、図版31）

遺　　構　Ⅱ区ＡＥ25を中心に検出し、全体を調査した。規模は長軸1.6ｍ、短軸0.76ｍ、深さ0.25ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

③ ＳＫ03（第49図、図版31）

遺　　構　Ⅱ区ＡＤ24を中心に検出し、全体を調査した。ＳＭ02、ＳＫ05を切る。規模は長軸1.24ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.2ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

④ ＳＫ04（第49図、図版32）

遺　　構　Ⅱ区ＡＤ23を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ05、ＳＫ06を切る。規模は長軸2.2ｍ、短軸1.44ｍ、深さ0.32ｍの楕円形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑤ ＳＫ05（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＤ23を中心に検出し、全体を調査した。ＳＫ06、ＳＫ07を切り、ＳＫ03、ＳＫ04に切られる。規模は長軸3.2ｍ、短軸1.28ｍ、深さ0.18ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑥ ＳＫ06（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＣ23を中心に検出し、南側半分が攪乱を受けているが、ほぼ全体を調査した。ＳＫ04、ＳＫ05に切られる。攪乱により規模は明確でないが、現状で長軸3.44ｍ以上 、短軸1.4ｍ、深さ0.2ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑦　ＳＫ07（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＣ24を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＫ05に切られる。規模は長軸2.44ｍ以上 、短軸0.88ｍ、深さ0.13ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑧　ＳＫ08（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＣ28を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。ＳＤ03を切り、ＳＭ01に切られる。北側をＳＭ01に切られているため、規模は現状で長軸0.68ｍ以上 、短軸1.0ｍ、深さ0.25ｍの不整形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑨　ＳＫ09（第49図、図版32）

遺　　構　Ⅱ区ＡＧ25を中心に検出し、北側が攪乱を受けているため、南側の１／２を調査した。重複する遺構はない。１／２の調査のため、規模は現状で長軸3.44ｍ、短軸1.68ｍ以上 、深さ1.57ｍの円形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑩　ＳＫ10（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＧ23を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.48ｍ、短軸0.68ｍ、深さ0.48ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑪　ＳＫ11（第49図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＨ24を中心に検出し、北側が攪乱を受けており、南側の１／３を調査した。重複する遺構はない。攪乱により規模は明確でないが、長軸1.48ｍ、短軸0.44ｍ以上 、深さ0.41ｍの不整形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑫　ＳＫ12（第50図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＨ19を中心に検出し、北西側の一部を除いて、ほぼ全体を調査した。ＳＸ01に切られる。規模は長軸1.56ｍ、短軸0.8ｍ以上、深さ0.38ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑬　ＳＫ13（第50図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＨ21を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ04を切る。規模は長軸0.7ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.34ｍの円形を呈する。

遺　　物　覆土から土師器破片が出土している。

時　　期　出土遺物から古墳時代とみられる。

⑭　ＳＫ14（第50図、図版32）

遺　　構　Ⅱ区ＡＨ18を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ04を切る。規模は長軸0.8ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.37ｍの円形を呈する。上部に石が配されている。覆土は土層図による。

遺　　物　なし

時　　期　中世以降か

⑮　ＳＫ21（第50図、図版33）

遺　　構　Ⅱ区ＡＭ17を中心に検出し、全体を調査した。ＳＴ01、ＳＴ02に切られる。規模は長軸2.04ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.35ｍの不整形を呈する。

遺　　物　打製石斧が覆土から出土している。

時　　期　不明

⑯　ＳＫ22（第50図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＬ17を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.2ｍ、短軸0.76ｍ、深さ0.13ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑰　ＳＫ24（第50図）

遺　　構　Ⅱ区ＡＩ25を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸4.72ｍ、短軸4.48ｍ、深さ1.76ｍの円形を呈する。

遺　　物　打製石斧が覆土から出土している。

時　　期　不明

⑱　ＳＫ25（第50図）

遺　　構　Ⅰ区ＡＫ30を中心に検出し、北側の一部が調査区外になるが、ほぼ全体を調査した。重複

する遺構はない。一部調査区外のため明確でないが、規模は長軸2.2m以上、短軸2.84m、深さ1.4mの楕円形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　覆土から須恵器（坏）が出土している。

時　　期　出土遺物から古墳時代とみられる。

⑲　ＳＫ26（第50図）

遺　　構　Ⅰ区ＡＫ22を中心に検出し、南側の一部が調査区外になるが、ほぼ全体を調査した。ＳＤ16を切る。規模は長軸0.88m以上、短軸0.8m、深さ0.4mの円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

⑳　ＳＫ27（第50図、図版33）

遺　　構　Ⅲ区ＢＰ19を中心に検出し、ほぼ全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.29mの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉑　ＳＫ28（第51図、図版33）

遺　　構　Ⅲ区ＢＱ20を中心に検出し、北側が攪乱を受けており、南側の一部を調査した。重複する遺構はない。攪乱のため規模は明確でないが、長軸1.24m以上 、短軸0.84m、深さ0.2mの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉒　ＳＫ29（第51図、図版33）

遺　　構　Ⅲ区ＢＱ19を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.28m、短軸1.16m、深さ0.08mの方形を呈する。覆土は土層図による。

遺　　物　覆土から陶器（Ⅲ）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㉓　ＳＫ30（第51図、図版34）

遺　　構　Ⅲ区ＢＷ17を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.6m、短軸0.48m、深さ0.38mの楕円形を呈する。炭化物が認められることから、火葬墓の可能性がある。

遺　　物　覆土から陶器（Ⅲ）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㉔　ＳＫ31（第51図、図版34）

遺　　構　Ⅲ区ＢＶ14を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.96ｍ、短軸0.92ｍ、深さ0.29ｍの円形を呈する。

遺　　物　覆土から陶器（碗）が出土している。

時　　期　出土遺物から中世（16世紀）とみられる。

㉕　ＳＫ32（第51図、図版34）

遺　　構　Ⅲ区ＢＸ13を中心に検出し、全体を調査した。ＳＤ04を切る。規模は長軸1.08ｍ、短軸0.72ｍ、深さ0.62ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　打製石斧が覆土から出土している。

時　　期　不明

㉖　ＳＫ33（第51図、図版35）

遺　　構　Ⅲ区ＢＷ14を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ03を切り、ＳＴ05に切られる。規模は長軸3.32ｍ、短軸1.52ｍ、深さ0.49ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉗　ＳＫ35（第51図）

遺　　構　Ⅲ区ＢＷ17を中心に検出し、全体を調査した。ＳＢ08に切られる。規模は長軸2.4ｍ、短軸1.28ｍ、深さ0.55ｍの不整形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　不明

㉘　ＳＫ36（ＳＭ03）（第51図、図版35）

遺　　構　Ⅰ区ＡＫ24を中心に検出し、ＳＤ04と重複しているため、全体の１／２程を確認したのみである。ＳＤ04に切られる。規模は長軸1.16ｍ、短軸0.72ｍ以上、深さ1.18ｍの円形を呈するものと考えられる。形態等から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　覆土から砥石が出土している。

時　　期　中世以降か

㉙　ＳＫ37（ＳＭ04）（第51図、図版35）

遺　　構　Ⅱ区ＡＰ16を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸1.4ｍ、短軸1.12ｍ、深さ0.33ｍの楕円形を呈する。形態等から土壙墓の可能性がある。

遺　　物　なし

時　　期　中世以降か

㉚　ＳＫ38（ＳＭ05）（第51図）

遺　　構　Ⅰ区ＡＭ22を中心に検出し、全体を調査した。重複する遺構はない。規模は長軸0.44ｍ、短軸0.32ｍ、深さ0.37ｍの楕円形を呈する。

遺　　物　なし

時　　期　中世以降か

(5) 溝址（ＳＤ）（第52～55図、図版36）

溝址については時期不明のものもあるが、その性格については、ある程度推定できるものもある。特に、ＳＤ04とＳＤ06については、「第Ⅳ章　まとめ」の項でも触れているが、これらは覆土の状況から旧河道の可能性が考えられるが、周辺の状況とも合わせてその性格を考えるべきといえる。

ＳＤ01・02・10は、調査当初はＳＤとして認識していたが、調査途中でＳＭとなることが確認され、ＳＭで番号を付け直した。そのため欠番となっている。

遺構No.	検出位置	重複関係	規　模(ｍ)(長×幅×深)	時期	出土遺物	備　考
03	Ⅱ区ＡＥ27	ＳＫ08に切られる ＳＭ01に切られる	4.16＋×0.3～0.65×0.18～0.44	不　明	－	
04	Ⅱ区ＡＨ21	ＳＢ03、ＳＢ05を切る ＳＫ32に切られる	45.6＋×4.1～10.2×0.04～1.48	古　墳～平安時代	縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石器類・金環・石製紡錘車	旧河道
05	Ⅱ区ＡＪ16	－	6.72＋×0.8～0.96×0.09～0.18	不　明	－	
06	Ⅱ区ＡＯ16	ＳＴ02に切られる	16.16＋×－×0.29～0.96	平安時代	土師器・須恵器・灰釉陶器・石器類・石製紡錘車	旧河道
07	Ⅱ区ＡＭ21	－	4.8＋×0.55～0.75×0.21～0.59	不　明	－	
08	Ⅱ区ＡＭ19	－	3.4×0.36～0.4×0.1～0.19	不　明	－	
09	Ⅱ区ＡＭ18	－	2.72×0.24～0.3×0.03～0.16	不　明	－	
11	Ⅲ区ＢＲ22	ＳＴ06に切られる	6.0＋×1.3～1.54×0.06～0.21	古墳時代	須恵器・装飾須恵器片・石器類	
12	Ⅲ区ＢＱ17	ＳＢ04に切られる	2.28＋×0.37～0.48×0.14～0.19	不　明	石器類	
13	Ⅲ区ＢＵ10	－	4.8＋×0.4～0.96×0.08～0.24	不　明	－	旧河道
14	Ⅲ区ＢＹ17	ＳＤ04に切られる	2.84＋×0.88～0.98×0.03～0.28	不　明	－	

遺構No.	検出位置	重複関係	規　模(m)(長×幅×深)	時期	出土遺物	備　考
15	Ⅲ区BW13	SD04に切られる	2.96+×0.4～0.56×0.2～0.25	不　明	−	
16	Ⅰ区AN21	SK26を切る	8.3+×0.88×0.05～0.21	不　明	−	

(6) その他の遺構

① SX01（第55図）

遺　構　Ⅱ区AF20を中心に検出し、全体を調査した。流路であるSD04から張り出した平坦な遺構である。規模は最大で6.5m、深さ0.48～0.71mの不整形を呈する。SD04に関連する遺構の可能性も考えられたが性格は不明である。

遺　物　西側から土師器（甕）が一括して出土している。

時　期　出土遺物から古墳時代中期（5世紀後半）とみられる。

4. 出土遺物

出土遺物については、以下の項目にそって基本的に遺構番号順に観察表を載せた。

(1) 土器・陶器類

土器・陶器類観察表（第84～86図、図版53）

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	手法 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	断面	内面	残存
SB01	84−1	陶器	皿	12.2	−	5.6	2.5	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰黄色	灰黄色	4/5残
SB08	84−6	陶器	天目茶碗	10.8	−	5.0	5.5	ロクロナデ、削り出し高台／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	褐灰色	鉄釉	1/6残
	−7	陶器	天目茶碗	11.4	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	暗褐色	鉄釉	1/3残
	−9	陶器	内耳鍋	25.7	−	19.0	13.1	ロクロナデ(ススス)／ロクロナデ（ススス）	砂粒	良	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	1/5残
	−8	陶器	擂鉢	31.6	−	−	−	ロクロナデ(ススス)／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	褐灰色	鉄釉	1/4残
	−10	陶器	擂鉢	−	−	10.0	−	ロクロナデ(ススス)／ロクロナデ（ススス）	砂粒	良	鉄釉	褐灰色	鉄釉	1/3残
SM08	84−11	弥生土器	甕	−	−	7.6	−	ミガキ／器面荒れ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	2/3残
	−12	灰釉陶器	皿	−	−	7.8	−	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1/3残
SK25	84−2	須恵器	坏	−	−	−	−	底部ヘラ切り／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	1/2残
SK29	84−3	陶器	皿	8.3	−	4.8	2.1	ロクロナデ、底部ヘラ切り／ロクロナデ	小石粒	良	灰釉	灰白色	灰白色	4/5残
SK30	84−5	陶器	皿	−	−	6.6	−	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰白色	灰白色	2/3残
SK31	84−4	陶器	碗	13.4	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	鉄	鉄釉	灰白色	鉄釉	1/5残
SD04	85−1	縄文土器	深鉢	−	−	−	−	−	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	黄橙色	−
	−2	縄文土器	深鉢	−	−	−	−	−	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	黄橙色	−
	−3	縄文土器	深鉢	−	−	−	−	−	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	黄橙色	−
	−4	縄文土器	深鉢	−	−	−	−	−	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	黄橙色	−
	−5	土師器	坏	12.2	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	内黒	1/5残
	−6	土師器	坏	−	−	6.2	−	ヘラミガキ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ほぼ残
	−7	土師器	高坏	−	−	−	−	ナデ／ヘラミガキ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	3/4残
	−8	土師器	高坏	−	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラケズリ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	3/4残
	−9	土師器	高坏	−	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラケズリ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1/2残
	−10	土師器	高坏	−	−	−	−	ヘラミガキ／ヘラナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	坏部内黒	3/4残
	−11	土師器	器台	−	−	4.8	−	ヘラミガキ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	3/4残
	−12	須恵器	坏蓋(蓋)	−	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	暗灰色	暗灰色	暗灰色	1/4残
	−13	須恵器	高坏	10.6	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰色	灰色	灰色	ほぼ残
	−14	須恵器	高坏	−	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	青灰色	青灰色	明灰色	1/5残
	−15	須恵器	坏	−	−	7.6	−	ロクロナデ、底部ヘラ切り／ロクロナデ	小石粒	良	黒灰色	暗褐色	暗灰色	1/4残
	−16	須恵器	鉢	15.0	−	−	−	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1/4残

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	手法 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	断面	内面	残存
SD04	85－17	須恵器	長頸壺	－	15.1	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰白色	褐灰色	灰白色	1／2残
	－18	須恵器	甕	－	7.6	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	ほぼ完
	－19	須恵器	器台	－	－	23.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	褐灰色	灰白色	灰白色	1／4残
	－20	灰釉陶器	皿	－	－	6.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／5残
	－21	灰釉陶器	皿	－	－	7.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－22	灰釉陶器	皿	－	－	9.2	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－23	陶器	甕	22.4	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	浅黄色釉	灰白色	褐色	1／5残
SD06	84－13	須恵器	坏蓋(蓋)	15.9	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／5残
	－14	須恵器	坏	11.7	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	1／5残
	－15	須恵器	坏	－	－	5.8	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－16	灰釉陶器	碗	15.7	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／4残
	－17	灰釉陶器	碗	－	－	6.4	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／5残
	－18	灰釉陶器	碗	－	－	7.6	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／3残
	－19	土師器	坏	－	－	5.8	－	ロクロナデ、回転糸切り底／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	内黒	1／4残
	－20	土師器	坏	－	－	7.8	－	ロクロナデ／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	内黒	ほぼ残
SD11	84－21	須恵器	坏	－	－	9.4	－	ロクロナデ、糸切り底／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	暗褐色	褐灰色	1／4残
SX01	86－1	土師器	甕	26.4	－	－	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／2残
	－2	土師器	甕	－	－	8.4	－	ナデ／ナデ	雲母・小石粒	良	褐色	褐色	褐色	1／3残

(2) 金属製品

金属製品観察表（第87図、図版43）

遺構No.	図版No.	材質	形態	法量(cm)
SD04	87－10	金銅	金環	全長2.6　幅2.9　径0.6

遺構No.	図版No.	材質	銭貨名	時代 初鋳年	法量(cm) 径	厚さ	備考
SB08	87－11	銅	永楽通寶	明1408	2.45	0.15	

(3) 石製品

石製品観察表（第87図、図版54）

遺構No.	図版No.	形態	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
SD04	87－13	石製紡錘車	6.6	6.6	0.9	砂岩
SD06	87－12	石製紡錘車	4.1	4.0	1.2	滑石

(4) 石器

石器観察表（第88～90図、図版54・55）

遺構No.	図版No.	形態	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
SK36	88－5	砥石	6.9	6.9	1.7	流紋岩
SM08	88－1	打製石斧	11.2	3.9	1.2	緑色片岩
SK21	88－2	打製石斧	12.3	8.1	3.0	硬砂岩
SK24	88－3	打製石斧	10.5＋	5.4	1.4	硬砂岩
SK32	88－4	打製石斧	12.3	5.1	1.5	硬砂岩
SD04	88－6	打製石斧	18.2	7.6	2.95	硬砂岩
	－7	打製石斧	17.3	7.1	1.7	硬砂岩
	－8	打製石斧	16.8	6.5	2.95	硬砂岩
	89－1	打製石斧	13.6	5.35	2.65	硬砂岩
	－2	打製石斧	12.25	5.6	1.5	硬砂岩
	－3	打製石斧	10.8＋	6.95	1.9	硬砂岩
	－4	石錘	8.0	4.85	2.0	硬砂岩
	90－6	磨製石鏃未製品	5.3	2.5	0.8	硬砂岩
SD06	89－5	打製石斧	18.8＋	10.2	4.0	硬砂岩
	－6	打製石斧	11.9	4.65	1.25	緑色片岩
	－7	粗製石匙	8.95	3.3	1.1	緑色片岩
	－8	横刃型石器	5.6	9.0	1.15	硬砂岩
	－9	砥石	17.5	6.7	6.75	流紋岩
SD11	90－1	打製石斧	10.2	3.4	1.1	緑泥片岩
SD12	90－2	打製石斧	16.4＋	6.5	1.6	硬砂岩

(5) 馬歯骨

ＳＢ02から馬歯の残片が出土している。遺構の時期から中世以降とみられる。

5．遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては、土器・陶器類、石器が出土している。

土器・陶器類としては、土師器（高坏）、須恵器では坏・平瓶のほか、底部に「万」の墨書のある坏が出土している。灰釉陶器の出土もあり、遺構としては明確に捉えられなかったが、古墳時代から平安時代に至る遺構の存在が推定される。中世の遺物としては天目茶碗が出土しており、高屋遺跡と同様に中世の遺構が確認されている宮垣外遺跡との関係を示唆させるものといえる。

① 土器・陶器類観察表（第86・87図、図版53）

遺構No.	図版No.	器種	器形	法量(cm) 口径	胴径	底径	器高	手法 外面／内面	胎土	焼成	色調 外面	断面	内面	残存
遺構外	86－3	土師器	高坏	－	－	－	－	ミガキ／ヘラナデ	雲母・小石粒	良	黄橙色	暗褐色	坏部内黒	1／3残
	－4	土師器	高坏	－	－	－	－	ヘラミガキ／ヘラナデ	雲母・小石粒	良	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ほぼ残
	－5	土師器	坏	－	－	6.0	－	ロクロナデ、回転糸切り／ロクロナデ	雲母・小石粒	良	褐色	暗褐色	褐色	1／4残
	－6	須恵器	坏	－	－	5.2	－	回転糸切り、墨書／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	ほぼ残
	－7	須恵器	甕	－	24.2	－	－	平行タタキ／ナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	1／4残
	－8	須恵器	蓋坏(坏身)	12.2	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	褐灰色	褐灰色	褐灰色	1／5残
	－9	須恵器	平瓶	－	13.8	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	灰白色	灰白色	褐灰色	ほぼ残
	87－1	灰釉陶器	皿	13.8	－	6.2	2.9	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／3残
	－2	灰釉陶器	皿	13.8	－	5.8	2.9	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰白色	灰白色	灰白色	1／5残
	－3	陶器	天目茶碗	12.8	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	鉄釉	褐灰色	鉄釉	1／5残
	－4	陶器	皿	11.4	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰白色	灰釉	1／5残
	－5	陶器	皿	10.4	－	6.0	2.5	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	灰釉	灰白色	灰釉	1／5残
	－6	陶器	皿	－	－	6.4	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒(鉄分含)	良	灰白色釉	灰白色	灰白色釉	1／4残
	－7	陶器	皿	－	－	4.2	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒	良	褐灰色釉	褐灰色	褐灰色釉	ほぼ残
	－8	陶器	擂鉢	27.2	－	－	－	ロクロナデ／ロクロナデ	砂粒(鉄分含)	良	鉄釉	褐灰色	鉄釉	1／6残
	－9	陶器	大平鉢	－	－	14.3	－	ロクロナデ／ロクロナデ	小石粒	良	褐色	明褐色	明褐色	1／4残

② 石器観察表（第90図、図版55）

遺構No.	図版No.	形態	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
遺構外	90－3	打製石斧	10.6	7.6	1.9	硬砂岩
	－4	打製石斧	6.7	4.1	0.95	緑色片岩
	－5	砥石	5.6	3.3	2.2	滑石

第Ⅳ章　まとめ

宮垣外遺跡と高屋遺跡は、異なる遺跡名が付けられているが、その性格を考えた場合、２つの遺跡を一つのものとして捉えることができる。ここでは、当遺跡の主要部分である墓域としての性格および集落のあり方について述べることでまとめとしたい。

(1) 番神塚古墳について

今回の調査地区内には、前方後円墳である溝口の塚古墳が存在するが、最初の経過のところでも触れたように、さらにもう一つ前方後円墳であったとされる番神塚古墳が、高屋遺跡のⅠ・Ⅱ区の北西側隣接地にかつて所在したという。

『下伊那史』第二巻によると、番神塚古墳は雲彩寺（天神塚）古墳の東南約100ｍの畑の中にあった石室を有する古墳で、もとは北村井の番神山と呼ぶ山林であったが、今は形なく東西24ｍ、南北35ｍ程が小高く残っているばかりで、その中心部に石室の天井石らしいものを台石として「三十番神」と刻んだ石碑が立ててあったという。また、明治34年に地主がこの古墳を発掘し、奥行き5.5ｍ程の石室からたくさんの遺物（須恵器・金銅製杏葉等馬具・直刀・玉類・遺骸の頭部と思われる所に五鈴鏡）が出てきたというが、これらは現在すべて散逸している。周囲は水田で、その間に古墳の跡である所が長楕円形の小高い畑となって残っているという。『下伊那史』の筆者は、この周辺で円筒埴輪の破片を表採しており、前述の状況からも前方後円墳の可能性を指摘している。

今回の調査時点では、番神塚古墳があったとされる所には建物が建っており、古墳の存在を推定させるものはないが、前述の状況から、調査前には番神塚古墳の周溝が調査用地内で確認されることが予想された。調査の結果、調査区の北側でＳＤ04・06の２本の溝を確認した。出土遺物としては須恵器片・土師器片等があるが、埴輪片や転落した葺石などは確認できなかった。また、覆土は粒子の極めて粗い砂が層をなしており、かなり強い流れがあったこともわかった。粗い砂からは表面がかなり摩滅した土器片や石器が出土し、自然か人為的な掘削かはわからないが、ここがかつて流路であったことが判明した。以上のことから、確実に番神塚古墳に関連する遺構は確認できなかったものの、２本の溝については旧河道以外の性格も考慮すべきであり、今後の周辺部の調査でも注意を要する。

(2) 周溝墓の名称について

墓域としての性格を述べる前に、本報告書で使用した「周溝墓」という名称について触れておきたい。

今回の調査で確認された円墳、周溝墓はすべて上部が削平されているため、埋葬施設及び墳丘の状態は不明であり、周溝墓に本来どの程度の盛土がなされていたかを確認することができなかった。古墳としたものは、ＳＭ03・04とかつてつくね塚古墳があったとされる場所に位置するＳＭ22の溝で、ＳＭ22の盛土の残存状況は、未調査であるが他の周溝墓と変わりはないと推測される。

本遺跡の調査以前にも墳丘が削平され、周溝をもつ墓が確認されている。これまでに飯田市においては古墳時代のもので、墳丘盛土が削平され、周溝のみが確認されたものについて、方形周溝墓・円形周溝墓・墳丘墓・古墳という名称を使用してきた。また、葺石状に石が貼られた方形の周溝墓を方形台状

墓または貼石を持つ方形低墳丘墓と呼称してきた。

こうした墓の盛土の状況について、ＳＭ22のようにかつては３～４ｍ程の墳丘を有していたにもかかわらず、調査時点では盛土は削平され、周溝のみが確認されるものがあることを考えると、他の周溝墓も本来は多少なりとも盛土を有していた可能性を否定できない。また、墳丘と同様に埋葬施設についても、飯田市寺所遺跡のＳＭ04では、良好な状態で埋葬施設が確認できているが、その検出レベルの低さから、報告書では「築造当初の盛り土の状況を判断することはできないが、主体部の検出位置からすれば、際だった高さがあったとは想定しにくい。現状では、周溝の土を盛った程度と考えておく。」としている。同市物見塚古墳では、調査開始時点では２～３ｍ程の墳丘を有していたが、墳丘上部からは埋葬施設の掘り込みが確認できず、調査により埋葬施設は地山に掘り込まれ、その上から盛土をするという構造であり、そのため埋葬施設の検出レベルは低かった。このような構造の埋葬施設を有する場合、墳丘盛土を削平されても、埋葬施設の一部は残る可能性が高いといえる。こうしたことから、埋葬施設検出レベルのみで盛土の有無を判断することは難しいと思われる。

以上の点から、同時期の墳墓に対し、遺構検出時点での状況からだけで、基準もあいまいなまま古墳と周溝墓という異なる名称を用いることには問題があるといえる。しかし、古墳時代中期においては複数の墳墓形態が併存しており、その形態差が被葬者の地位等に関連することも勘案すると、古墳とは異なる墓の存在もまた無視はできない。本報告書では、便宜上周溝規模をめどに古墳・周溝墓を類別したが、類例につき整理・検討を深めることにより、個々の墳墓形態名を冠すべきものといえる。

(3) 墳墓群としての遺跡の性格について

今回調査地区内における宮垣外・高屋両遺跡の主たる性格は、墳墓群であるということである。調査の結果、弥生時代から中世に至る墓が確認された。

〔弥生時代〕

弥生時代の周溝墓として、ＳＭ06、ＳＭ10があり、ＳＭ12が形態的に類似する。（挿図７）いずれも、周溝の一辺の中央部に土橋部を有するタイプであり、古墳時代に属するものとは形態を異にする。周囲では、同時期の方形周溝墓群は確認されていないため、墓域の範囲を知ることはできないが、ＳＭ12の東側半分が調査区外になるという状況から、墓域も東側に広がる可能性が考えられる。ただし、地形としては今回の調査地点から東へはだんだんと低くなっており、今回確認できた範囲を中心として大きくは広がらないであろう。

〔古墳時代〕

本遺跡の中心をなす古墳時代においては、前方後円墳・円墳・方形周溝墓・円形周溝墓・土壙墓が確認された。（挿図７）

周溝墓はいずれも上部が削平されており、埋葬施設が確認できたものはＳＭ15のみである。周溝墓の時期も周溝内からの出土遺物によっているため、築造時期決定要素としては不十分な面があるが、その出土状況から、築造の時期とは大きく隔たらないものとみられる。出土遺物を根拠に時期の把握できる墳墓は以下のとおりである。

①ＳＭ03（ＳＫ64）

規模は外径30.4ｍの円墳と判断される。周溝内から、土師器（壷・甕・高坏）、直刀・鉄鏃等が出土

している。周溝内における祭祀行為にかかわるものとみられる。また、南側の墳丘裾部から周溝にかけて掘り込まれた古墳築造時期と一致するＳＫ64からは、馬歯骨と馬具一式が出土している。

②ＳＭ04

規模は外径で26.5×26.4ｍの円墳と判断される。周溝内から土師器（壷・甕）、石製品（剣）等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものとみられる。

③ＳＭ07

規模は外径で15.5×16.6ｍの円形周溝墓。土師器（壷・甕・坏・高坏）、須恵器（甕・瓶）、玉類、石製模造品（有孔円板）、鉄器（工具類）が出土している。周溝内における２次埋葬もしくは祭祀行為にかかわるものとみられる。

④ＳＭ15

規模は外径で18.7ｍの円形周溝墓。土師器（甕・坏・高坏）、須恵器（甕）、馬歯が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑤ＳＭ18

規模は13.4×14.1ｍの方形周溝墓。周溝内から土師器（壷・甕・坏・高坏）、須恵器が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑥ＳＭ19

規模は外径で16.7ｍの方形周溝墓。周溝内から須恵器（甕）等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑦ＳＭ21

規模は不明、円形を呈するものとみられる。周溝内から土師器（高坏）等が出土している。周溝内における祭祀行為か、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑧ＳＭ22（つくね塚古墳）

規模は不明、円形を呈する。周溝内から土師器（壷・坏）、底部穿孔壷形土器等が出土している。周溝内における祭祀行為にかかわるものか、もしくは本来墳丘にあったものが転落したとみられる。

⑨ＳＫ18

規模は3.16×1.24ｍ、不整楕円形を呈する土壙墓である。靫金具と鉄鏃が出土している。

⑩ＳＫ21

規模は2.64×0.8ｍ、楕円形を呈する土壙墓である。鉄鏃が出土している。

⑪ＳＫ24

規模は3.12×1.4ｍ、方形を呈する土壙墓である。土師器（高坏・坏）が出土している。

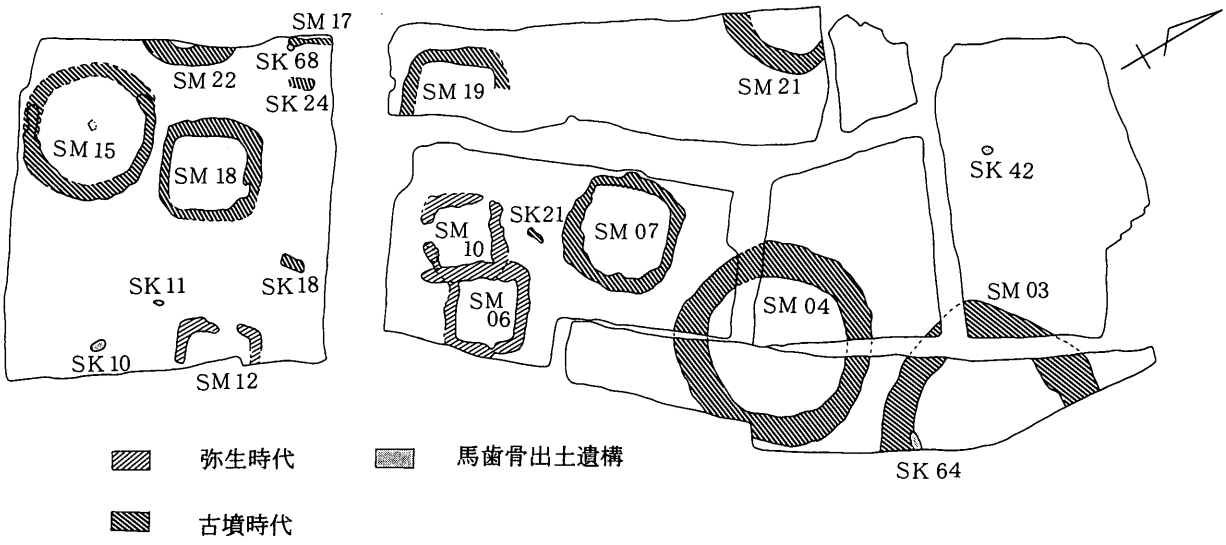
また、本書では扱わないが、墳丘長約50ｍの前方後円墳である溝口の塚古墳が上記墳墓群の北辺に位置している。

以上、11の遺構は出土遺物から、５世紀中葉から後半にかけて築造されたものであり、大きく３段階に分けることができる。

１段階－ＳＭ22

２段階－ＳＭ03（ＳＫ64）、ＳＭ07、ＳＭ19、ＳＭ21、ＳＫ18、ＳＫ21、ＳＫ24、溝口の塚古墳

３段階－ＳＭ04、ＳＭ18、ＳＭ15



挿図７　弥生～古墳時代遺構分布図及び馬歯骨出土位置図

今回の調査が幅約50ｍのトレンチ調査であり、遺跡全体の実態を把握できておらず、また詳細な分析を経てはいないが、墳墓群は前方後円墳・円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土壙墓とで構成される。

これをみていくと、同時期に前方後円墳・円墳・円形周溝墓・方形周溝墓・土壙墓という複数の墳墓形態が併存（混在）するという状況が捉えられる。これまで、４世紀後半から５世紀前半の方形周溝墓群である飯田市八幡原遺跡のあり方から、弥生時代の墓制を継承する方形周溝墓の築造が古墳時代にも引き続き行われ、その後八幡原遺跡の場合は茶柄山古墳群へと推移するものと想定された。墳墓形態としては、八幡原遺跡では方形周溝墓から方墳への移行、そして茶柄山古墳群に至って前方後円墳・円墳へと変化する、基本的には方から円へと変化するものと考えられた。しかし、宮垣外遺跡の様相をみると、方から円への一方的な変遷だけで捉えきれるものではなく、同様の状況は、市内田圃遺跡でも確認されている。これまでに確認された周溝墓あるいは墳丘墓が、５世紀中頃から６世紀初頭にかけてのものが多くあることから、古墳時代中期の墳墓形態の多様性を考えないわけにはいかない。

墳墓形態の差は、被葬者の集団内での位置付けの差によることは、様々な観点で認められてきており、当然その頂点は前方後円墳に葬られた人物ということになる。以下に円墳、次に円形及び方形周溝墓、そして土壙墓の順に埋葬者の階級差があったものと理解される。しかし、前述したとおり円墳と円形周溝墓との見極めをどうするのか、円形と方形の周溝墓の被葬者間に差があるのか、今後の検討課題である。また、形態差による被葬者の差については、階級差が基本的事項と考えられるが、同種形態墳墓にあっても、副葬品（周溝内遺物も含む）内容に変化があり、集団内での役割差などにも思慮すべきといえる。

さらに、土壙墓については遺物の出土したもののみを墓として扱ったが、遺物の出土がない土坑の中に本来は墓であるものが含まれている可能性も十分に考えられることから、今後調査時点での詳細な分析が必要であるといえる。副葬品の有無も被葬者の性格を考える上で問題となろう。

いずれにしても、宮垣外遺跡は近隣に集落を構えた集団による最上位から下位までの集団構成員の奥津城とされ、集団にとってこの地は特別のエリアとして位置付けられていたことが明らかである。

集団の墓域としての姿は、土壙墓のいくつかは重複する可能性があるものの、古墳時代に属する主な

墳墓のいずれも重なり合うことがないことから、それぞれの築造にあたっては、既存する墓の存在を認知した上で、築墓位置に一定の約束事があったことも窺える。

また、溝口の塚古墳との関係について、多くは別刊の報告書によるが、古墳の埋葬施設から出土した副葬品から考えられる時期から、宮垣外遺跡の墳墓群が形成された時期に築造されたことは明らかである。その位置関係から、多様性が明らかな墳墓形態の中でも、前方後円墳の存在は特別視されていたものといえる。

最後に、所属時期の不明な周溝墓のうち、弥生時代の可能性のあるものを除いたＳＭ11・ＳＭ16・ＳＭ20についても、他墳墓と重複関係がなく、５世紀代の墓域を構成するものである可能性が高いことを指摘しておく。

〔奈良・平安時代以降〕

奈良・平安時代の土壙墓としてはＳＫ19・ＳＫ82がある。中世以降については、宮垣外遺跡では銭貨が出土したＳＫ76・81やＳＫ77・78・80・82、高屋遺跡ではＳＫ30・36・37・38が土壙墓とみられる。

古墳中期以降中世まで、この一帯が連続して墓域としての性格を持ち続けたことが明らかとなったわけではあるが、集落との関連でみると中世末期には、この辺一帯に大きな開発が入り、居住域へと土地利用の姿を変じている。

いずれにせよ、居住域との関連の中で、それぞれの時代の全体像の理解が進むであろう。

(4) 周溝内出土遺物について

周溝を有する墳墓の周溝内からは土師器、須恵器、鉄器類等が出土している。これらの出土状況については、「３．遺構」の項で述べているが、特徴的ないくつかの状況について、以下のように類別が可能と考えられる。

①一定の範囲に複数の遺物が集中して出土し、それらは原位置もしくはほとんど移動のない状態と判断されるもの。（ＳＭ03・07・21）

②単独もしくは２点程度の土器が、原位置もしくはほとんど移動のない状態と判断されるもの。（ＳＭ03・04・07）

③周溝内の礫間に単独もしくは散在し、原位置の可能性もあるがある程度の移動も考えられるもの。（ＳＭ15・18・19・22）

④周溝覆土中に単体あるいは散在するもの。（ＳＭ04・07・17・19・20）

以上の４つ程度の状況が捉えられるが、それぞれの墳墓によりその状況は異なり、上記のうち２つ以上のパターンにあてはまる場合もある。また、同一の墳墓にあっても、同じパターンが場所を変えて複数確認されるものもある。

上記４つのパターンについて検出時の状況に至る姿を考えると、またいくつかに分けて考えられる。

①～④のすべてが該当する可能性として、周溝内もしくは墳墓外側での祭祀行為が行われたことによるもの。この場合は周溝内の検出位置により、墳墓築造時期から周溝がある程度埋没するまでの間のいくつかの段階で行為があったことを考えなければならない。

①・②に関しては、周溝内で２次的な埋葬が行われたと考えられるもの。

③は、本来墳丘肩部に付近に置かれていた土器類が、葺石（貼り石）の周溝内への転落とともに落ち

込んだもの。

④は、人為的な行為ではなく、周辺に存在したものが転入したと考えられるもの。

以上の状況が整理されるが、それぞれの位置付けについては、今後他の例も併せ詳細に検討した上で、具体的にしていかなければならないといえる。

なお、武器・工具などの鉄製品や玉類を伴出する例などは、土器類のみを出土する場合とは異なる性格を有する可能性もあり、ＳＭ03の武器類の集中的出土とＳＭ07の周溝底部からの遺物出土状況や工具類・玉類を含む遺物内容から、周溝内への２次的な埋葬の可能性が高いことも考えられる。

最後に、各遺構から出土した遺物個々については特に触れないが、ＳＭ22から出土した底部穿孔壷形土器の存在が注目されるので、ここで若干の整理を行いたい。

本資料に類する土器は当地方での出土は皆無といえる。あえて、類例を地域内で求めるとすれば、市内座光寺地区高岡４号古墳出土の小形壷形埴輪がその系列上で考えられるかもしれないが、調整・器形等の隔たりは大きい。一方、伊那谷以外でみると、かなり共通する例として、北信地域にいくつかの類例が求められる。長野市見山砦遺跡・大星山古墳・坂城町東平１・２号墳などであり、これらは関東地方との関連も含め、最近注目を集めている資料群である。これらの例は、いずれも形態的には壷に近いが、底部の成形方法は埴輪と同様に、最初にドーナツ状に粘土紐を設置し、その上に粘土を積み上げていくというもので、その成形方法から「底部開口壷」とも呼称される一群である。今回出土したＳＭ22の壷形土器は、底部成形方法が若干異なるものの底部をあらかじめ開けることを意図して作られているとみられることから、前述の例と類似するものといえる。

なお、壷形の他に鉢としたものがある。下部を欠損するため全体形は不明であるが、坂城町東平２号墳出土の円筒埴輪が形態的に類似する可能性もある。

ＳＭ22出土の壷形土器と鉢の存在は、本遺跡内の他墳墓からの出土資料より時期的に先行する可能性が高く、本遺跡群の初期の墳墓と位置付けられる。

また、これらの資料を当地方の埴輪出現期の姿と捉えると、松尾・座光寺地区のいくつかの古墳から出土し、伊那谷的な埴輪と呼ばれる土師器製作技術を踏襲した５世紀代の埴輪の原形となっていることも考えられるが、本例のみで特定はできず、今後解明すべき課題といえる。

(5) 古墳時代の馬骨葬について

今回の調査で馬骨が確認されたのは、宮垣外遺跡では、ＳＭ03（ＳＫ64）・ＳＭ15・ＳＫ10・ＳＫ11・ＳＫ42・ＳＫ68、高屋遺跡では、ＳＢ02がある。このうち、出土遺物などから古墳時代と特定できるものは、ＳＭ03（ＳＫ64)、ＳＭ15、ＳＫ10であり、埋土状態や他の遺構分布状況からＳＫ11・ＳＫ68も同時期の可能性が高い。ＳＢ02は中世以降、ＳＫ42は中世と考えられる土坑の集中する一画にあり、その形態も他と同様に小規模・不整形であり、中世に属する可能性が高い。(挿図７)

馬の全身骨格ないし、出土状況から全身骨格が埋められたと判断されるものは、ＳＫ10とＳＫ64の２例である。ＳＭ15は周溝内からの出土であり、頭部のみか全身かの判断は難しい。ＳＫ11とＳＫ68についても頭部のみか全身であるか明確にはわからない。その中で、ＳＫ10は共伴遺物こそないが、古墳時代の馬骨の好例として注目されるものであり、今後当地域の出土例や他地域の例との比較を行っていきたい。

共伴遺物のあるものはＳＫ64であり、馬具一式が出土している。これまでにも、当地域において馬に伴う馬具の出土例はあるが、轡・鞍・鐙・雲珠・杏葉のすべてを出土したのは今回が初めてである。馬具は馬体からはずされ、副葬されたとみられるが、馬具の一括資料として、また装着状態を復元できるという点において、今後の馬具研究に対して極めて重要な資料の提供となった。これまでに飯田市内で発見された古墳時代の馬に関して、馬具を伴うものは新井原遺跡４号土壙、茶柄山古墳群馬の墓10、物見塚古墳例があるが、これらは馬に装着されていたものとみられる。新井原遺跡４号土壙・茶柄山古墳群馬の墓10は単独の土壙で、近接する新井原12号古墳・茶柄山２号古墳との関連が考えられる。一方、本例は土層状況などからＳＭ03の築造と同時に埋葬されたことが明らかで、古墳への随葬馬であることを直接明らかにすることができた好例である。

今回の調査例も含め、飯田市内で現在までに発見された古墳時代の馬骨は、すべて人を葬った墓域内からのものである。個々の状況に若干の相違点はあるが、その多くが関連する墳墓を特定することができ、随葬馬としての位置付けが可能である。しかし、各遺跡における馬の出土状況には相違点もあり、墓域全体としての構成要素の１つとして捉えるべきともいえる。

馬（馬の墓）の性格をどうとらえるかについては、今次調査資料も含め飯田市内の出土例のすべてについての考究が必要であり、県外を含む他地域例とも比較検討する中で、論じられるべきものといえる。

（6）集落について

調査範囲内からは、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の墳墓が確認されたが、該期の住居址等は確認できず、おそらく集落は、今次調査箇所より東側の宮垣外遺跡内及び、より東側の水田可耕地をひかえた別府面あるいは南条面にある矢崎遺跡・兼田遺跡か、今次調査箇所より北側の高屋遺跡・高屋下遺跡に求められるものとみられる。

今回の調査で集落が確認できたのは中世のもので、方形竪穴と掘立柱建物址がある。16世紀を中心におおむね３時期に分かれるようである。方形竪穴の性格については明確でないが、該期の集落の一端を知ることができた。溝口の塚古墳が大規模に削平されたのは中世のことであり、この時期にこの地域に大きな開発が入ったことを示しているものと考えられる。また、この地が「別府」という地名である事とも関わりがあると考えられる。

最後に、全体としてみると、今回の発掘調査結果により宮垣外遺跡・高屋遺跡で確認されたものは、ある意味では、これまでの飯田市内で集積されてきた発掘調査の成果に大きな変更をもたらすものではないといえる。しかし、これまで考えられてきた状況に再考を促すべき面を多く持っている。一つには上郷地区における古墳時代の様相についてである。これまでは飯沼天神塚古墳を中心に６世紀代の横穴式石室導入以降に小規模古墳群が形成されていくという程度の捉えで、深く考究されることはなかった。しかし、飯沼天神塚古墳が伊那谷でも最大級の前方後円墳であり、群馬県などとの関連も考えられる特異な形態の初期横穴式石室を有するにもかかわらず、その築造に至る経緯は十分に整理されておらず、それに先行する５世紀代については、北側の座光寺地区と南の松尾地区との関連が取り上げられる程度であった。今回の調査結果により、座光寺とも松尾とも切り離した形で、上郷地区内の一画にあって５世紀代に墳墓群を形成した集団が存在し、その世紀内で前方後円墳を築造するまでに至った姿を捉える

ことができ、さらにその集団が継続して、当地方最大級の前方後円墳築造を可能にする地位を保ち続けたことをより明確にしたといえる。

しかも、5世紀代に全国屈指の馬生産地として認識されている当地方の中心部にあって、馬そのものが複数頭発見されていることは、墳墓群の背景にある集団が馬生産と深くかかわり、伊那谷の古墳時代の中枢として、大和王権との関係にあっても一翼を担っていた重要な地区としての姿が具体的に示されたといえる。

参考文献

市村咸人　1955　『下伊那史』第二巻

飯田市教育委員会　1992　『八幡原遺跡　物見塚古墳』

飯田市教育委員会　1992　『八幡原遺跡』

飯田市教育委員会『寺所遺跡』

飯田市教育委員会『田圃遺跡』

長野県埋蔵文化財センター　1999　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21－上田市内・坂城町内－』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41

平成12年度長野県考古学会秋季大会　2000『発掘された科野の首長墓』資料

岩井市史編さん委員会　1996　『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市史遺跡調査報告書　第2集

附編１．ＳＫ10出土馬骨について

群馬県立大間々高校教諭　宮　崎　重　雄

体高：約127㎝　中型在来馬の木曽馬のうちでも小型の方に相当する大きさである。
また、群馬県子持村白井遺跡群出土の馬蹄から推定された６世紀半ばの馬の体高が平均130.0㎝であるのと比べても、３㎝ほど下回る。古墳時代としてはやや小型の個体といえよう。

性別：牡　犬歯の存在が確認されることから、牡馬であることがわかる。

年令：11歳前後と推定され、壮令馬である。

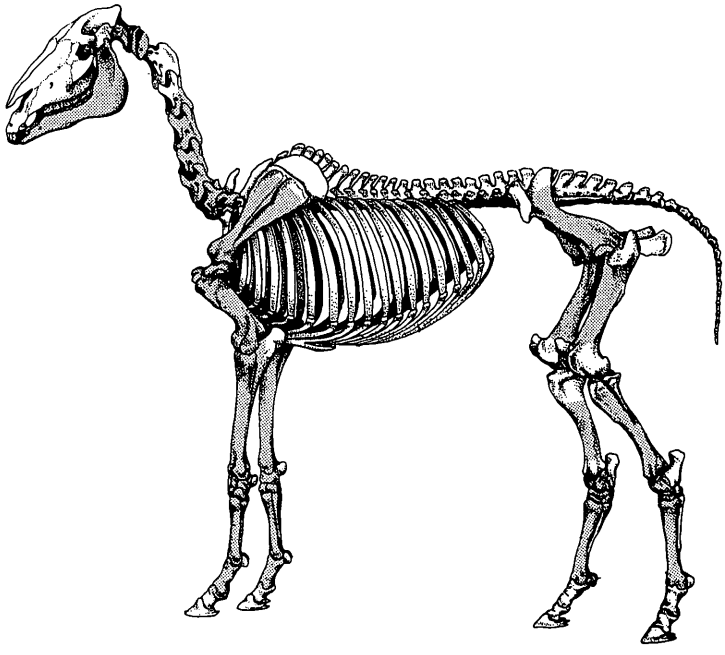
中手骨の長幅指数：比較的保存の良好な中手骨で長幅指数（中央幅/骨長）を求めてみると13.5で、細めの肢をしていたことを示している。現生木曽馬のもっとも指数の小さい個体に近い。

埋葬姿勢：左を下にした横臥姿勢で、土坑に埋葬された馬としてはごく一般的な姿勢である。

他の所見：第２前臼歯の近心側には上顎歯・下顎歯とも、ハミによる摩耗痕は観察されずハミを常時つけているということはなかったようである。
現存状態で見る限り、切り痕など人工的な加工痕、動物などによる咬み痕などは観察されない。

長野県飯田市宮垣外遺跡出土馬骨計測値（単位：㎜）

頭骨基底の長さ	445.0	肩関節窩の縦径	45.0
Diastemaの長さ	93.7	上腕骨生理的な長さ	256.0
上顎後臼歯・前臼歯の長さ	160.4	上腕骨体最小幅	36.8
後臼歯・切歯の長さ	304.0	橈骨全長	320.0
口の幅	－	橈骨骨体中央最小幅	31.0
下顎骨の長さ	415.2	中手骨最大長	207.0
下顎後臼歯・前臼歯の長さ	170.0	中手骨骨体最小幅	28.0
第２前臼歯での下顎高	45.0	前肢基節骨最大長	74.6
第４前臼歯・第１後臼歯間での下顎高	61.6	大腿骨最大長	264.0
第３後臼歯での下顎高	118.0	大腿骨頭縦径	50.0
肩甲骨の長さ	254.0＋	脛骨最大長	206.0＋
肩甲骨頸部の幅	57.0＋	距骨滑車最大長	48.5
肩関節部の頭尾方向の径	79.0	中足骨最大長	252.0
肩関節窩の横径	37.4		



挿図８　ＳＫ10出土馬骨遺存部位（加藤嘉太郎・山内昭二 1995「改著 家畜比較解剖図説 上巻」を一部改変）

附編２．ＳＫ64出土馬具について

國學院大学大学院　片　山　祐　介

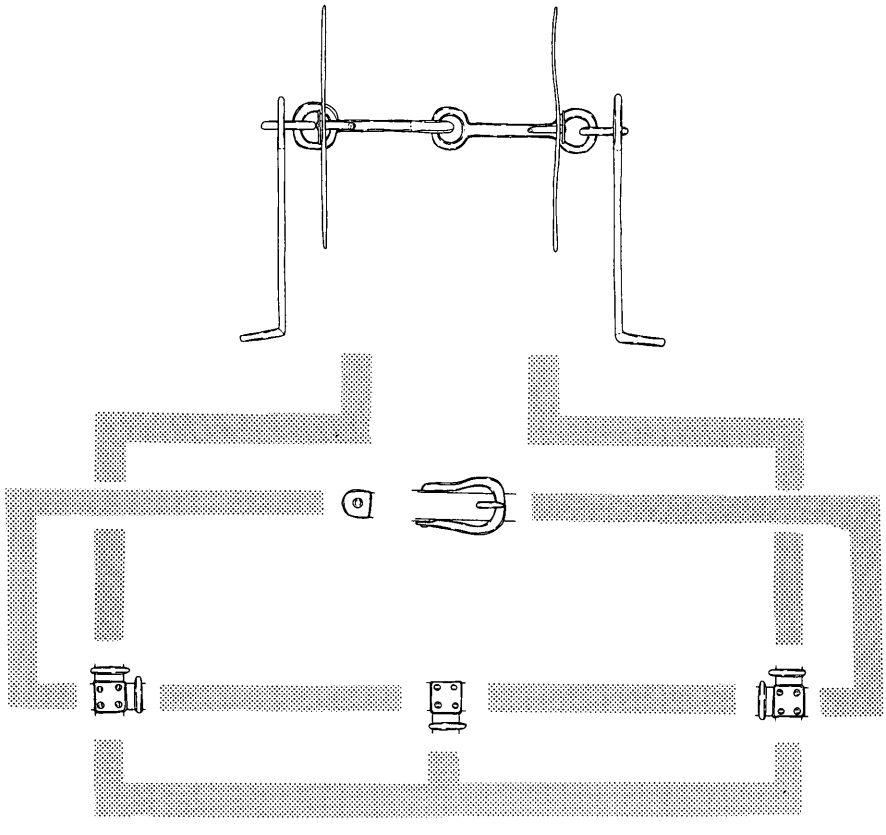
伊那谷は馬具・馬骨とも出土事例が豊富であるが、馬骨に馬具が装着された状態で出土したものは約半数である。今回のように古式鉄製馬具が、確実な組み合わせとしてフルセット出土することは全国的にも珍しく、非常に重要な資料であることは疑いえない。また通常、古式馬具は古墳主体部内より一括して出土するため復元が困難だが、本例は装着されて埋納したかどうかについて判断はできないものの、装着状態の復元が可能である。ここでは、馬具の復元および、年代を含めた位置づけについて考察を加える。

(1) 馬装復元（挿図９・10）

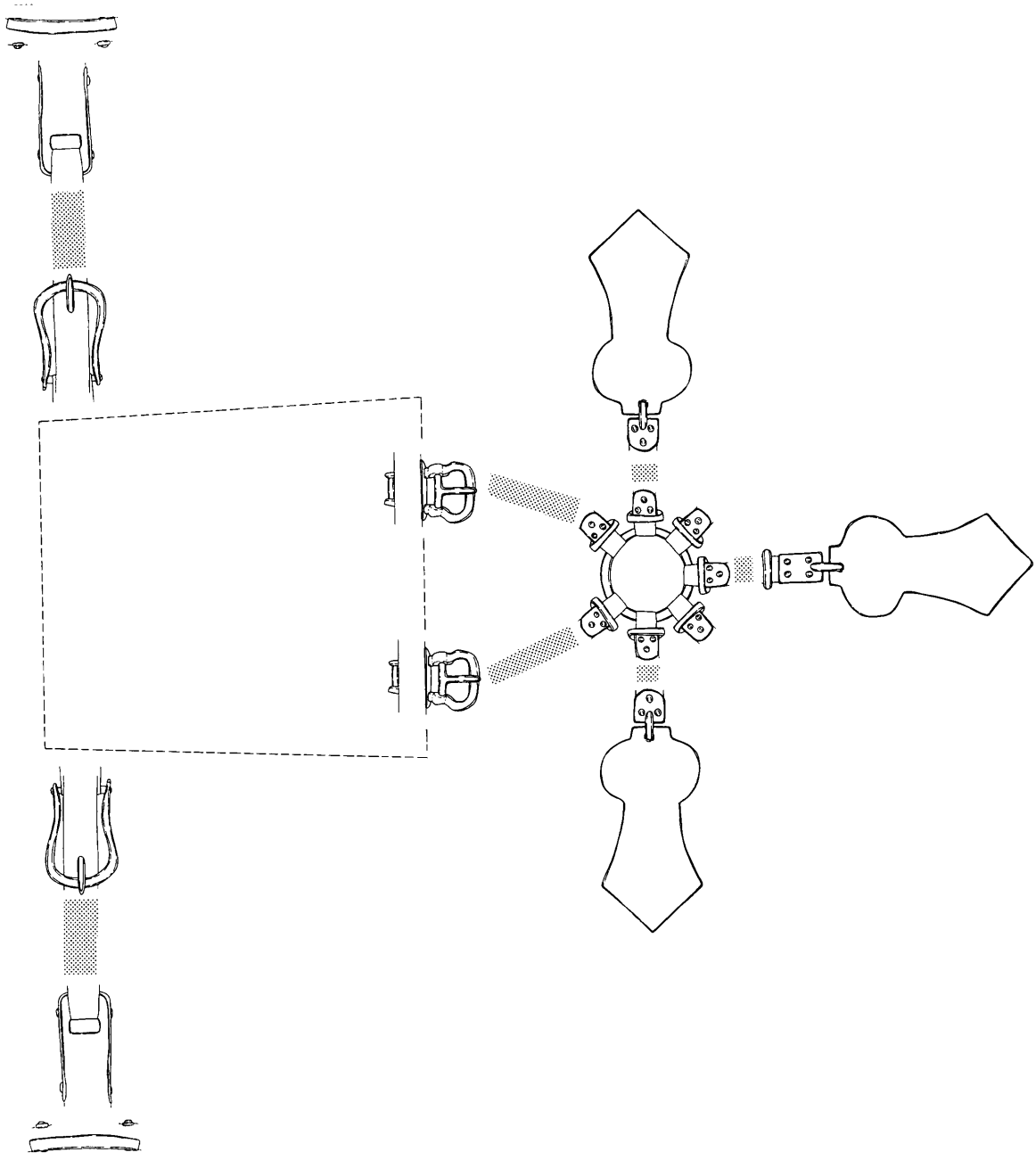
馬壙はまったく撹乱を受けておらず、馬具はおおむね原形を留めた位置から出土した。欠損も少ないため、繋の復元を行うことができた。

①轡～面繋

轡の引手の延長線上、南西に辻金具が３点、三角形を形成する位置で出土していることから、単条系辻金具３点装着（宮代1997）と思われる。責金具は、左右辻金具に付属するものは各２点、中央は１点のみである。中央額に付属するものは辻金具の後方に位置し、左右辻金具に付属するものは、１点は耳の後ろから中央辻金具へ回る繋を安定させるもの、１点は顎下へ回す繋を安定させるものと推定した。さらに西側より１鋲半円形留金具と小型鉸具が出土しているが、これは顎下で留めたものと考えられる。留金具と鉸具は、それぞれベルトの両端に取り付けられていたと推定される。留金具は鉸具の輪金を通るサイズではあるが、おそらく刺金を通した後に留金具で固定したのであろう。留金具と鉸具が離れて出土している点からも、轡は馬から外されて埋納されたことがわかる。



挿図９　面繋復元図



挿図10　鐙・尻繋復元図

②鐙

鐙は、北側のものが本来の形状をよく残しているものと考えられる。鉸具は刺金先端を下に向けて出土したことから、鞍から下げたベルトに装着したものであろう。柄と輪に残存する木目方向が直交することにより、木製鐙本体は、棒をたわめて柄と踏み込み部分を作り出す、通有の製作方法を採った可能性が高い。また、北側の鐙は柄が小さいため、さらに釘を柄の付け根に打ち込んで補強している。本来の設計にあったと考えるよりは、状況に応じた処置の結果と考えたい。北側鐙の配列から、金具と木芯に大きなサイズの違いはないと思われる。したがって、柄の長さ7.0cm、柄の厚み1.5cm、輪上部の厚み2.5cmと推定され、おそらく踏み込み部はさらに厚みを増し、側面台形に近い形状をしたものと考えられる。

③鞍

海や磯を覆う金具はなく、後輪のみ鉄製金具を使用する木装鞍である。脚が外反しており、装着したときに輪金が若干尻繋側を向くように作られている。漆膜の痕跡から、前輪と後輪の間隔はおよそ50cm、鞍の脚の長さから、後輪鞍橋の厚みは1.5cm程度と推定される。後輪幅は、北側鞍金具の位置が不明だが、おそらく40cm程度であろう。

④尻繋～雲珠・杏葉

胸繋に関連する金具は出土していない。

尻繋を雲珠に留める方法は半球形雲珠とは異なり、一度責金具を通して雲珠に巻き付け、さらに責金具に戻したのち留金具で固定したものと思われる。杏葉と雲珠の間に辻金具はない。責金具は、留金具に対応しないものが1点存在する。最後部に位置する4鋲方形板吊金具付剣菱形杏葉に付属するものと推測した。出土位置は鞍金具より50cmほど離れており、馬の腰よりかなり後方に付けられたものと思われ、雲珠と杏葉に辻金具を介さないことは、この構造によるものと考えられる。

(2) 検討

復元した馬具を元に、年代的位置づけを行う。通常、古墳時代の馬具は古墳より出土するが、本例は馬葬に伴うものである点が決定的に異なる。したがって、伝世といった時間差を考える必要がない反面、他の資料との年代差をある程度考慮に入れる必要があるかもしれない。

①轡

本例は、鏡板に大きな特徴を認められる。銜通しが∞形をしており、銜留めが非常に大きく幅1.0cmに達する。∞形銜通し孔の例は確認していないが、銜留めの大きいものとして京都府宇治二子山南墳出土轡がある。宇治二子山出土轡は鏡板長14.5cm、引手壷は兵庫鎖を介した別作りである。それに対し本例は、鏡板長13.0cmと短いことから、宇治二子山例に比べて古い様相を示している。

鉄製f字鏡板付轡は、銜と引手の連結が鏡板の外で行われ、引手壷に兵庫鎖を用いず、f字の屈曲の小さいものが古相を示すとされる（坂本1985)。鏡板の屈曲の小さいものは、f字端部の返りがほとんど見られない福岡県塚本1号墳例、銜通し孔から左右の長さが大きく異なる宮崎県小木原3号地下式横穴墓例など微妙な点でバランスを欠くことがある。そうした中で本例は、飯田市新井原遺跡4号土壙（挿図11－1)、韓国福泉洞23号墳など初現期のf字鏡板に近い形状をしており、鉄製f字鏡板の中でも最も古相に位置づけることが出来る資料と言える。しかし、本例の引手壷は香川県川上古墳例と同じ一

体型であり、新井原・福泉洞例が別作り式である点が異なる。また、伊那谷からは塚原古墳群より２点の鉄製ｆ字鏡板付轡が出土している（挿図11－３・４）。鏡板形状や引手壷の構造などから、本例を含めた４点の伊那谷出土ｆ字鏡板付轡は、いずれも時期が近接し、かつ当該型式轡の初現期の製品であると考えられる。

鉄製ｆ字鏡板付轡は横矧板鋲留短甲を共伴することも多く、湾曲の強いものも少ないため、５世紀中葉から後半に限定される遺物と見られる。宇治二子山・小木原３号例がＴＫ47型式期に当てられ、香川県川上古墳からはＴＫ208型式期の須恵器を共伴している。そうした点から、本例は遅くともＴＫ208型式期を下ることはないものと考えられる。

②雲珠・杏葉

ｆ字鏡板付轡は剣菱形杏葉とセットになることが多く、本例も例外ではない。しかし、ｆ字鏡板付轡は鉄地金銅張が一般的で、鉄製のものは単独で出土することが多い。京都府宇治二子山南墳より鉄製ｆ字鏡板付轡と剣菱形杏葉のセットが出土しているのがほとんど唯一の類例である。宇治二子山例は剣先が鋭く突出して付け根が細く、かつ円形部分が全長の１/２を占めるほど大きい。剣菱形杏葉は、古相に位置するものは小型で剣先部分の突出が弱く鈍角である。本例は全長12.0cmの小型品で、剣先の突出が弱く、立聞孔は円形である。また吊金具は２点が３鋲半円形板を使用しており、こうした特徴はすべて、飯田市新井原遺跡４号土壙出土例に類似する（挿図11－２）。しかし新井原４号土壙、宇治二子山例ともに杏葉は１点のみである点が異なる。また本例は、３点中最後尾に位置する１点が４鋲方形板吊金具を使用している。

剣菱の突出から、本例は新井原４号土壙、岡山県築山古墳出土例などとほぼ同時期のものと思われ、おそらくＴＫ208型式期を下ることはないと思われる。したがって、ｆ字鏡板付轡とのセット関係を考慮しても、両者の年代は一致する。

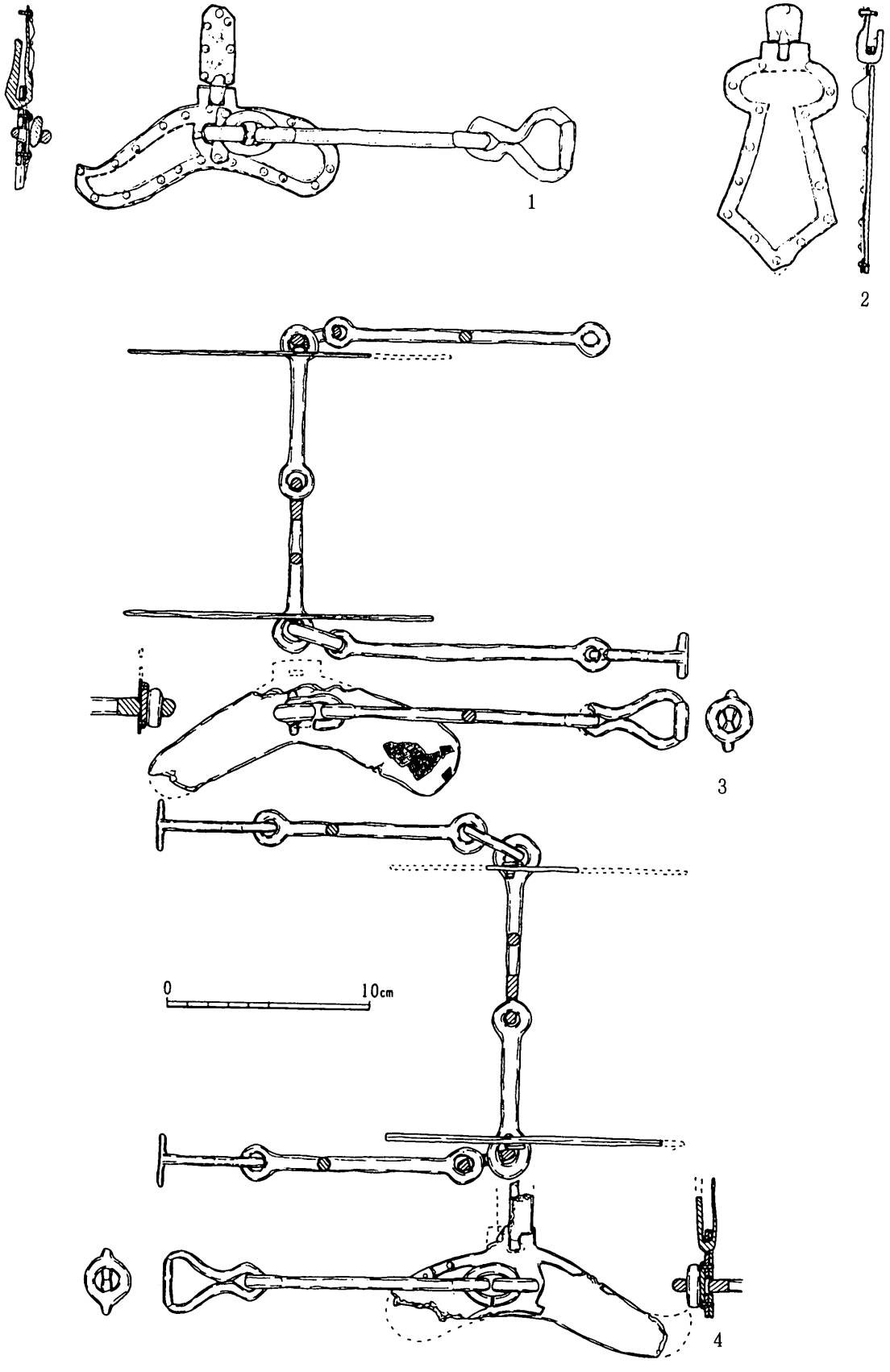
③鞍

鞍金具は後輪の鞍のみで、いわゆる木装鞍である。鞍金具は、輪金脚一体型、脚先端に横棒を当てたもので、この型式はＴＫ73～47型式期の初期馬具を特徴づけるものとされている。同様の構造を持つ京都府宇治二子山南墳は脚の長さが輪金の１/３ほどで、鉸具の輪金が円頭形、座金は栗形である。本例は、宇治二子山例とは異なる形態を持つ。もっとも特徴的な点は、輪金に瘤が作り出され、そこにＴ字形刺金が差し込まれていることである。こうした例は他に確認していないが、後出する各型式の鞍金具にも見られず、試作の域を出なかったものと考えられる。また脚が若干長く輪金の半分ほどの長さを持ち、外反して鉸具が少し雲珠側へ向くように作られている。こうした例も他になく、やはり瘤と同様に試作されただけで終わったものであろう。

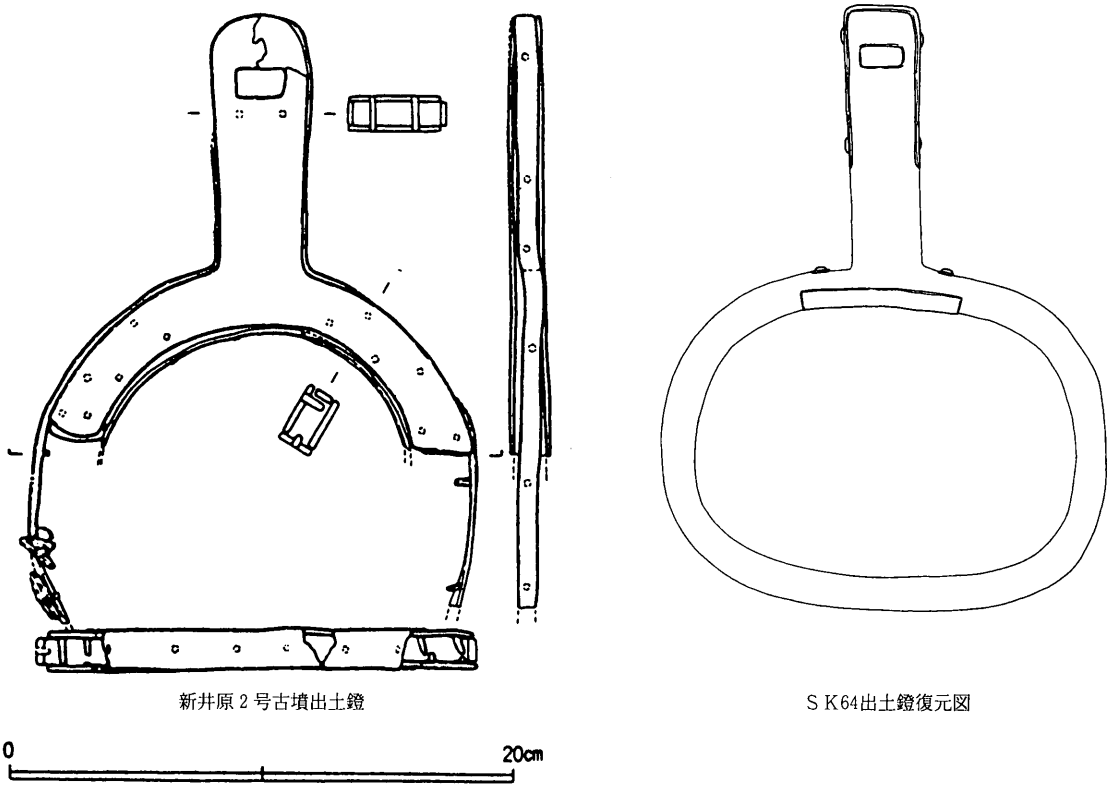
ＴＫ23型式期に入ると、脚一体型鞍金具も佐賀県関行丸古墳に見られるように形状が多様化することから、本例の試作的形態も同時期の所産として見ることができる。しかし馬骨に伴うものであることから、他の古墳出土遺物の年代より若干早まるかもしれない。したがって、ＴＫ208～ＴＫ23型式期に当てることが妥当と思われる。

④鐙

鐙は鉸具、柄と輪を別作りにしたものである。木芯鉄張輪鐙は、本体と踏み込みを一体化させて作ることが一般であり、全面ないし側面のみを鉄張にする。しかし、本例のように柄と輪の側面のみを金具



挿図11　伊那谷出土ｆ字鏡板付轡



挿図12　伊那谷出土鐙

で作成するものは少ない。類例は、京都府宇治二子山南墳より出土している２点のうち１点があげられる。ほかに韓国良洞里78号墳、同107号墳などに認められ、韓国の編年で５世紀前葉に比定されている。初期段階の柄頂部が丸く、柄と輪の厚みが同じ鐙は、新井原２号古墳より出土している。本例は柄頂部が方形をしており、柄と輪の側面厚みが異なる。したがって、ＴＫ73～ＴＫ216型式期に当てられる新井原２号古墳出土鐙（挿図12）よりも一段階遅れ、ＴＫ208型式期と考えられる。５世紀前葉の朝鮮半島における金具型式が、５世紀中葉から後半にかけた段階の木芯型式に合わせて変化したものとも思える。

⑤面繋金具

４鋲方形板辻金具３点と、小型鉸具・半円形留金具の組み合わせである。方形板辻金具は、出土位置から顔面左右と額の３点に装着された３点留めであることは確実で、ＴＫ208型式期よりＴＫ209型式期まで存続して確認されており、もっとも一般的な面繋装着方法であったと考えられている。

面繋に伴う小型鉸具は２点セットで出土することが多く、馬の頸下を留めるもの、左右頬革の中間点、項革中央部３点交差などが使用方法として考えられている（宮代1997）。本例は面繋辻金具より左右へ外れた地点から、半円形留金具と対になる形で１点のみ出土しており、頬革左右および項革３点交差は考えにくい。一方、面繋金具に伴う留金具は通常、鉸具のすぐ近くから出土し、鉸具の後ろに取り付けられたものと推定される。以上から、鉸具と留金具は馬の頸下に取り付けられ、埋納に際して外されたものと推定した。留金具と鉸具がそれぞれベルトの両端に留められた例として、宮崎県馬頭13号横穴出土面繋金具があげられる。しかし馬頭13号例は刺金がなく、刺金の代わりに留金具で固定してあったものと推定されている。本例は鉸具に刺金を持つため、装着状態と構造は若干異なる。

(3) まとめ

ＳＫ64出土馬具は、各部位でも類似品を多く持ち、かつ組み合わせとしても類似している宇治二子山南墳よりも古く遡るものと考えられる。しかし、鐙が新井原２号古墳出土品よりも新しい様相を示していることから、新井原２号古墳、高岡４号古墳、松尾物見塚古墳など飯田市域のＴＫ73～ＴＫ216型式期の例よりも１段階遅れ、新井原４号土壙出土馬具とほぼ同時期であろう。したがって、各遺物ごとに得られた年代でもあるＴＫ208型式期に位置づけられる。

ｆ字鏡板付轡＋剣菱形杏葉のセットは、甲冑を伴うことが多いが、本例は古墳出土遺物ではなく、馬葬に伴うものであるため、馬具以外の共伴遺物はない。しかし、隣接する溝口の塚古墳からは三角板鋲留短甲と横矧板鋲留衝角付冑、横矧板鋲留短甲の甲冑セットが出土している。新井原12号古墳と新井原４号土壙の状況を鑑みても、溝口の塚古墳出土甲冑とＳＫ64馬具が無関係であったとは考えにくい。

５世紀代の甲冑に馬具が共伴する確実な事例は、伊那谷において意外に少ない。それは、馬具があくまで「ウマ」に伴うものとして出土していることと、相互関係が不明瞭なほど複数の古墳、低墳丘墳、馬壙が密集しているケースが多いこと、発掘調査による甲冑の出土事例が少ないことが理由としてあげられる。確実な事例としては、川路月の木１号古墳があるが、これは韓国玉田20号墳出土品と同型の鉄製楕円形鏡板付轡が出土している。また、鉄製ｆ字鏡板付轡と鉄地金銅張ｆ字鏡板付轡は時間的・地理的に隣接する関係を持つことが多い。本例は新井原４号土壙出土馬具との関連が指摘され、また轡と杏葉の形状が類似している点を先に述べた。しかし新井原古墳群と宮垣外遺跡は異なる墓域群に捉えられる（白石1988）ことを考えると、相関は認められても、直接的な因果関係を結論づけるには慎重になる必要があるかもしれない。

附編３．ＳＫ18出土鉄製靫金具について

國學院大学大学院　　片　山　祐　介

（1）復元

靫金具は、鉸具付き短冊形吊手飾金具とコ字形金具のセットが鉄鏃に共伴した状態で出土した。

吊手飾金具は、鉸具の残存するものは表を上にして鉄鏃群の横から出土し、鉸具の欠損した長いものは３～４㎝ほど下がった位置より、側面を上に向けた状態で出土した。鉸具の位置は鉄鏃茎先端付近で、鉸具の方向が鋒方向と一致している。「靫」としたが、２点の吊手金具の長さが異なるため、いわゆる背中に背負う靫とは構造が異なるものと思われる。むしろ、時代は下るが唐代李重潤墓墓道東壁に見られる盛矢具（挿図13－１）に近い形態をしていた可能性がある。

コ字形金具は鉄鏃より離れた、鉄鏃の頸部付近より出土したことから、靫本体の口の部分に取り付けられていたものとも思えるが、木目方向が金具長軸方向と一致していることを考えれば、全く異なる部品であった可能性も否定できない。通常の「コ字形胡籙金具」とは異なり、縁断面の形態や内面木目方向などから木芯鉄張輪鐙の柄頭に類似するが、類例がないため、よくわからない。

（2）吊手金具

本例は、短冊形吊手飾金具に分類される。鉸具が共伴することはあっても、本例のように一方の先端に鉸具が「取り付けられている」ことはあまりない。

①類例

岡山県総社市法蓮40号墳（挿図13－３）

２群の鉄鏃のうち、Ｂ群に胡籙金具が付属する。短冊形吊手飾金具と鉸具のセットが、片刃長頸鏃と椿葉長頸鏃とともに出土している。鉸具と吊手金具は別作りである。鉸具に刺金がなく、鋲は２個の並列と鉄板中央の１個を組み合わせている。

横矧板鋲留短甲を共伴することから、５世紀後半に位置づけられている。

韓国陜川玉田Ｍ３号墳（挿図13－２）

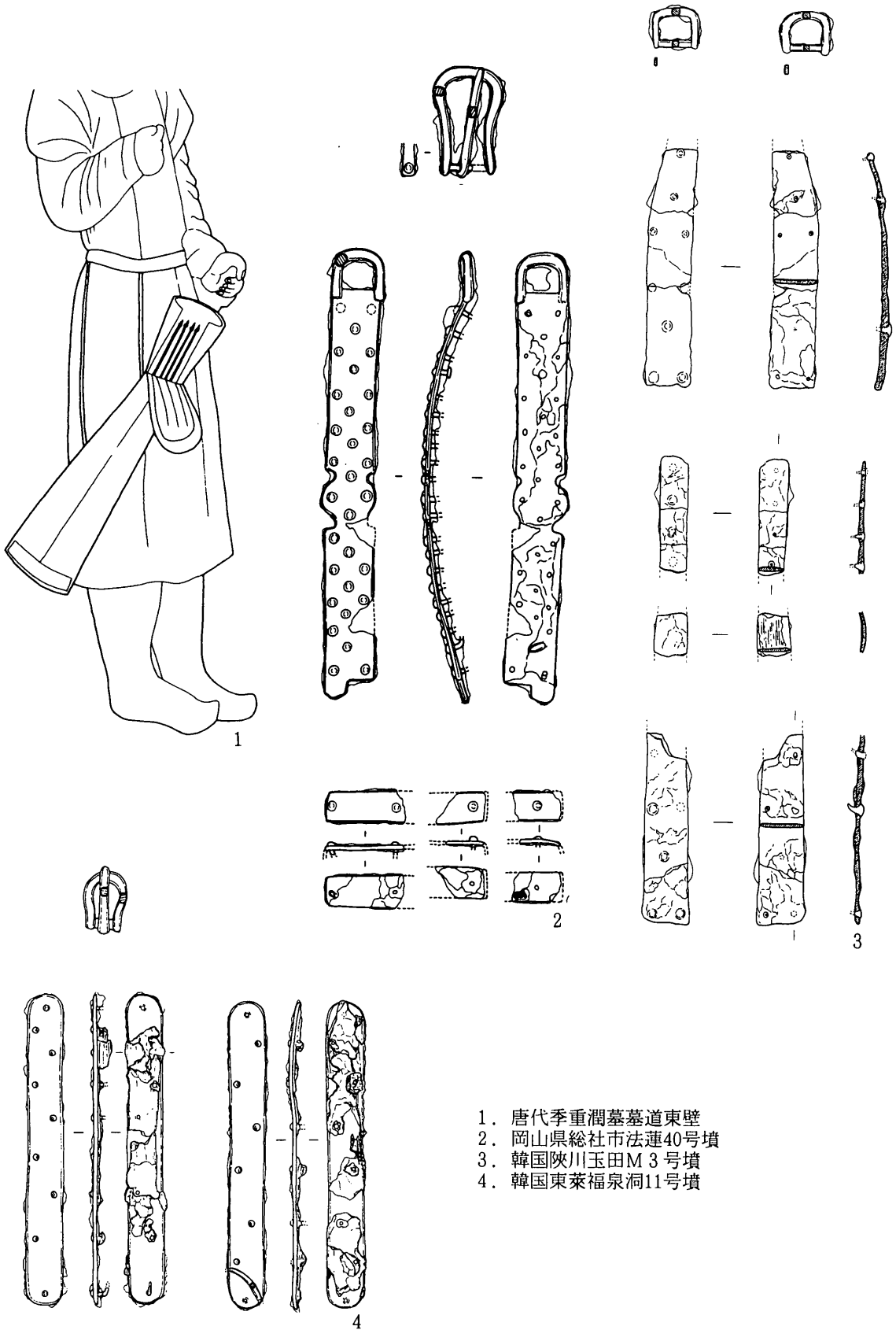
玉田Ｍ３号墳からは10群の鉄鏃が出土しており、このうちＩ群の鉄鏃群に共伴する胡籙金具は、中円部造り出し形吊手飾金具と鉸具、裾板責金具が各１点ずつセットで出土している。吊手金具には、３列の鋲が交互に打たれている。上端は左右端を切り欠いた軸受けを造り出し、刺金のない鉸具が取り付けられている。下端はＬ字形に切り欠かれている。

古墳は韓国編年で、５世紀第４四半期に位置づけられている。

韓国東萊福泉洞11号墳（挿図13－４）

福泉洞11号墳は５群の鉄鏃が出土しているが、そのうちＢ群に胡籙金具が共伴する。短冊形吊手飾金具と山形前立飾金具、大小の鉸具２点、偏円偏方形金具がセットで出土している。長方形吊手金具は端部が丸くおさめられ、鋲が千鳥状に打たれていることなどから、最古相を呈しているものと考えられている。２点の鉸具は、１点は肩紐に使用され、１点は矢を束ねる目的で使用されたものと想定されている。鉸具はいずれも刺金を付けた通有のものである。

韓国編年で５世紀30年代に位置づけられている。



1．唐代季重潤墓墓道東壁
2．岡山県総社市法蓮40号墳
3．韓国陜川玉田M３号墳
4．韓国東萊福泉洞11号墳

挿図13　胡籙金具参考資料

②小結

鉄製短冊形吊手飾金具の法蓮40号、福泉洞11号、稲荷台１号出土例は、いずれも鉸具が別作りで、吊金具と一体化していない点が共通する。短冊形吊手飾金具は、福泉洞11号に見られるように初現段階から鉸具と短冊形金具が別作りであったと考えられる。また、鋲は中円造り出し形に比べて少ない。

鉸具と吊手金具が一体化し、飾り鋲の多いものは中円部造り出し形に認められる。しかし、この型式は金銅製ないし鉄地金銅張製が一般的であり、鉄製のものは少ない。玉田Ｍ３号墳例は、上端に軸受けを作りつけた鉸具一体型であるが、鉸具に刺金を持たない。鋲はＳＫ18出土例と同じ配列を持つ飾り鋲的要素が強い。下端をＬ字形に切り欠いた点は、５世紀後半の新羅に出土例の多い金銅製胡籙金具と同じである。

ＳＫ18例は刺金のない鉸具を作りつけている点、鋲配列が列点文装飾を持たない中円部造り出し形に類似していることなどから、短冊形と中円部造り出し形の中間の性格を持ち、玉田Ｍ３号墳例に近い構造を持つものと言える。

鉄製短冊形吊手飾金具は、５世紀後葉の限られた時期に製作・使用されたものと考えられており、また鉸具の刺金が簡略化されたものは、中円部造り出し形を含めて、いずれも５世紀後半に位置づけられる。玉田Ｍ３号墳は５世紀第４四半期に位置づけられていることを考えれば、本例もほぼ同時期の製品と見て大過はないものと思われる。

また本例は、胡籙金具を逆転させた状態で出土した「靫」金具と考えられることから、金具は類似型式であっても、本体の構造が同じであるとは限らないという点において、今後の注意を促す遺物とも言えよう。

参考文献

飯田市教育委員会　1992　『八幡原遺跡　物見塚古墳』

飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館　1997　『伊那谷の馬・科野の馬－古墳時代における受容と広がり－』

宇治市教育委員会　1991　『宇治二子山古墳』

内山敏行　1996　「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

内山敏行・岡安光彦　1997　「下伊那地方の初期の馬具」『信濃』49－４・５

岡安光彦　1986　「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71－４

橿原考古学研究所　1976　『葛城・石光山古墳群』

金斗喆　1996　「韓国と日本の馬具－両国間の編年調律－」『４・５世紀の日韓考古学』九州考古学会・嶺南考古学会

慶尚大学校博物館　1990　『陜川玉田古墳群Ⅱ　Ｍ３号墳』慶尚大学校博物館調査報告　第６輯

早乙女雅博　1987　「古代東アジアの盛矢具」『日本考古学会第35回例会資料』

坂本美夫　1985　『馬具』考古学ライブラリ－34

澁谷恵美子　2000　「馬の文化論－伊那谷を中心として－」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』

杉原清一　1991　「仁多・川子原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ＸⅧ集

総社市教育委員会　1987　『法蓮40号墳』

田中茂　1974　「えびの市小木原地下式横穴３号出土品について」『宮崎県総合博物館研究紀要』２

田中新史　1988　「古墳出土の胡籙・靫」『井上コレクション　弥生・古墳時代資料図録』

千賀久　1992　「日本出土の初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』九

千賀久　1994　「日本出土の初期馬具の系譜２」『橿原考古学研究所論集』十二

橋本達也　1995　「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義」『考古学雑誌』80－４

花谷浩　1991　「3)馬具－日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』

釜山大学校博物館　1982　『東萊福泉洞古墳群Ⅰ』釜山大学校博物館遺跡調査報告　第５輯

松尾昌彦　1983　「下伊那地方における馬具の一様相」『長野県考古学会誌』45

柳昌煥　1994　『伽耶古墳出土鐙子に関する研究－木心鉄板被輪鐙を中心として－』東義大学校大学院

宮代栄一　1986　「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号

宮代栄一　1993　「５・６世紀における馬具の『セット』について－ｆ字鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に」『九州考古学』第68号

宮代栄一　1995　「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』70

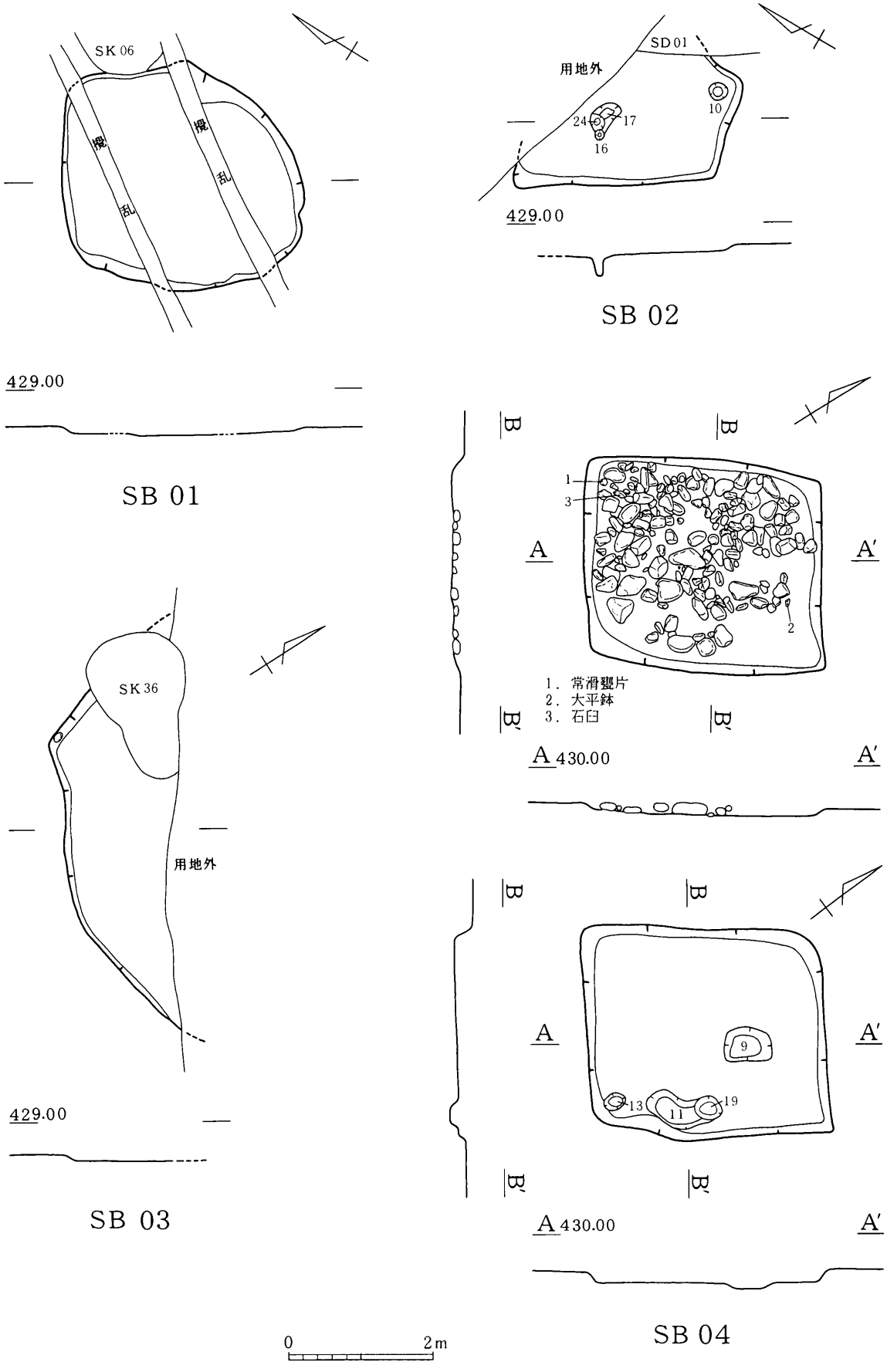
宮代栄一　1996　「飾り馬の繋構造の研究－面繋構造を中心に－」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』

宮代栄一　1996　「古墳時代金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」『日本考古学』第３号

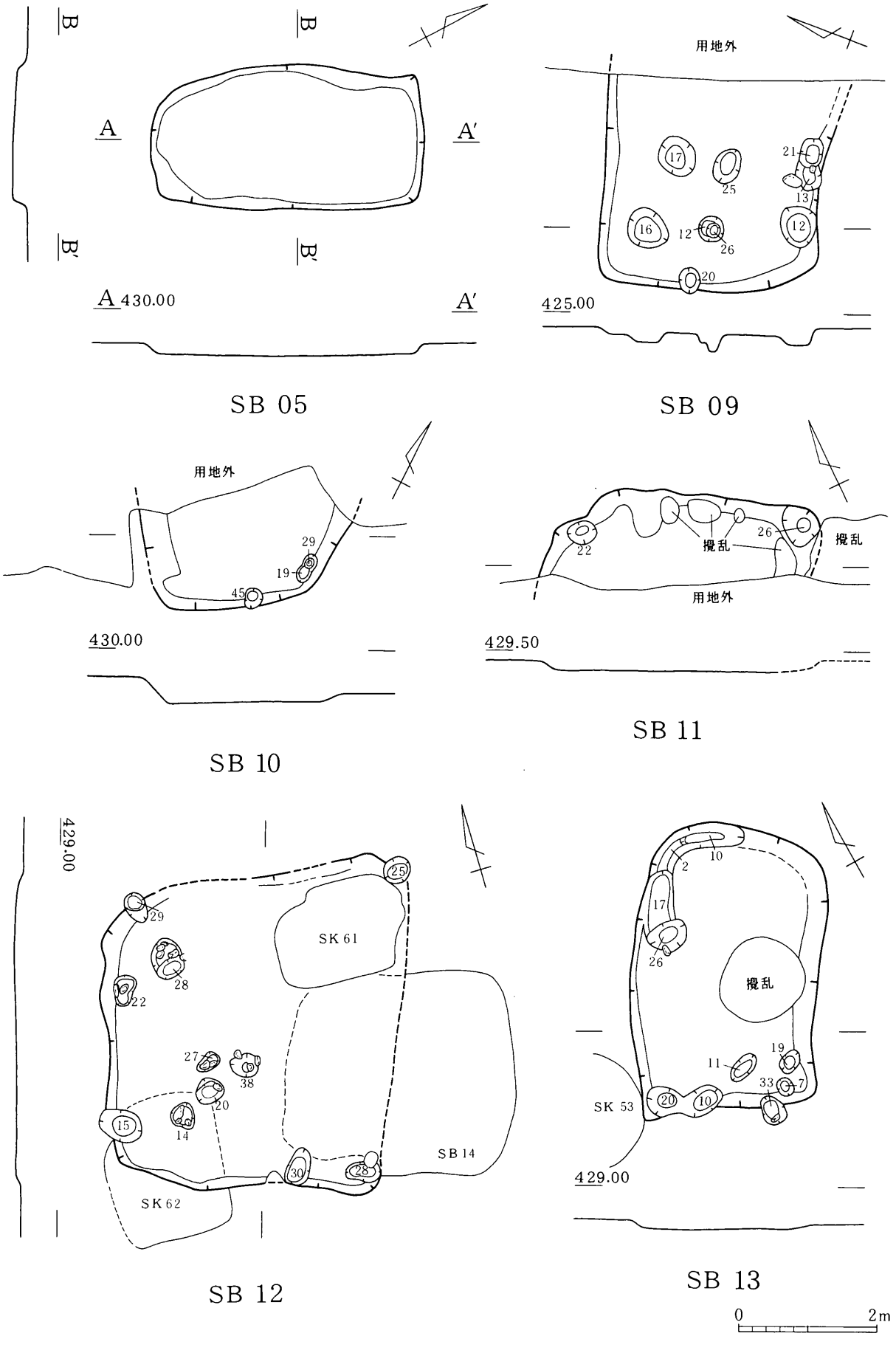
桃崎祐輔　1999　「日本列島における騎馬文化の受容と拡散－殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響－」『渡来文化の受容と展開－５世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)』第46回埋蔵文化財研究集会

嶺南考古学会　1995　『伽耶古墳の編年研究Ⅲ－甲冑と馬具－』

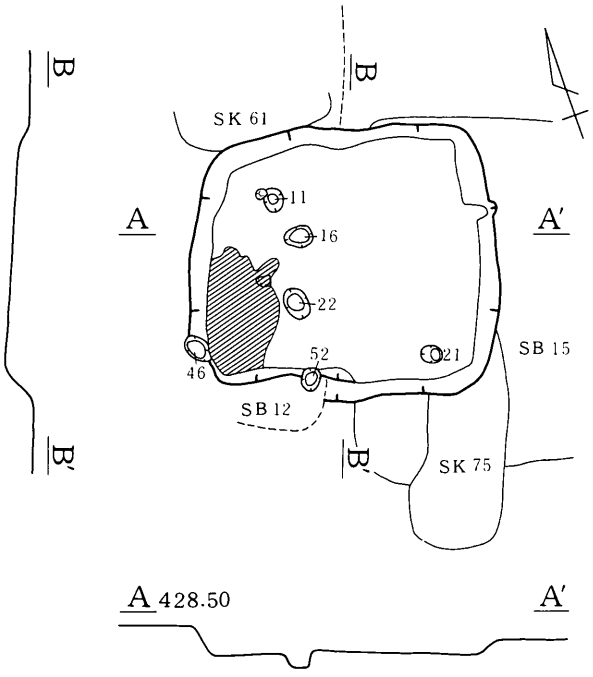
遺　構　図　版



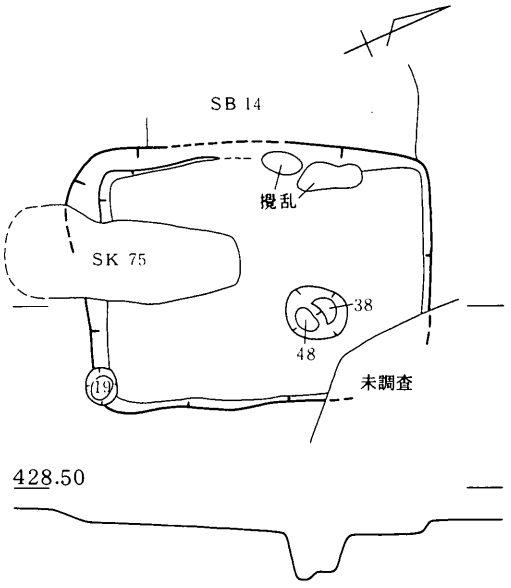
第1図　MGT　SB01　SB02　SB03　SB04



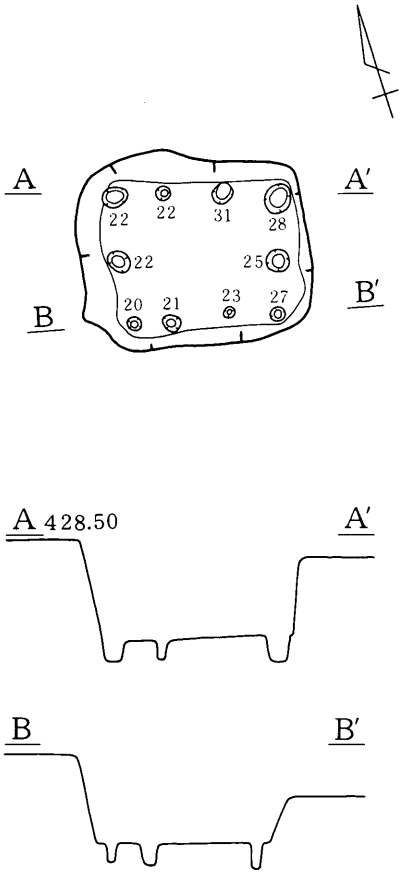
第2図　MGT　SB05　SB09　SB10　SB11　SB12　SB13



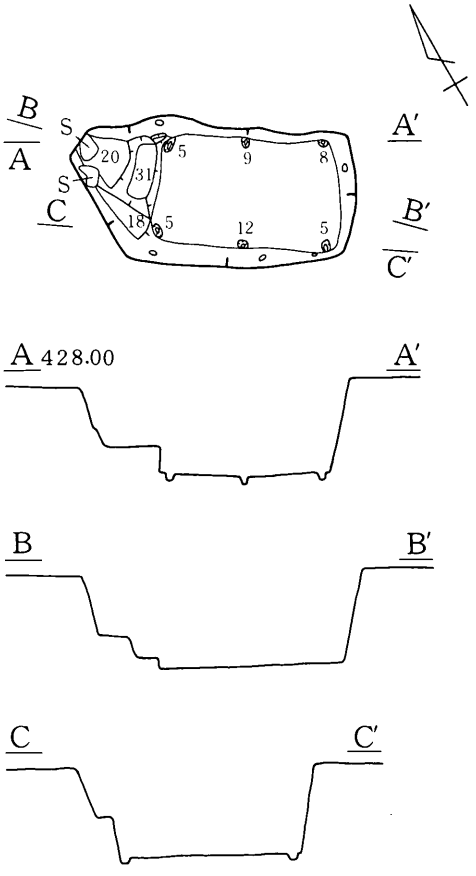
SB 14



SB 15



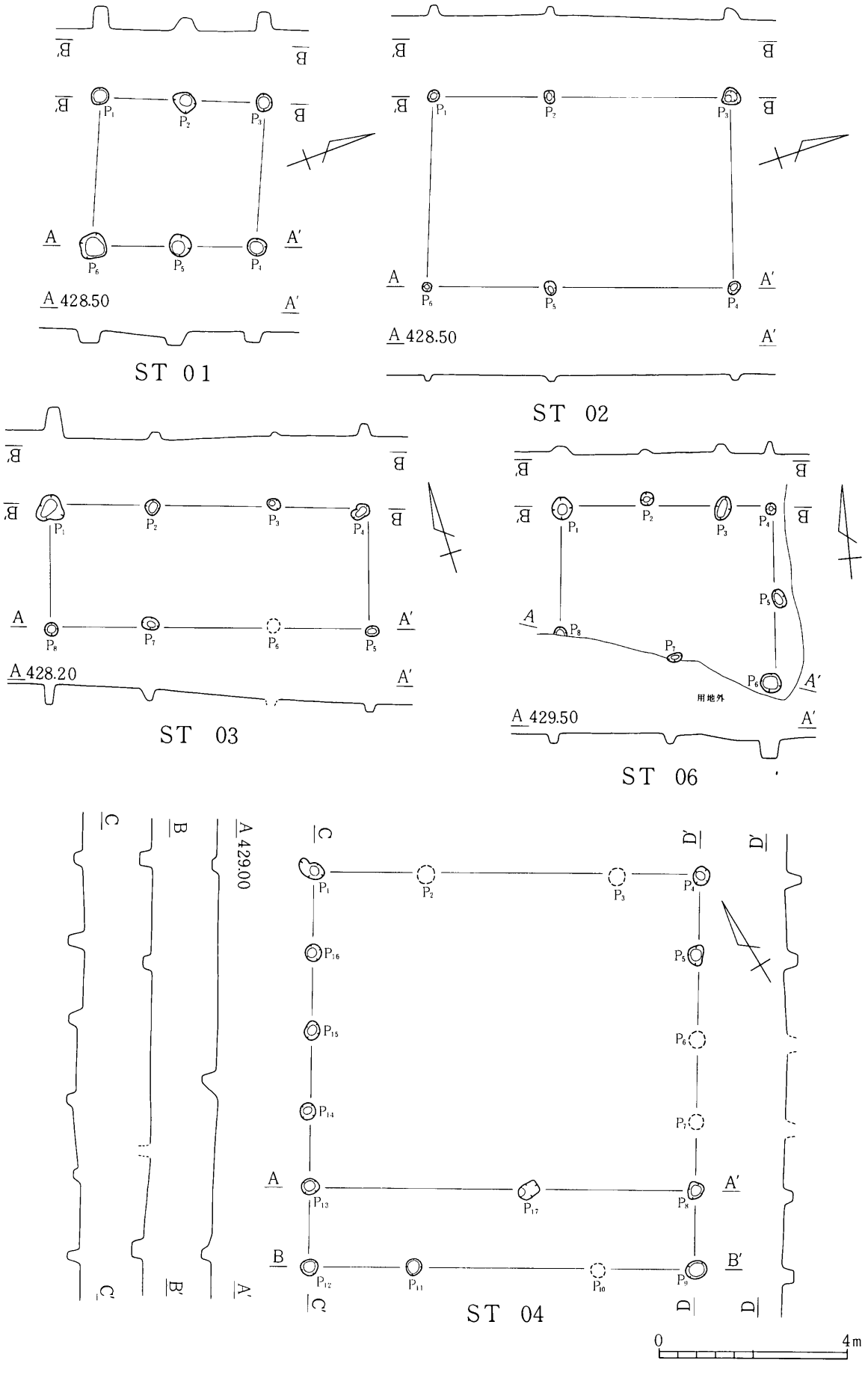
SB 16



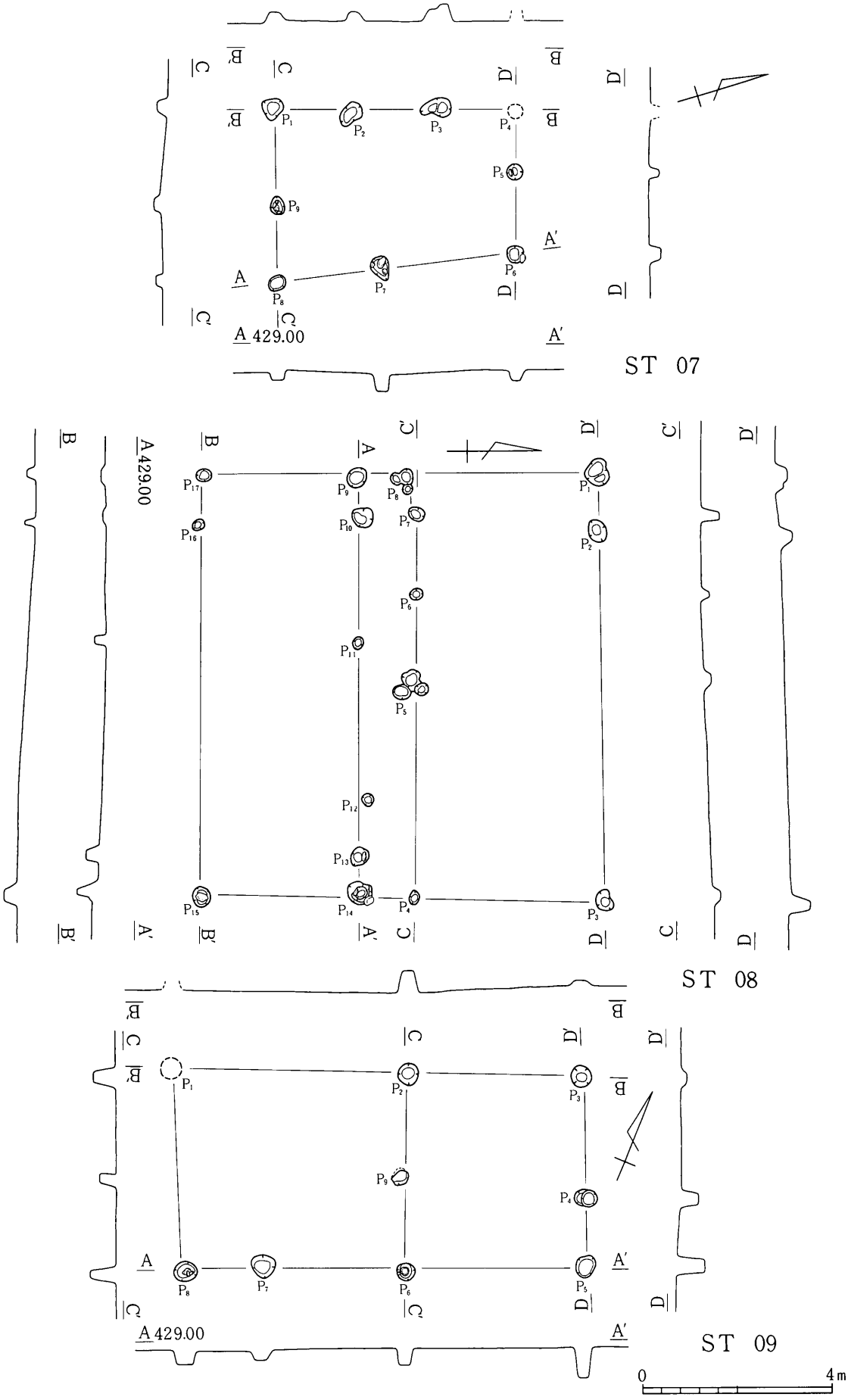
SB 17

0 2m

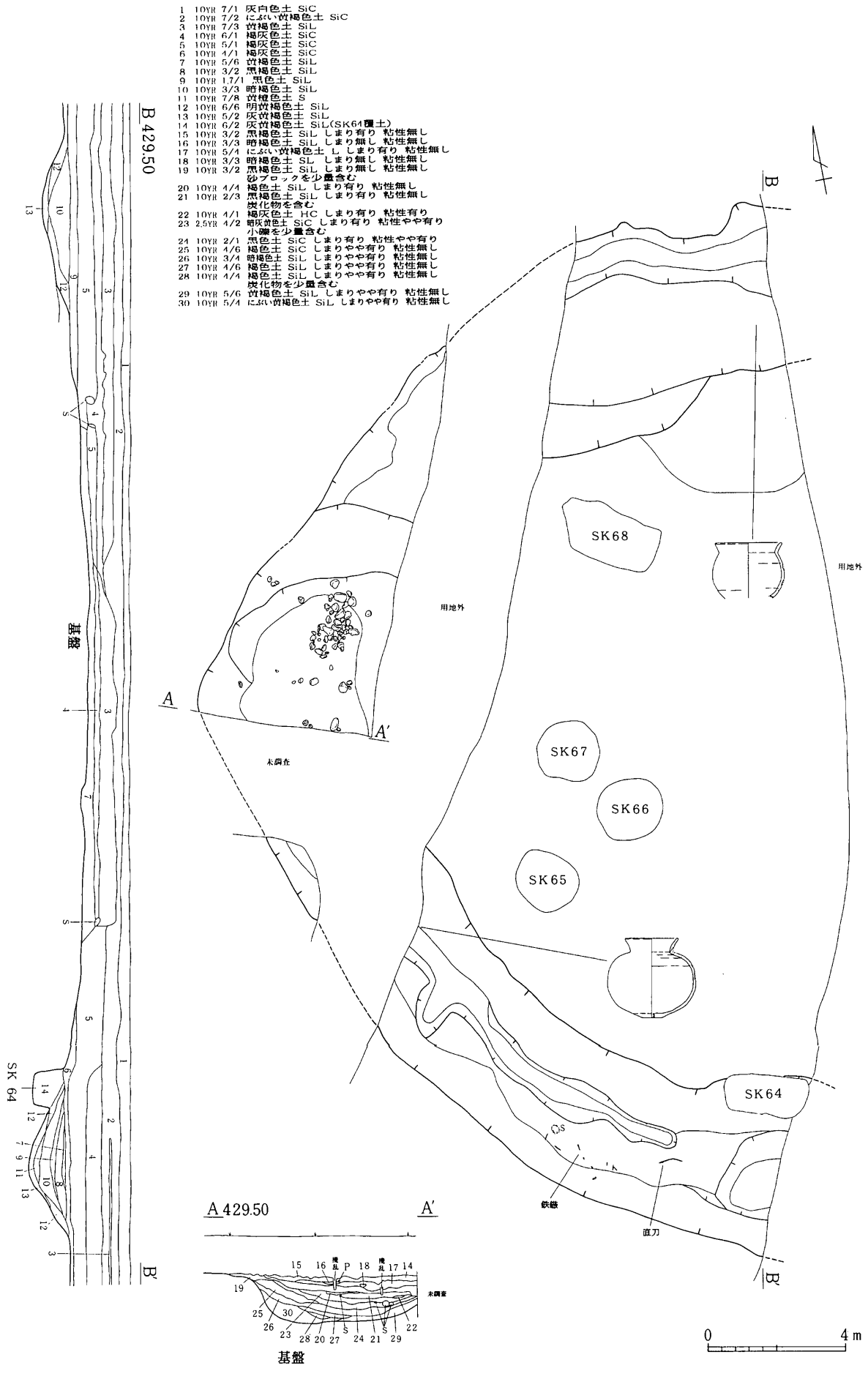
第3図 MGT SB14 SB15 SB16 SB17



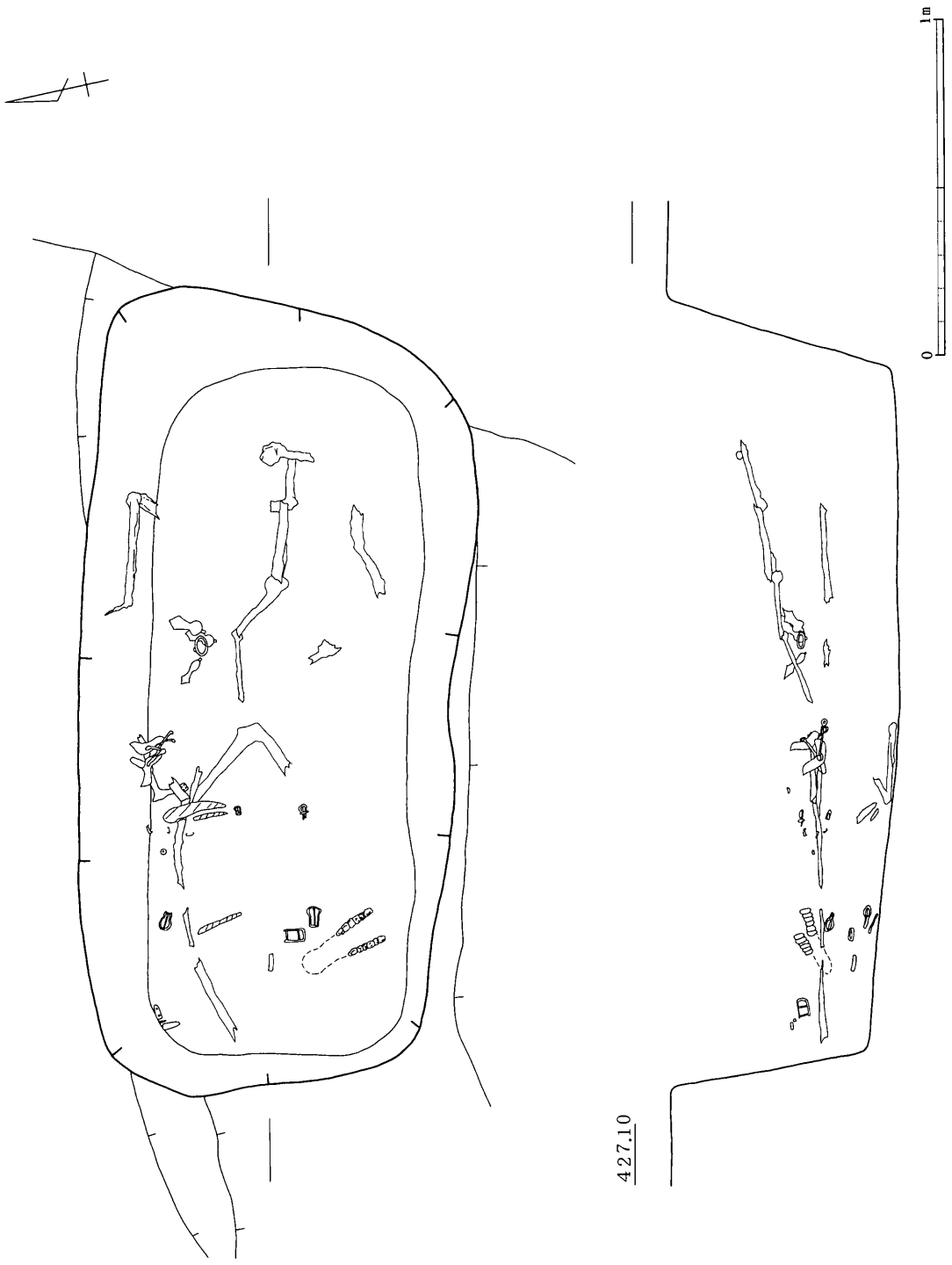
第4図 MGT ST01 ST02 ST03 ST04 ST06



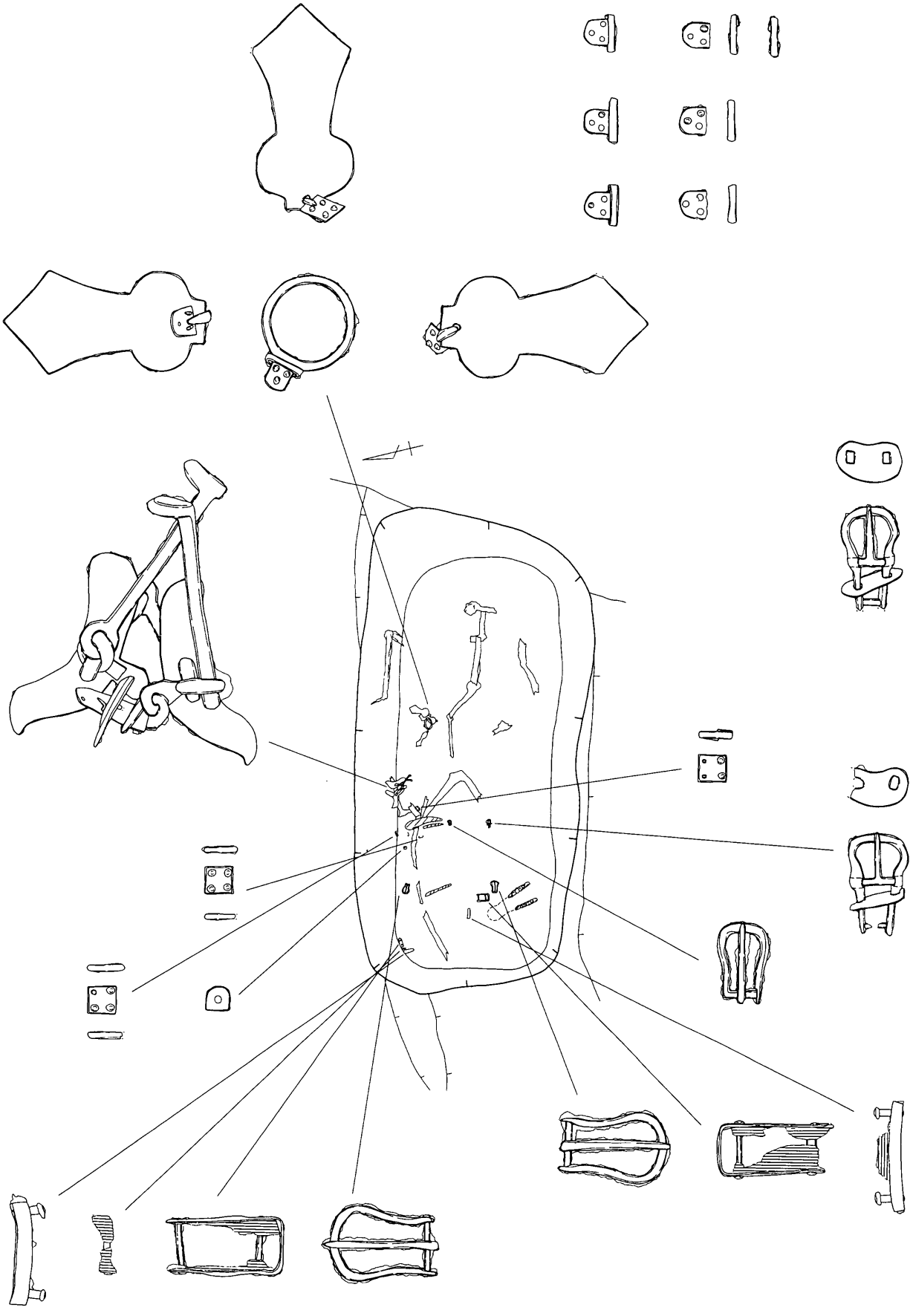
第5図 MGT ST07 ST08 ST09



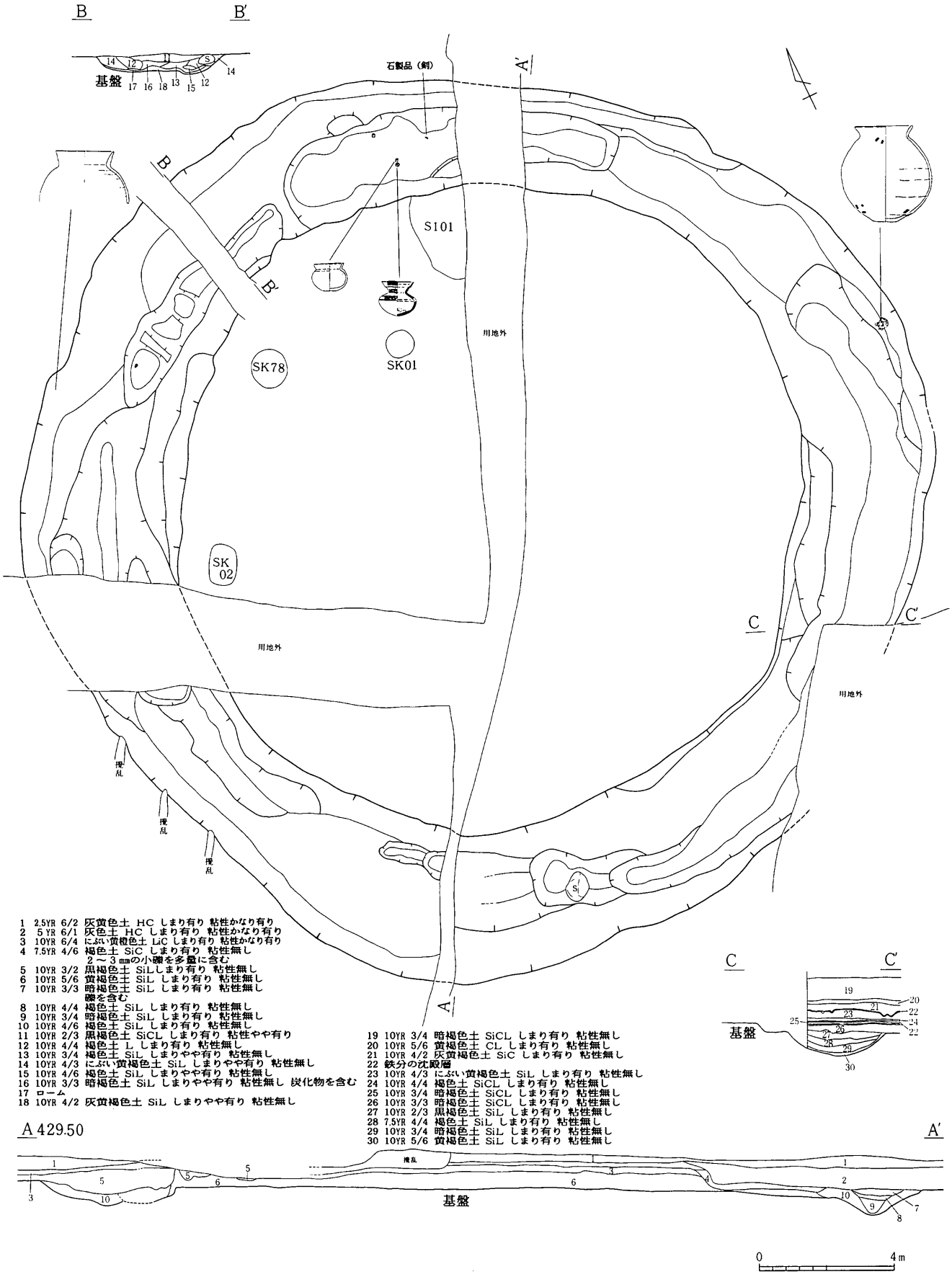
第6図 MGT SM03 SK64



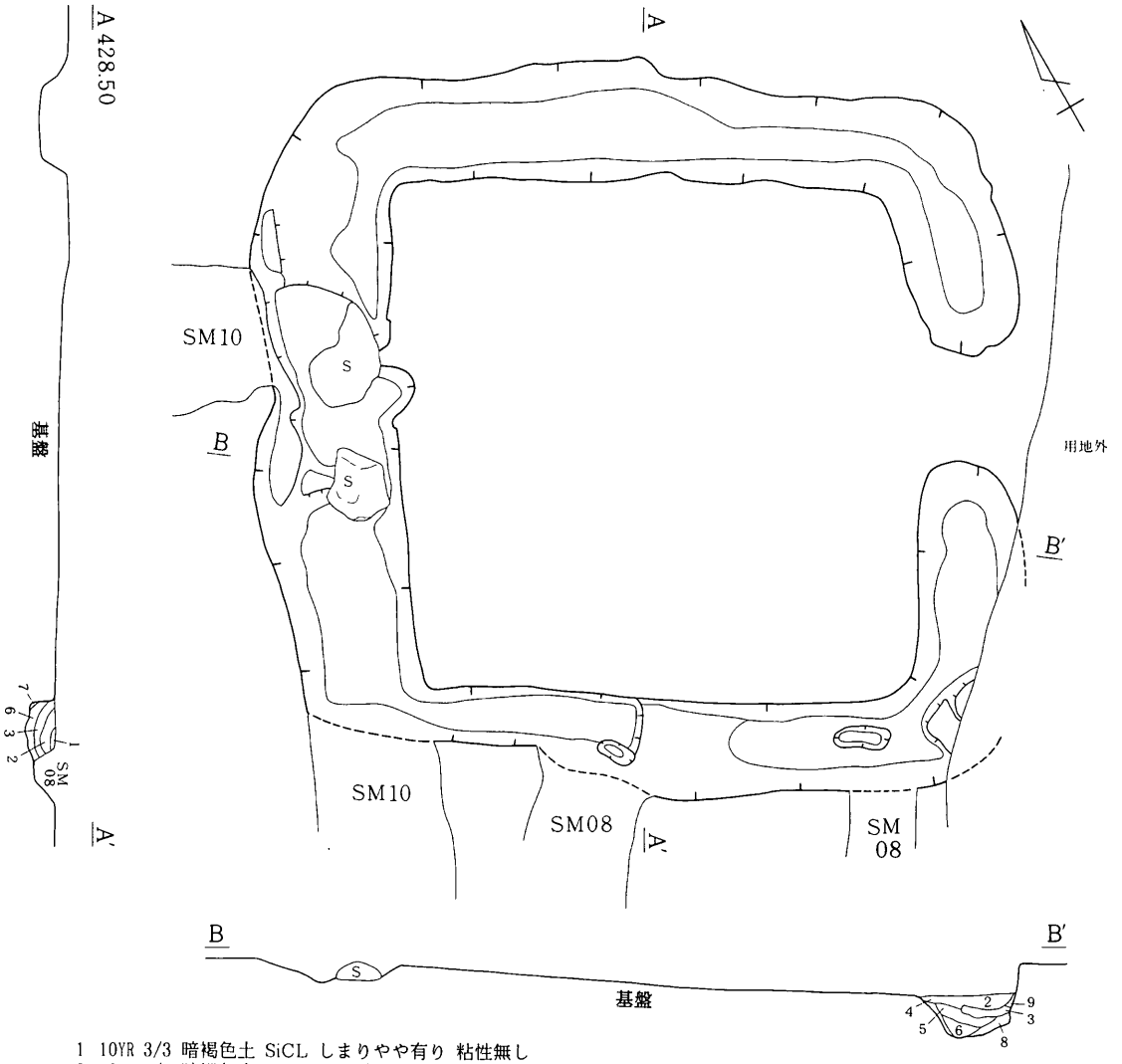
第7図　MGT　SK64　遺物出土状況



第8図　ＳＫ64　馬具出土位置図


B
B'
基盤
石製品（剣）
A'
S101
SK78
SK01
SK 02
用地外
C
C'
撹乱
1 2.5YR 6/2 灰黄色土 HC しまり有り 粘性かなり有り
2 5YR 6/1 灰色土 HC しまり有り 粘性かなり有り
3 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 LiC しまり有り 粘性かなり有り
4 7.5YR 4/6 褐色土 SiC しまり有り 粘性無し
2～3㎜の小礫を多量に含む
5 10YR 3/2 黒褐色土 SiLしまり有り 粘性無し
6 10YR 5/6 黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
7 10YR 3/3 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
礫を含む
8 10YR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
9 10YR 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
10 10YR 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
11 10YR 2/3 黒褐色土 SiCL しまり有り 粘性やや有り
12 10YR 4/4 褐色土 L しまり有り 粘性無し
13 10YR 3/4 褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
14 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
15 10YR 4/6 褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
16 10YR 3/3 暗褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し 炭化物を含む
17 ローム
18 10YR 4/2 灰黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
19 10YR 3/4 暗褐色土 SiCL しまり有り 粘性無し
20 10YR 5/6 黄褐色土 CL しまり有り 粘性無し
21 10YR 4/2 灰黄褐色土 SiC しまり有り 粘性無し
22 鉄分の沈殿層
23 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
24 10YR 4/4 褐色土 SiCL しまり有り 粘性無し
25 10YR 3/4 暗褐色土 SiCL しまり有り 粘性無し
26 10YR 3/3 暗褐色土 SiCL しまり有り 粘性無し
27 10YR 2/3 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
28 7.5YR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
29 10YR 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
30 10YR 5/6 黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
A 429.50
A'
0
4m

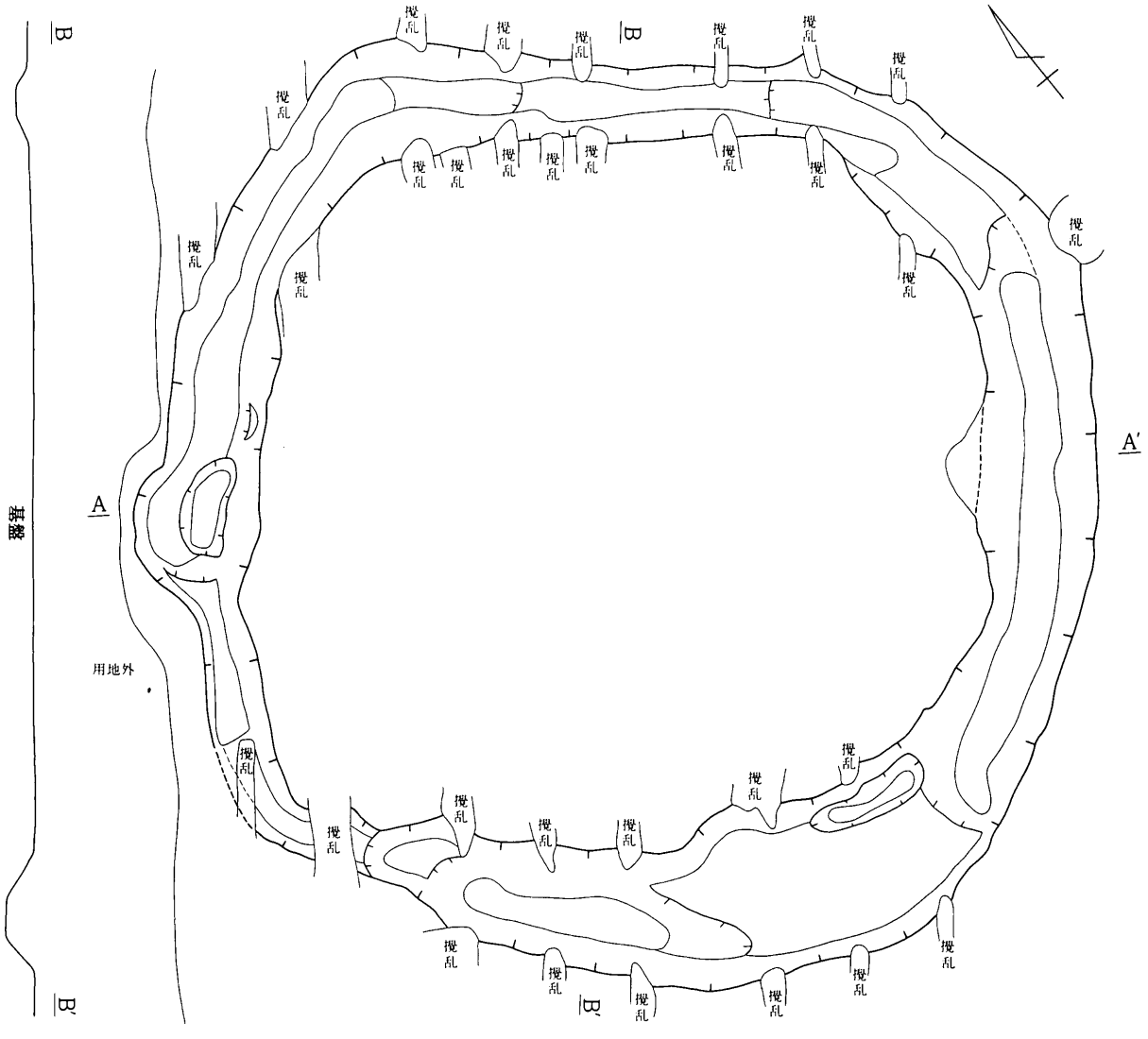
第9図 MGT SM04



1 10YR 3/3 暗褐色土 SiCL しまりやや有り 粘性無し
2 10YR 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 10mmの小礫を含む
3 10YR 3/2 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
4 10YR 3/2 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 炭化物を少量含む
5 10YR 4/4 にぶい黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
6 10YR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
7 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し 炭化物を少量含む
8 10YR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
9 10YR 4/2 灰黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し

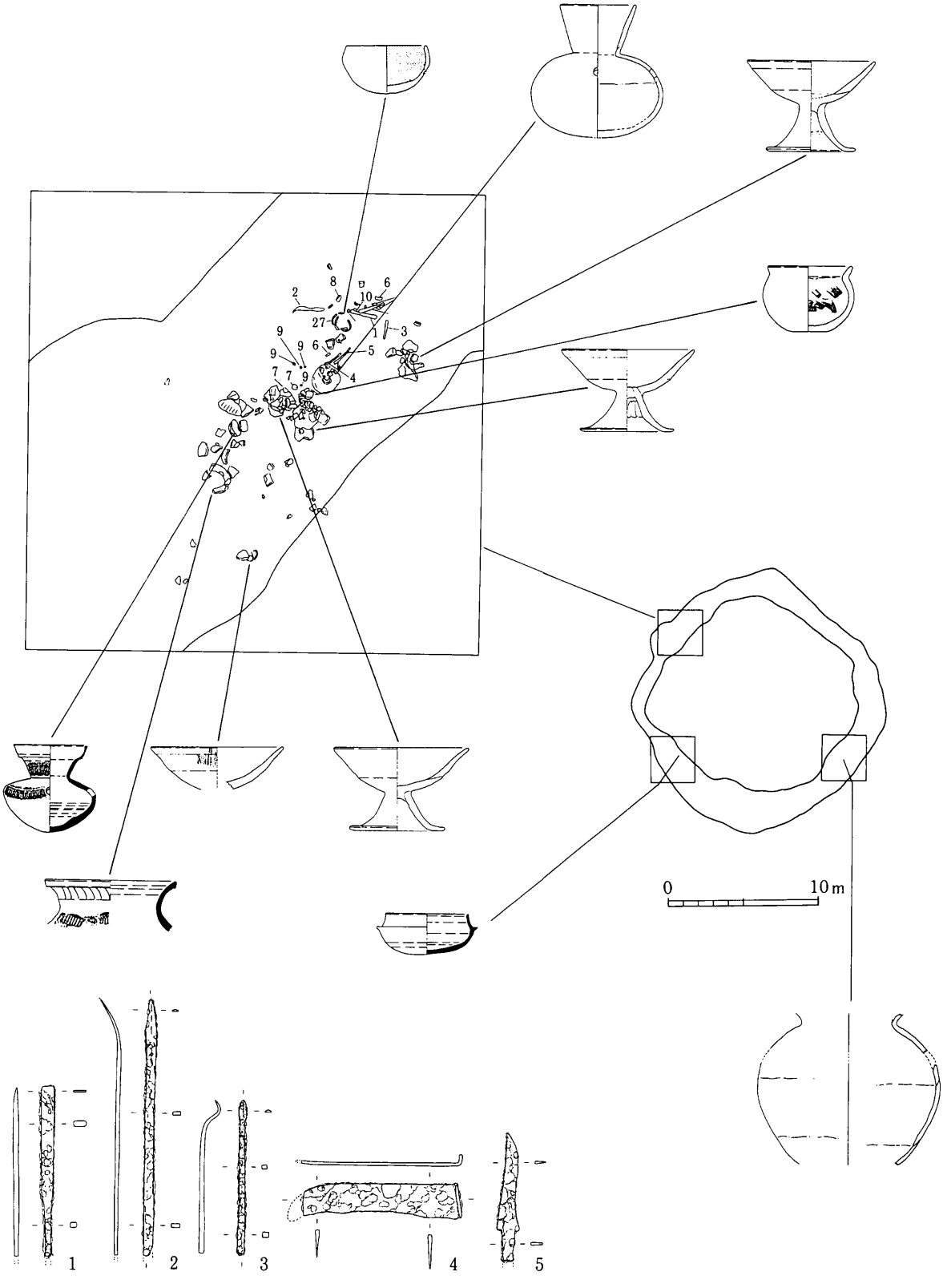
0 4m

第10図　ＭＧＴ　ＳＭ06



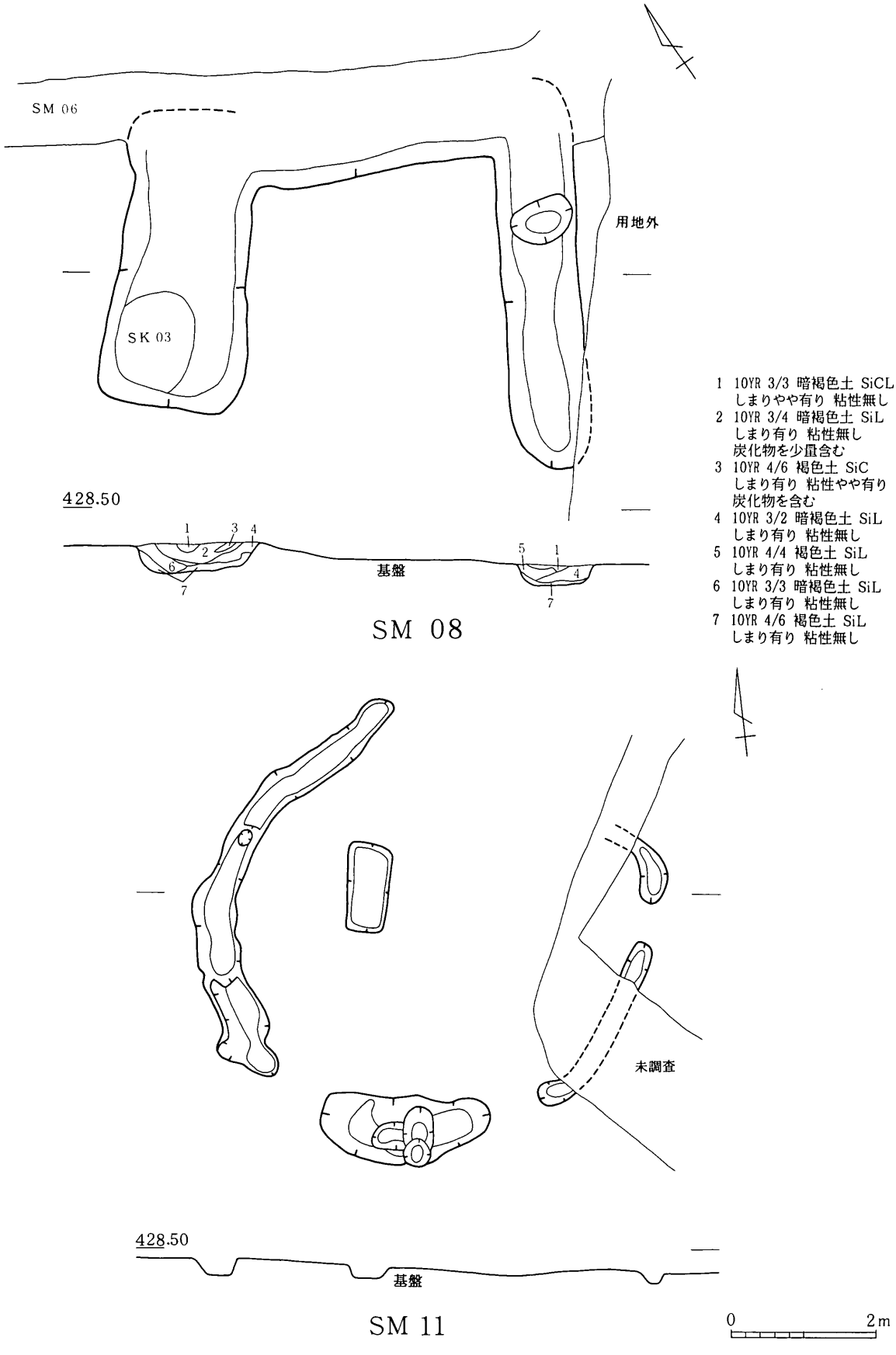
1 10YR 3/4 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
2 10YR 3/2 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
3 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
4 10YR 3/3 暗褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
5 10YR 2/3 黒褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
6 10YR 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し

第11図 MGT SM07

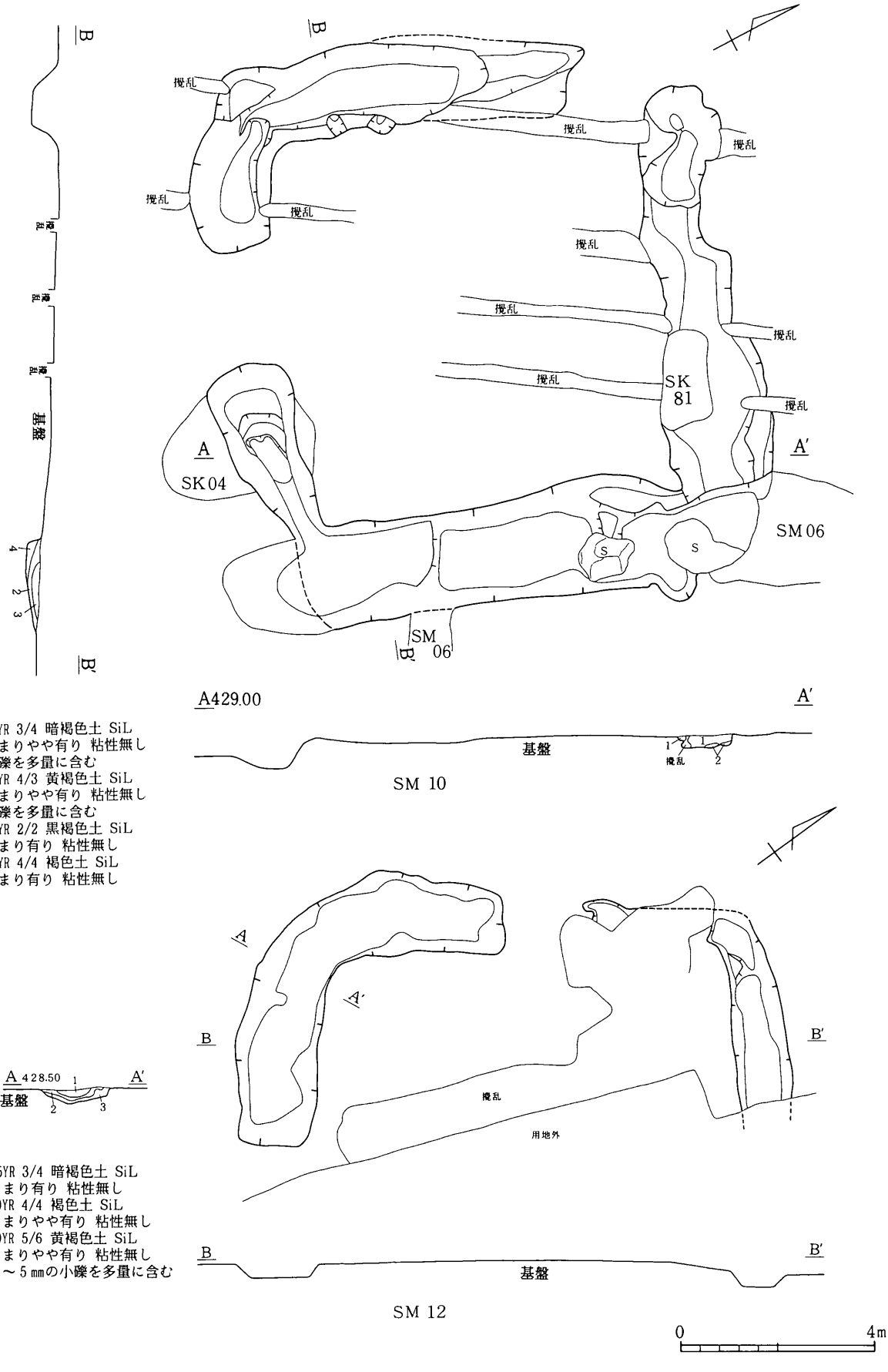


6　鉄鏃片　7　石製模造品(有孔円板)　8　勾玉　9　臼玉　10　管玉

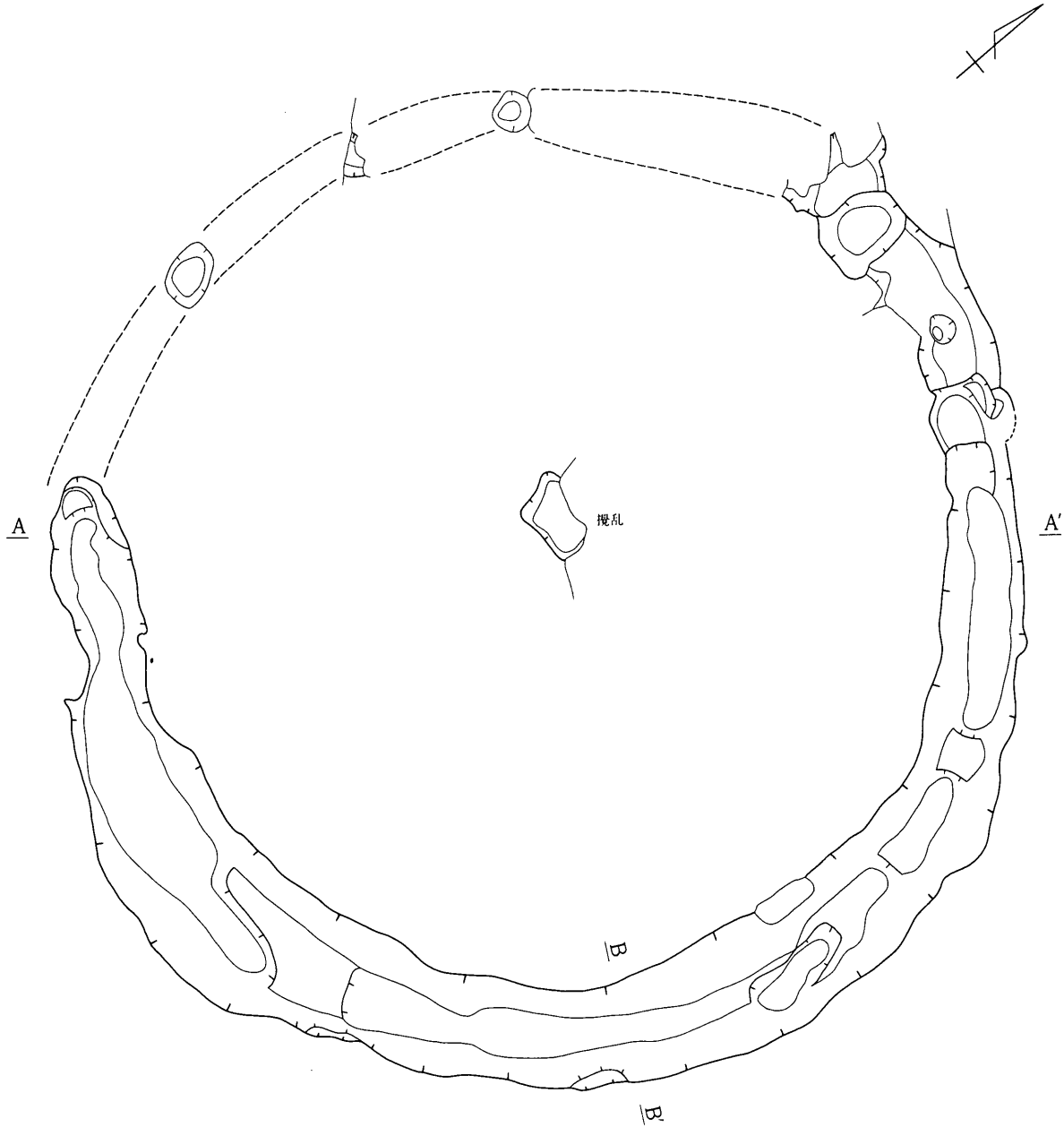
第12図　　ＭＧＴ　ＳＭ07　遺物出土状況

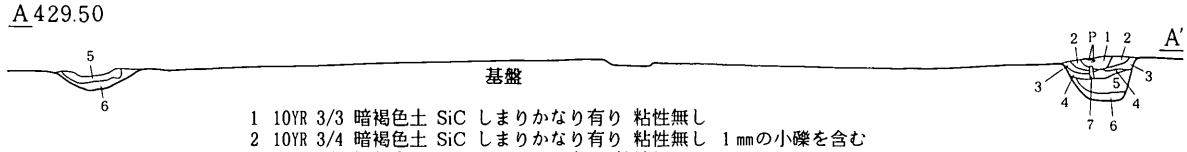


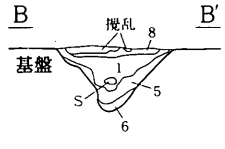
第13図　MGT　SM08　SM11



第14図 MGT SM10 SM12





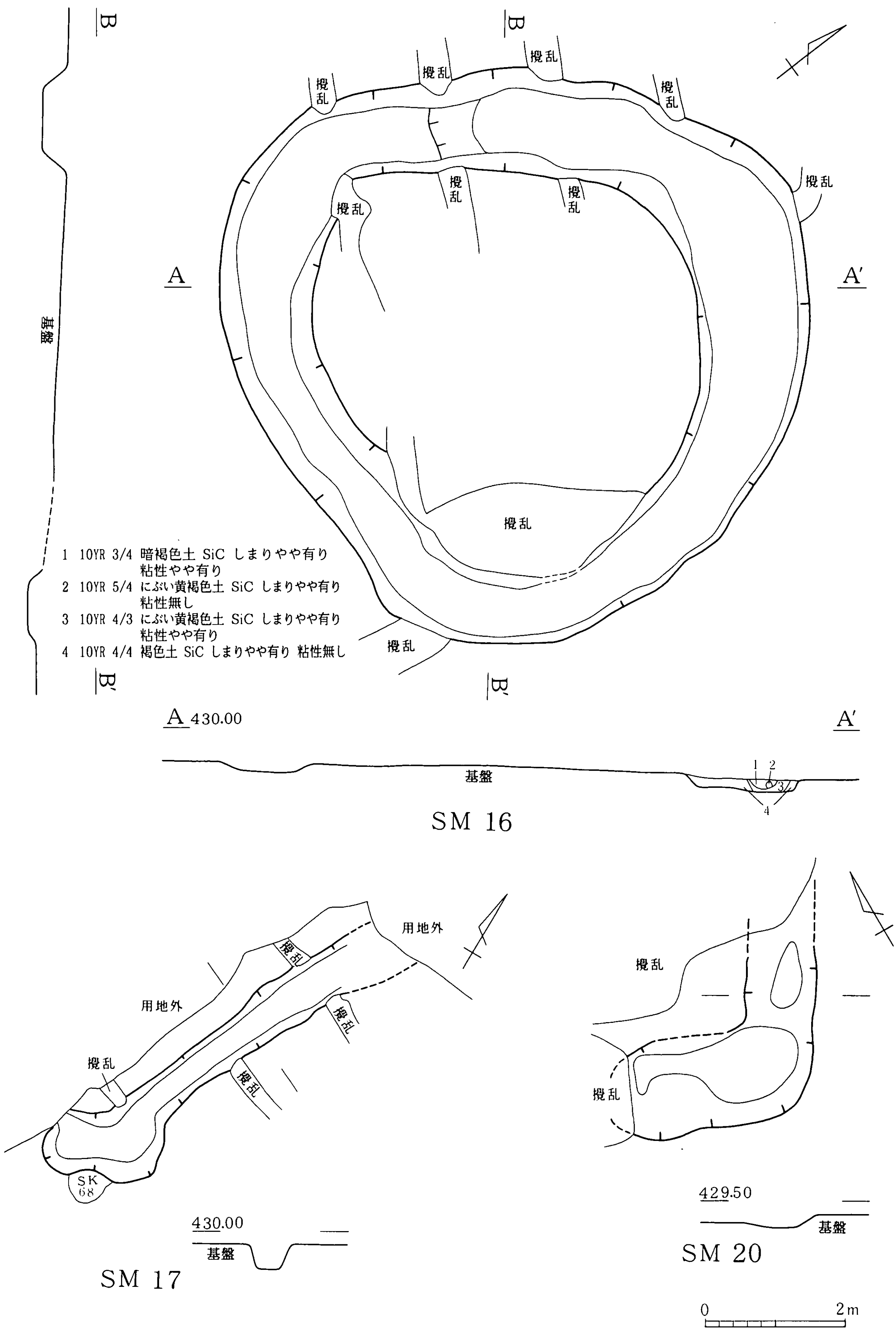


1 10YR 3/3 暗褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
2 10YR 3/4 暗褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し 1㎜の小礫を含む
3 10YR 4/4 褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
4 10YR 4/6 褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し
5 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiC しまりやや有り 粘性無し
6 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 SL しまり無し 粘性無し
7 10YR 2/3 黒褐色土 SiC しまりやや有り 粘性無し
8 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiC しまりかなり有り 粘性無し

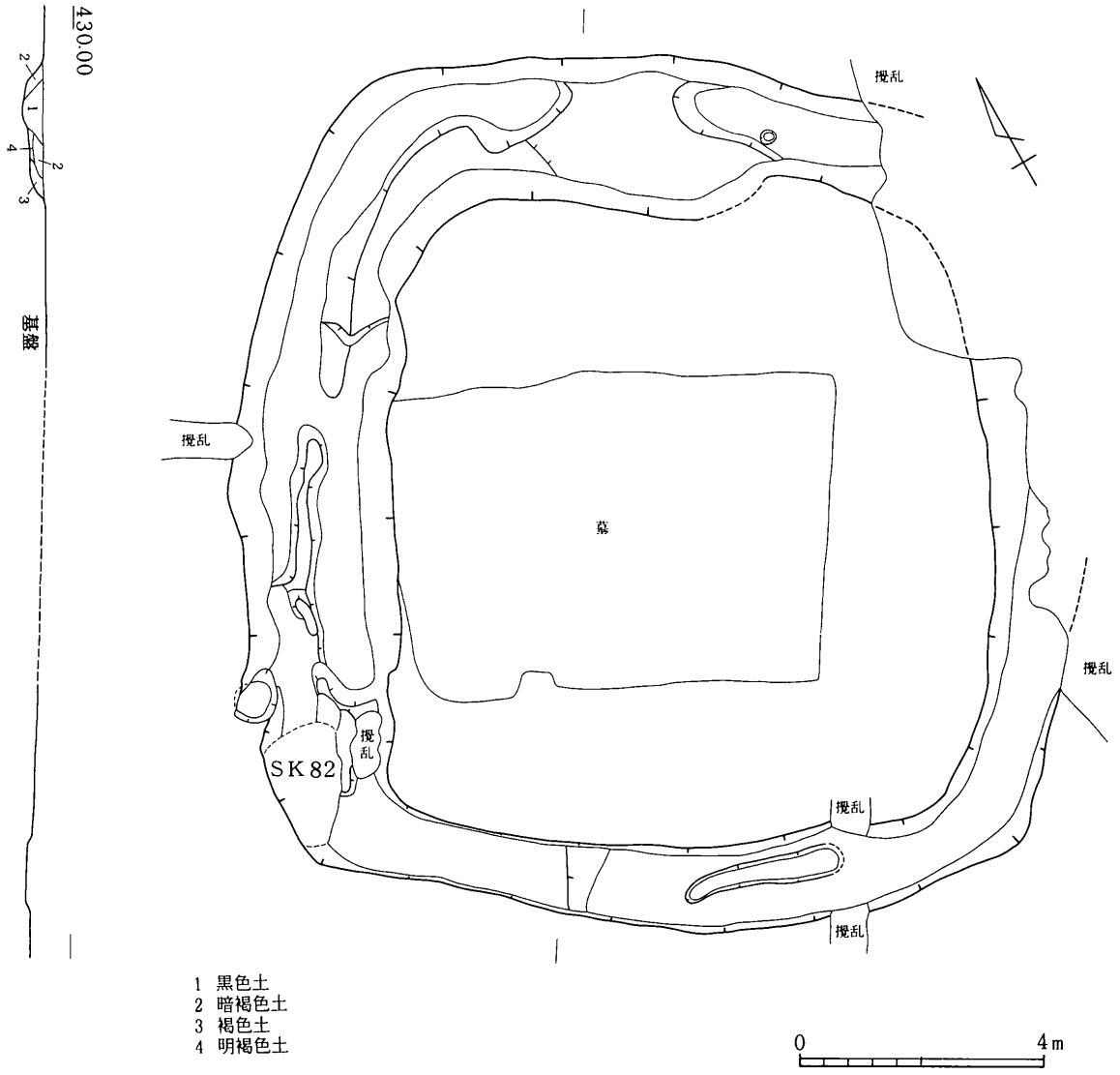
0 4m

第15図 MGT SM15

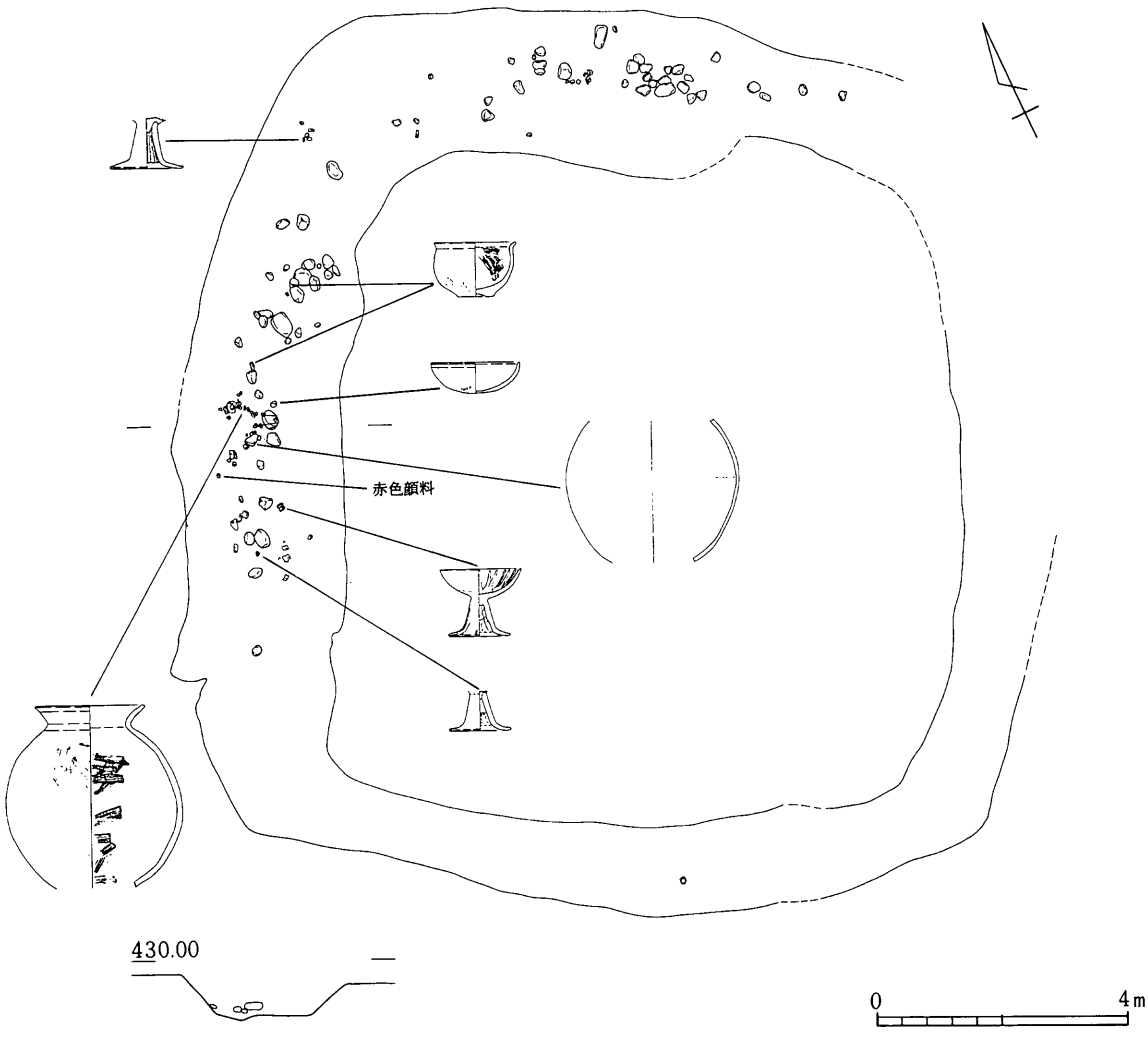
第16図　ＭＧＴ　ＳＭ15　遺物出土状況



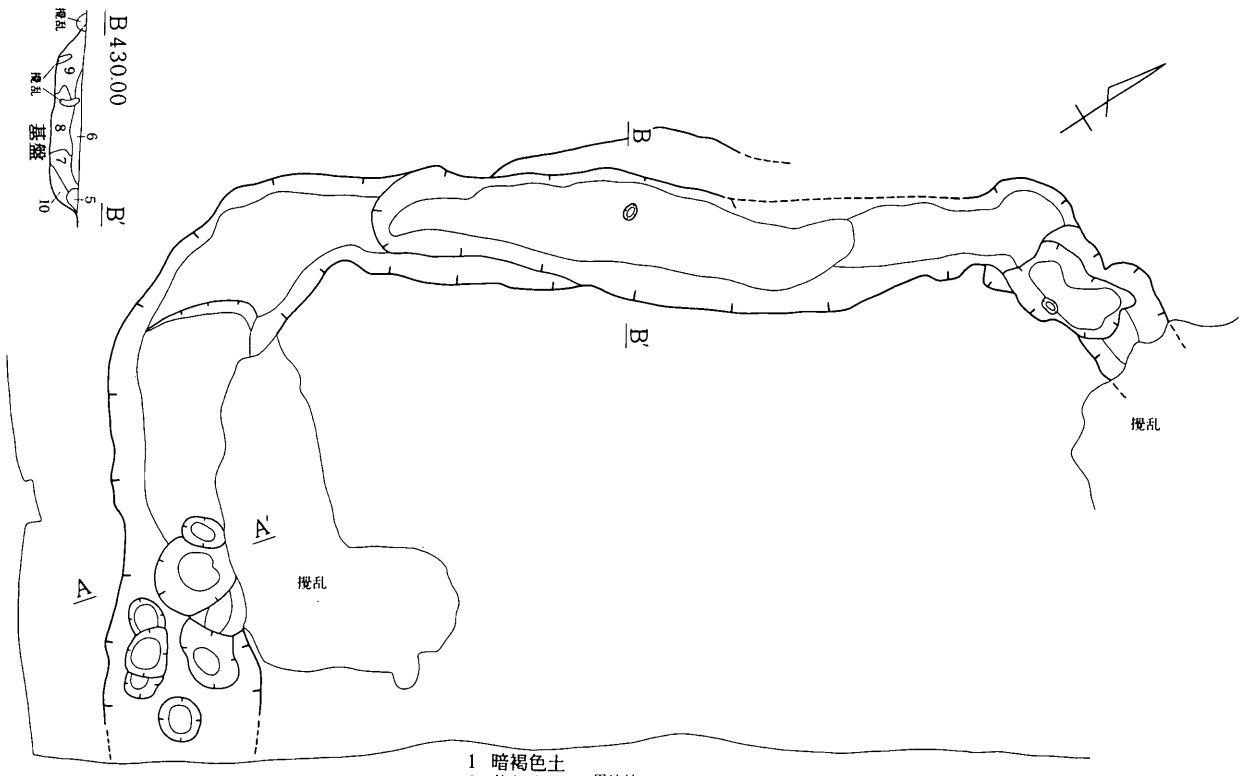
第17図　MGT　SM16　SM17　SM20



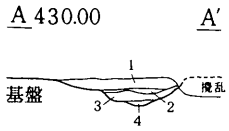
第18図　MGT　SM18

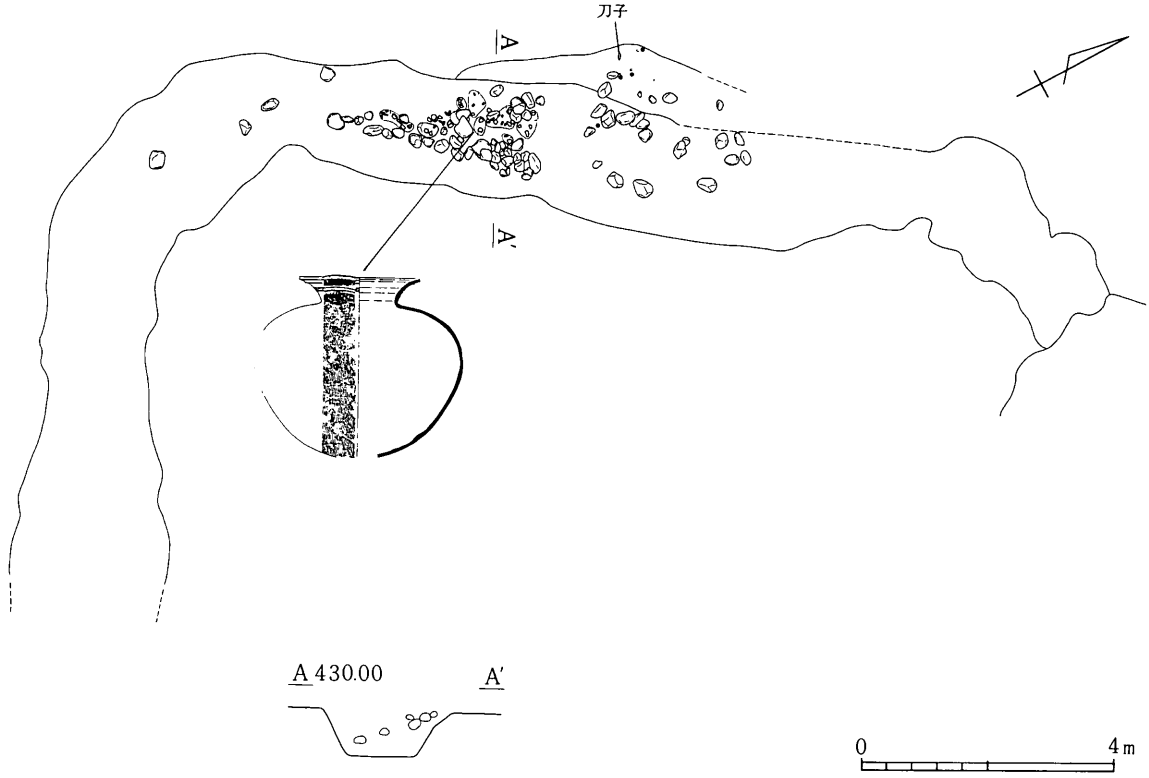


第19図　ＭＧＴ　ＳＭ18　遺物出土状況

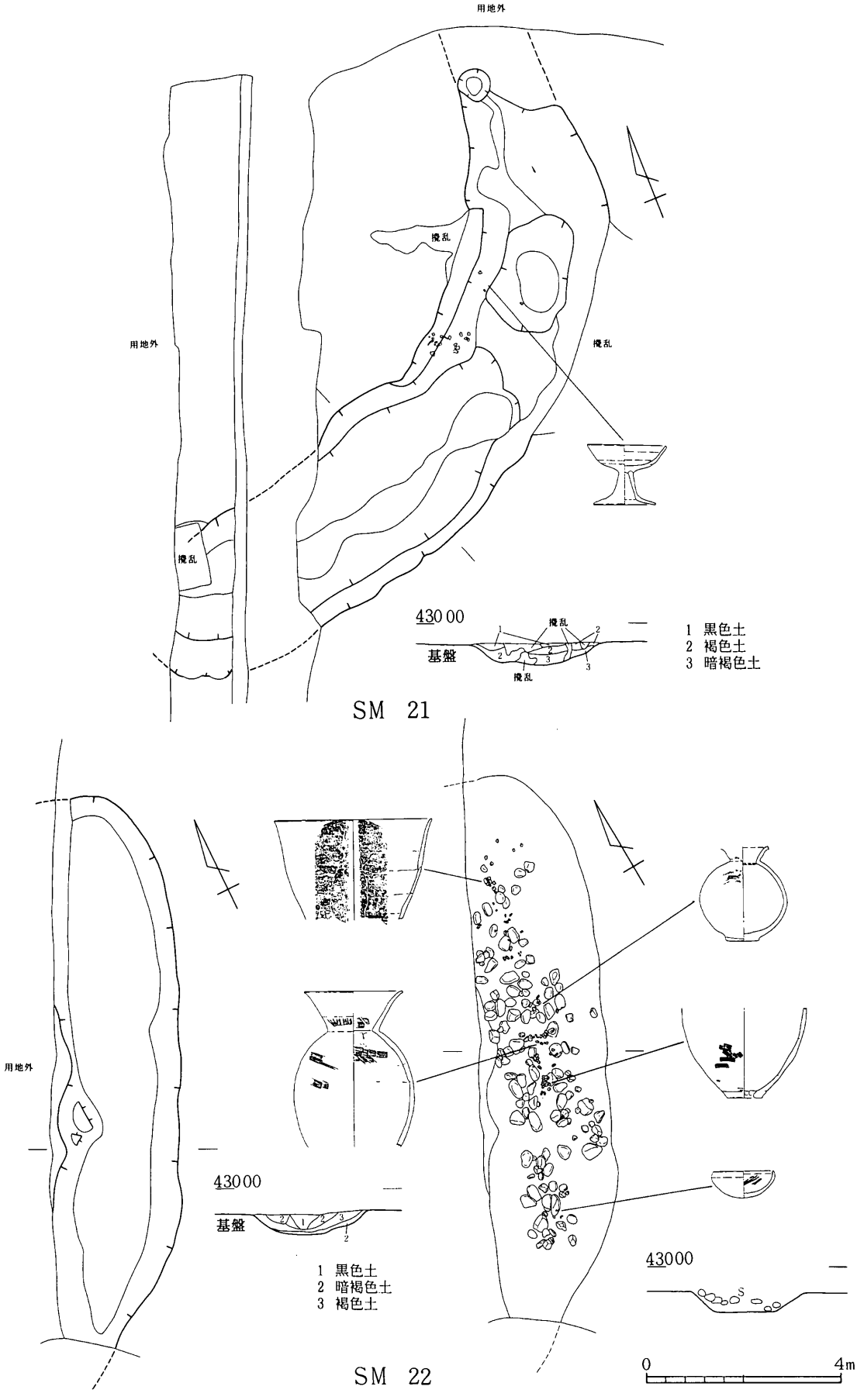


1 暗褐色土
2 黄色土　用地外
3 暗褐色土
4 黒色土
5 10YR 3/2 黒褐色土に4/4褐色土との混じる
6 10YR 2/2 黒褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
7 10YR 4/4 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し
8 10YR 3/4 暗褐色土 SiL しまりやや有り 粘性無し
9 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 SiL しまりやや有り 粘性やや有り
10 10YR 4/6 褐色土 SiL しまり有り 粘性無し

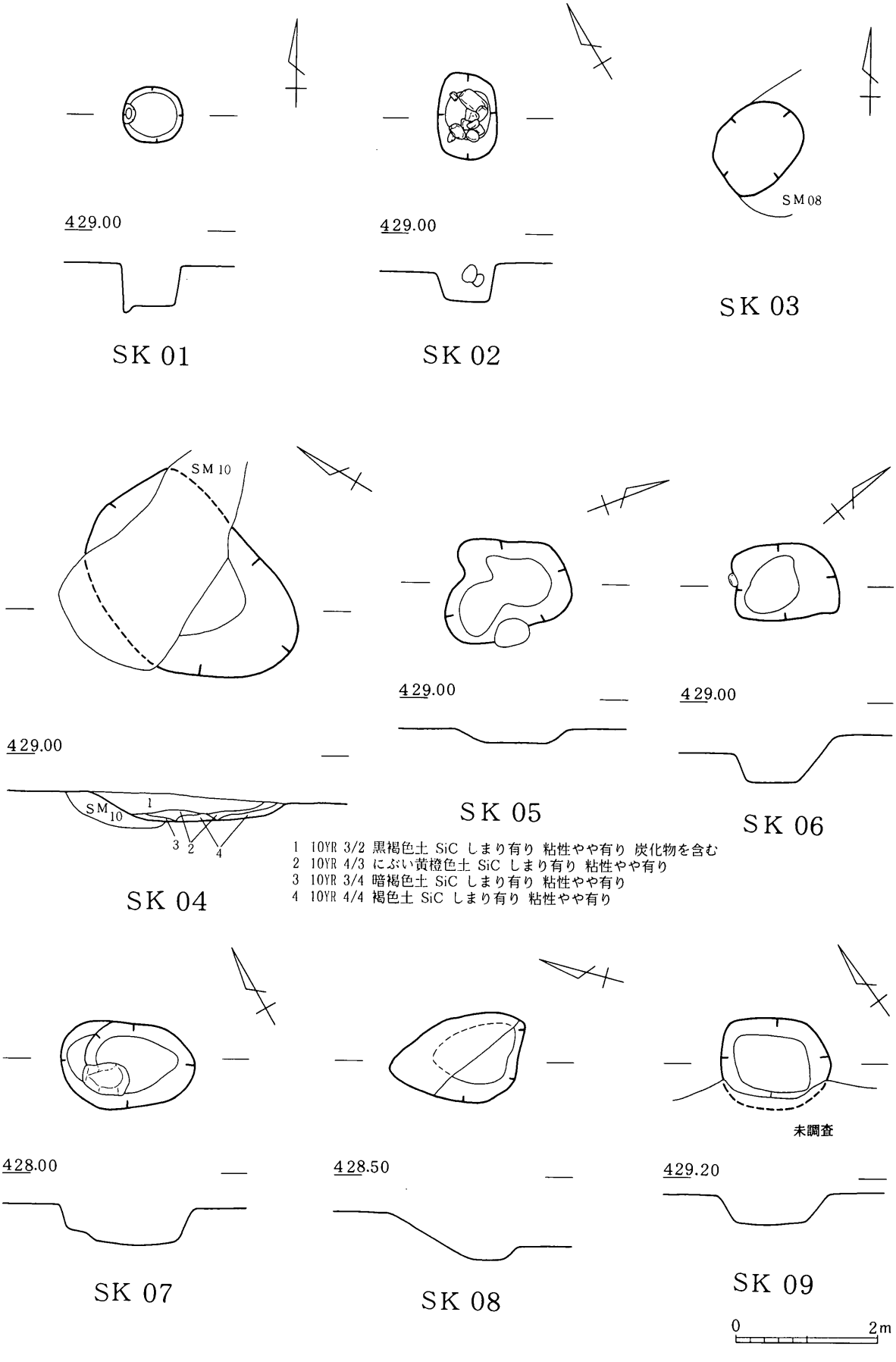




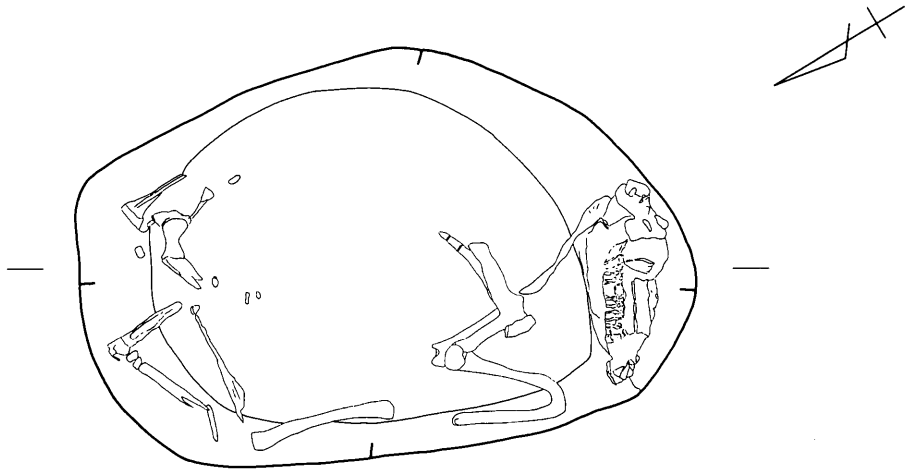
第20図　MGT　SM19

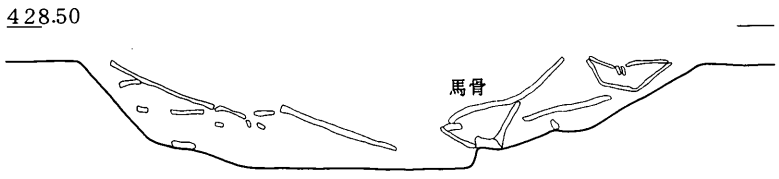


第21図 MGT SM21 SM22

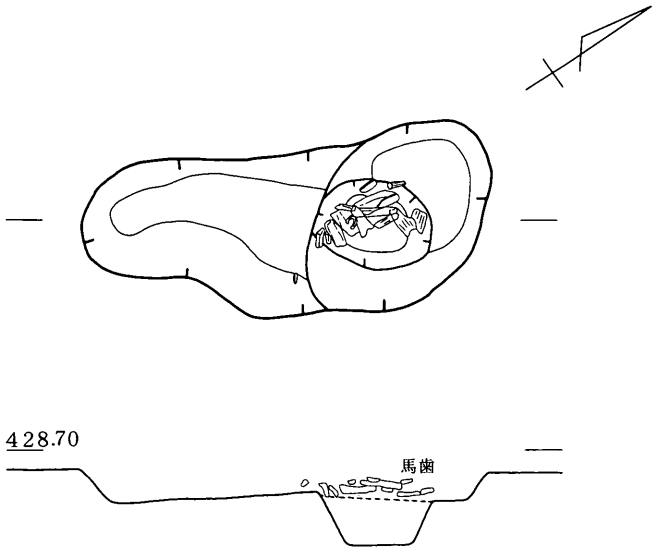


第22図 MGT SK01 SK02 SK03 SK04 SK05 SK06 SK07 SK08 SK09

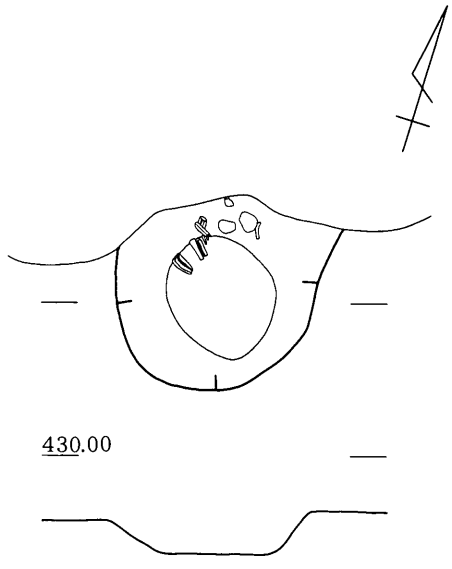




SK 10



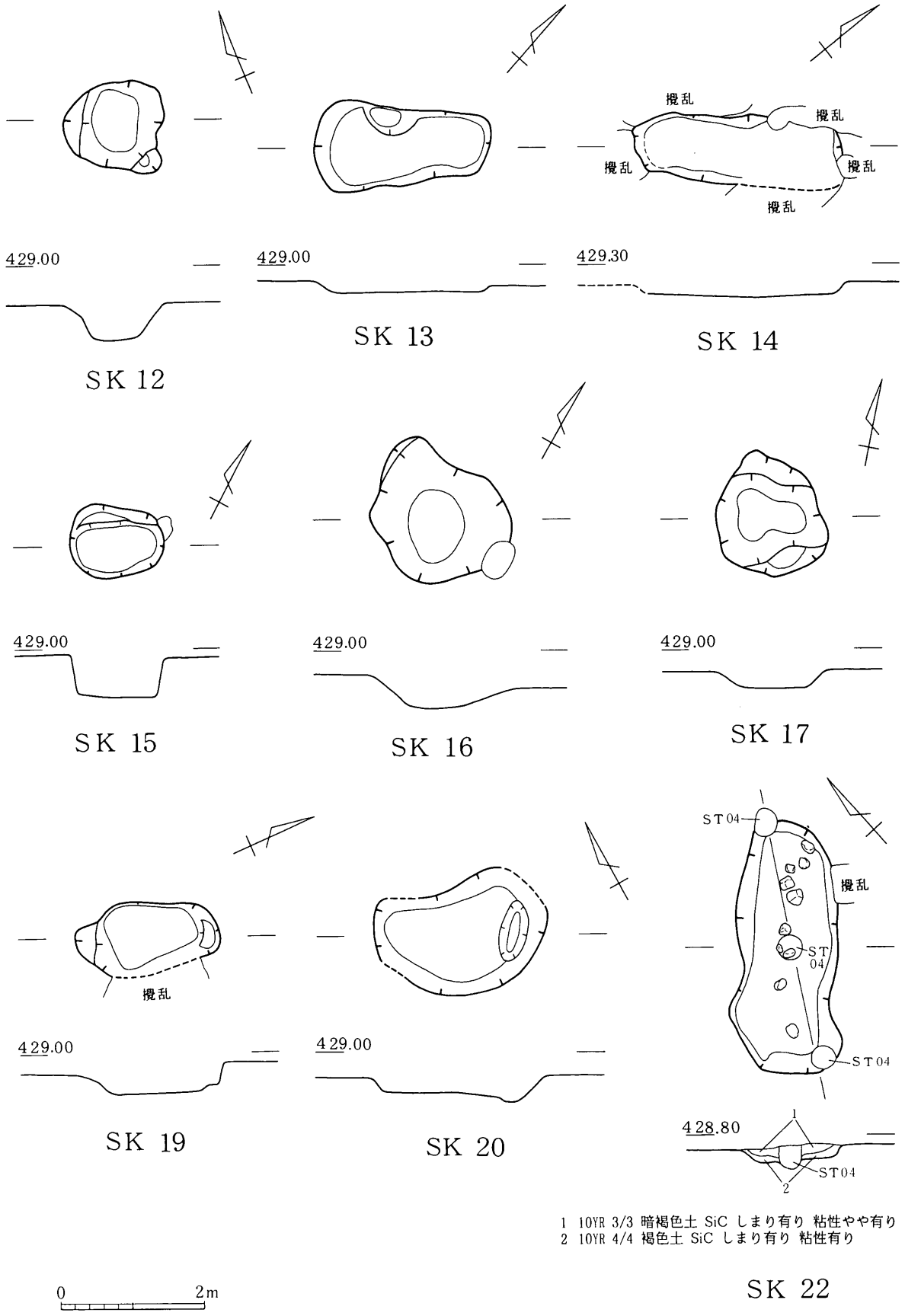
SK 11



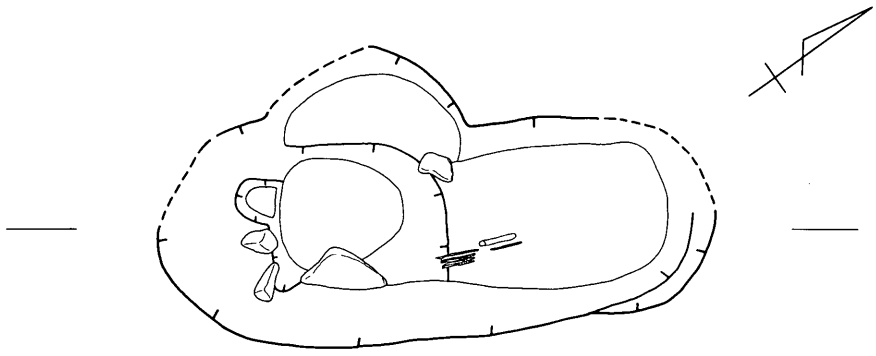
SK 68

0 1m

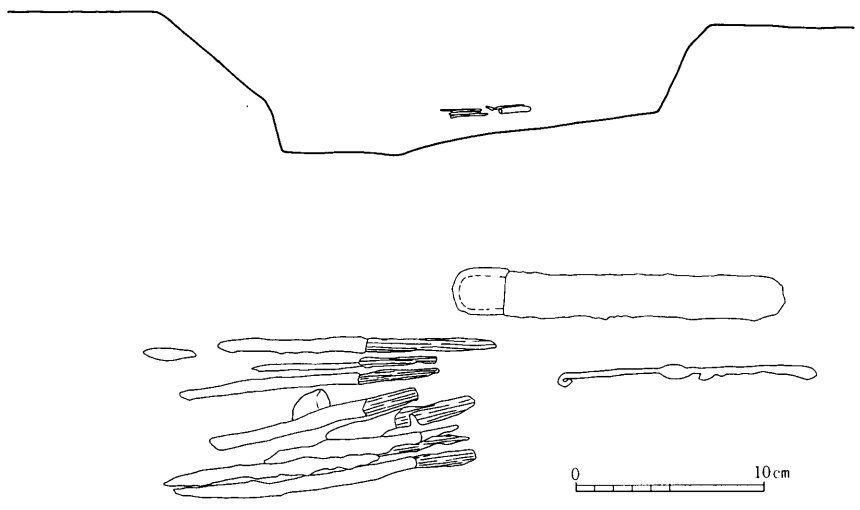
第23図　MGT　SK10　SK11　SK68



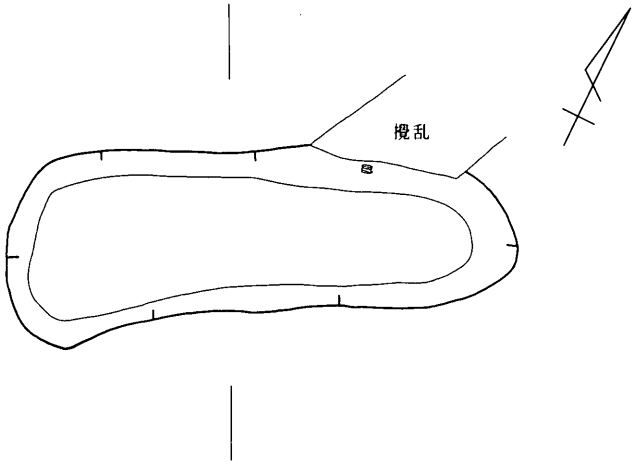
第24図 MGT SK12 SK13 SK14 SK15 SK16 SK17 SK19 SK20 SK22



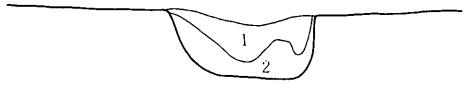
429.00



SK 18

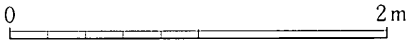


428.70

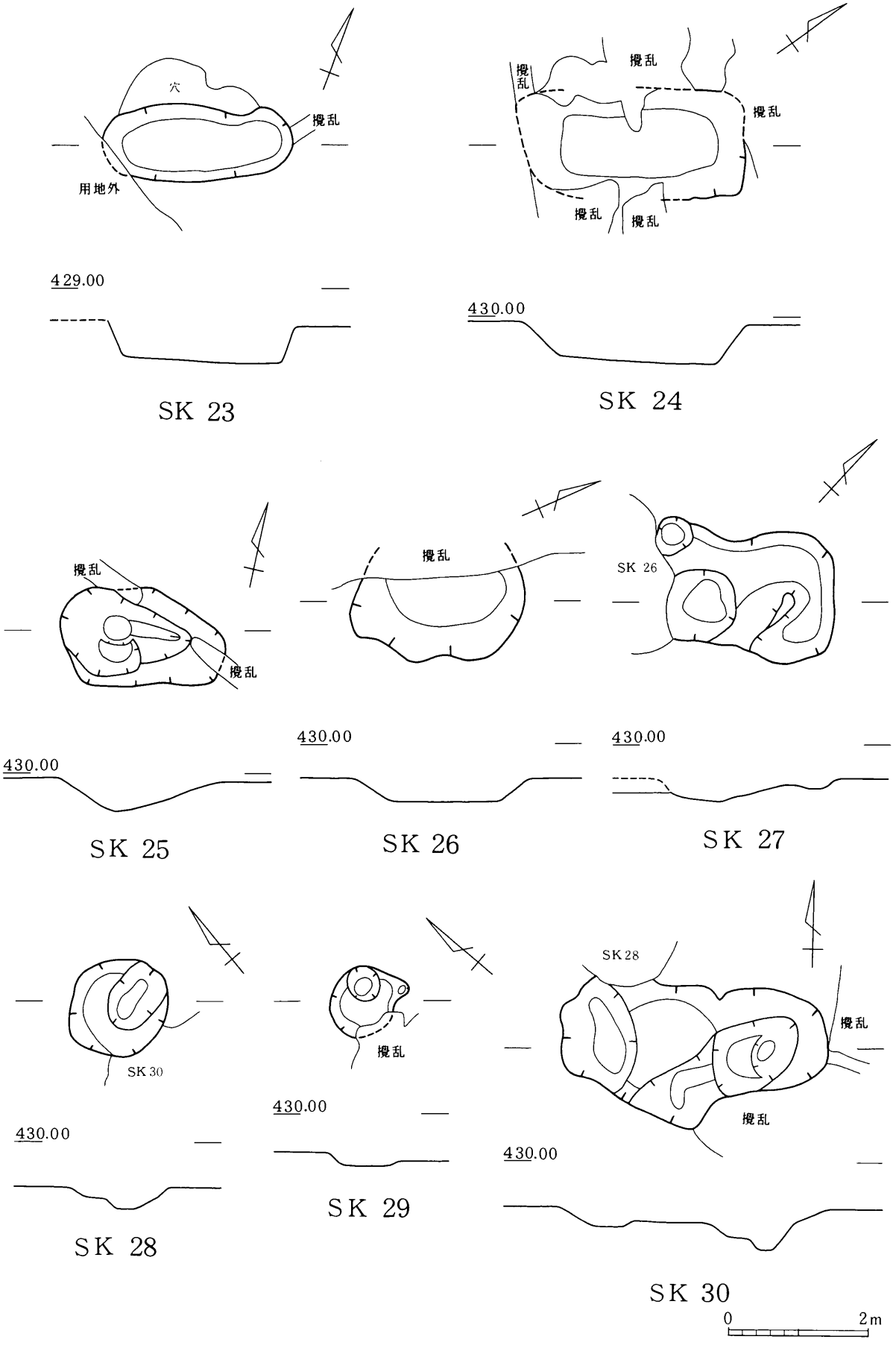


1 黒色土 シルト
2 褐色土 砂質

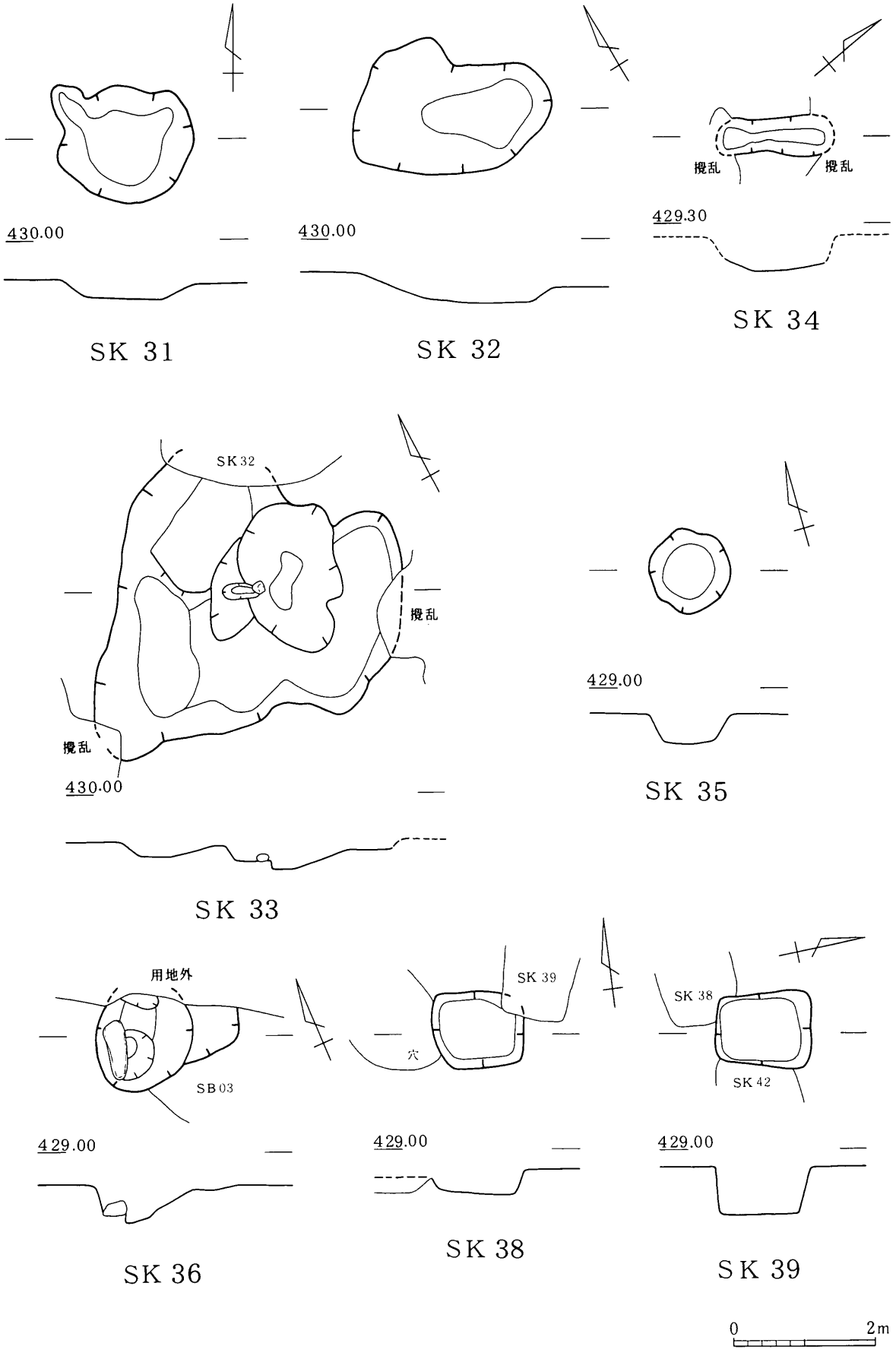
SK 21



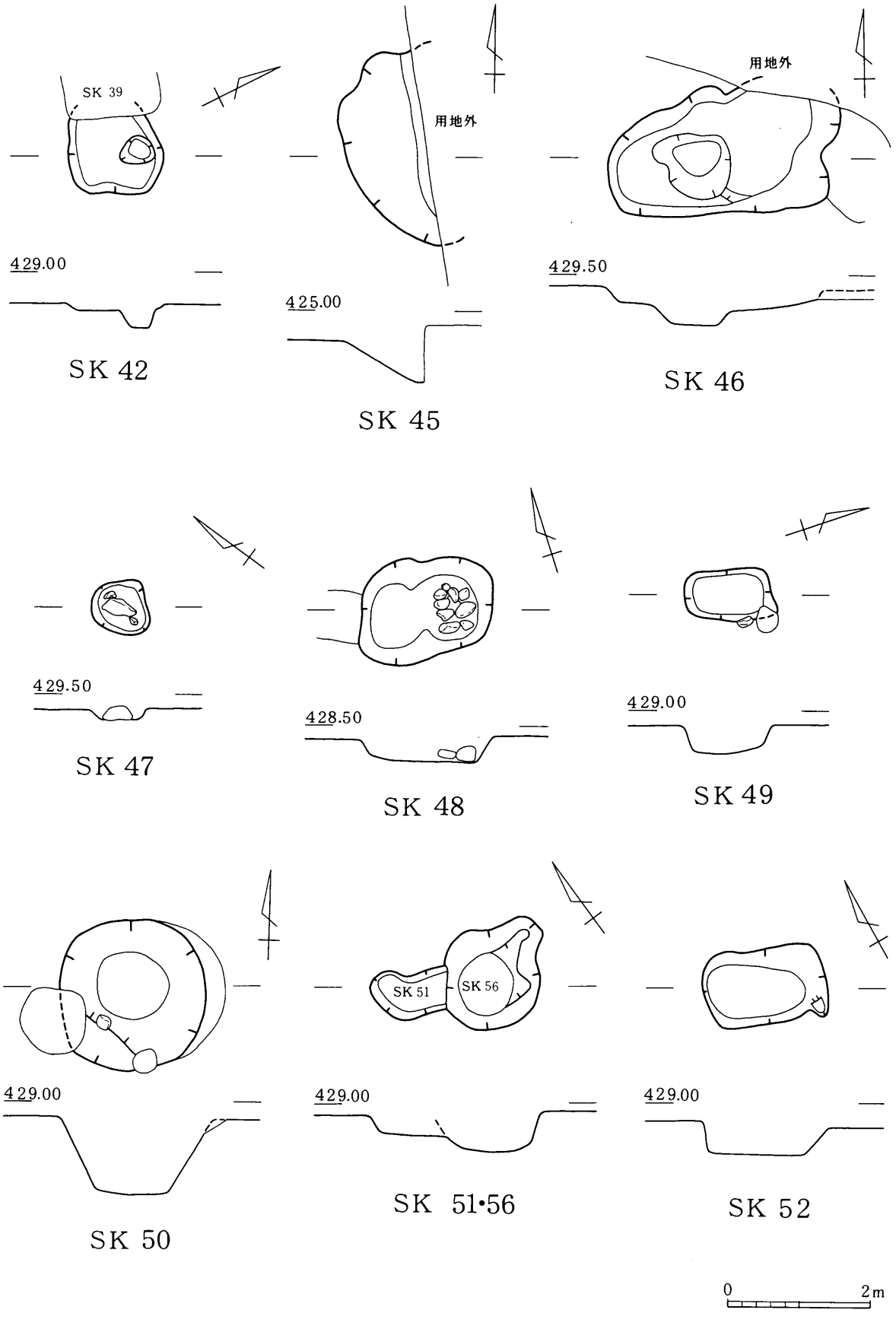
第25図 MGT SK18 SK21



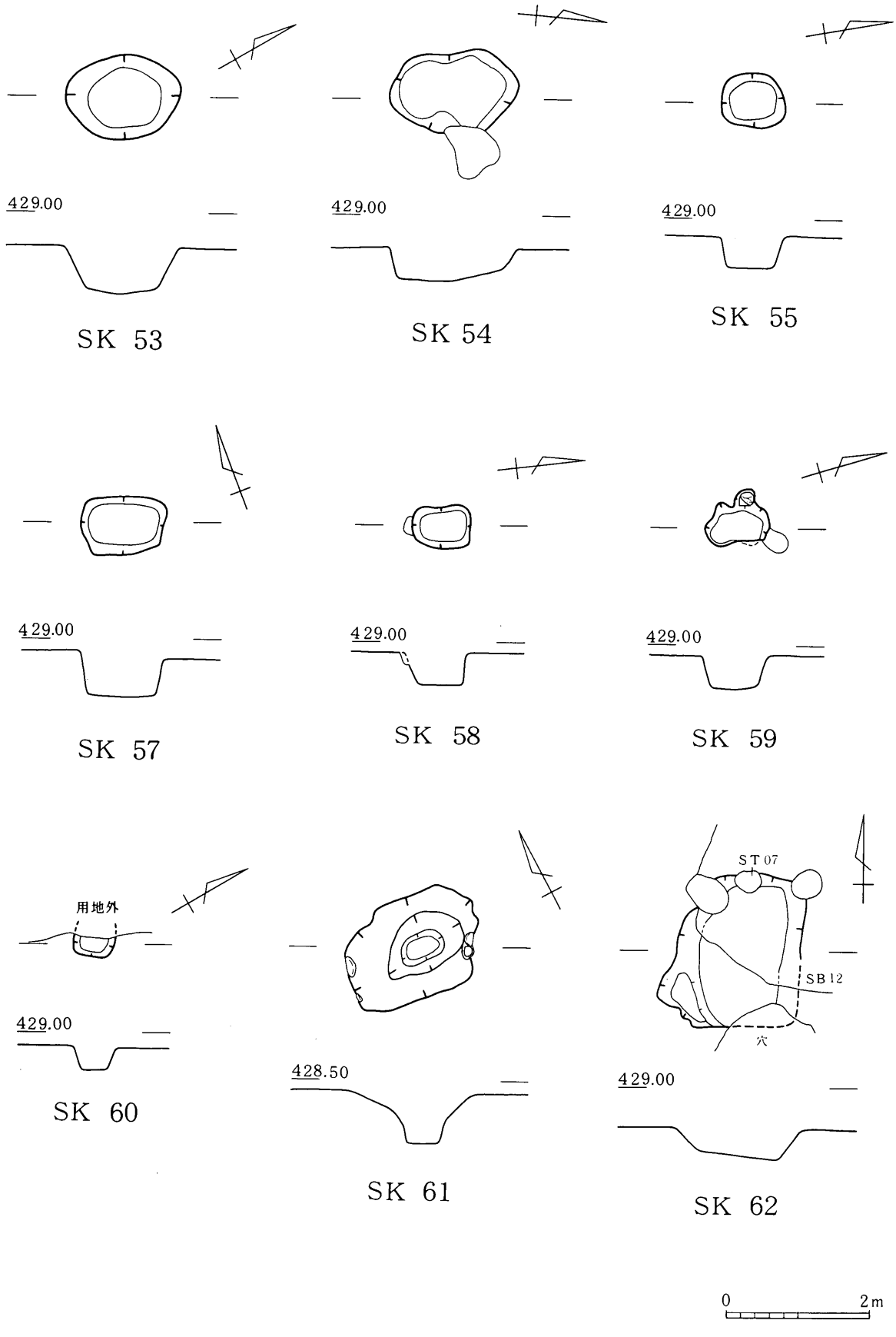
第26図　MGT　SK23　SK24　SK25　SK26　SK27　SK28　SK29　SK30



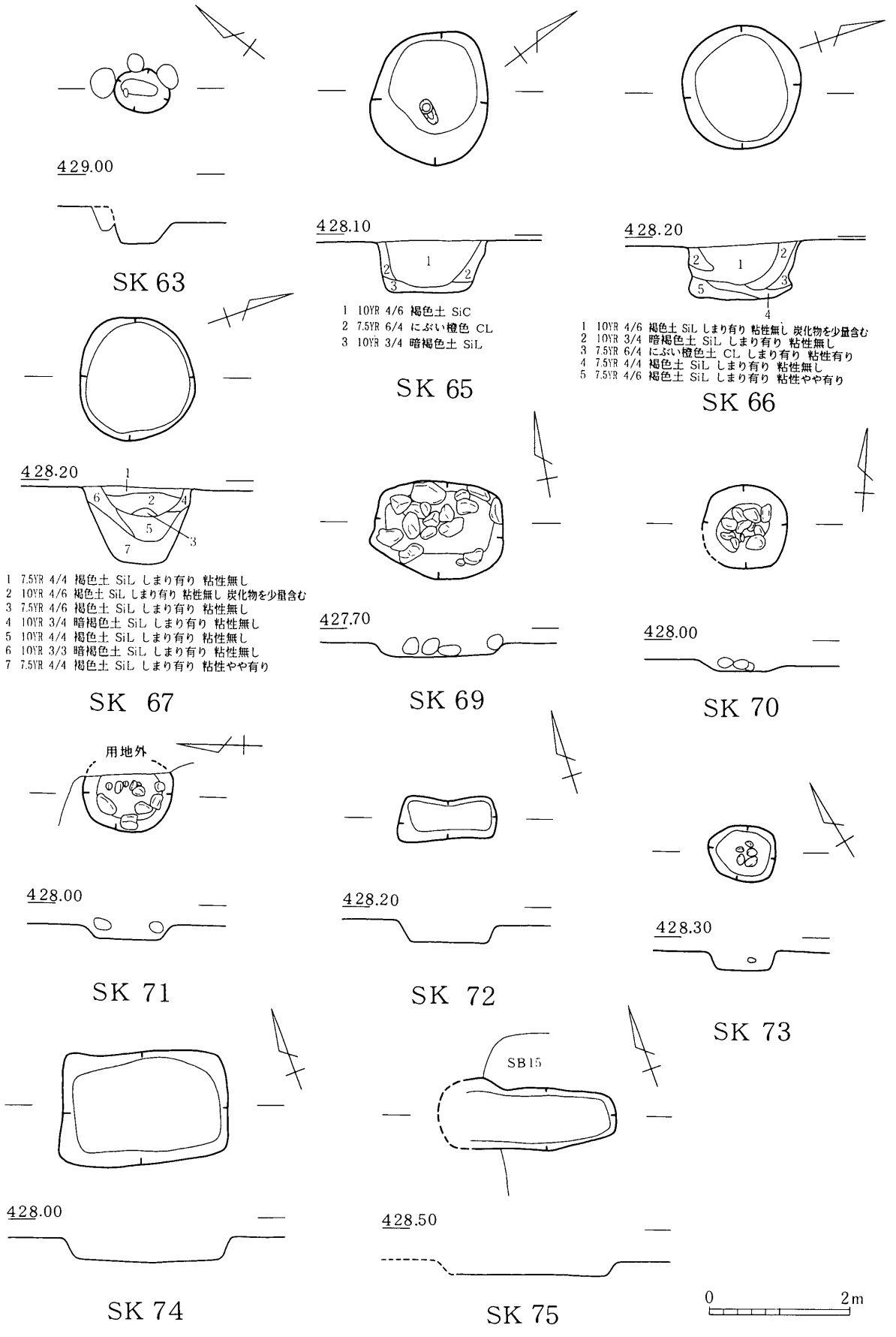
第27図　MGT　SK31　SK32　SK33　SK34　SK35　SK36　SK38　SK39



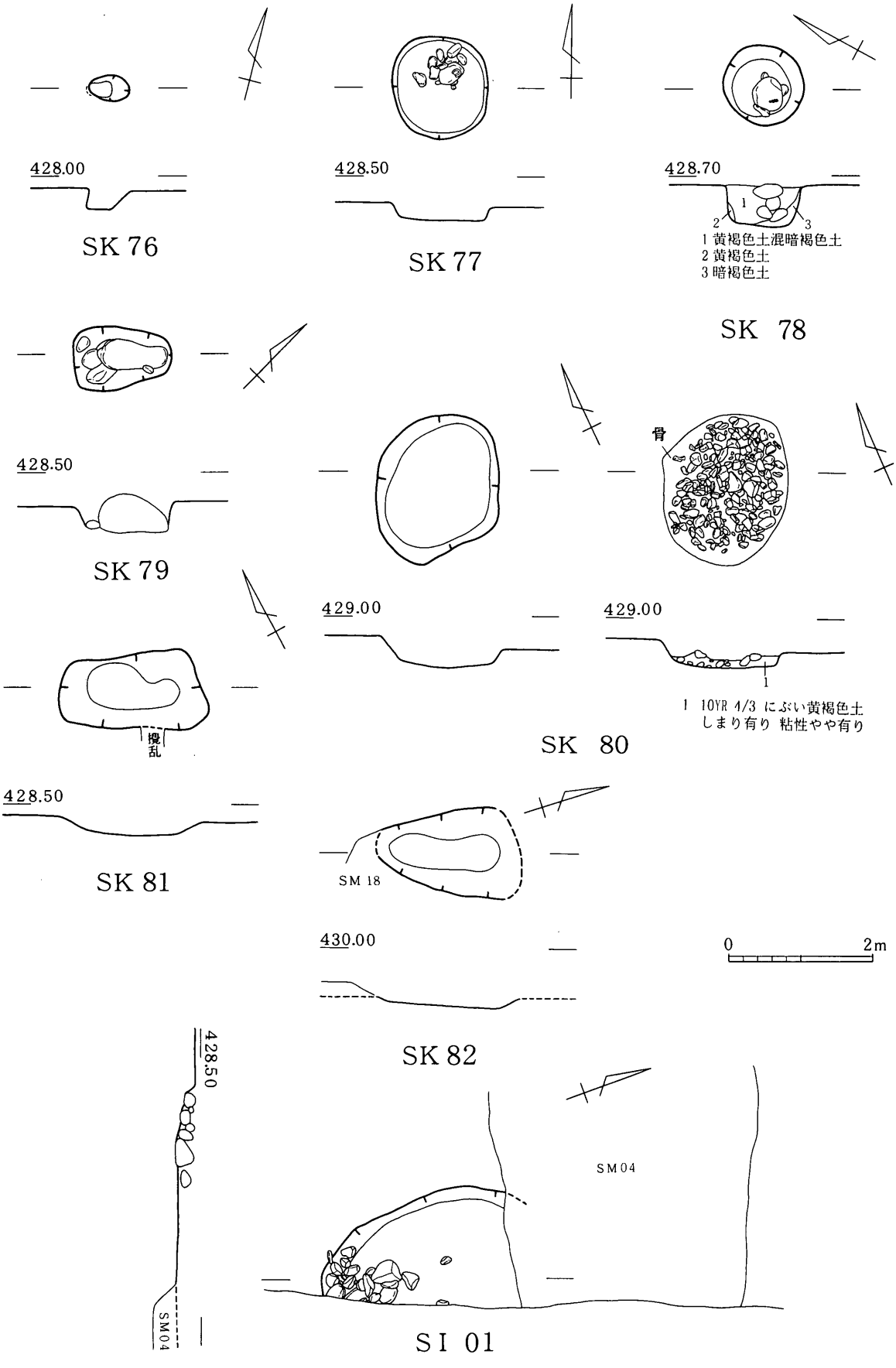
第28図　MGT　SK42　SK45　SK46　SK47　SK48　SK49　SK50　SK51　SK52　SK56



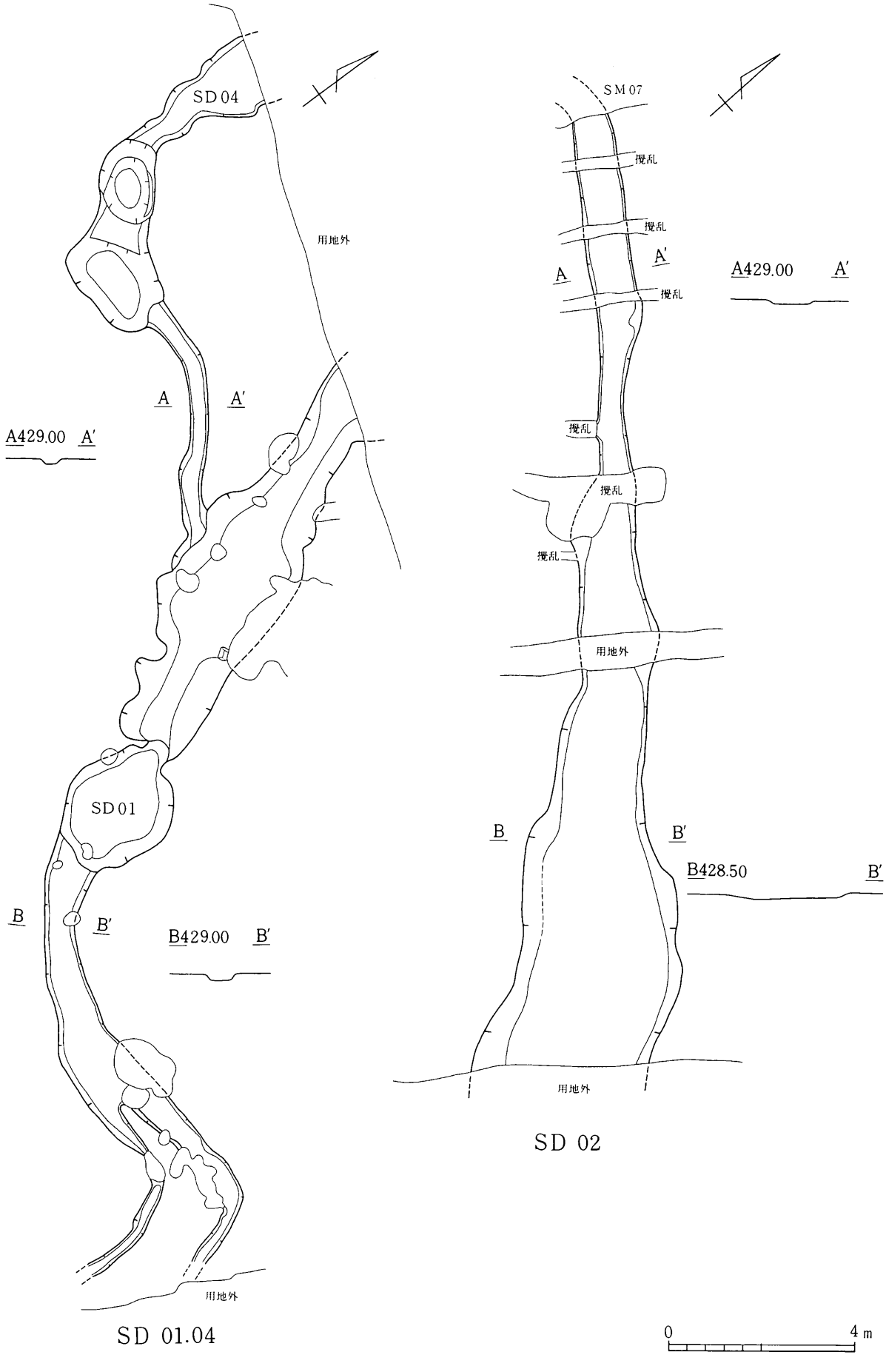
第29図　MGT　SK53　SK54　SK55　SK57　SK58　SK59　SK60　SK61　SK62



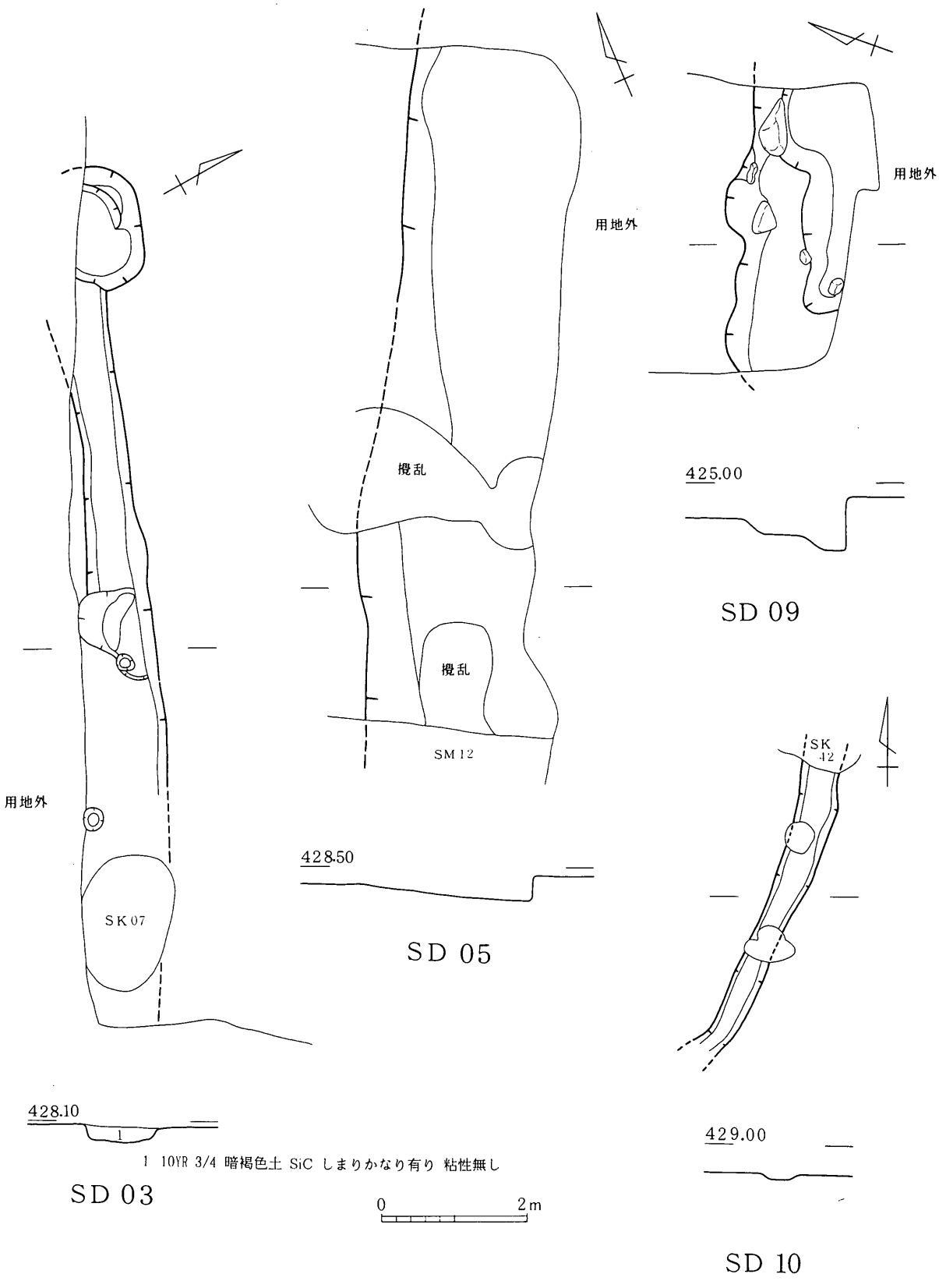
第30図　MGT　SK63　SK65　SK66　SK67　SK69　SK70
SK71　SK72　SK73　SK74　SK75



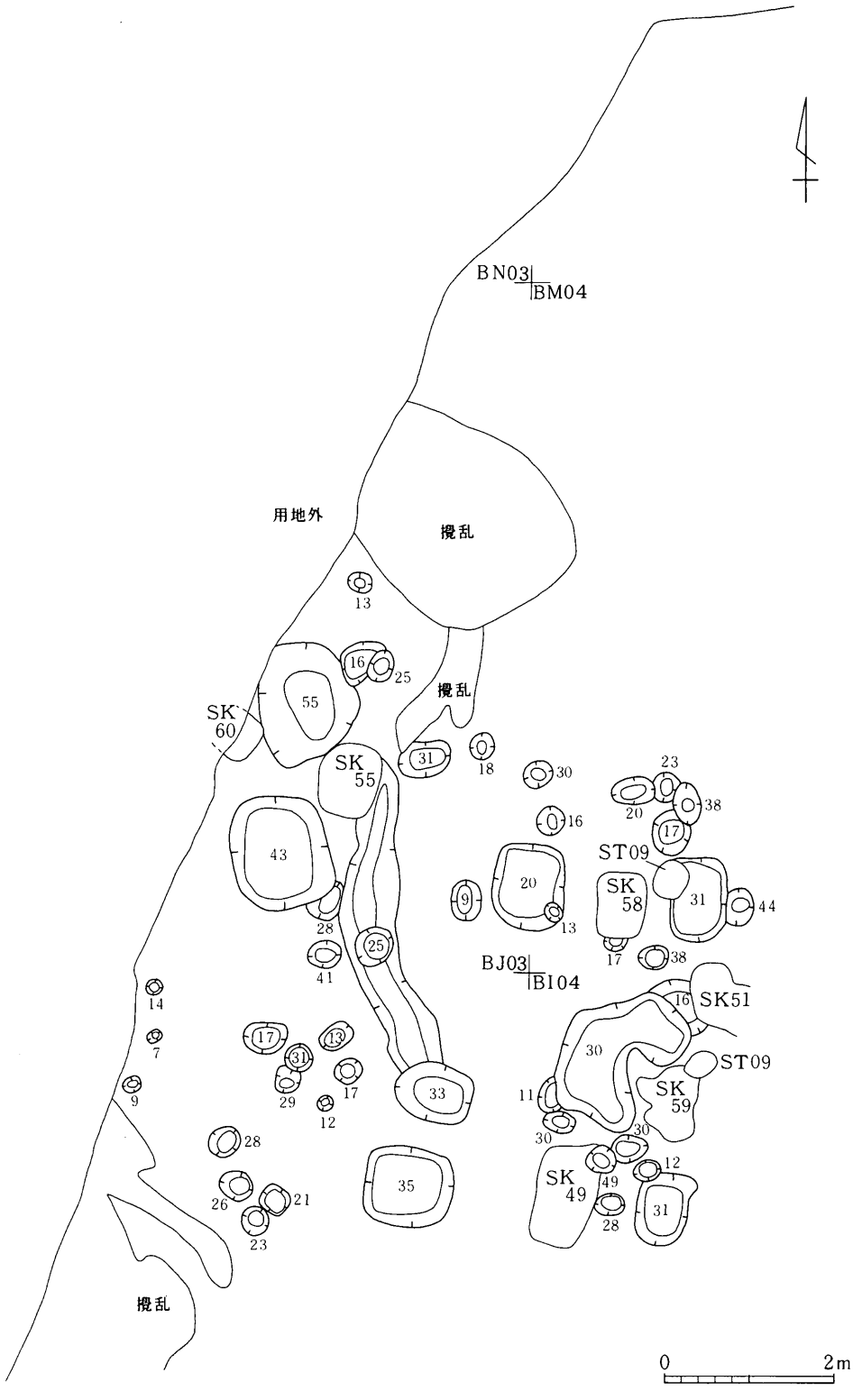
第31図 MGT SK76 SK77 SK78 SK79 SK80 SK81 SK82 SI01



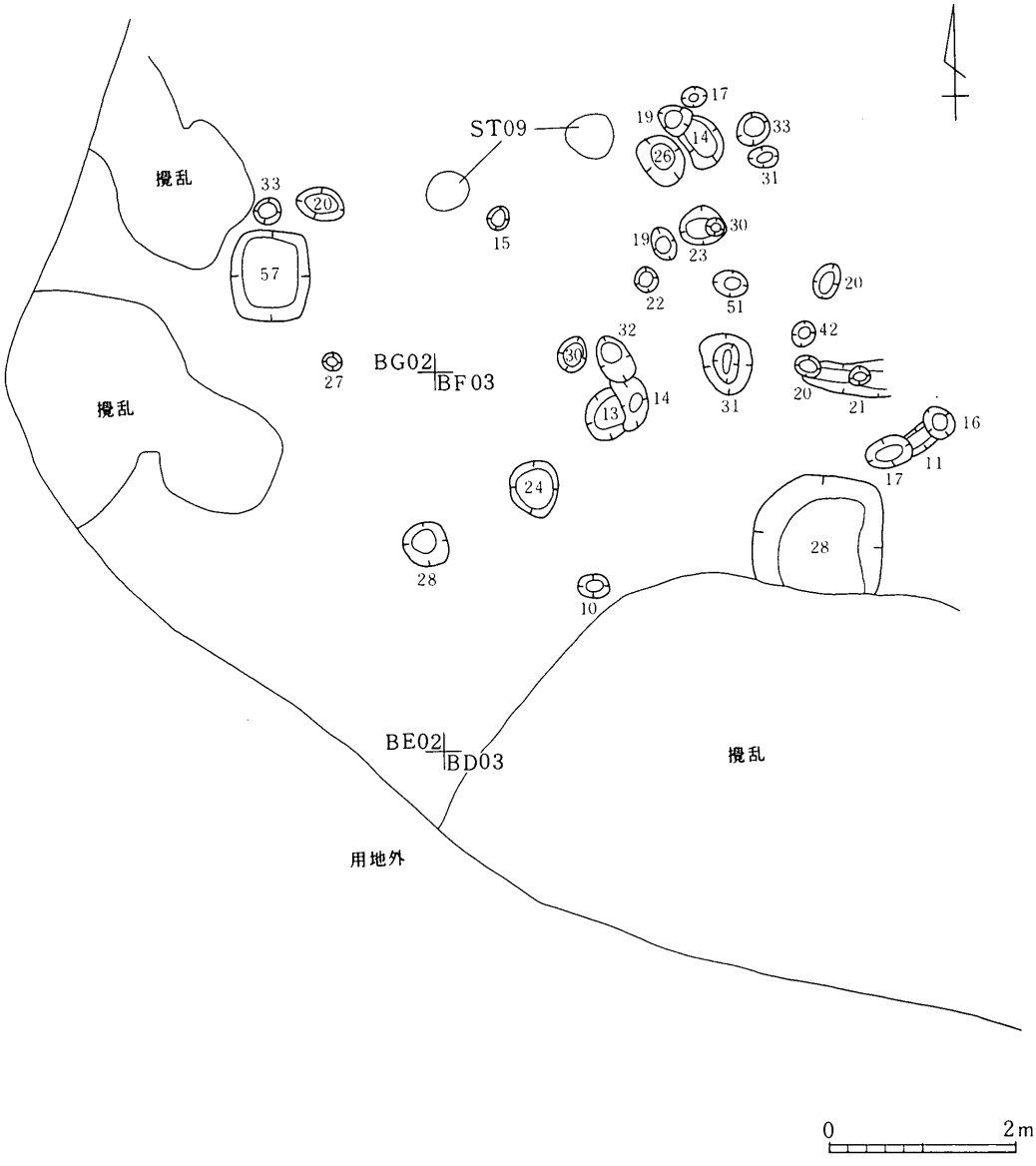
第32図　ＳＤ01　ＳＤ02　ＳＤ04



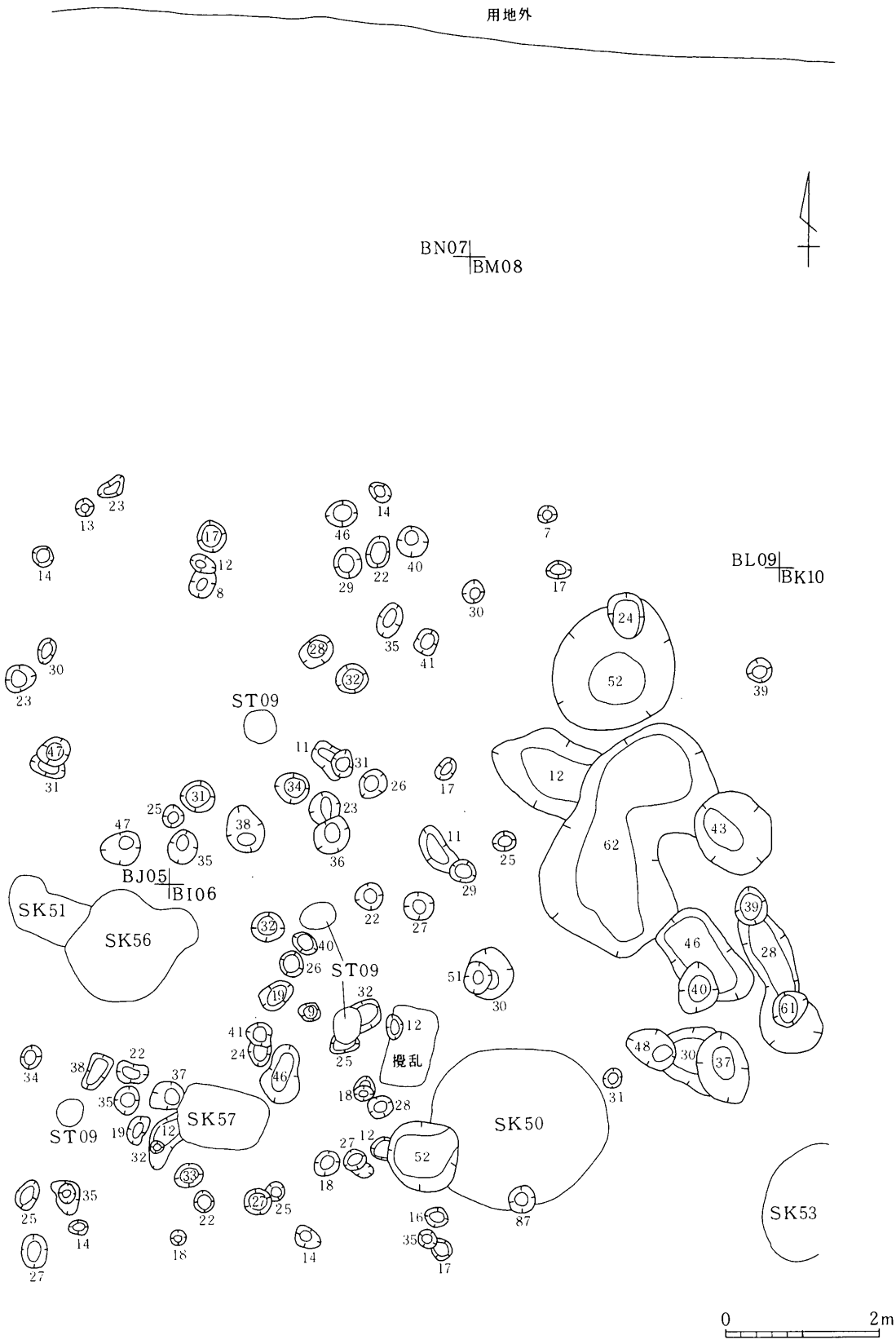
第33図　MGT　SD03　SD05　SD09　SD10



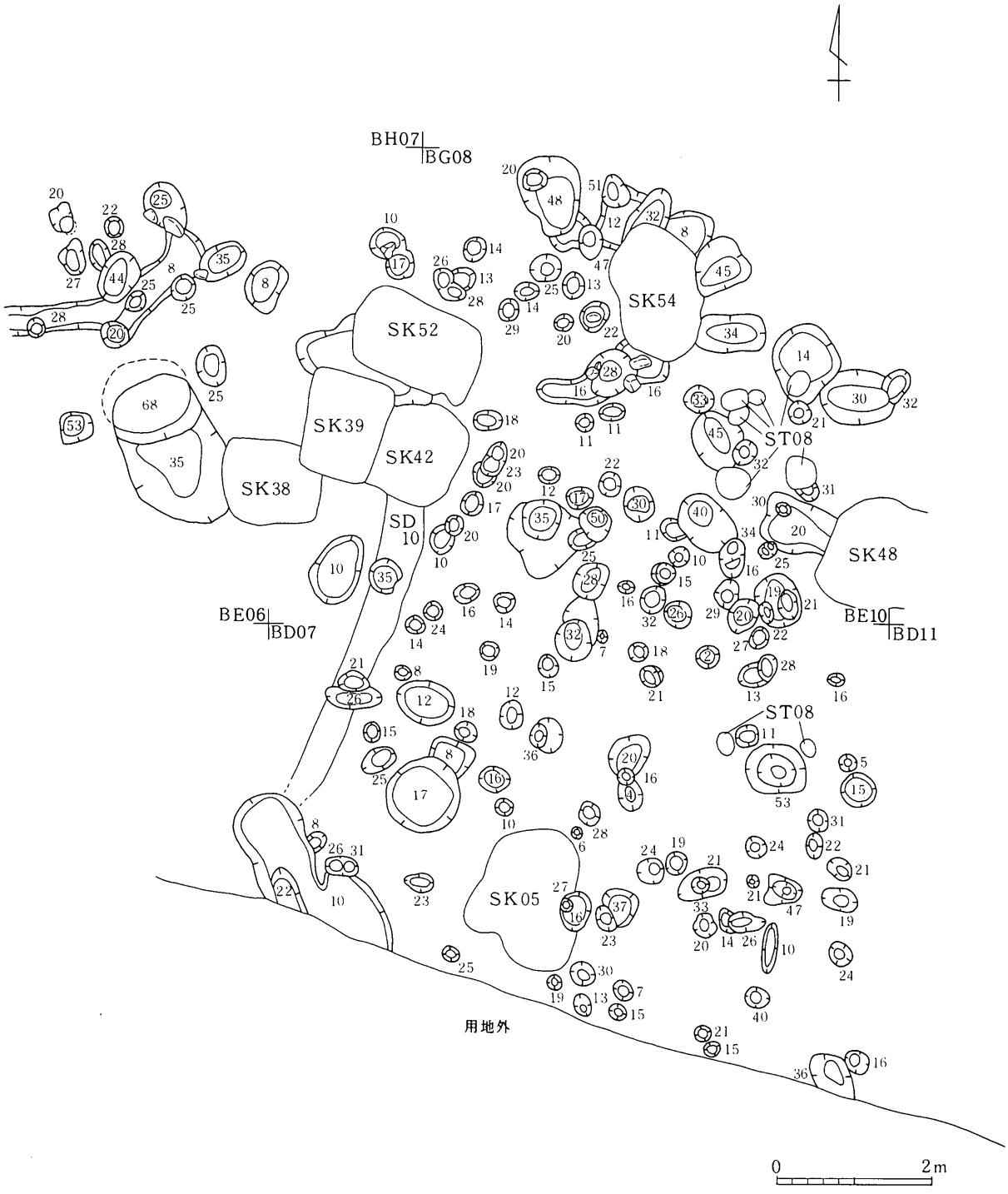
第34図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(1)



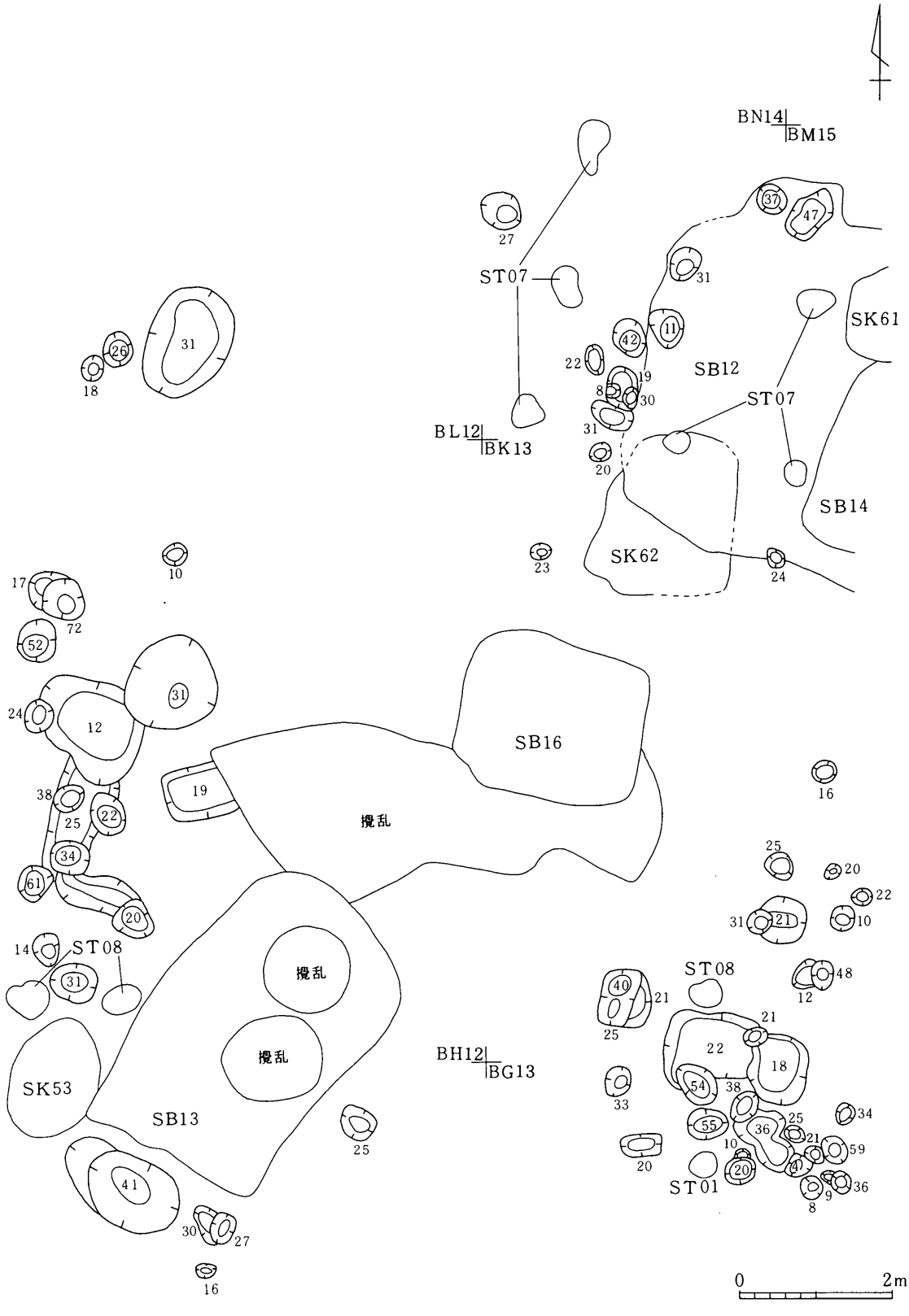
第35図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(2)



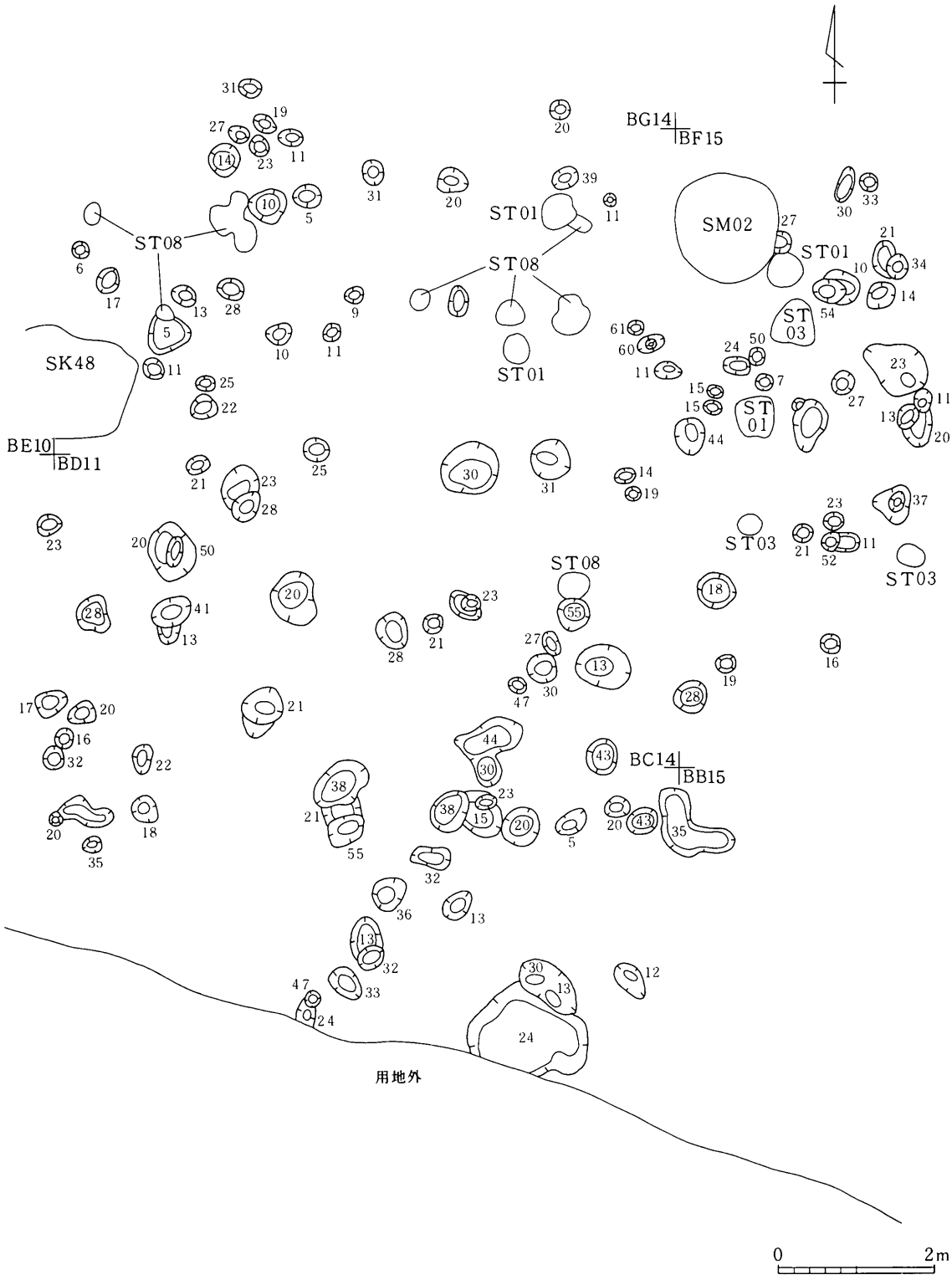
第36図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(3)



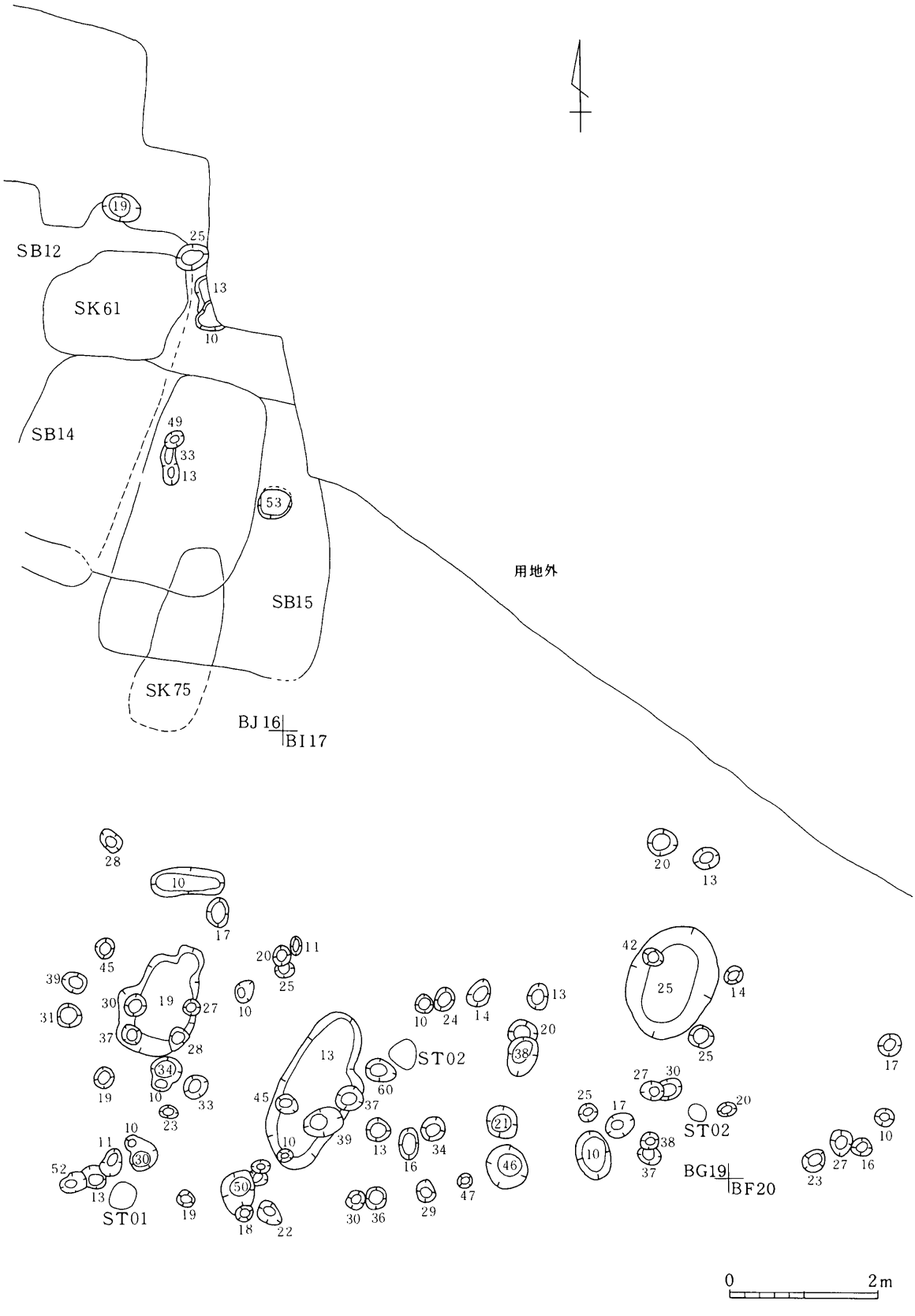
第37図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(4)



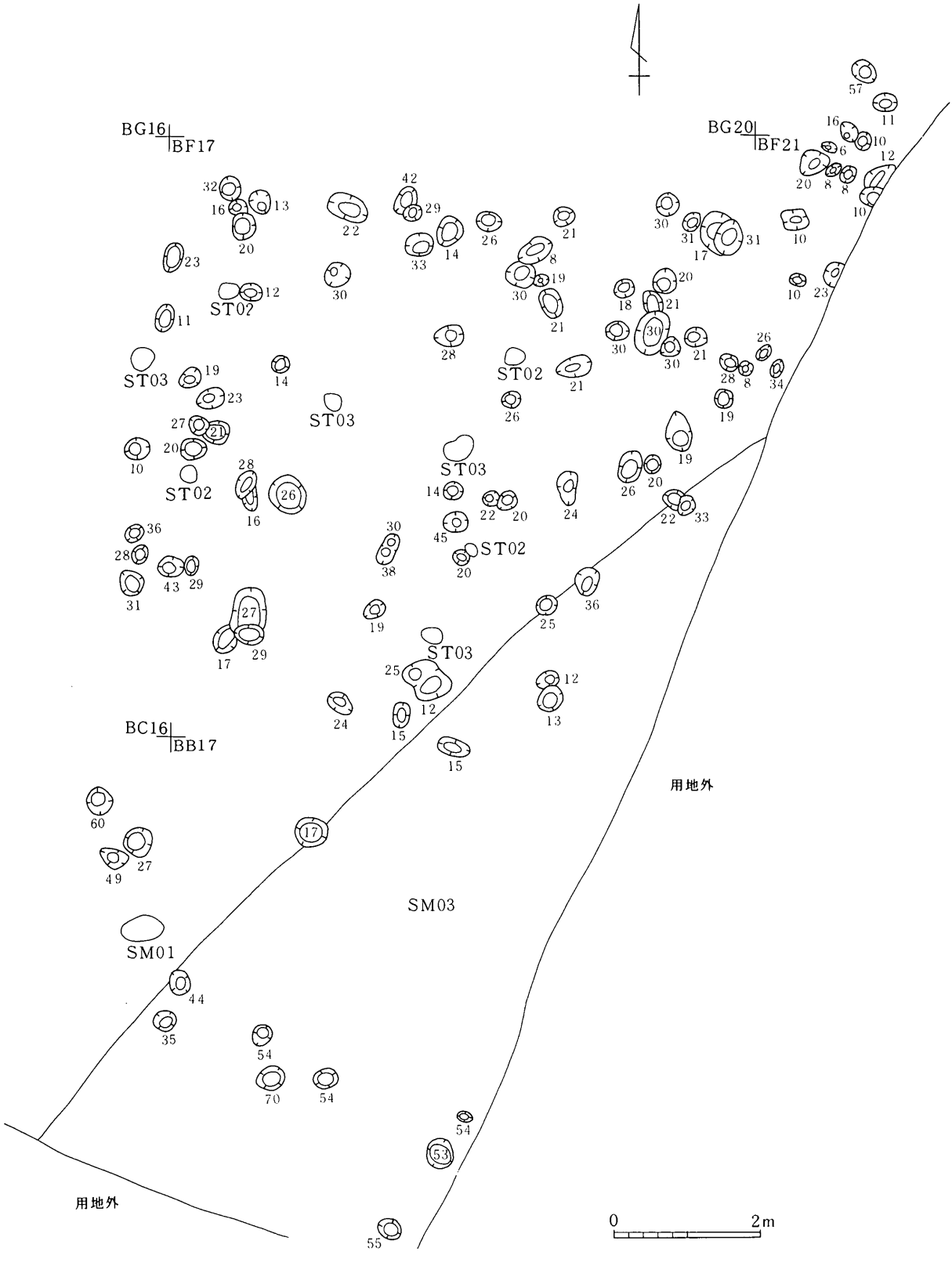
第38図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(5)



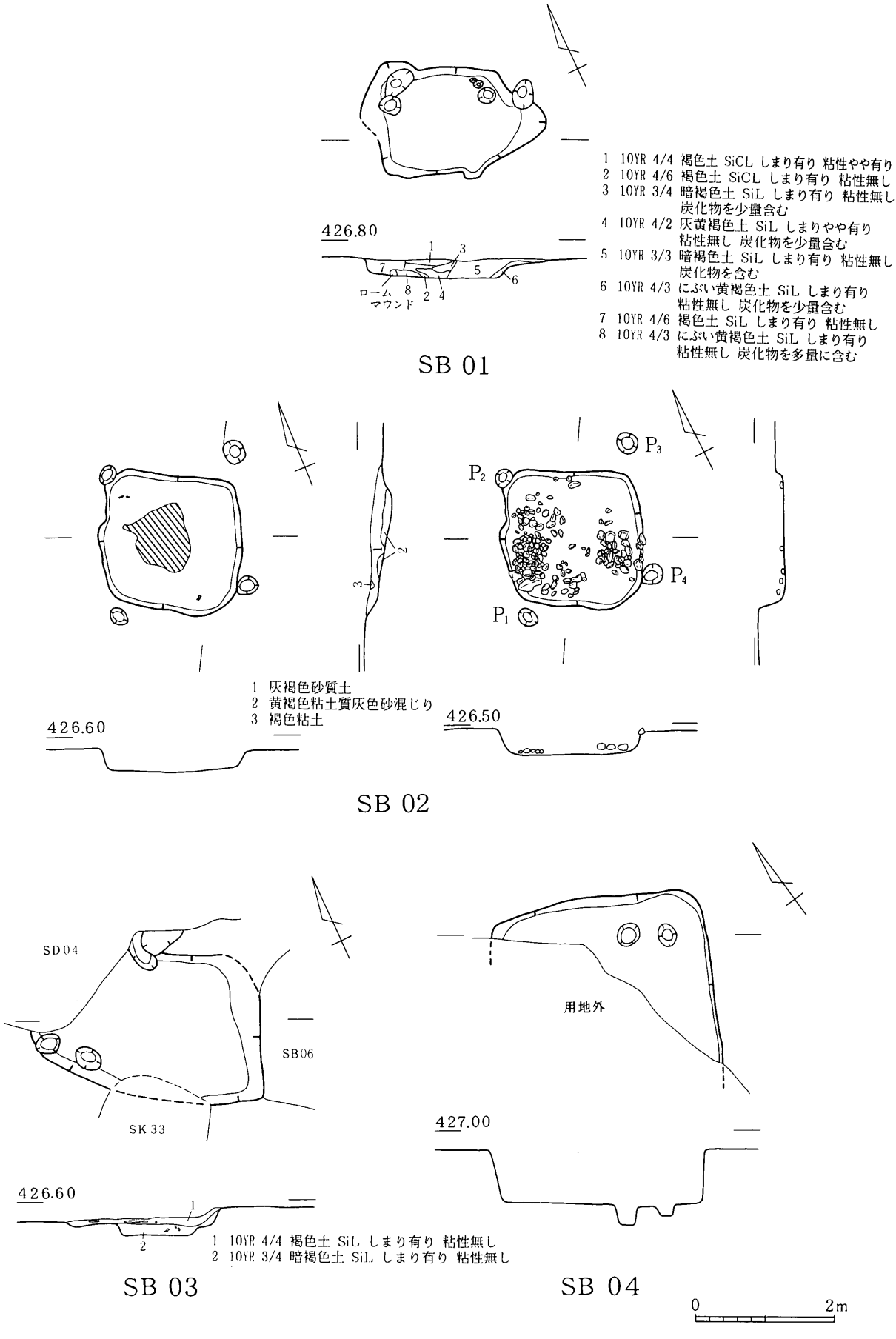
第39図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(6)



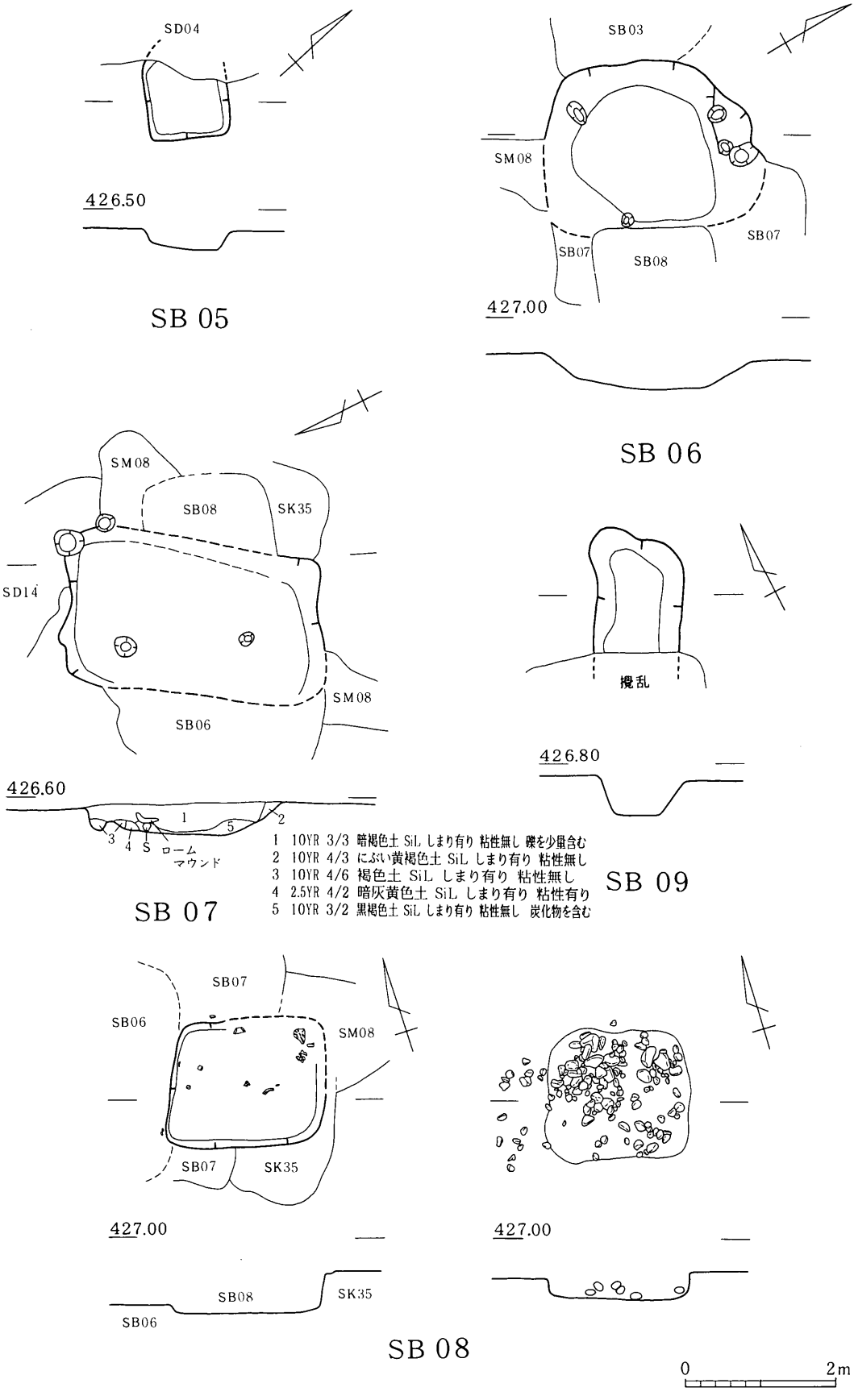
第40図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(7)



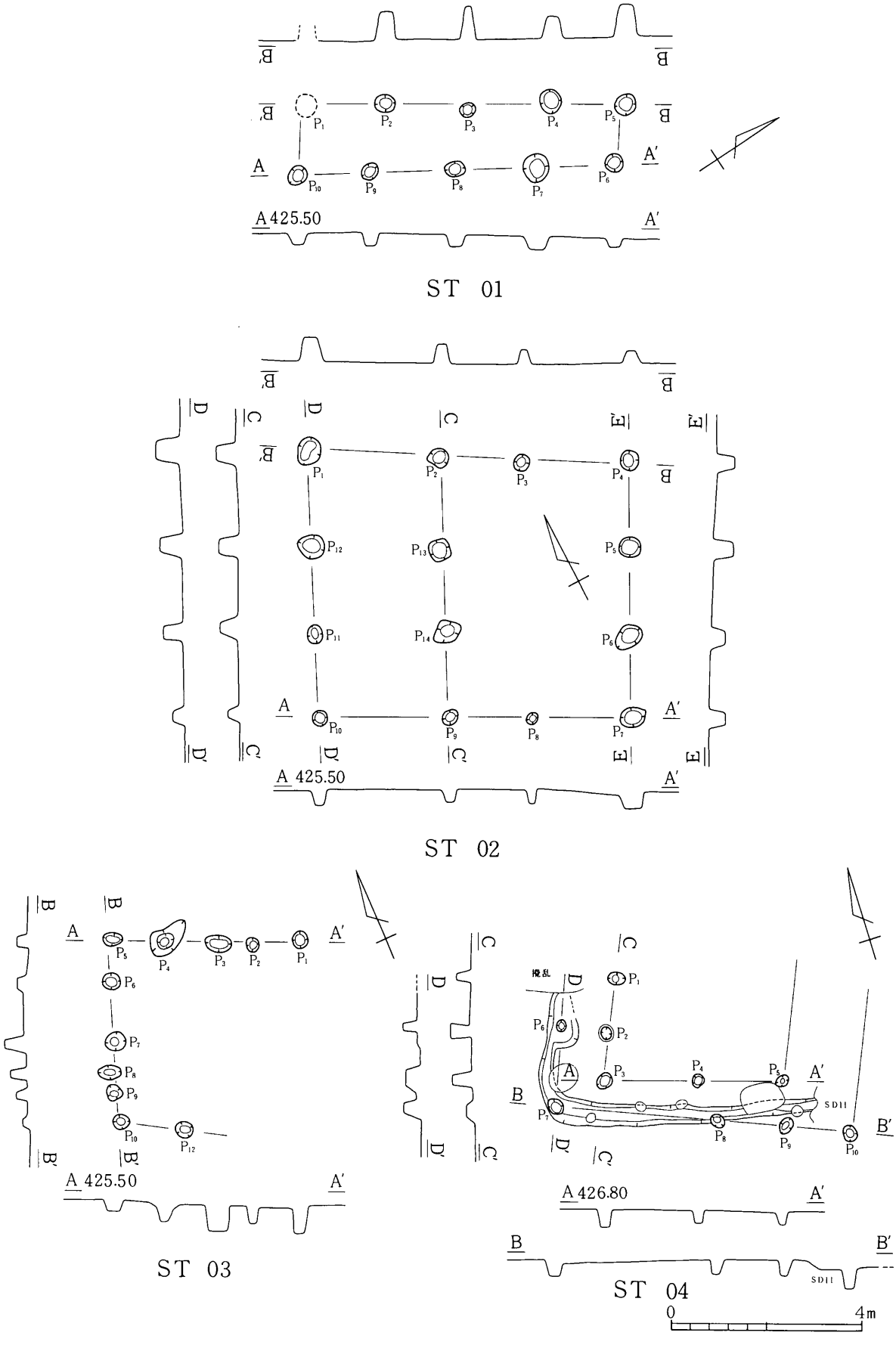
第41図　ＭＧＴ　Ｖ区グリットピット(8)



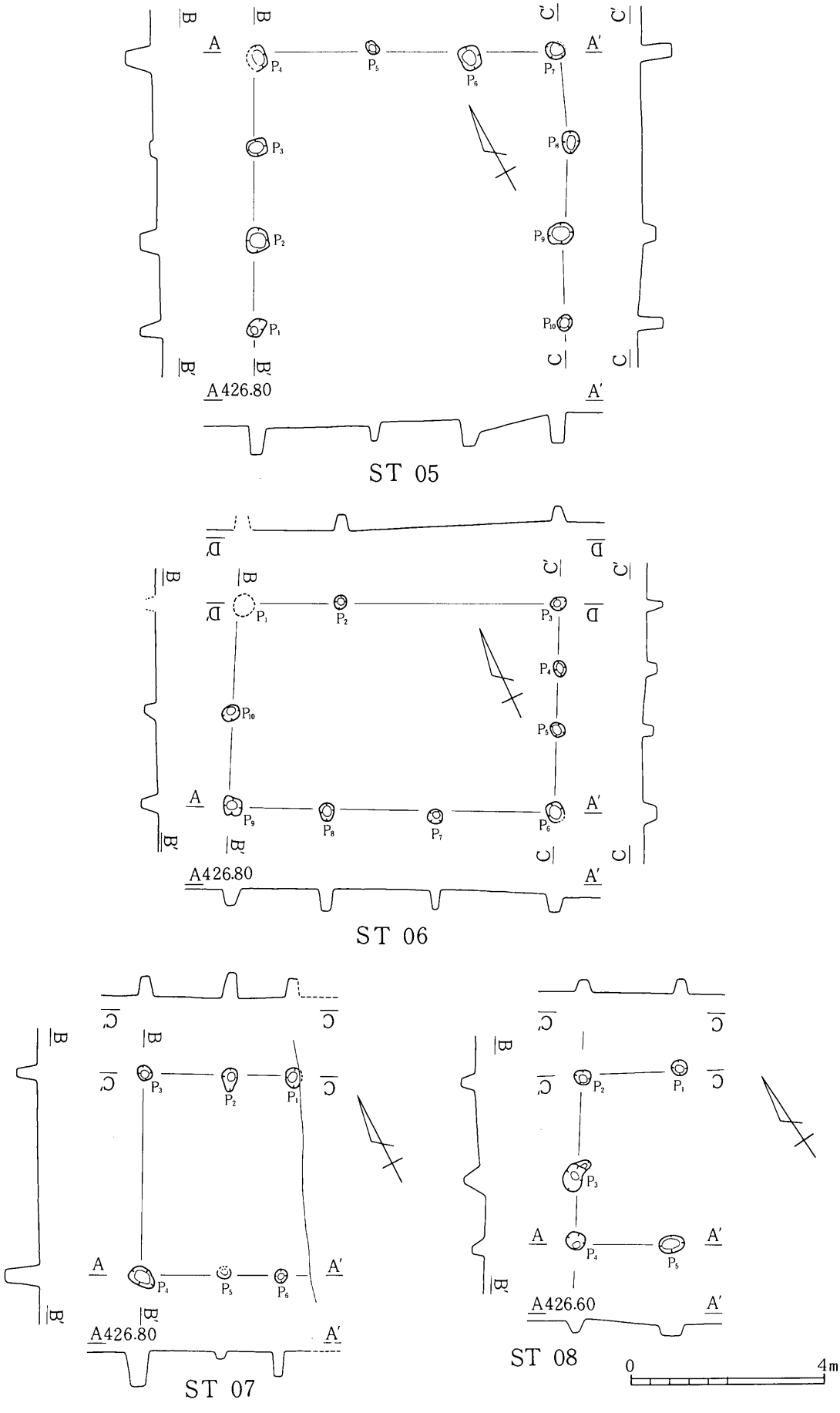
第42図　ＴＫＹ　ＳＢ01　ＳＢ02　ＳＢ03　ＳＢ04



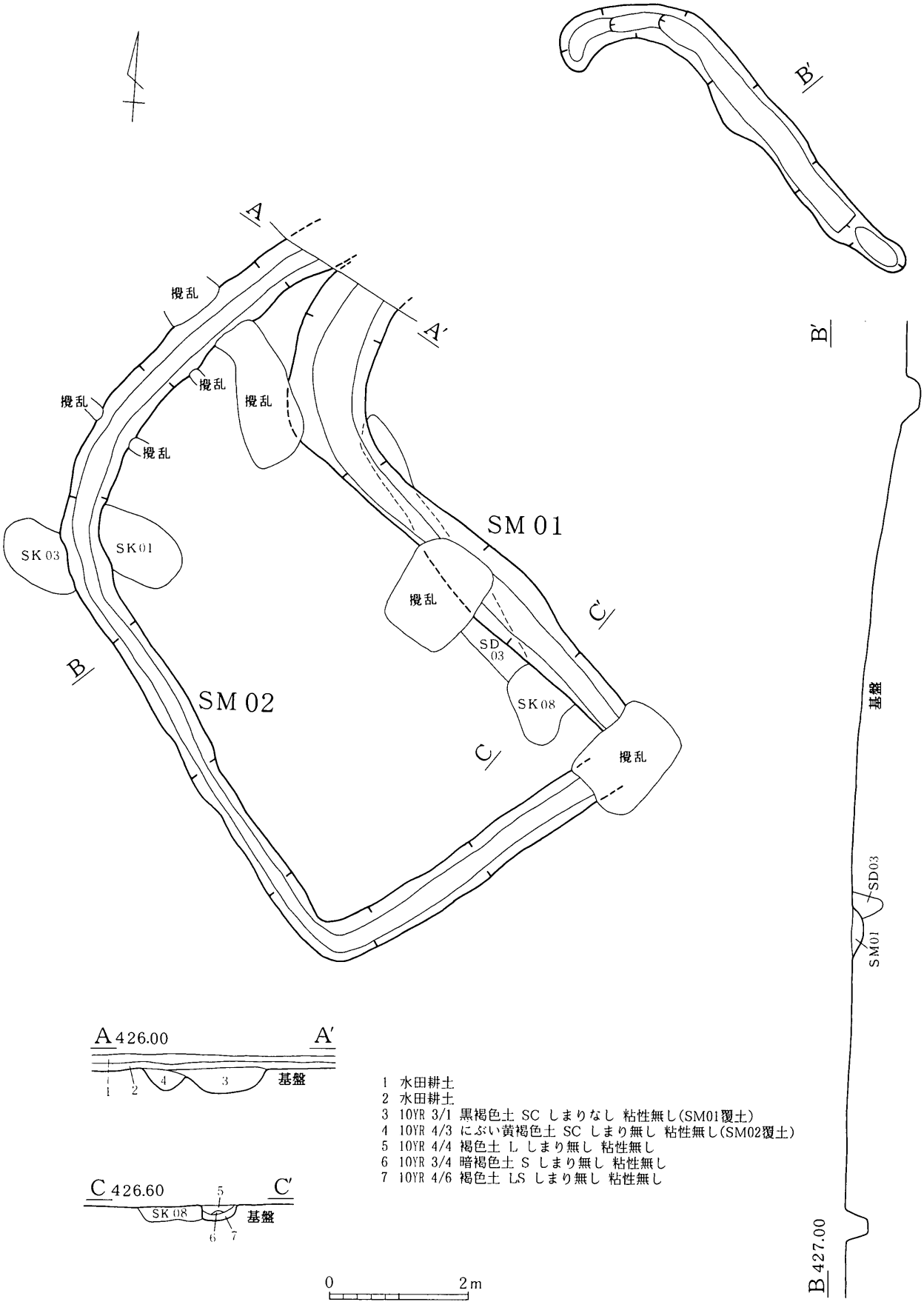
第43図　ＴＫＹ　ＳＢ05　ＳＢ06　ＳＢ07　ＳＢ08　ＳＢ09



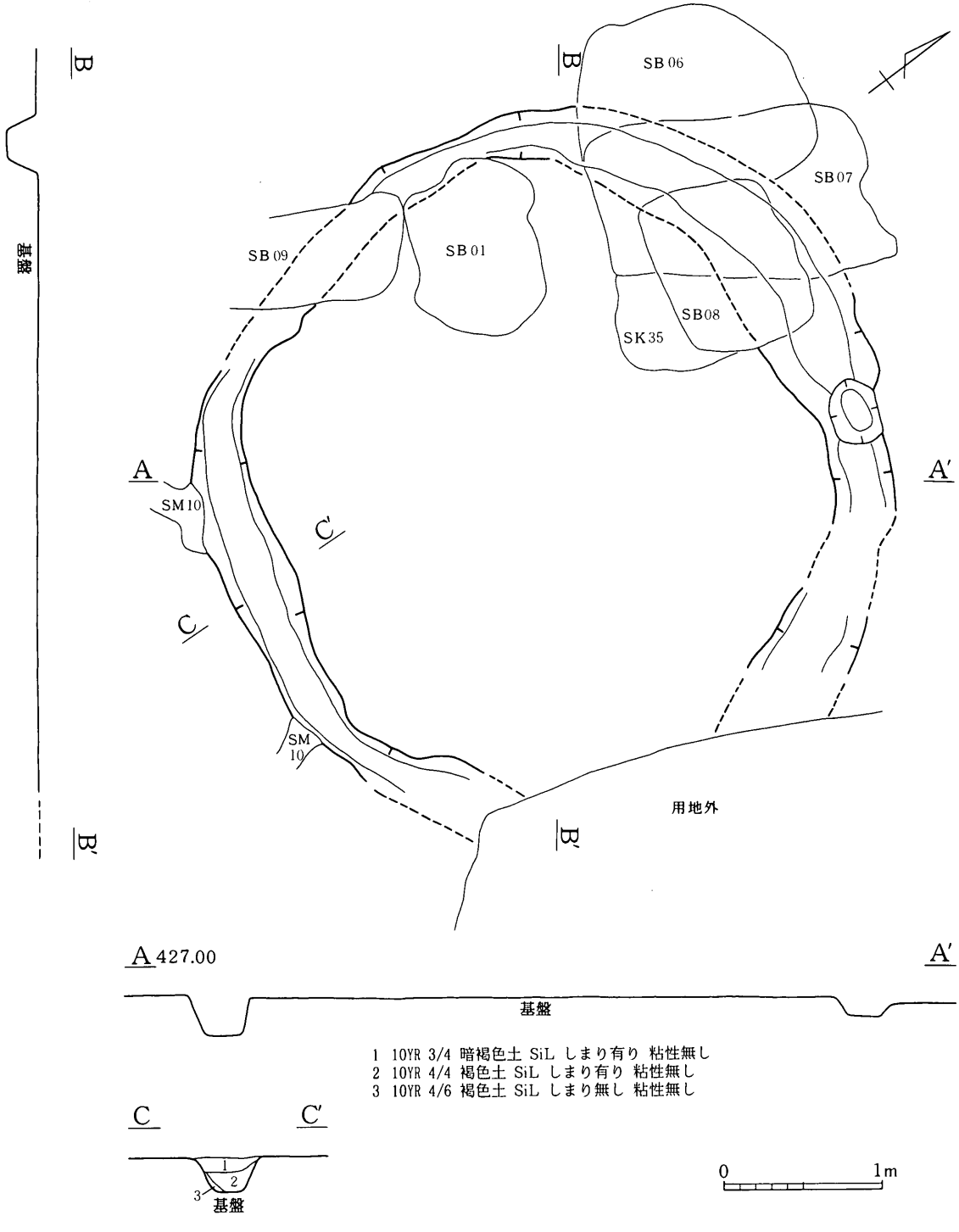
第44図　TKY　ST01　ST02　ST03　ST04



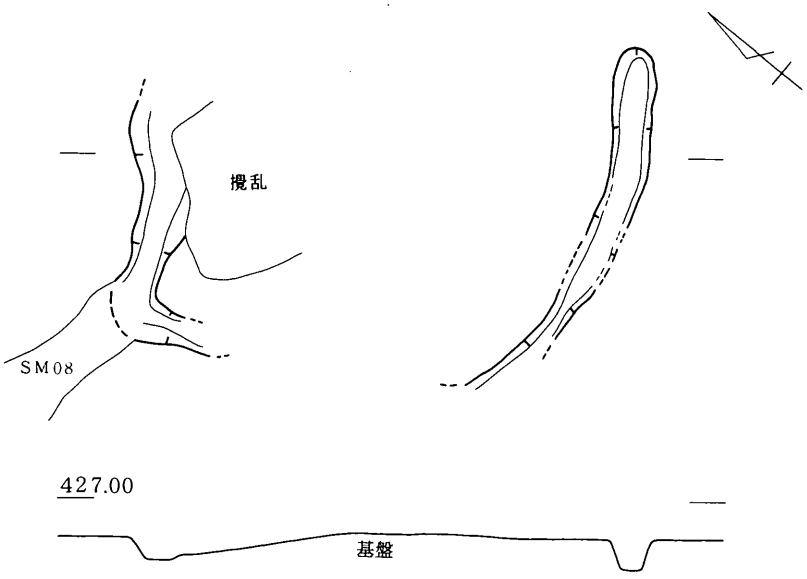
第45図　ＴＫＹ　ＳＴ05　ＳＴ06　ＳＴ07　ＳＴ08



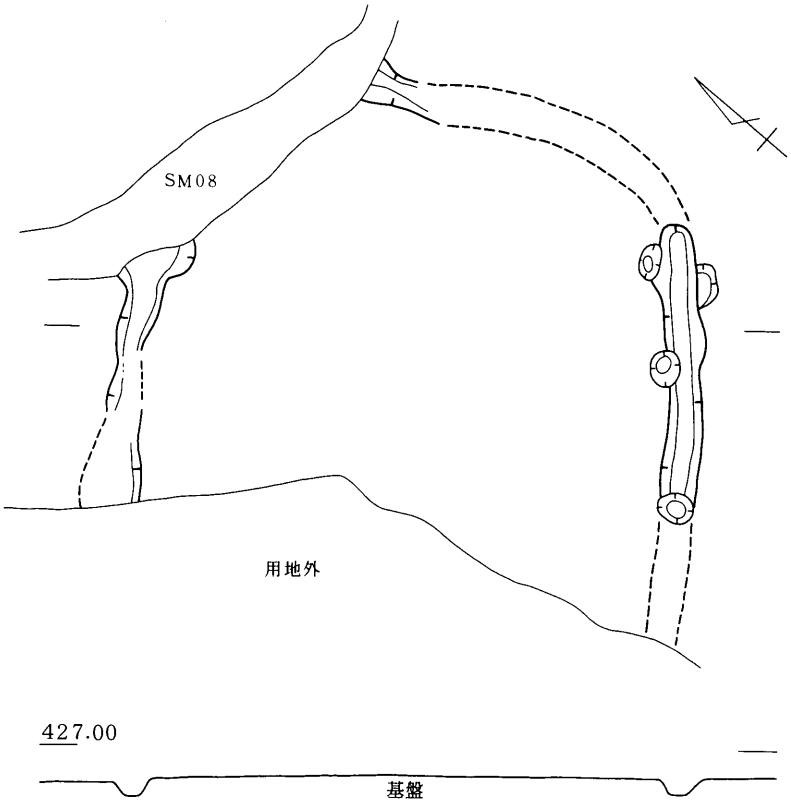
第46図　ＴＫＹ　ＳＭ01　ＳＭ02



第47図　ＴＫＹ　ＳＭ08



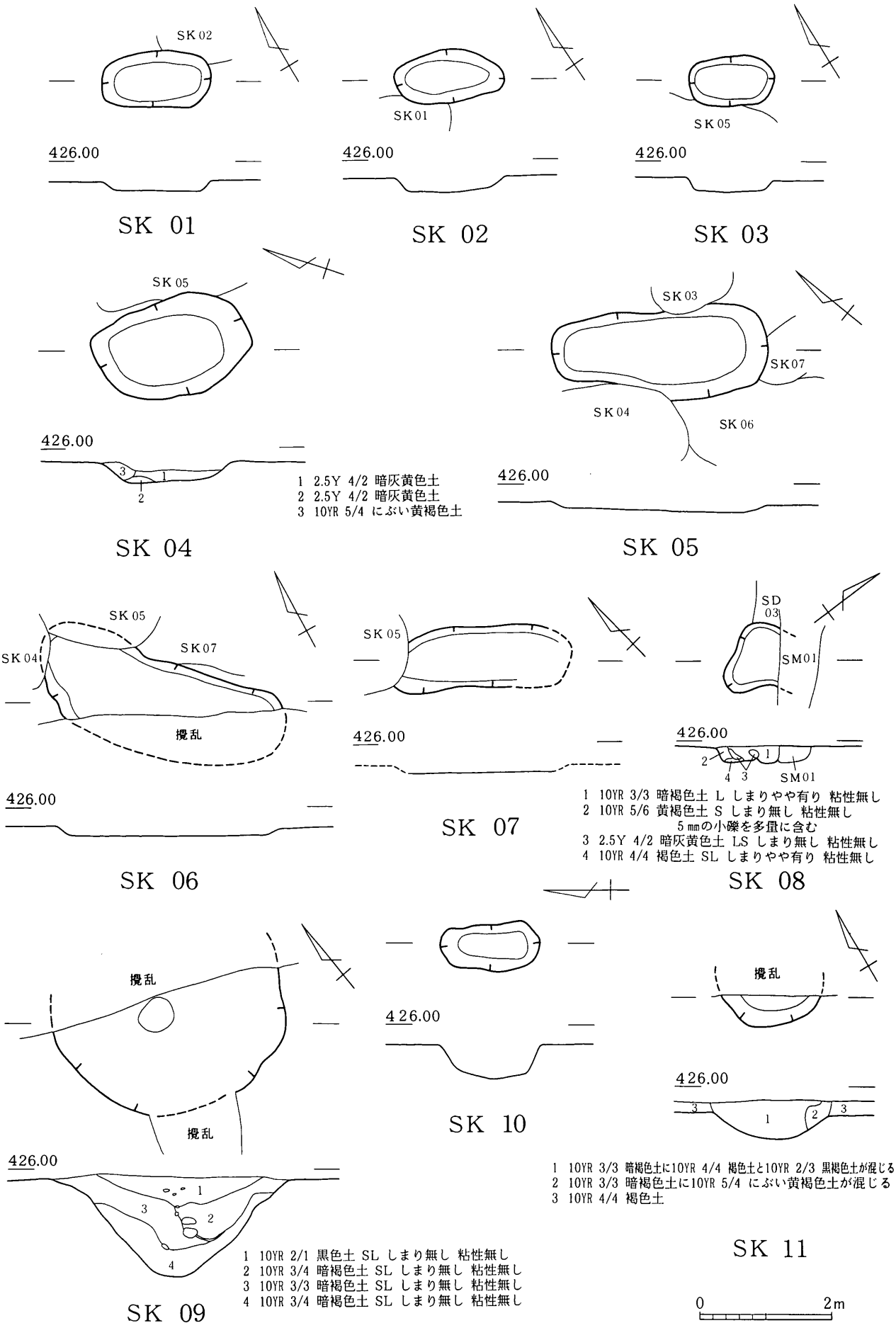
SM 09



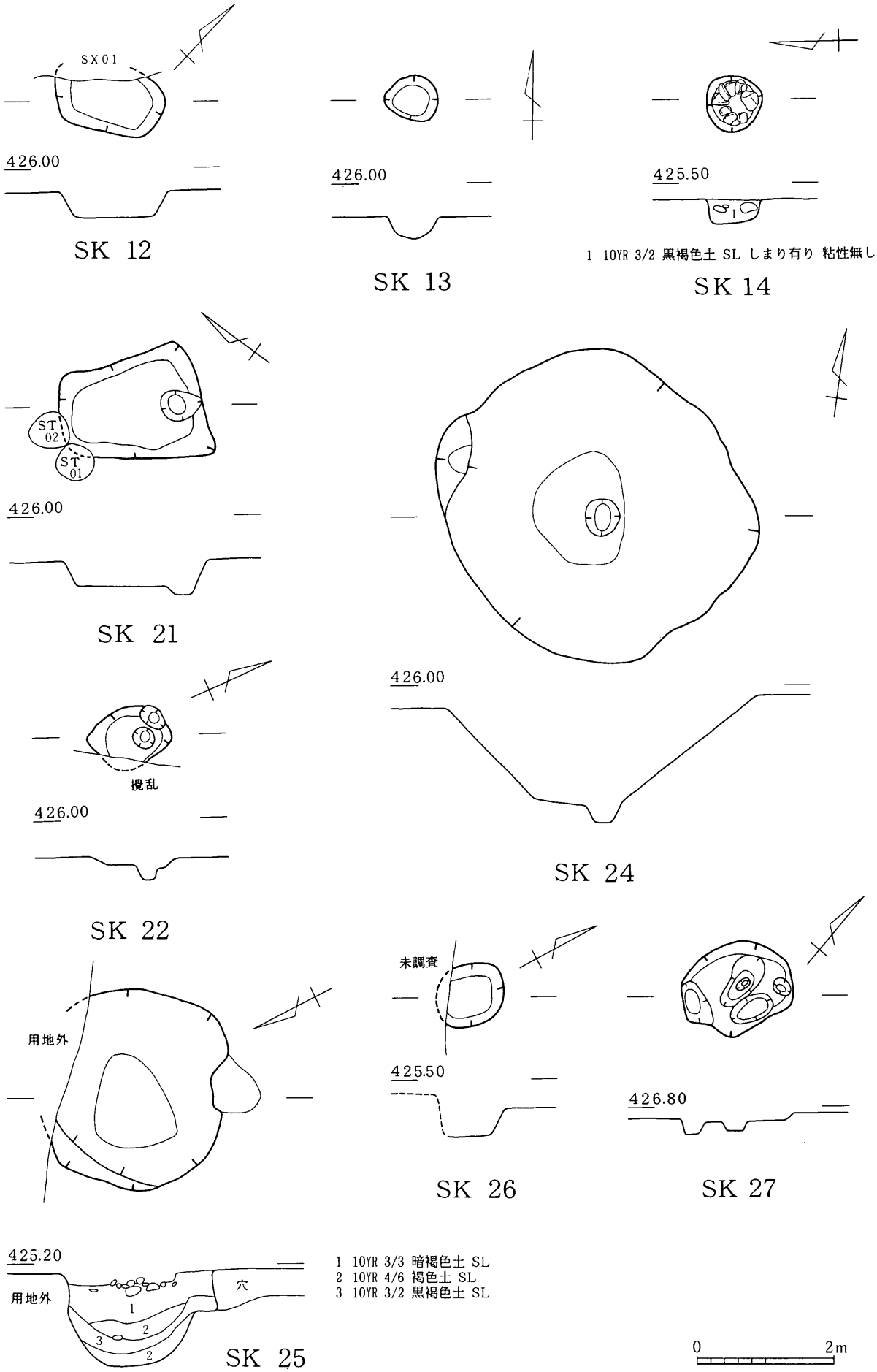
SM 10

0 2m

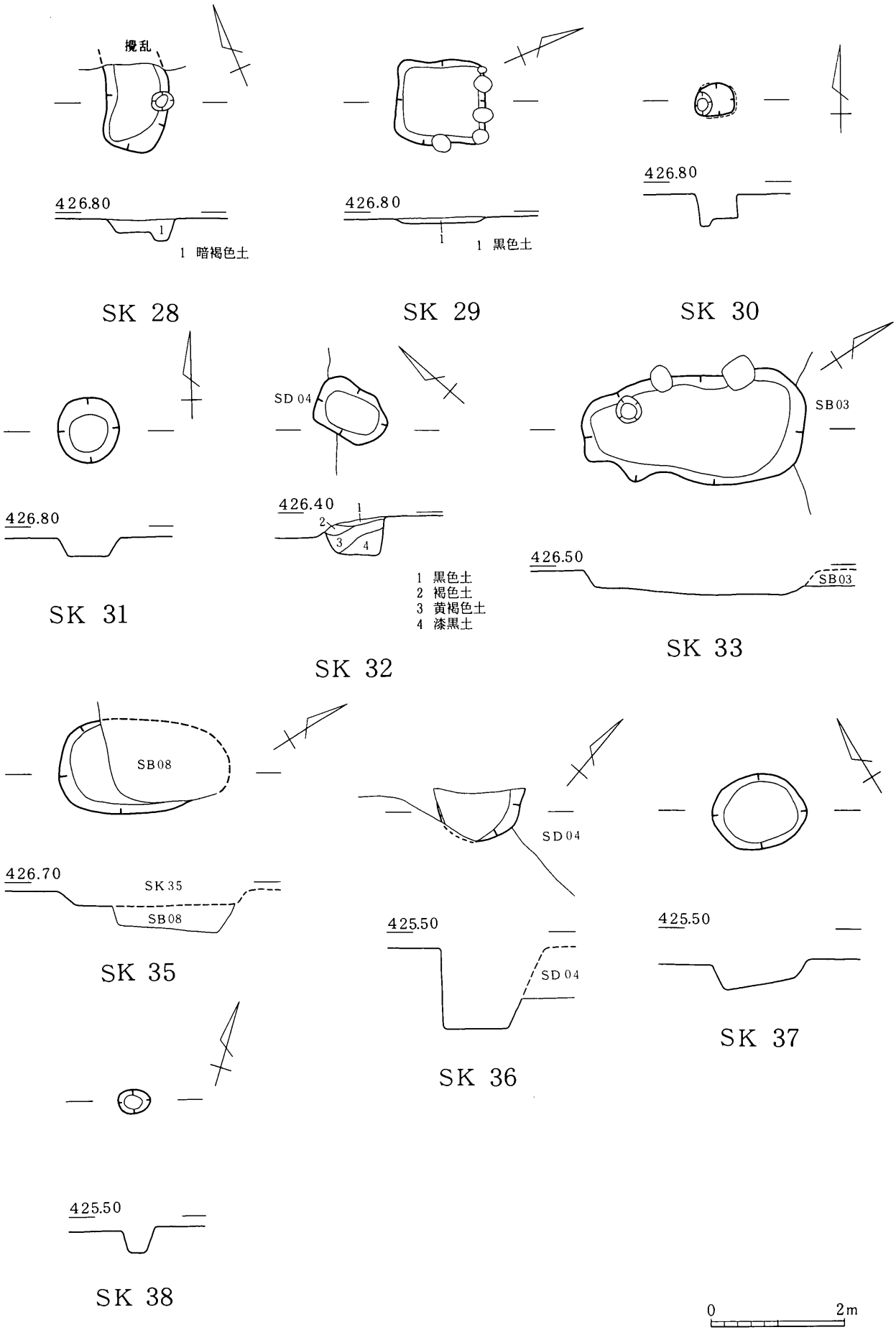
第48図　ＴＫＹ　ＳＭ09　ＳＭ10



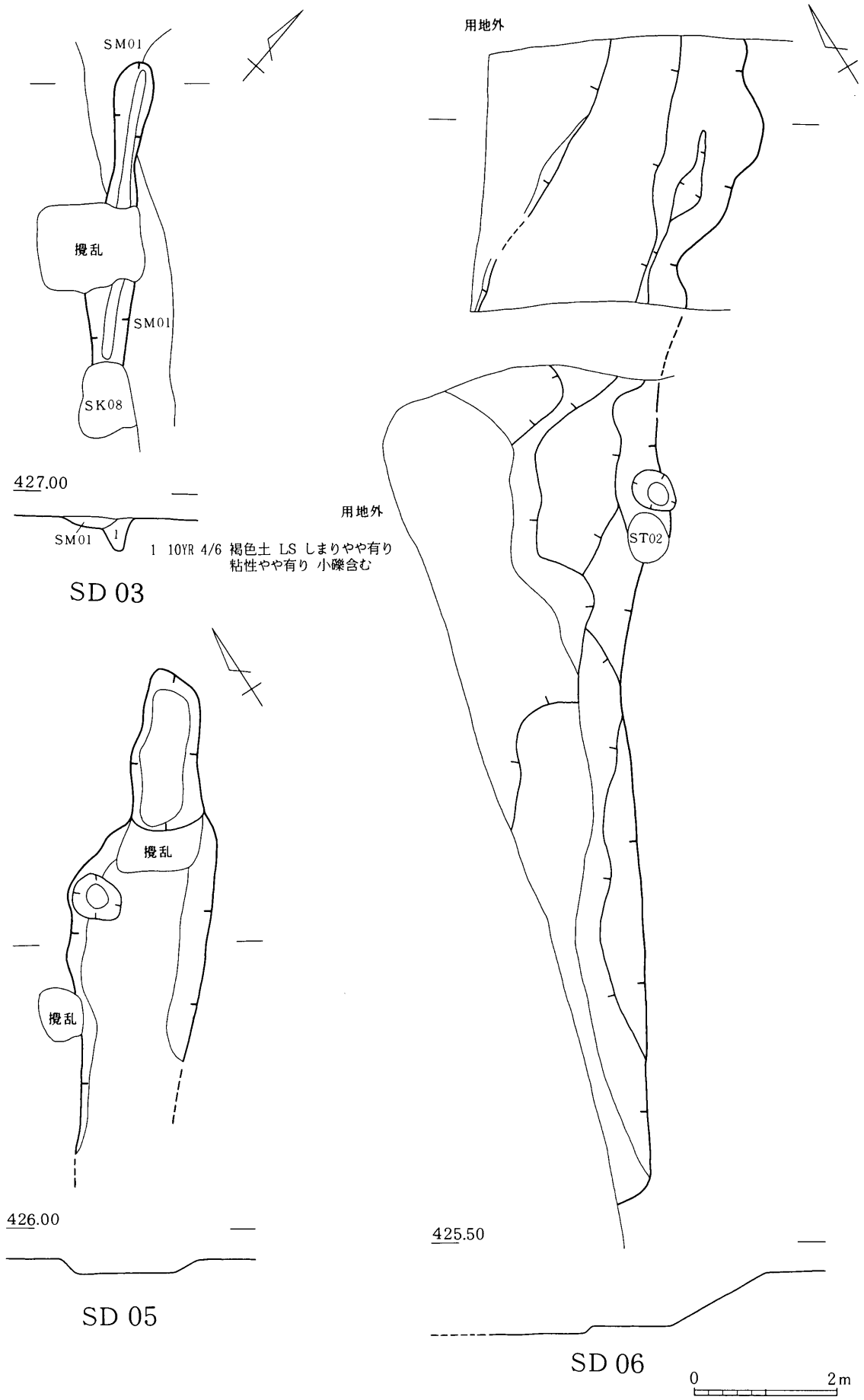
第49図　TKY　SK01　SK02　SK03　SK04　SK05　SK06　SK07　SK08　SK09　SK10　SK11



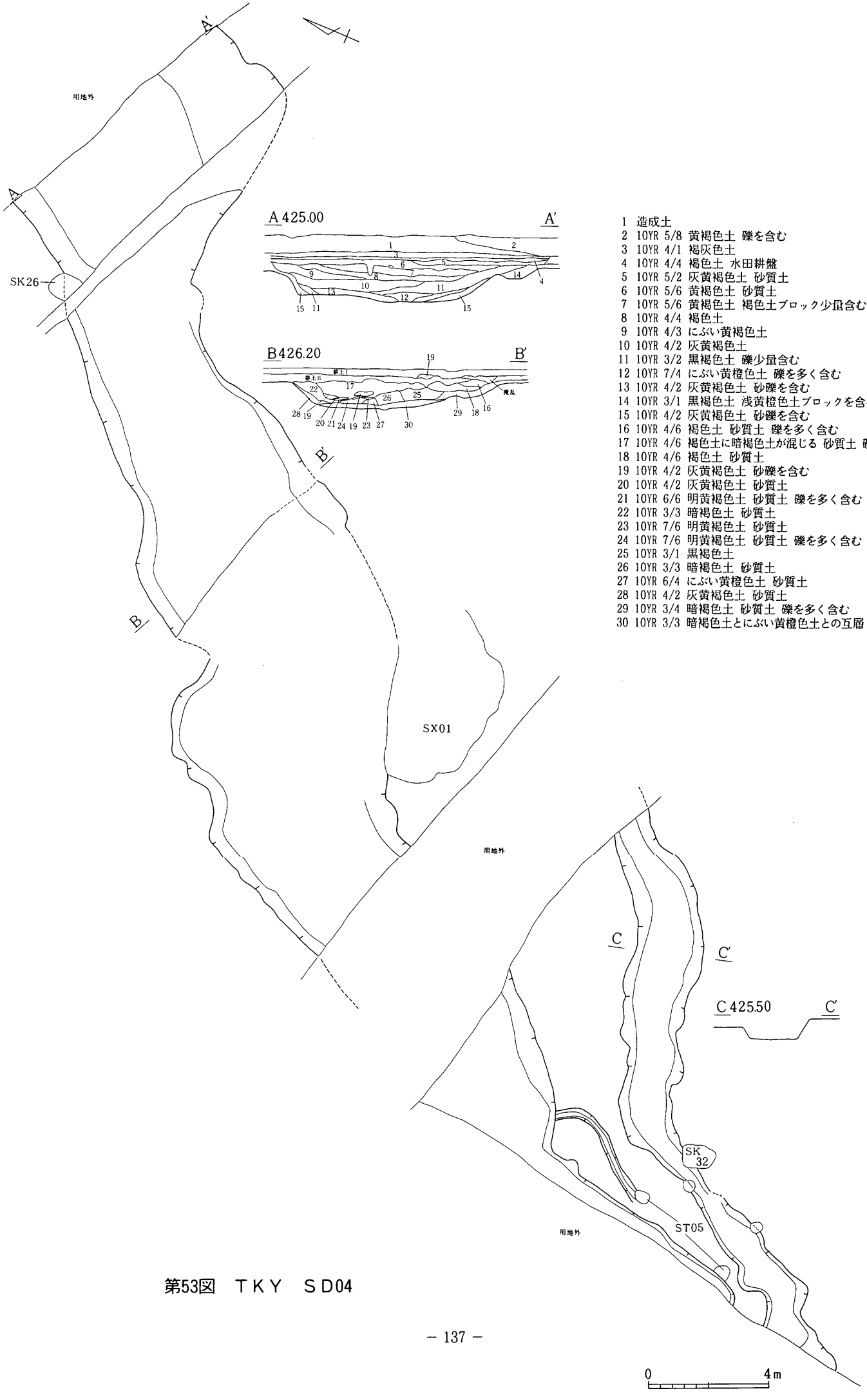
第50図 TKY SK12 SK13 SK14 SK21 SK22 SK24 SK25 SK26 SK27



第51図　ＴＫＹ　ＳＫ28　ＳＫ29　ＳＫ30　ＳＫ31　ＳＫ32　ＳＫ33　ＳＫ35　ＳＫ36　ＳＫ37　ＳＫ38

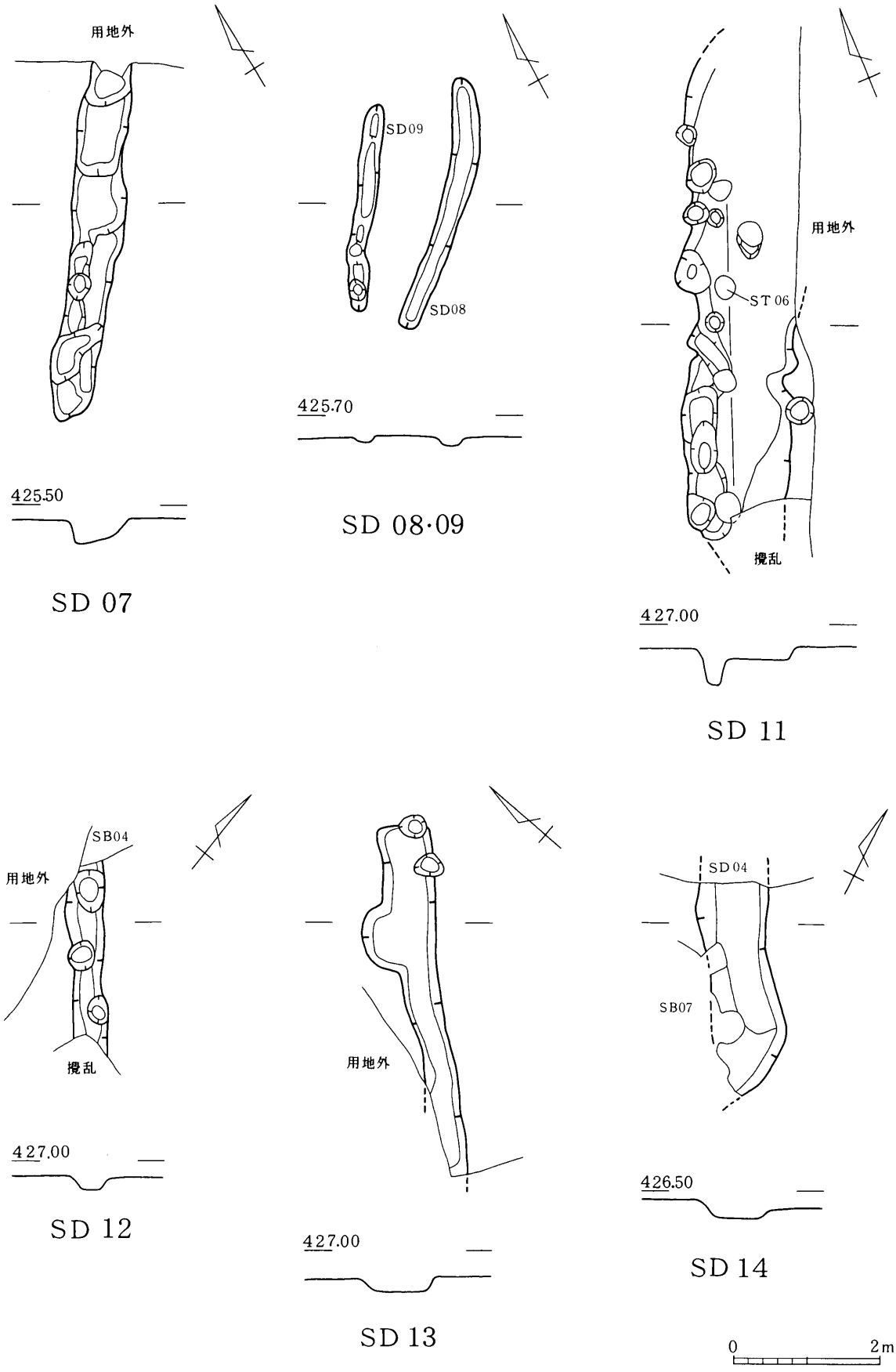


第52図　ＴＫＹ　ＳＤ03　ＳＤ05　ＳＤ06

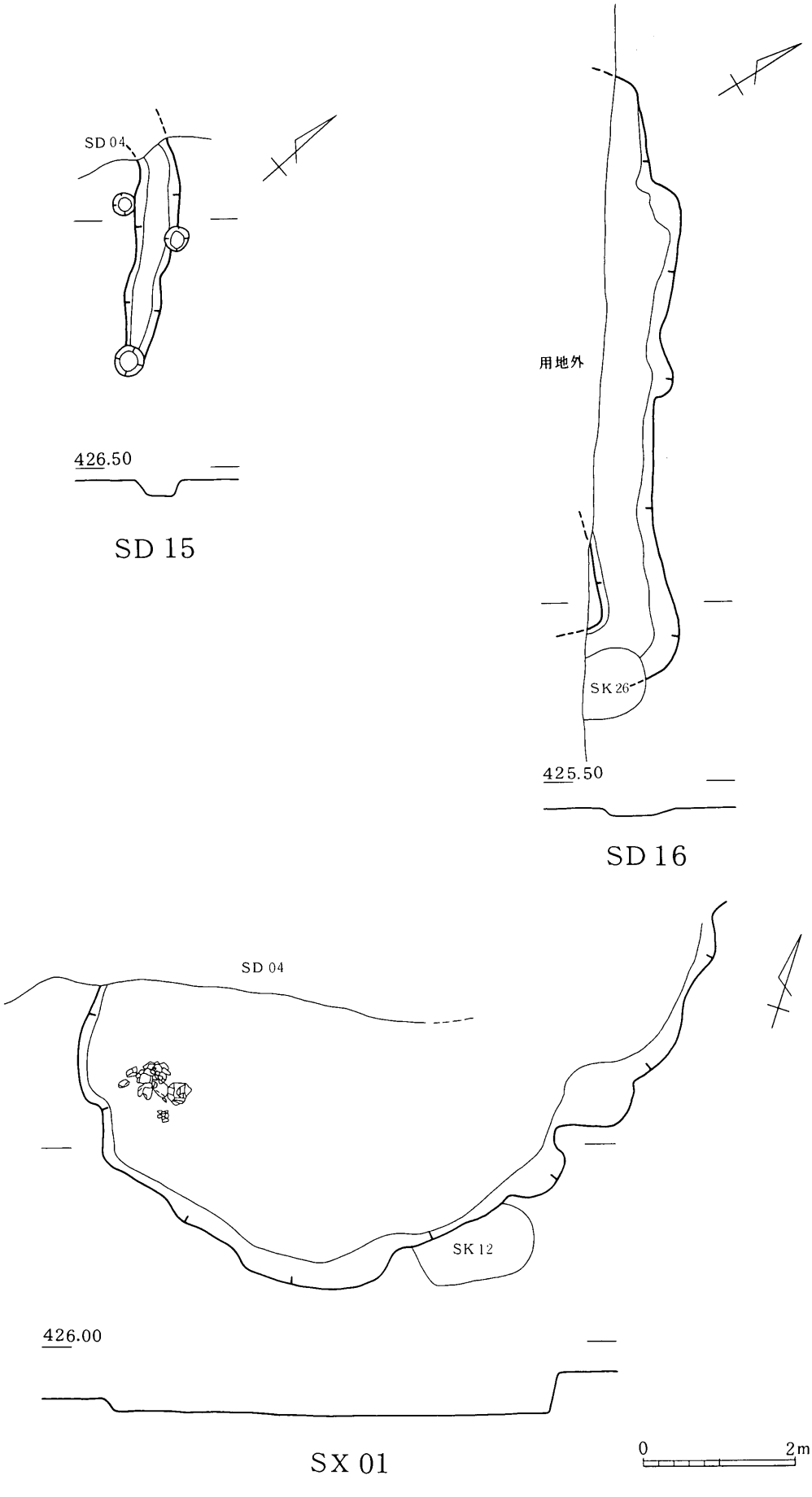


1 造成土
2 10YR 5/8 黄褐色土 礫を含む
3 10YR 4/1 褐灰色土
4 10YR 4/4 褐色土 水田耕盤
5 10YR 5/2 灰黄褐色土 砂質土
6 10YR 5/6 黄褐色土 砂質土
7 10YR 5/6 黄褐色土 褐色土ブロック少量含む
8 10YR 4/4 褐色土
9 10YR 4/3 にぶい黄褐色土
10 10YR 4/2 灰黄褐色土
11 10YR 3/2 黒褐色土 礫少量含む
12 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 礫を多く含む
13 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂礫を含む
14 10YR 3/1 黒褐色土 浅黄橙色土ブロックを含む
15 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂礫を含む
16 10YR 4/6 褐色土 砂質土 礫を多く含む
17 10YR 4/6 褐色土に暗褐色土が混じる 砂質土 礫を含む
18 10YR 4/6 褐色土 砂質土
19 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂礫を含む
20 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂質土
21 10YR 6/6 明黄褐色土 砂質土 礫を多く含む
22 10YR 3/3 暗褐色土 砂質土
23 10YR 7/6 明黄褐色土 砂質土
24 10YR 7/6 明黄褐色土 砂質土 礫を多く含む
25 10YR 3/1 黒褐色土
26 10YR 3/3 暗褐色土 砂質土
27 10YR 6/4 にぶい黄橙色土 砂質土
28 10YR 4/2 灰黄褐色土 砂質土
29 10YR 3/4 暗褐色土 砂質土 礫を多く含む
30 10YR 3/3 暗褐色土とにぶい黄橙色土との互層 砂質土

第53図　ＴＫＹ　ＳＤ04

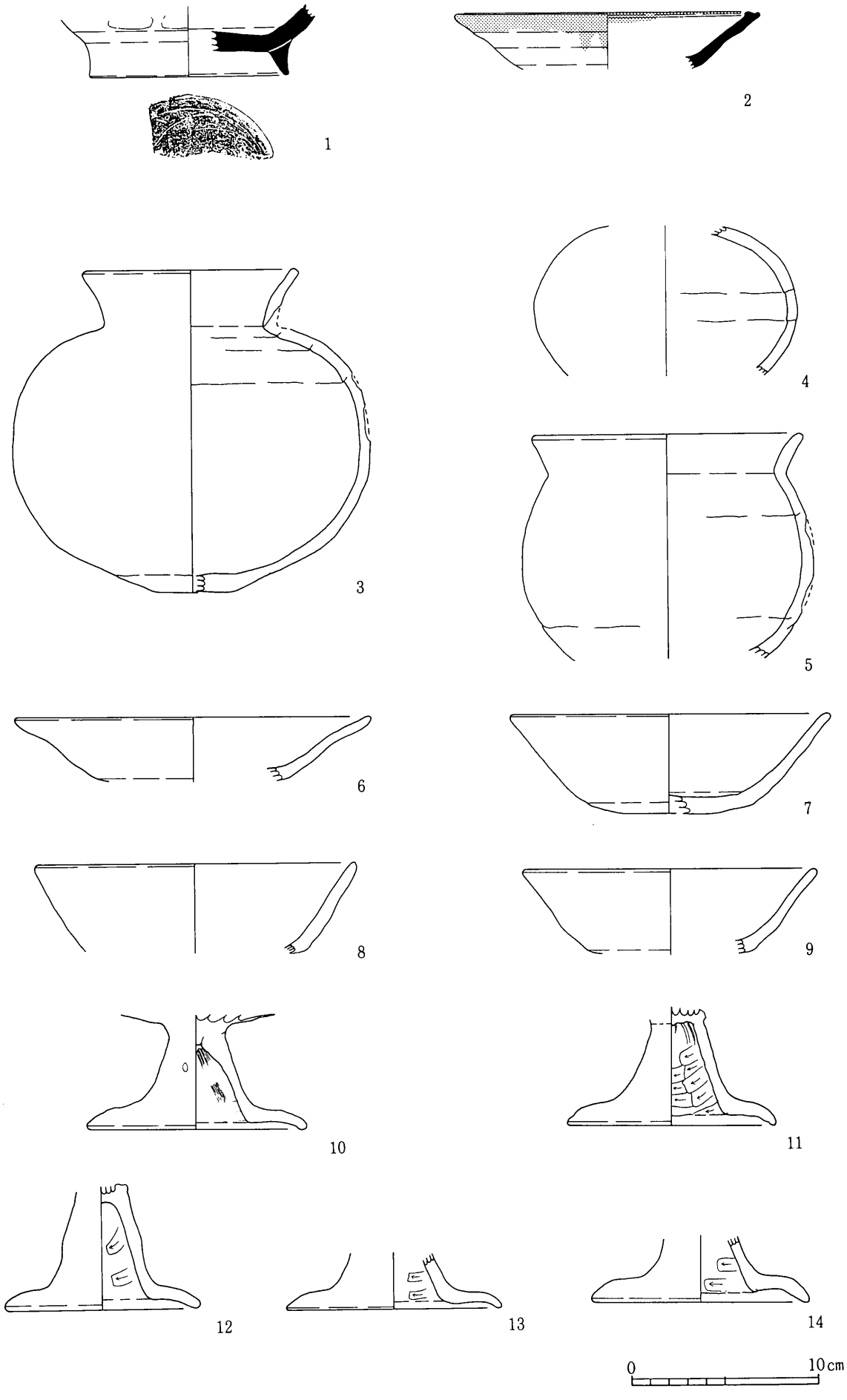


第54図　TKY　SD07　SD08　SD09　SD11　SD12　SD13　SD14

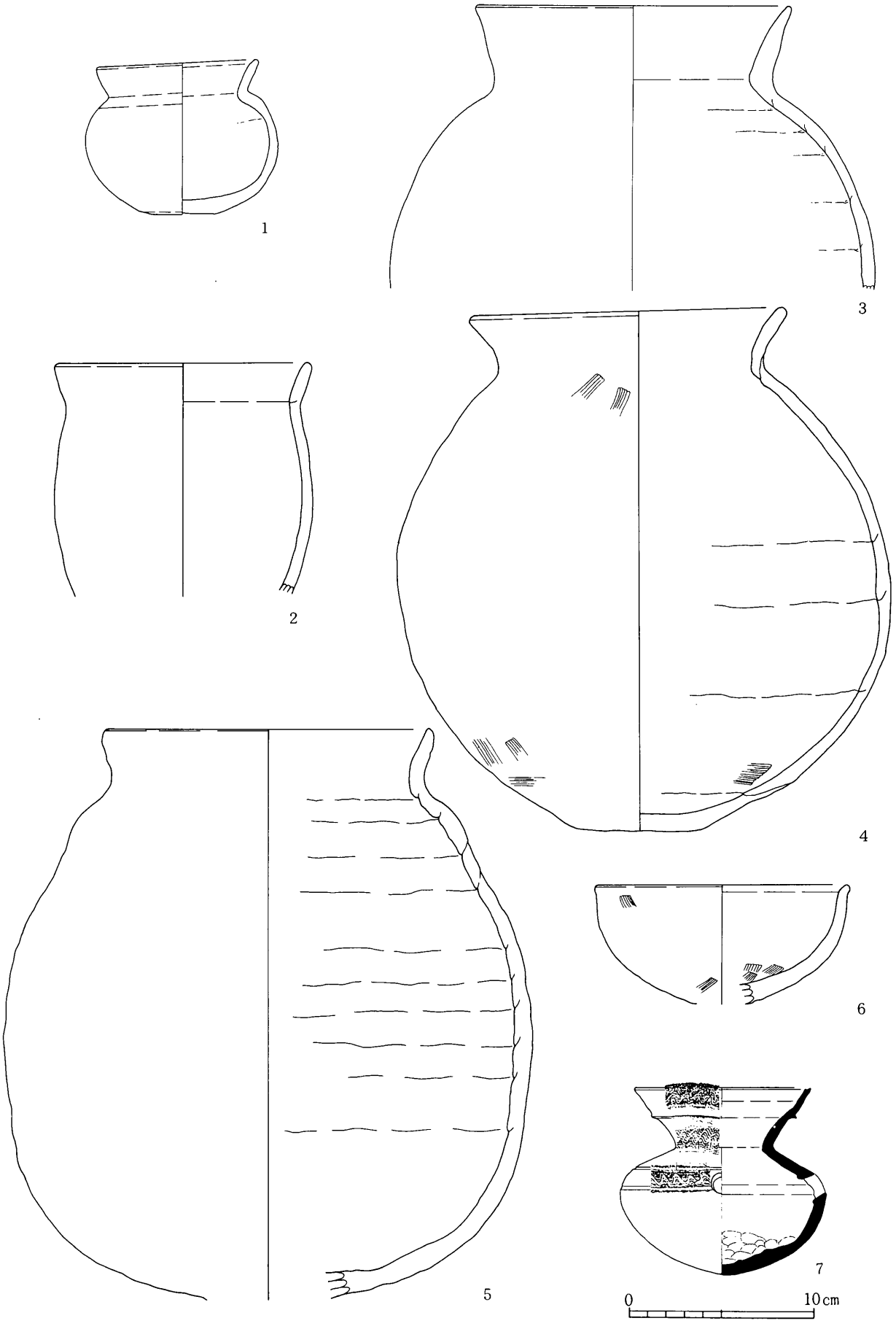


第55図　ＴＫＹ　ＳＤ15　ＳＤ16　ＳＸ01

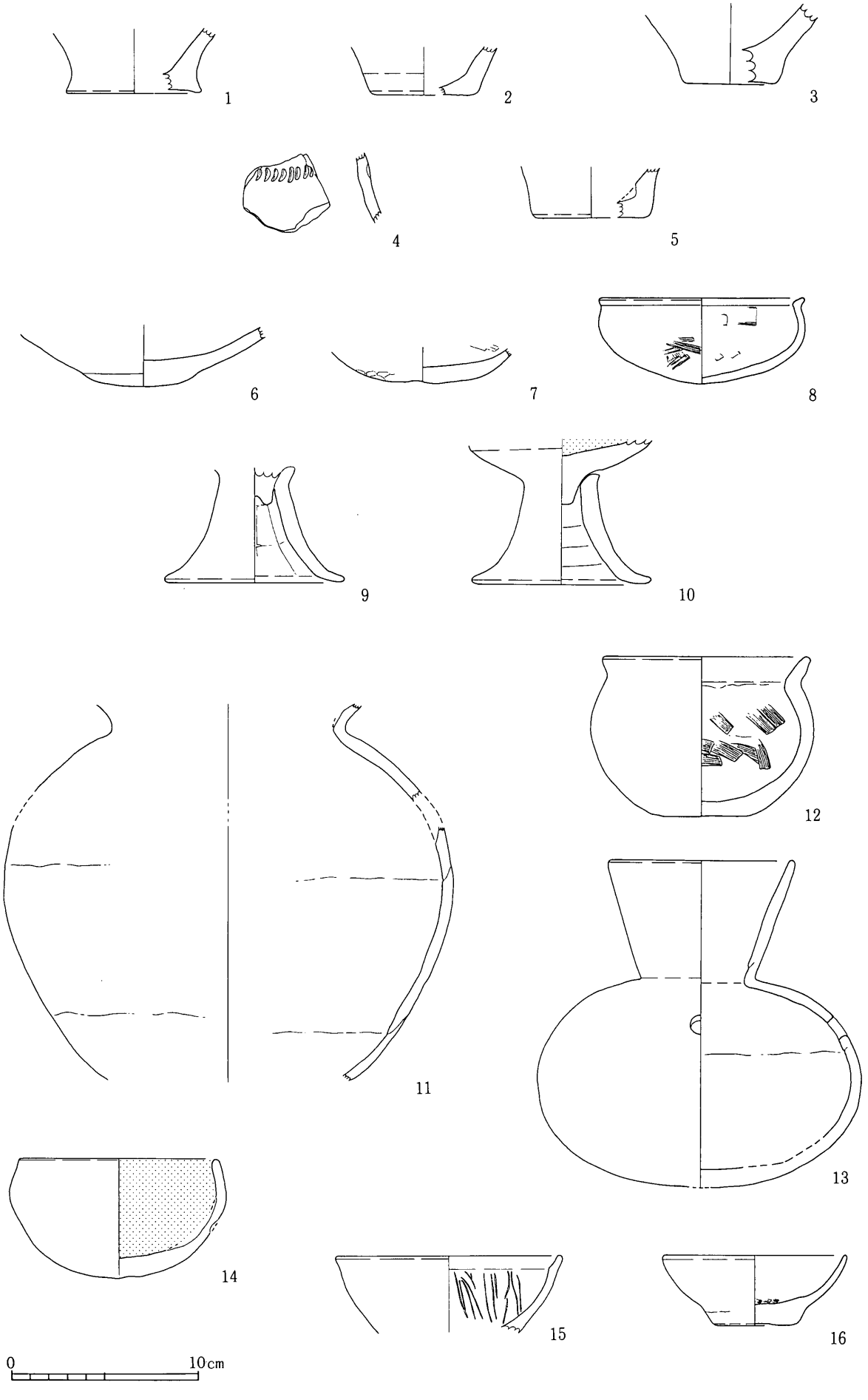
遺　物　図　版



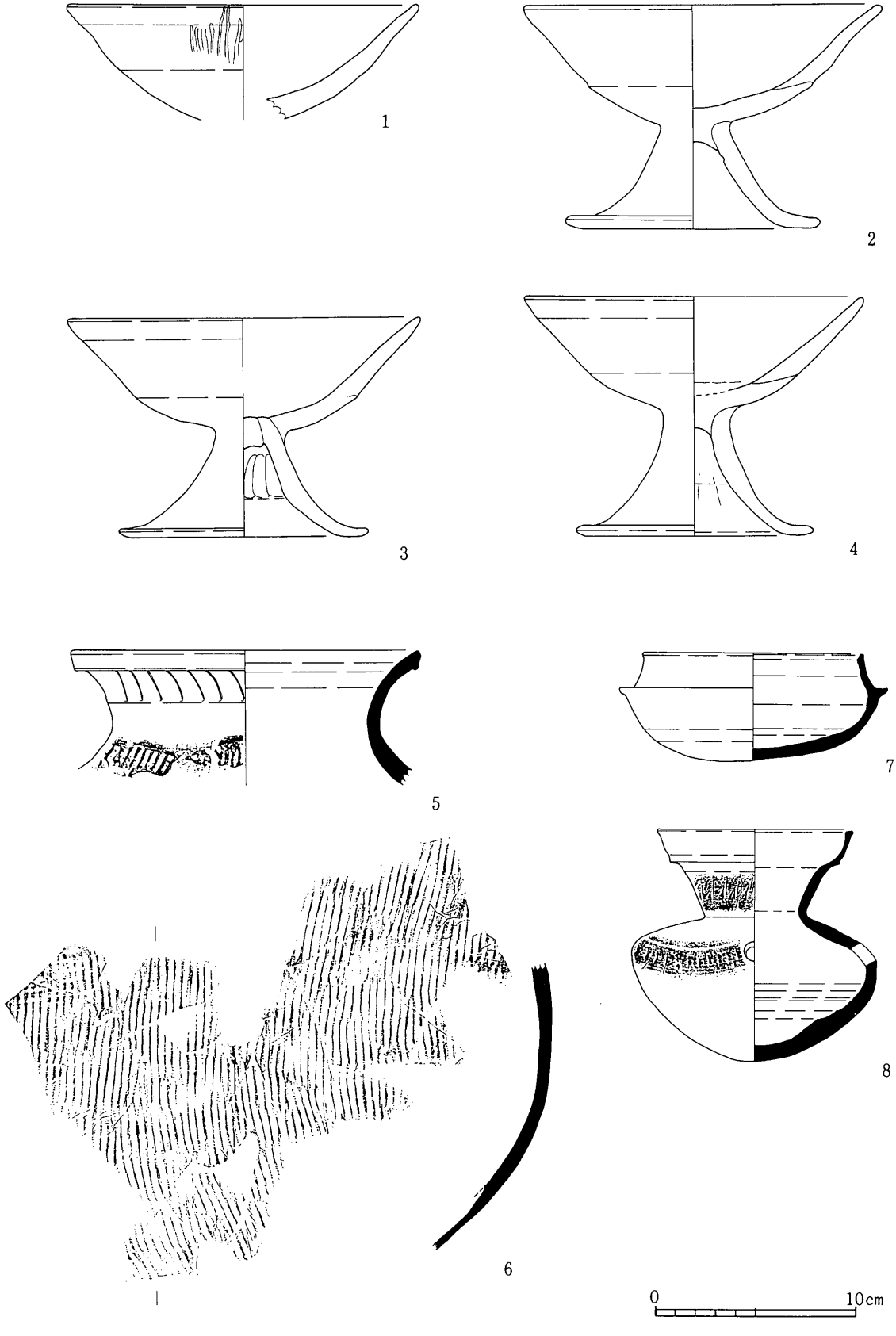
第56図　ＭＧＴ　１　ＳＢ04　２　ＳＢ12･15　３～14　ＳＭ03



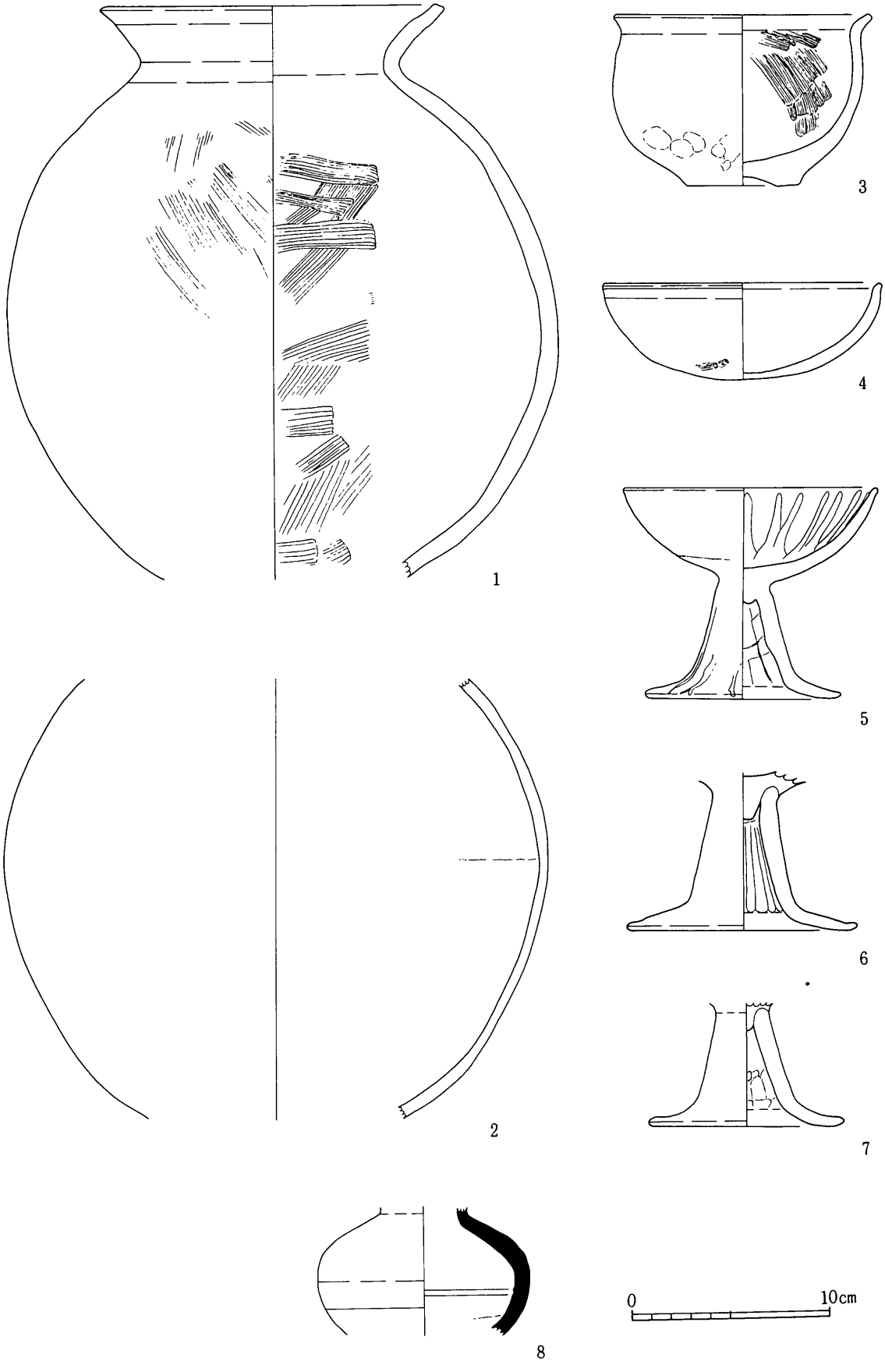
第57図　ＭＧＴ　ＳＭ04



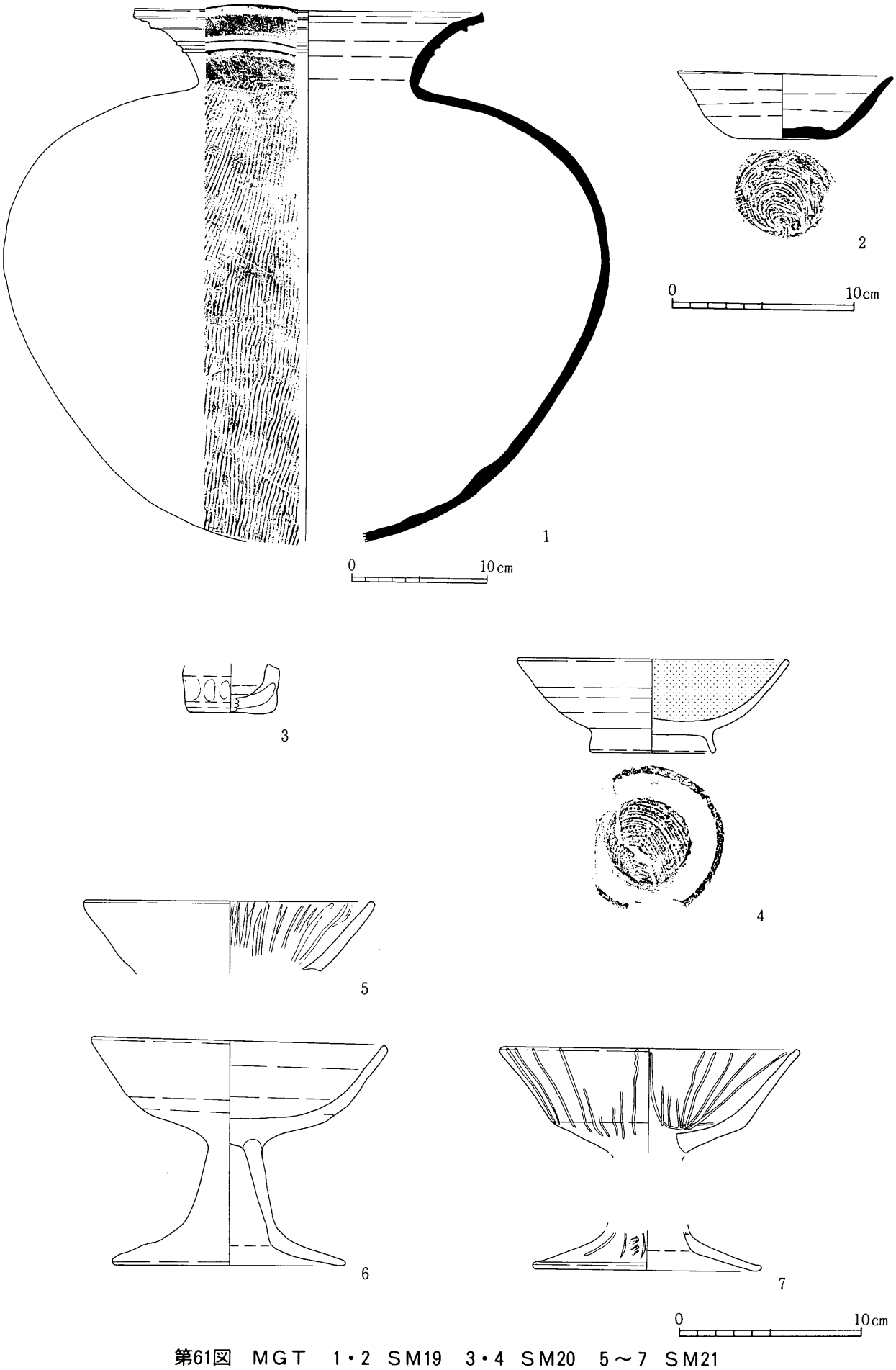
第58図　ＭＧＴ　１～３　ＳＭ06　４・５　ＳＭ10　６～10　ＳＭ15　11～16　ＳＭ07



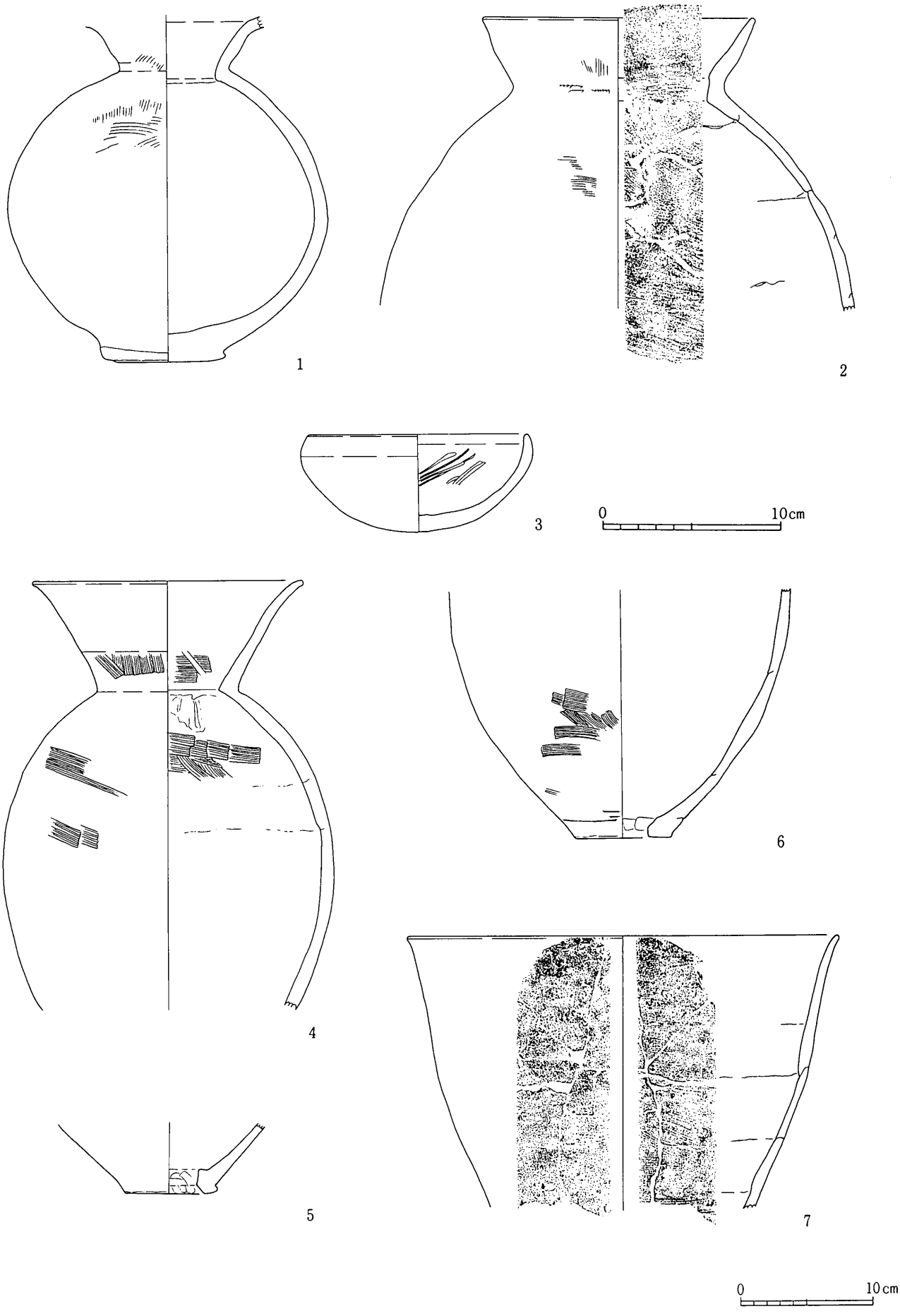
第59図　ＭＧＴ　ＳＭ07



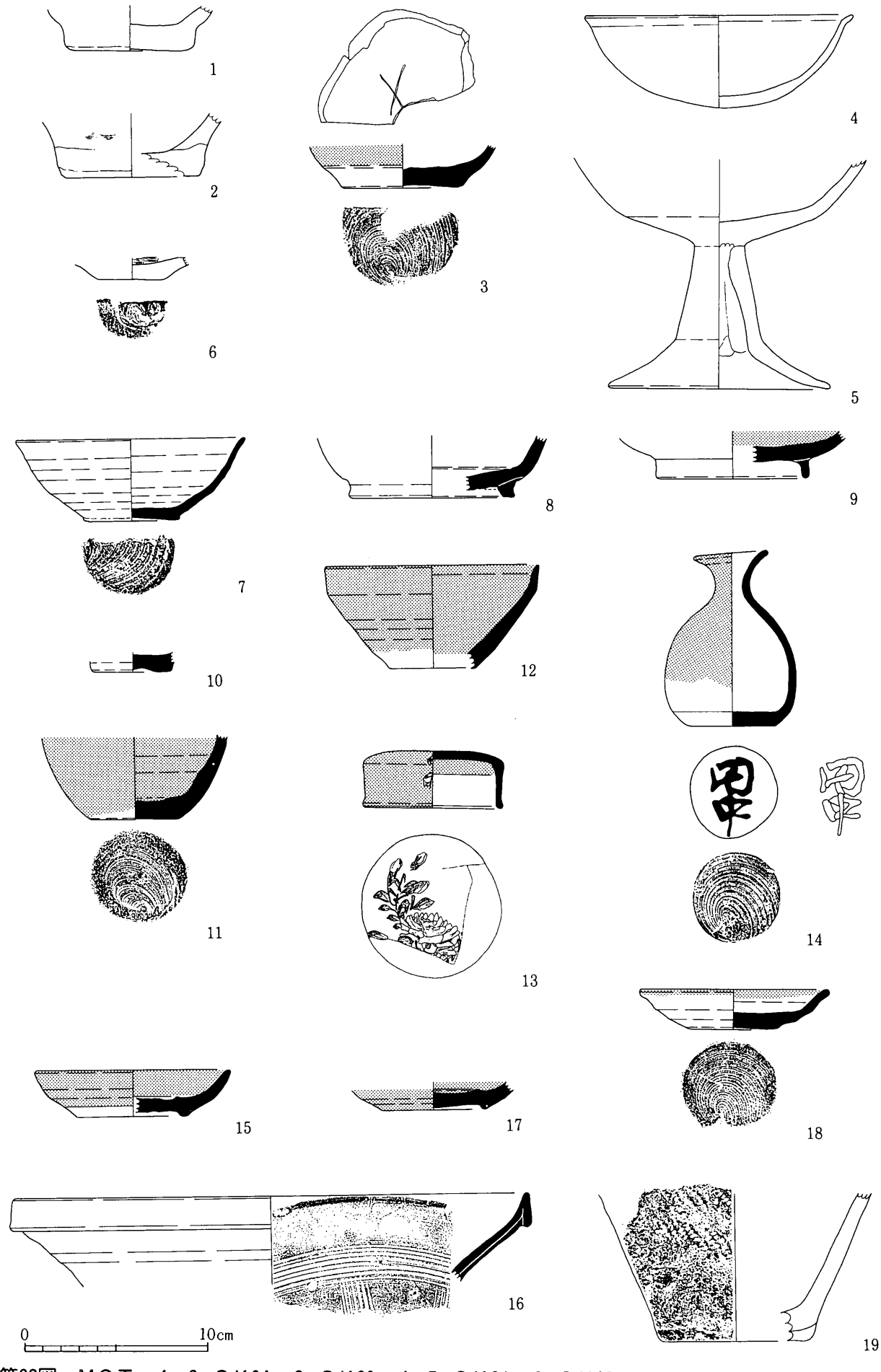
第60図　ＭＧＴ　ＳＭ18



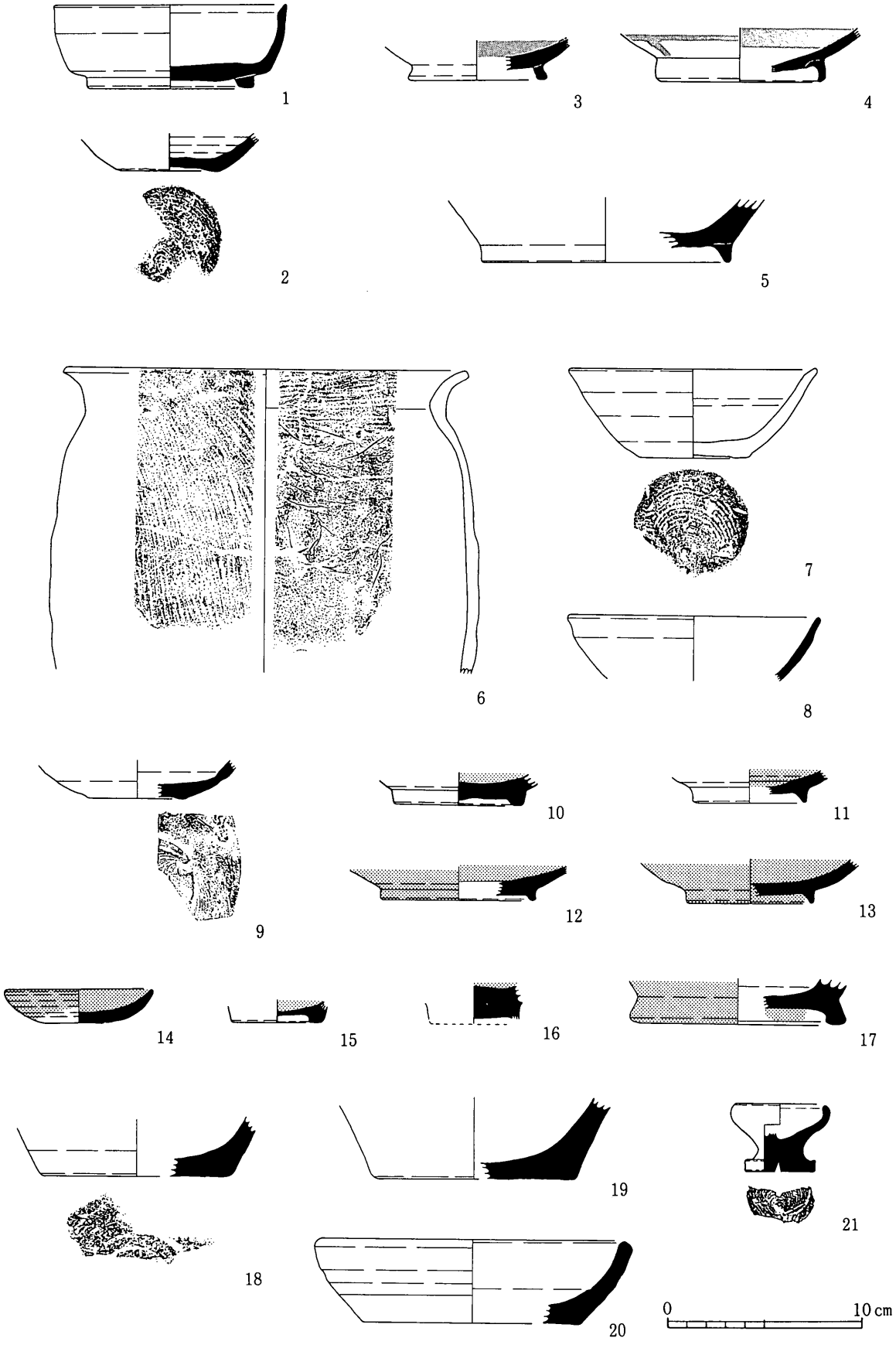
第61図　MGT　1・2　SM19　3・4　SM20　5～7　SM21



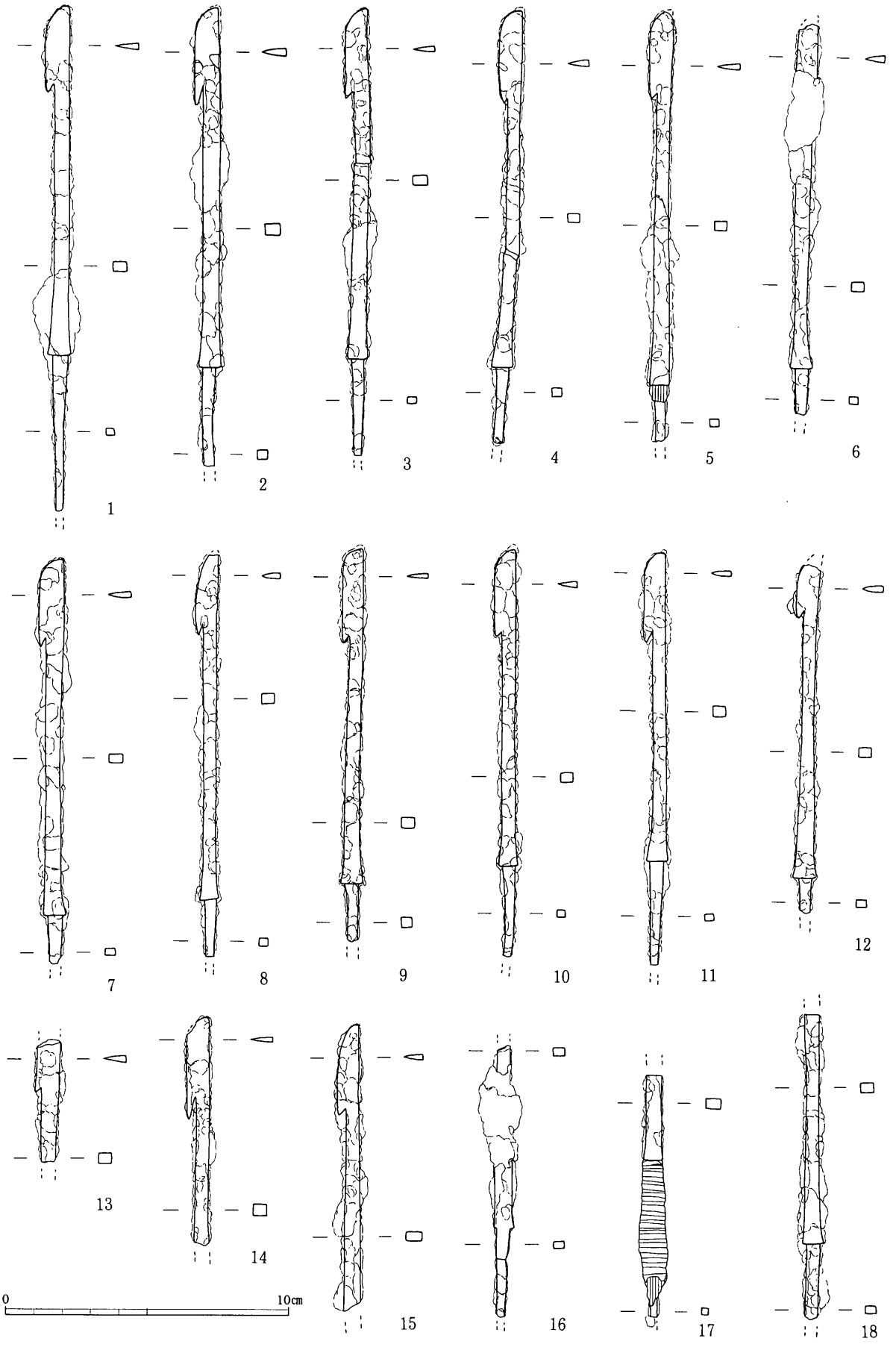
第62図　ＭＧＴ　ＳＭ22



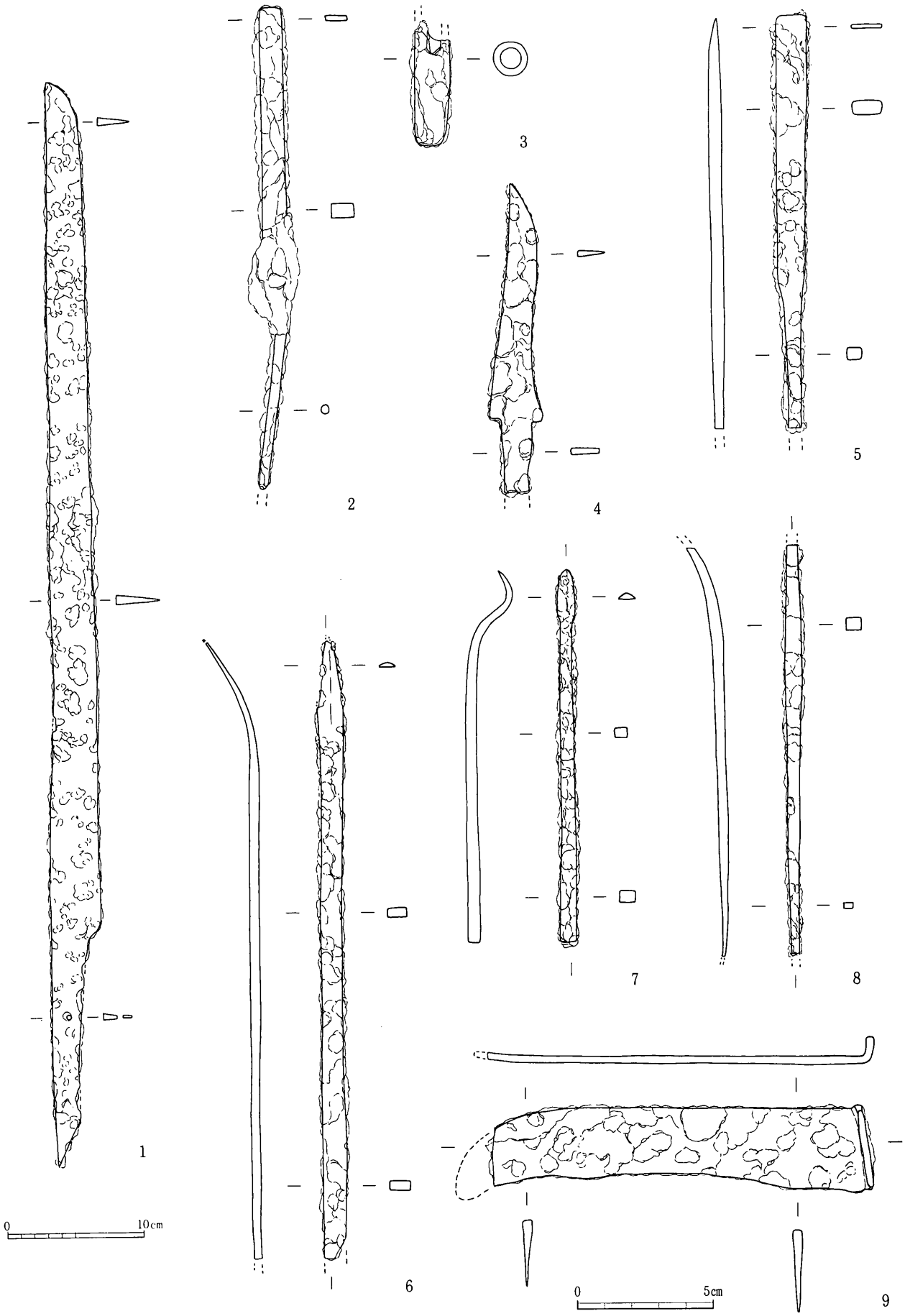
第63図　ＭＧＴ　1・2 ＳＫ04　3 ＳＫ20　4・5 ＳＫ24　6 ＳＫ29　7～9 ＳＫ31　10・11 ＳＫ51
12・13 ＳＫ54　14 ＳＫ82　15・16 ＳＫ55　17 ＳＫ57　18 ＳＫ77　19 ＳＫ63



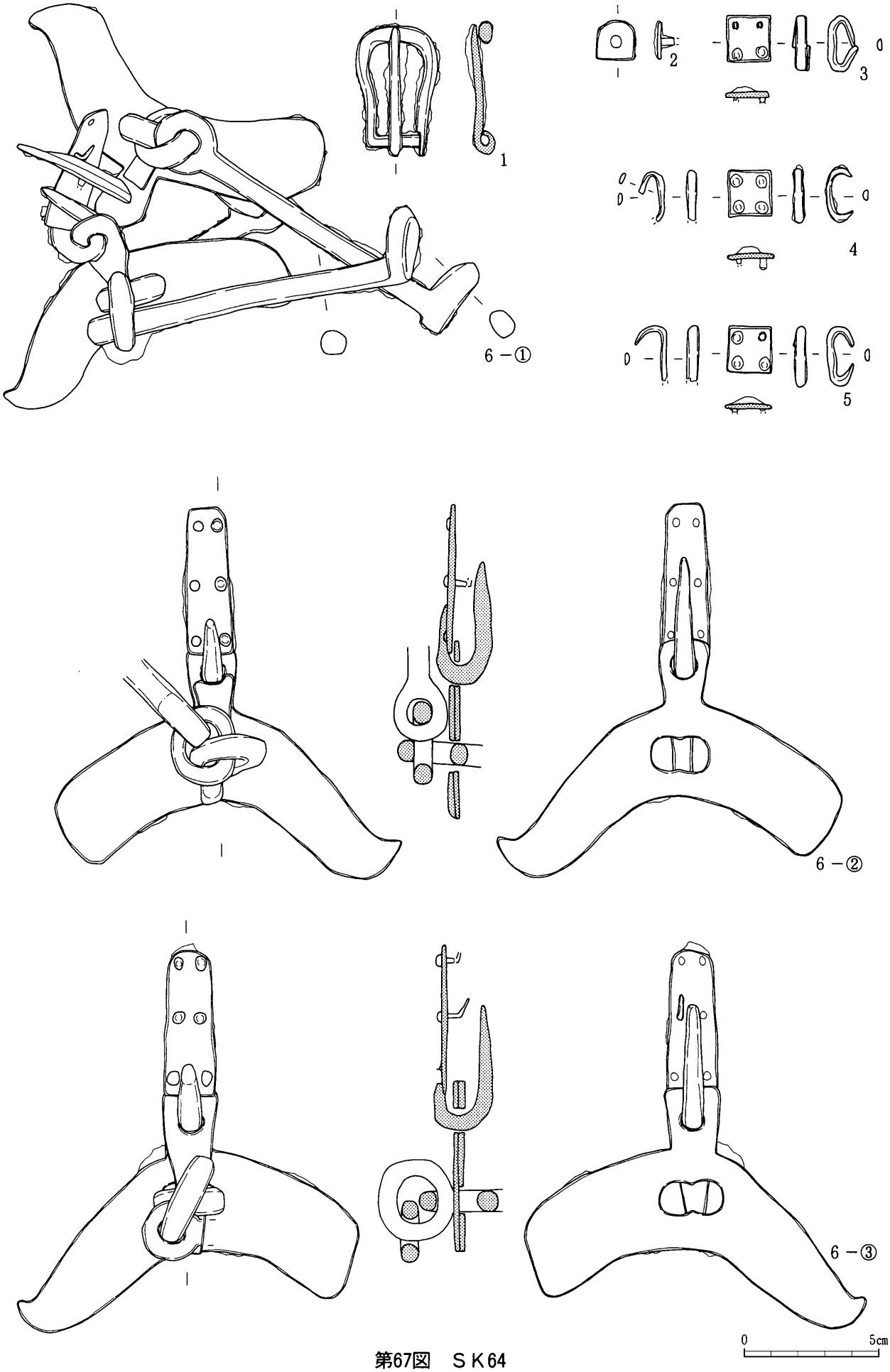
第64図　ＭＧＴ　１～５　ＳＭ04(覆土)　６～21 遺構外



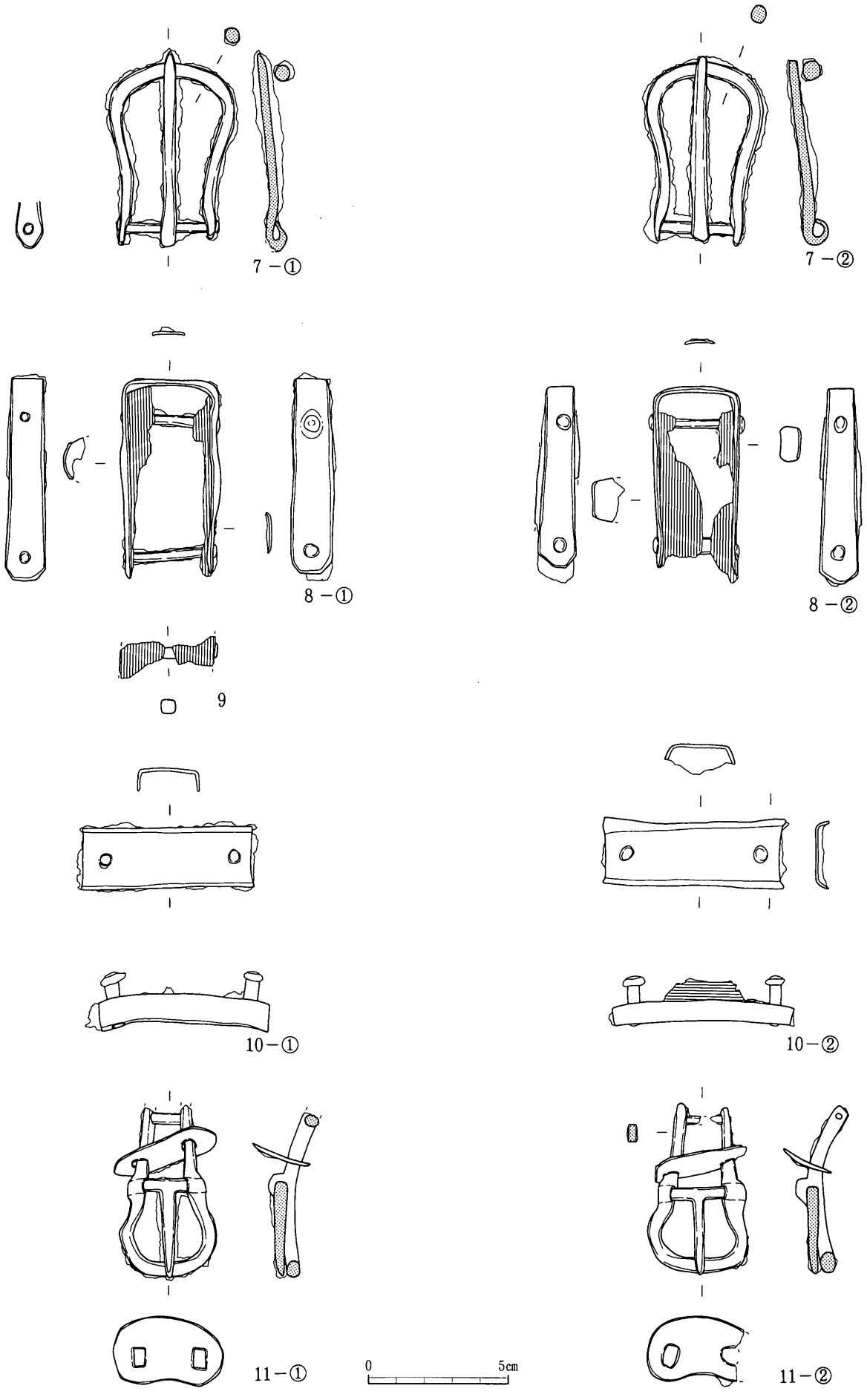
第65図　ＭＧＴ　ＳＭ03



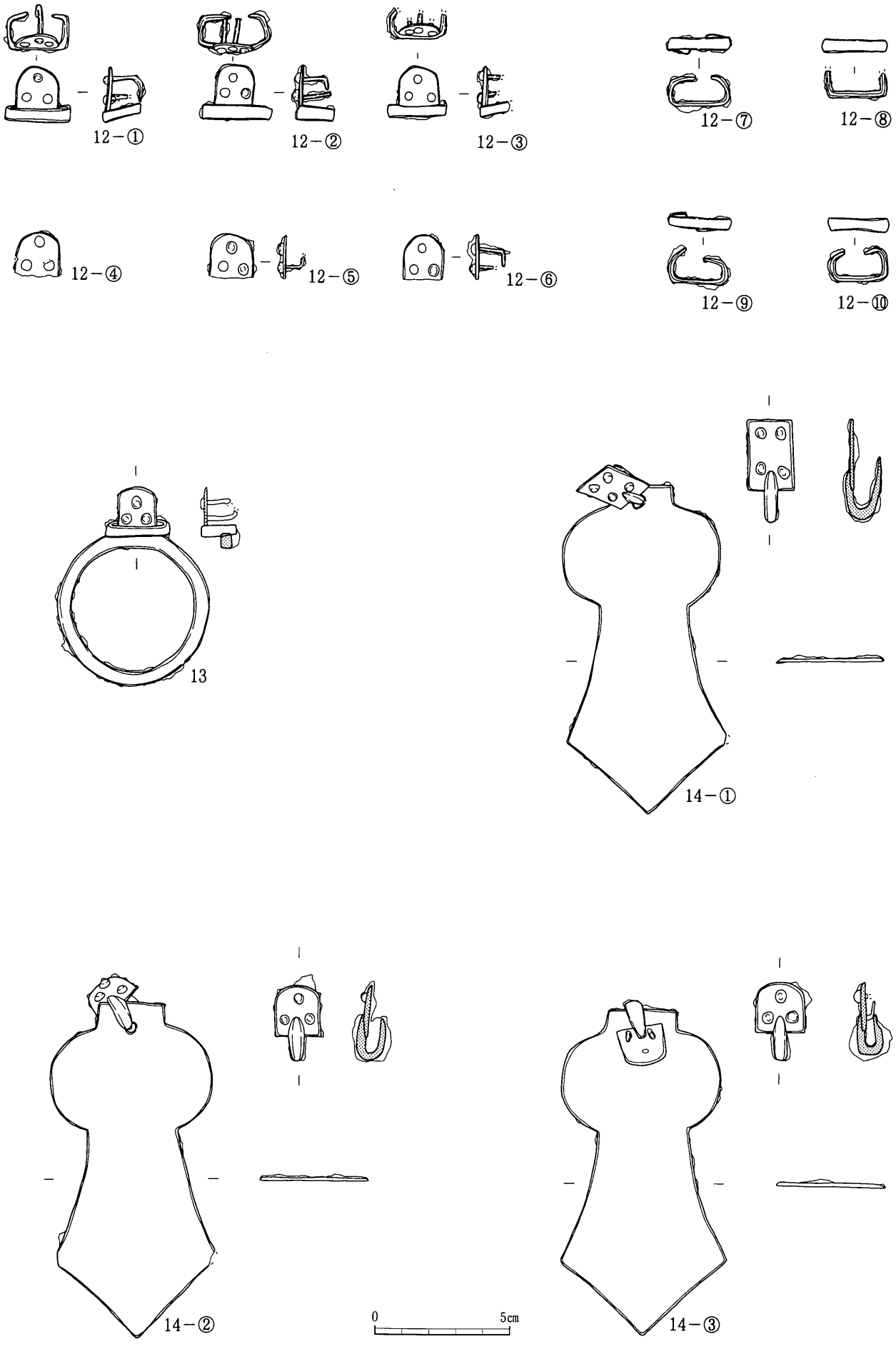
第66図　MGT　1 SM03　2・3 SM04　4～9 SM07



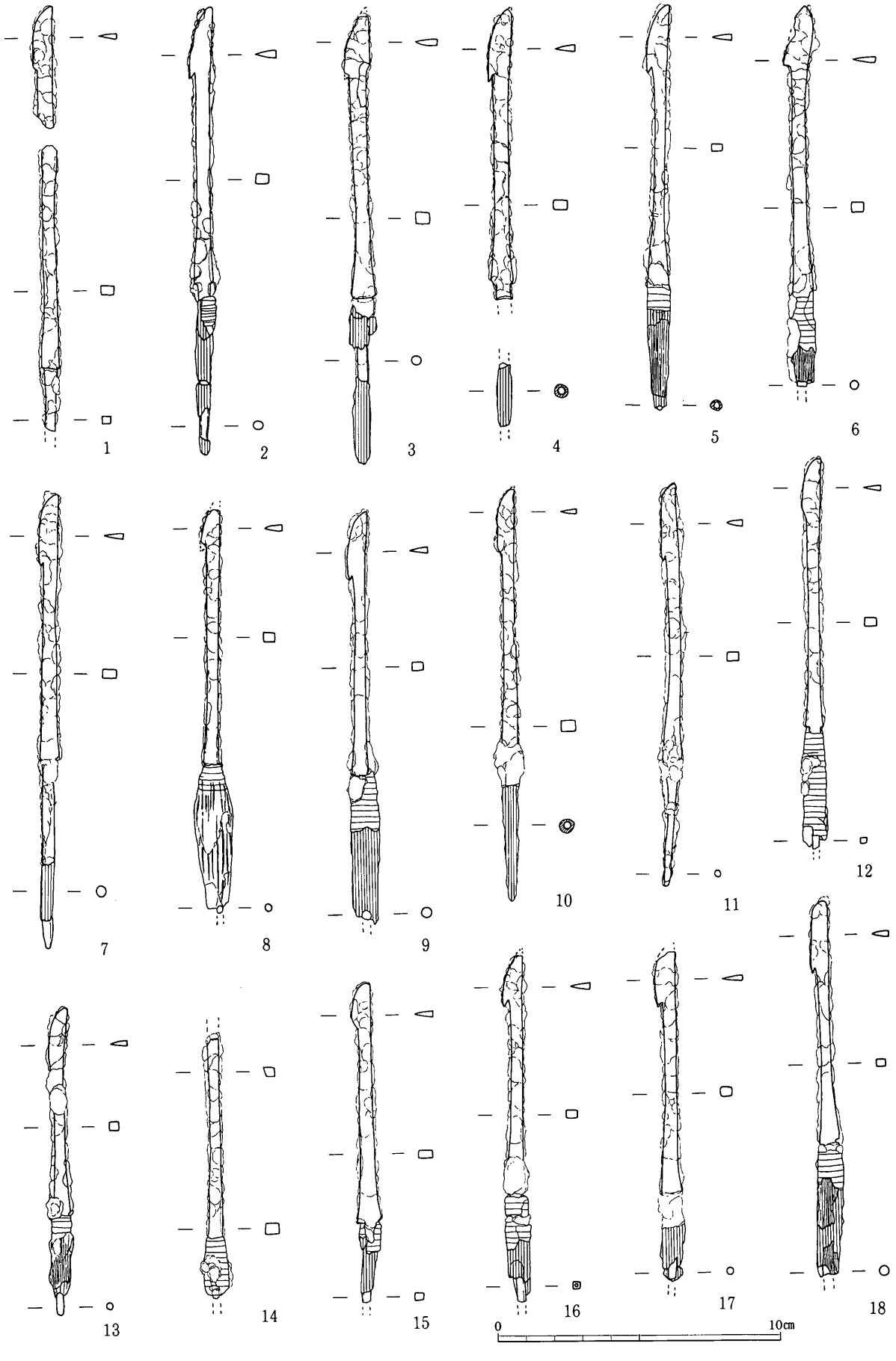
第67図　ＳＫ64



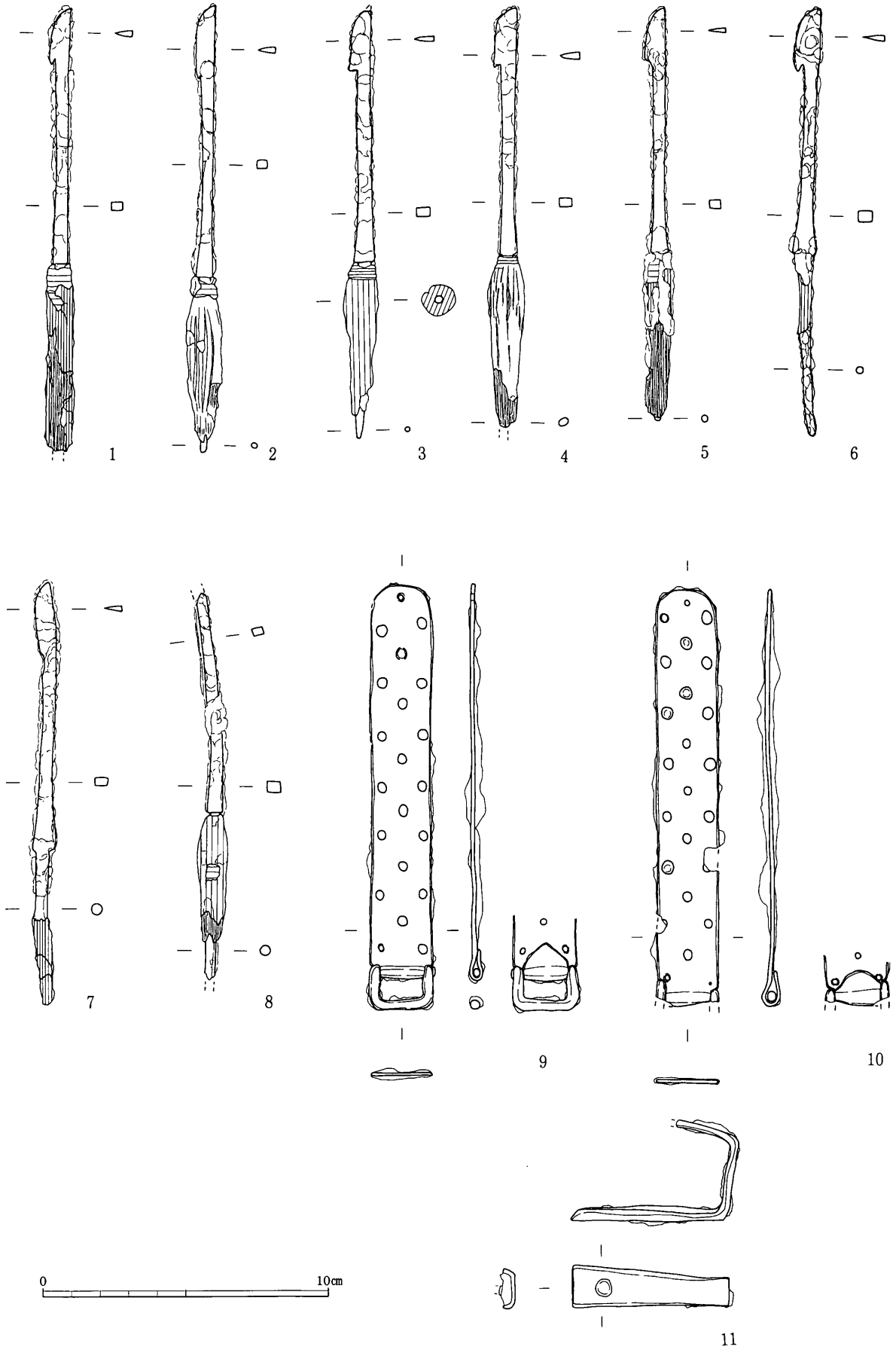
第68図　ＳＫ64



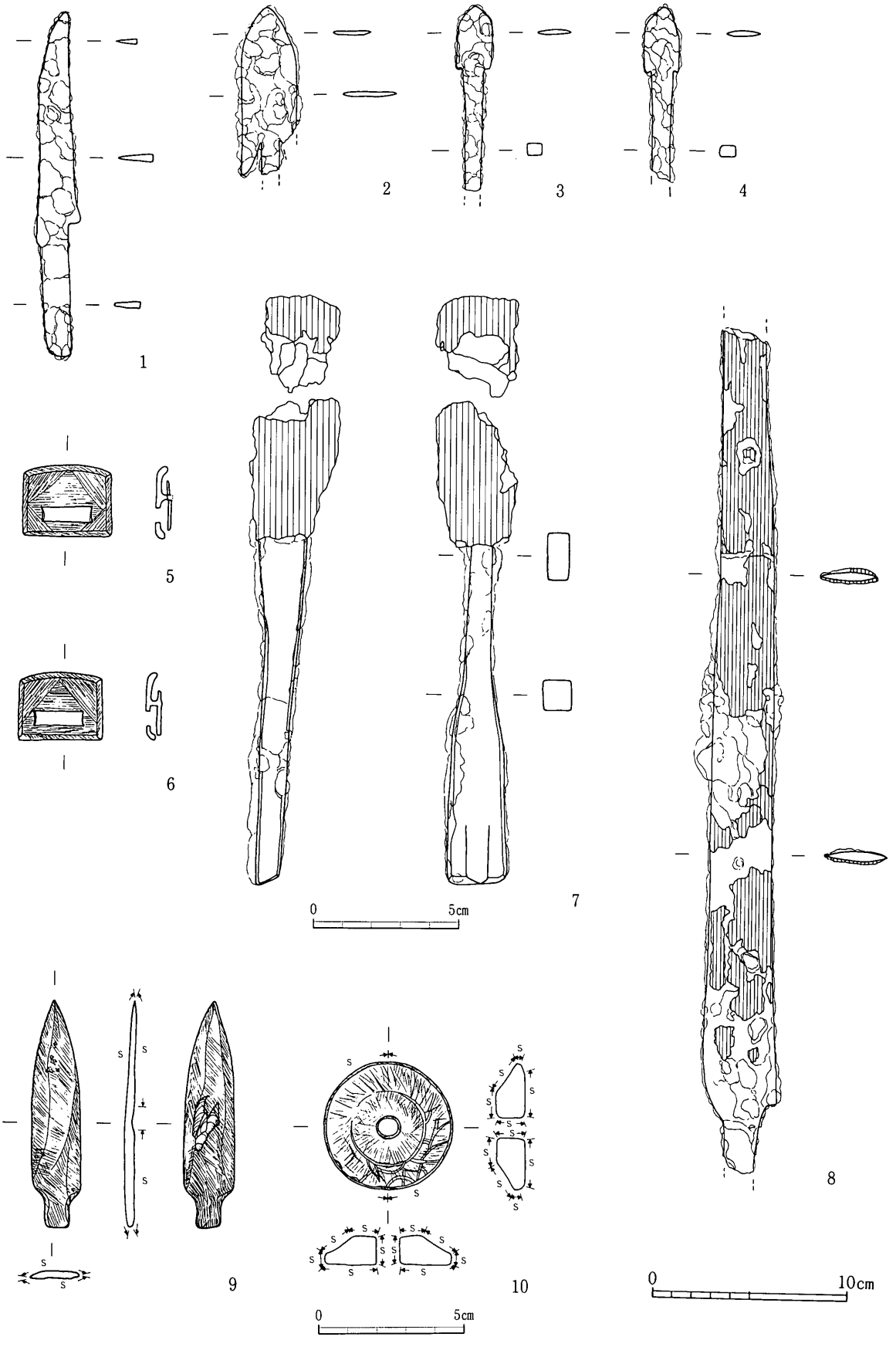
第69図　ＳＫ64



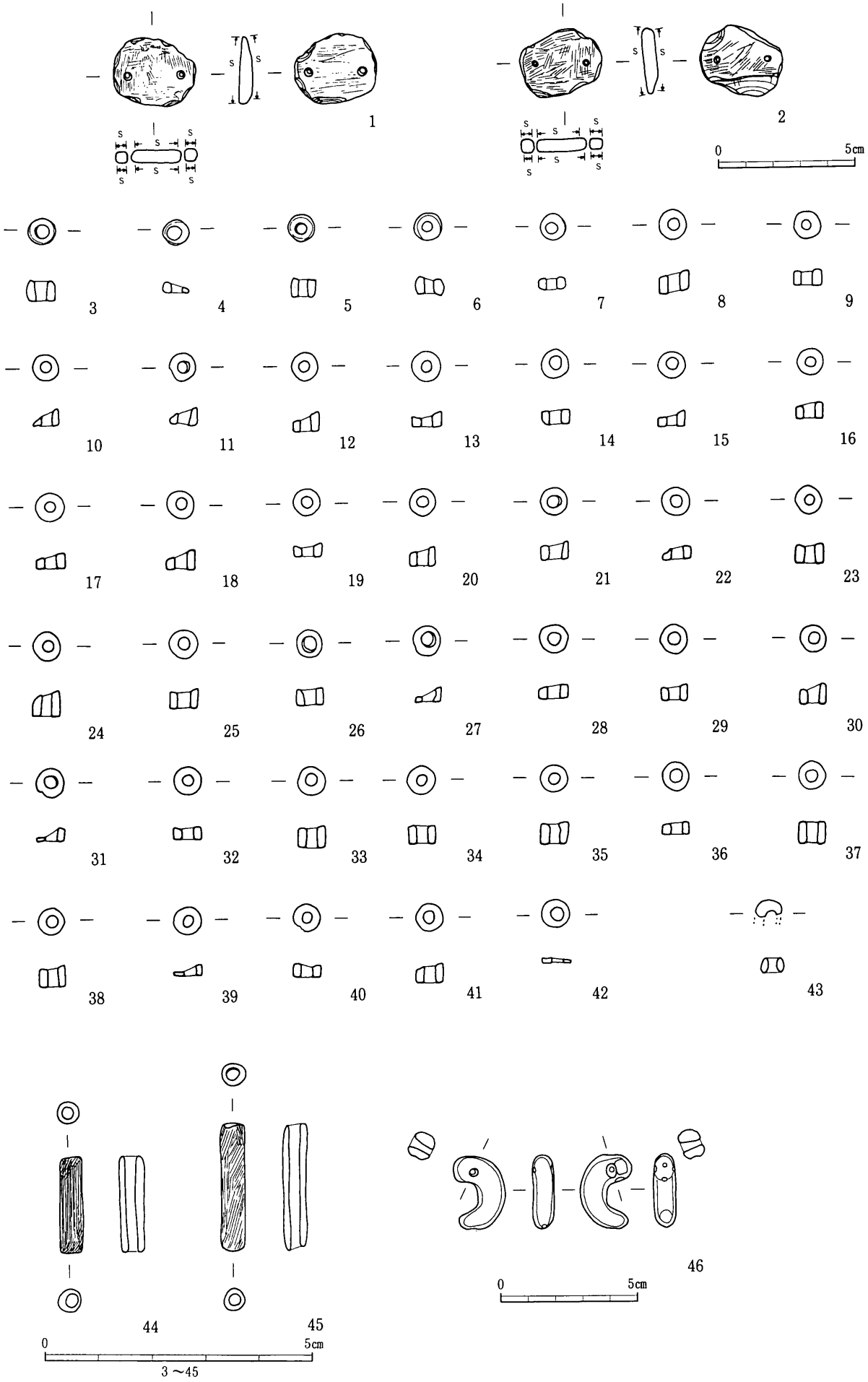
第70図　ＭＧＴ　ＳＫ18



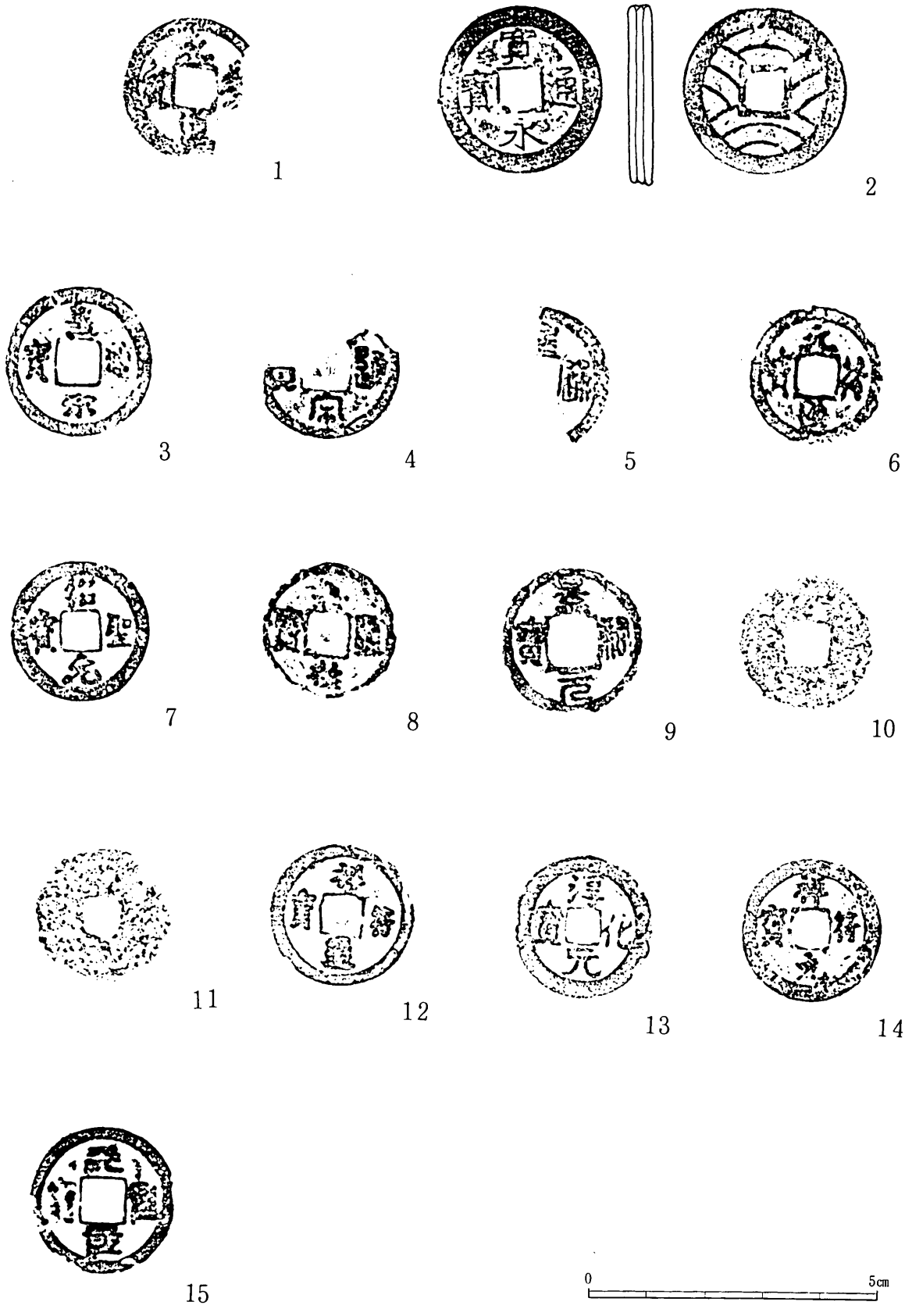
第71図　ＭＧＴ　ＳＫ18



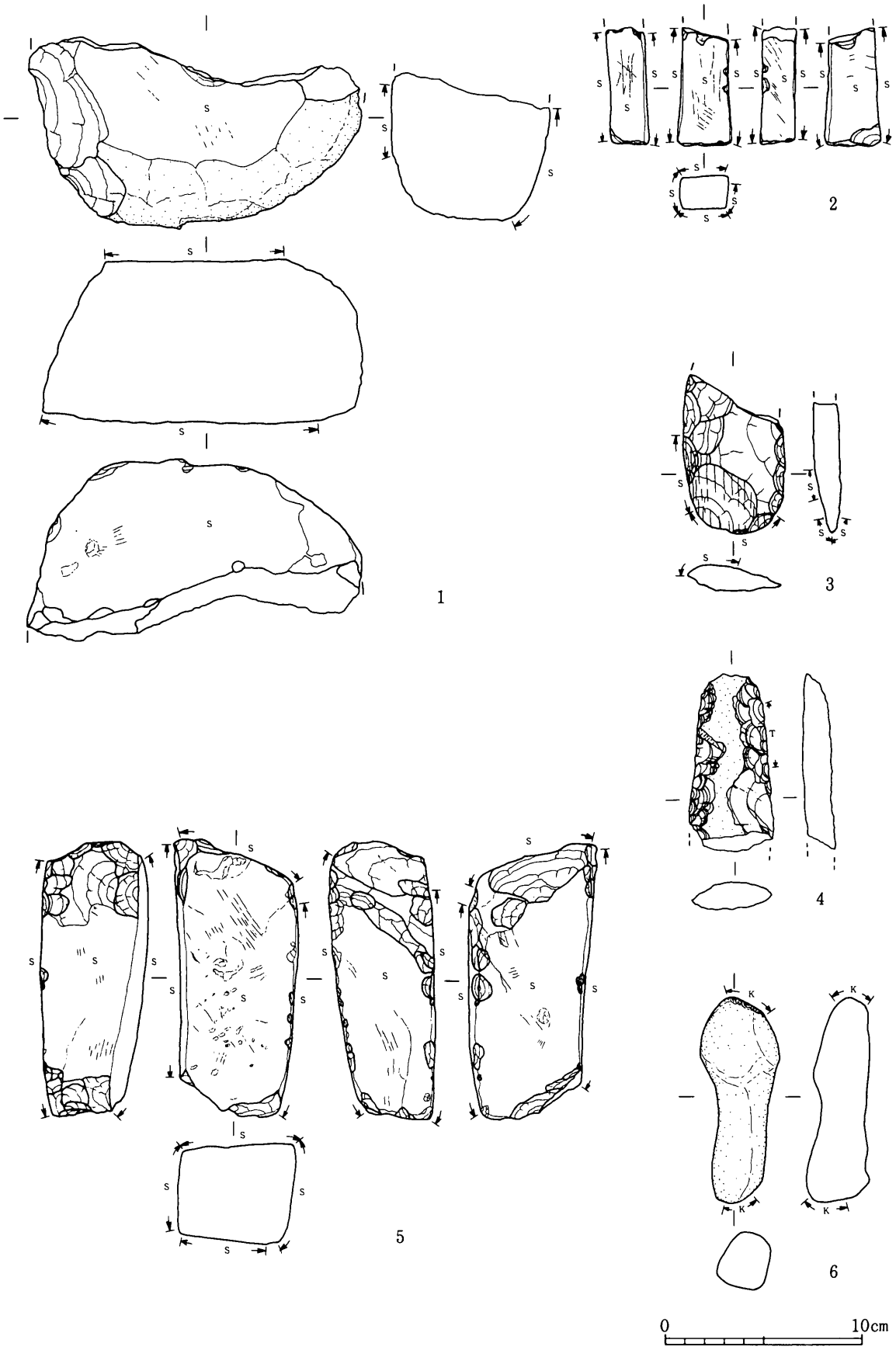
第72図　ＭＧＴ　1　ＳＭ19　2～4　ＳＭ21　5・6　ＳＫ19　7・8　遺構外　9・10　ＳＭ04



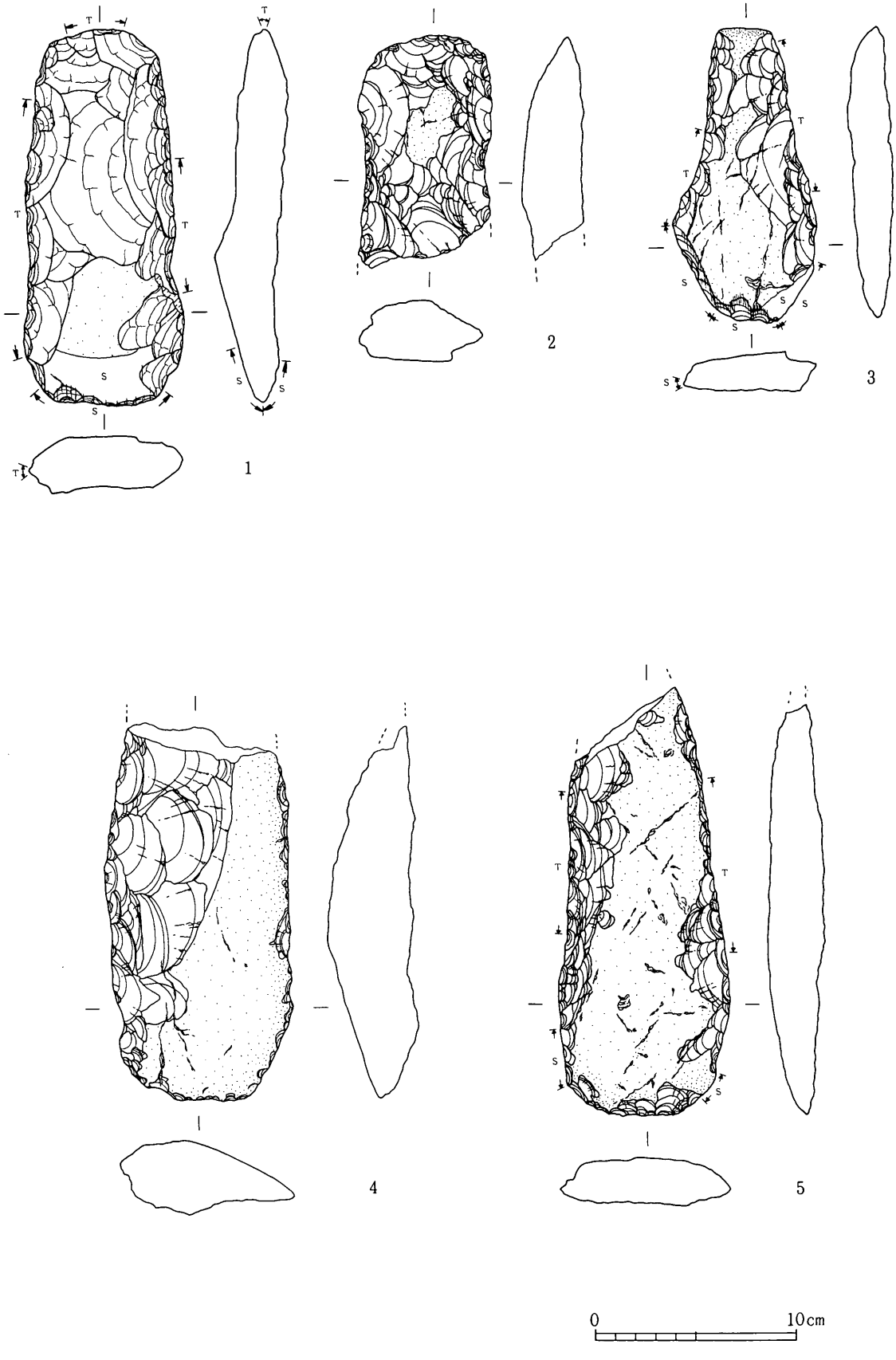
第73図　ＭＧＴ　ＳＭ07



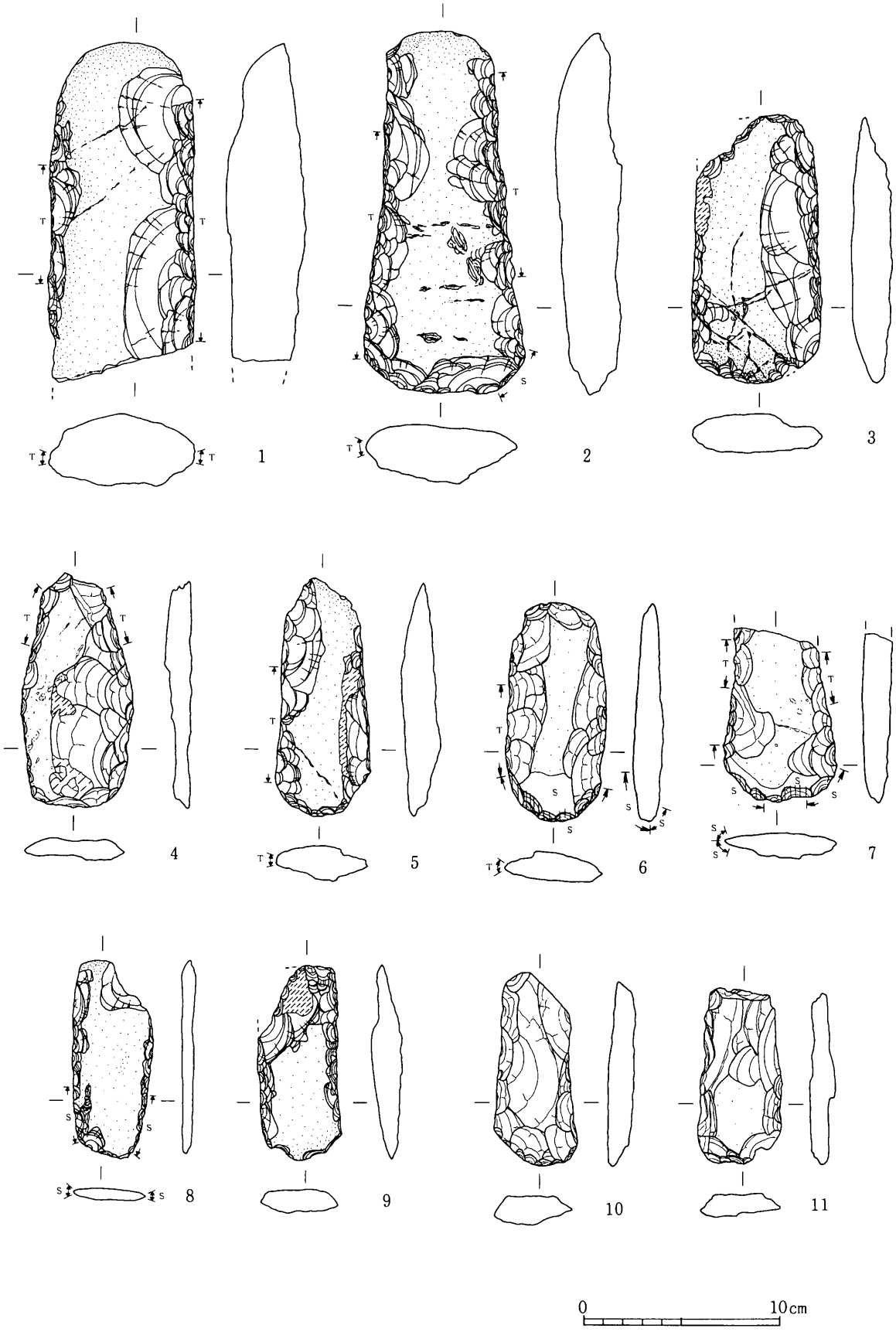
第74図　ＭＧＴ　1　ＳＢ03　2　ＳＫ54　3～8　ＳＫ76　9　ＳＫ81　10～15 遺構外



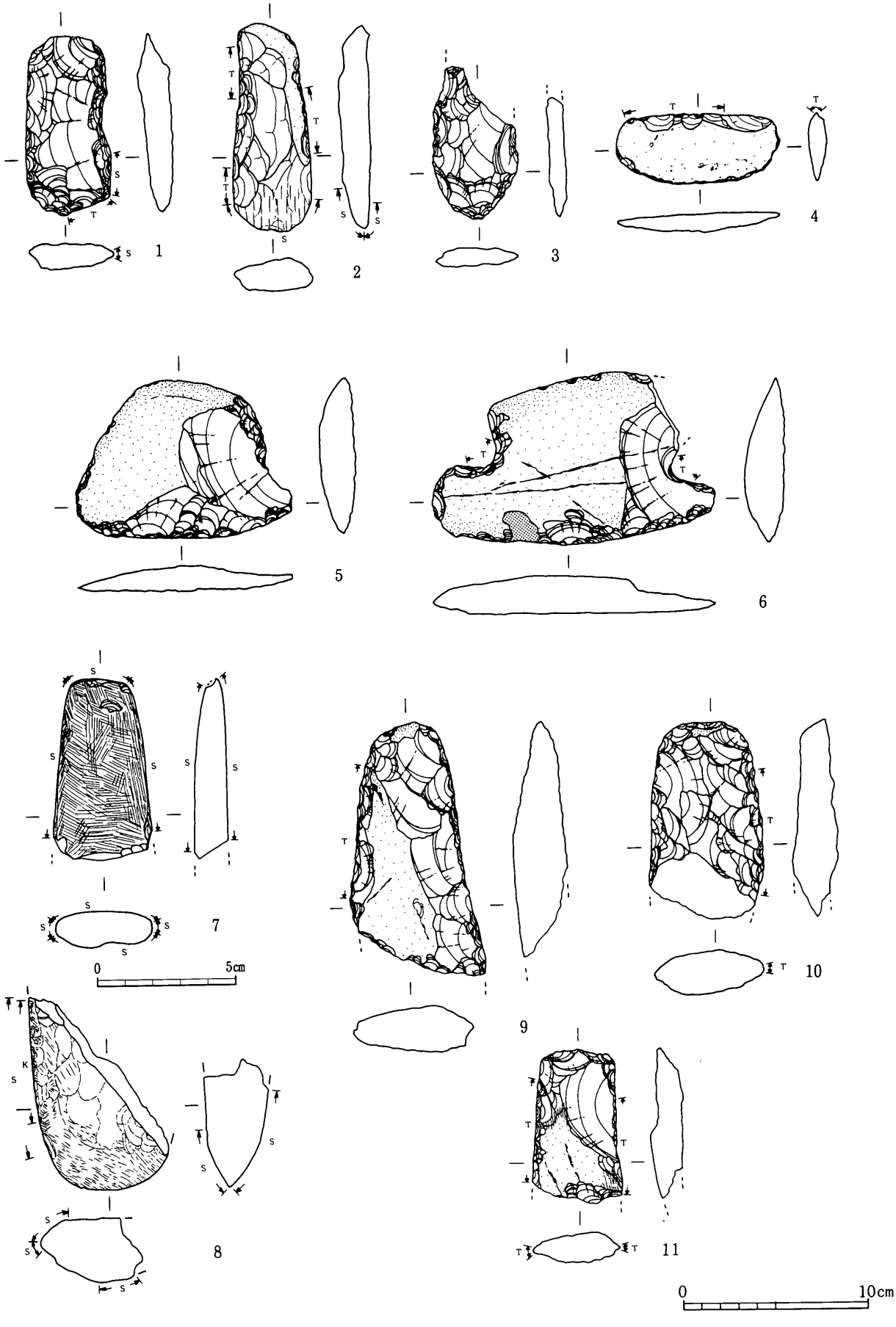
第75図　ＭＧＴ　1 ＳＢ04　2 ＳＢ15　3 ＳＫ13　4 ＳＫ34　5 ＳＫ36　6 ＳＫ57



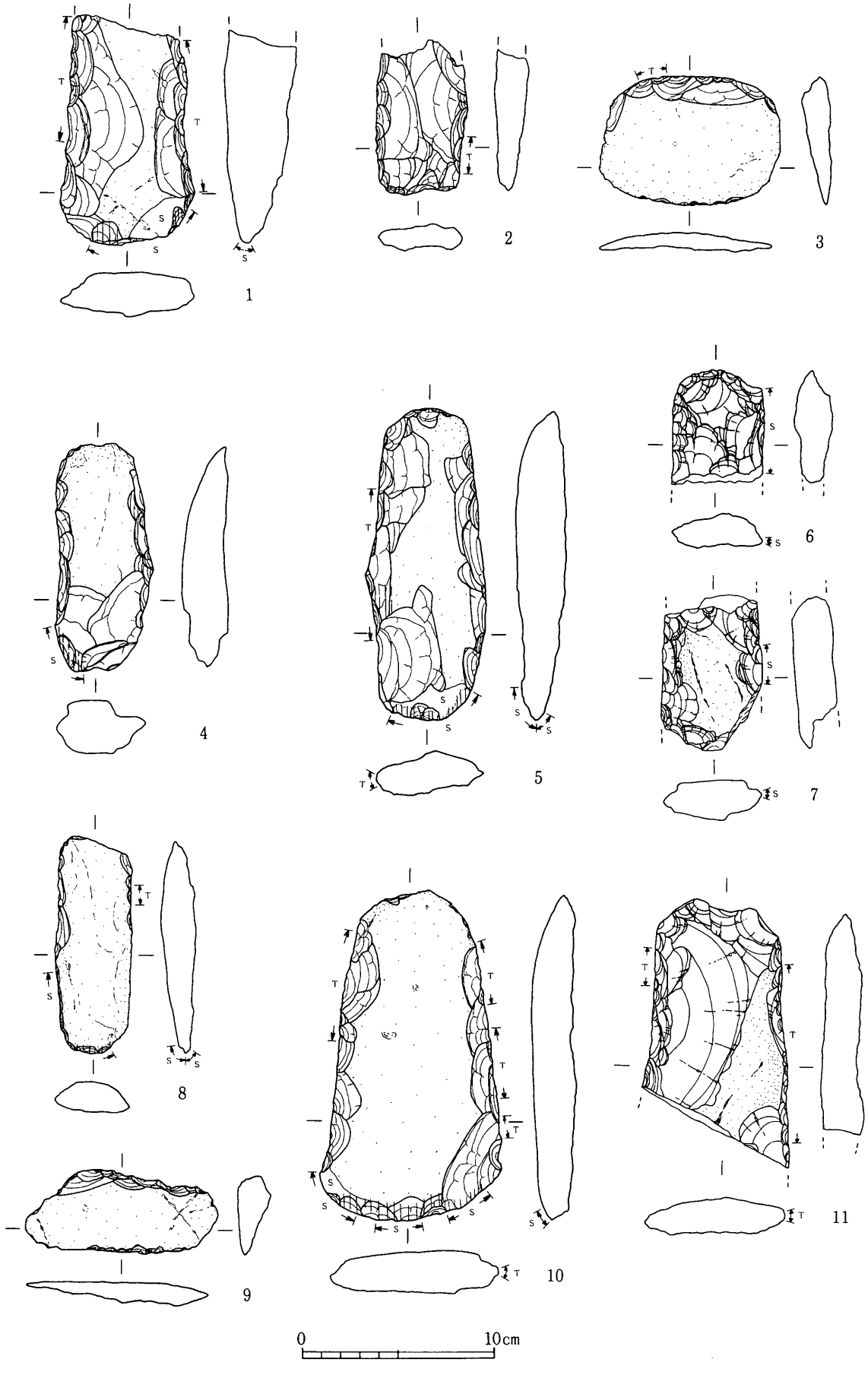
第76図　ＭＧＴ　１～３　ＳＭ03　４～５　ＳＭ04



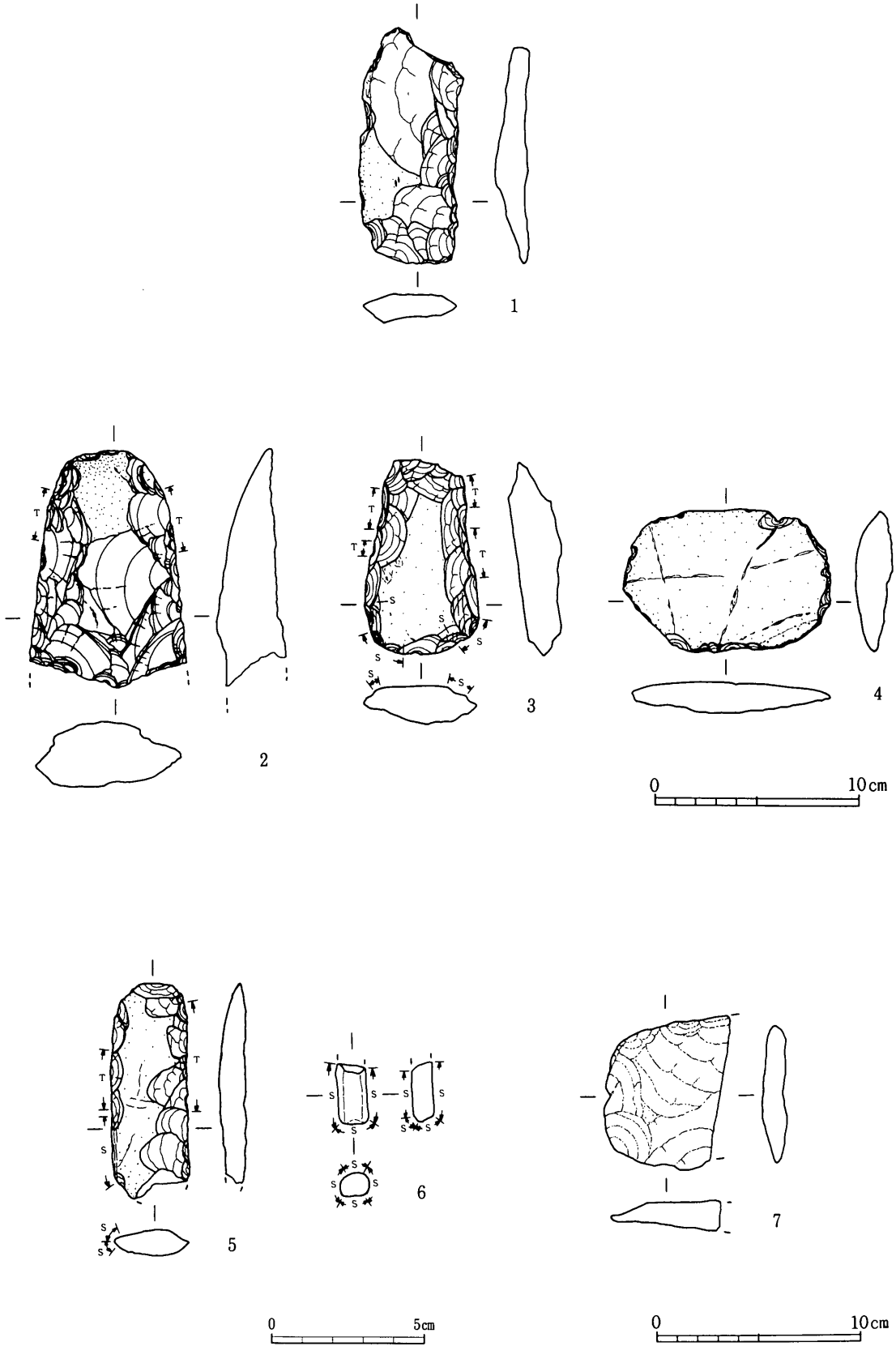
第77図　ＭＧＴ　ＳＭ04



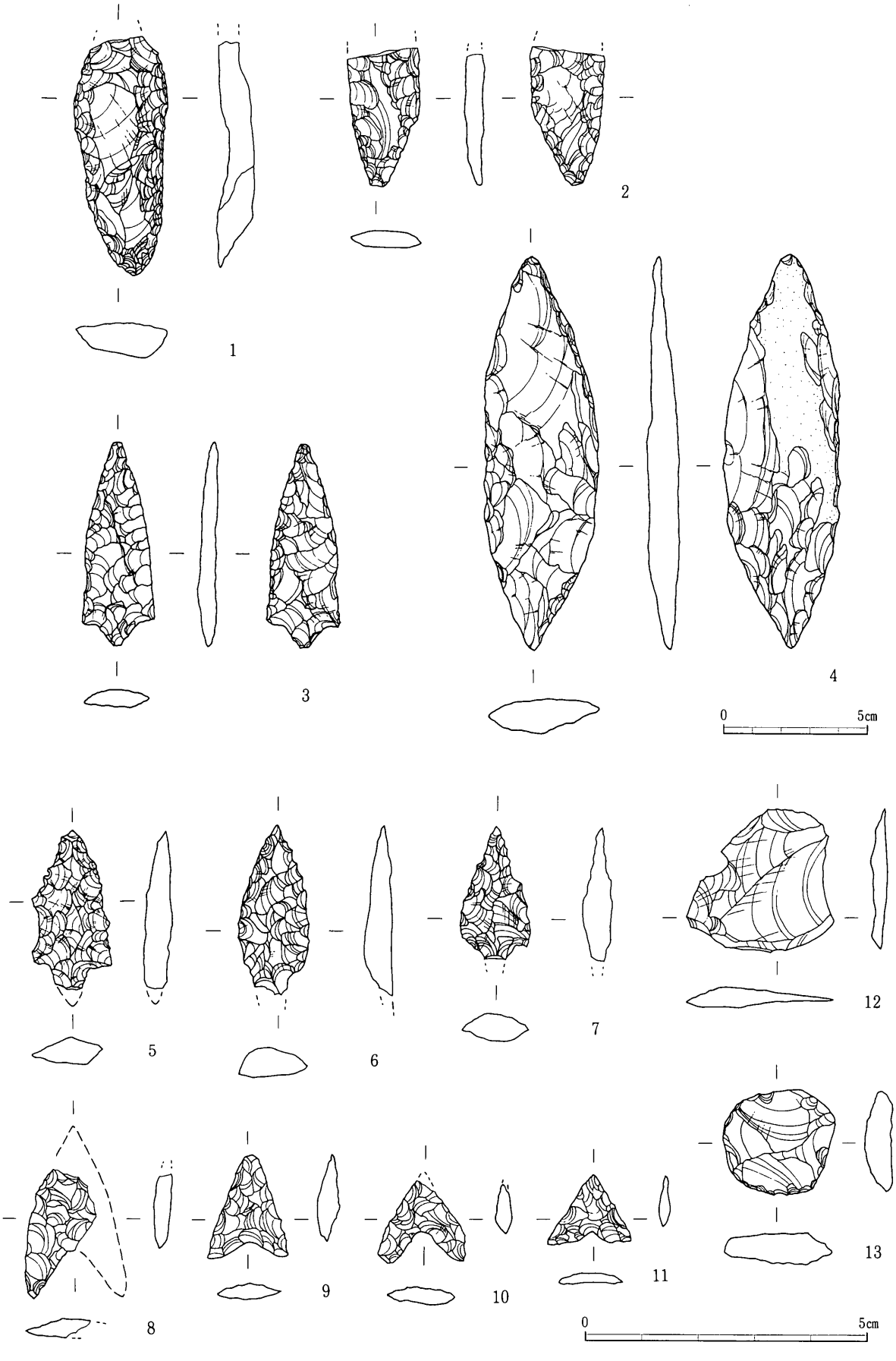
第78図　MGT　1～8　SM04　9～11　SM06



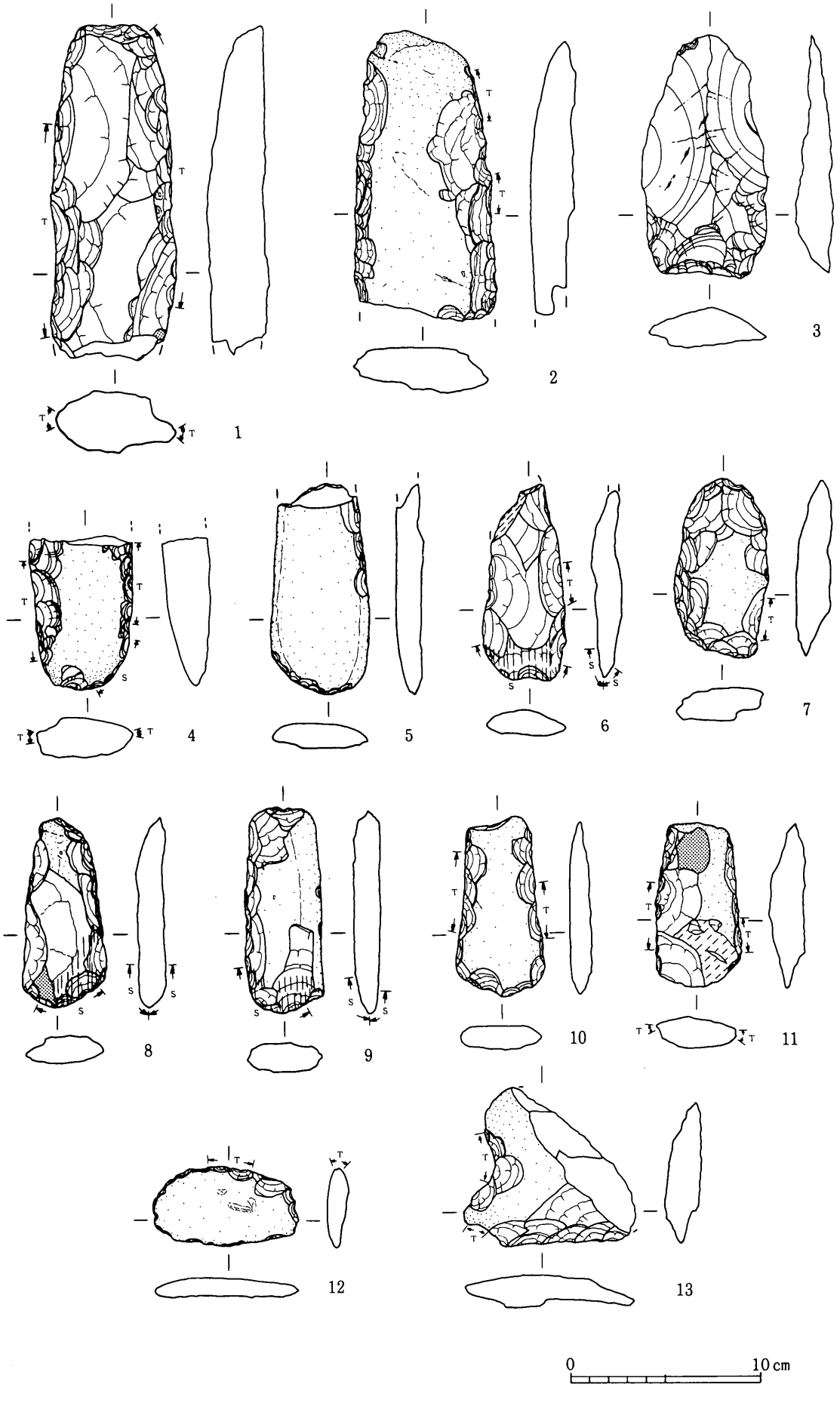
第79図　ＭＧＴ　1～3　ＳＭ07　4　ＳＭ12　5～9　ＳＭ15　10～11　ＳＭ18



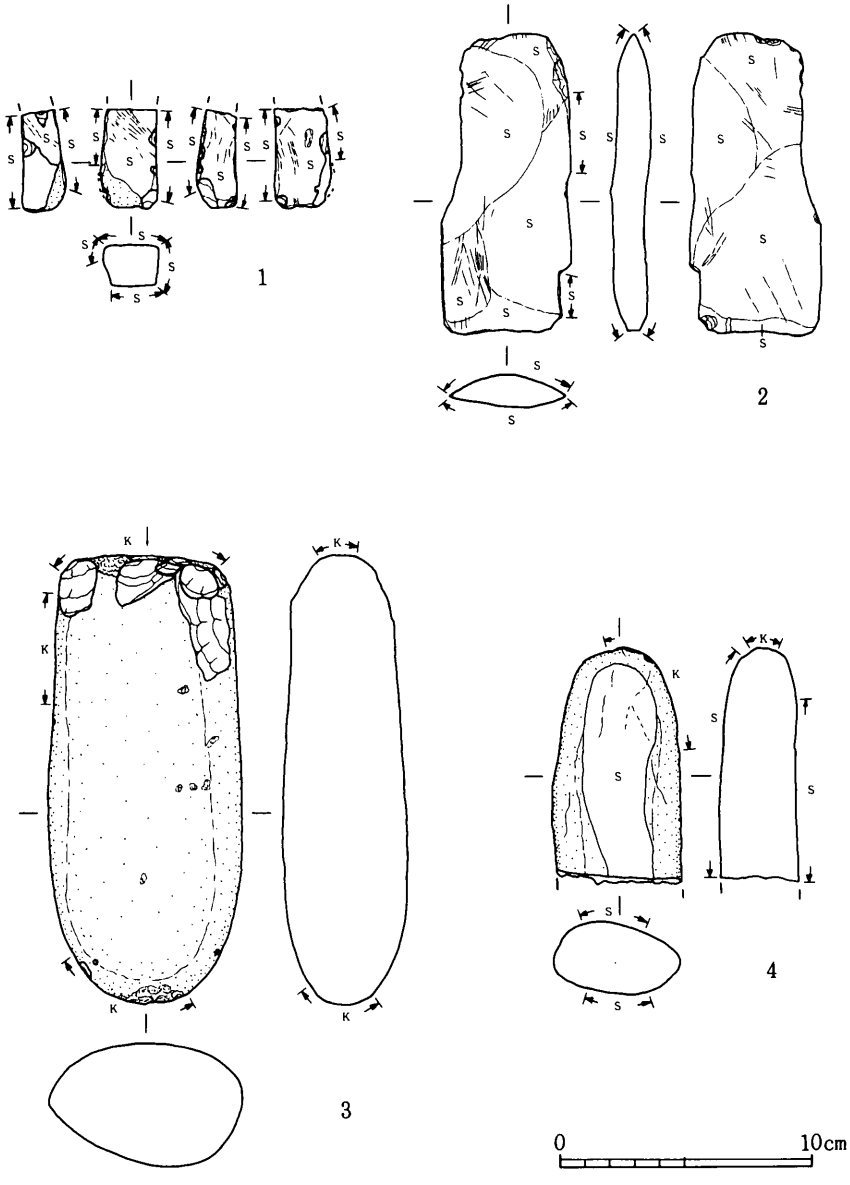
第80図　MGT　1 SM22　2～4 SK82　5・6 SD01　7 SD09



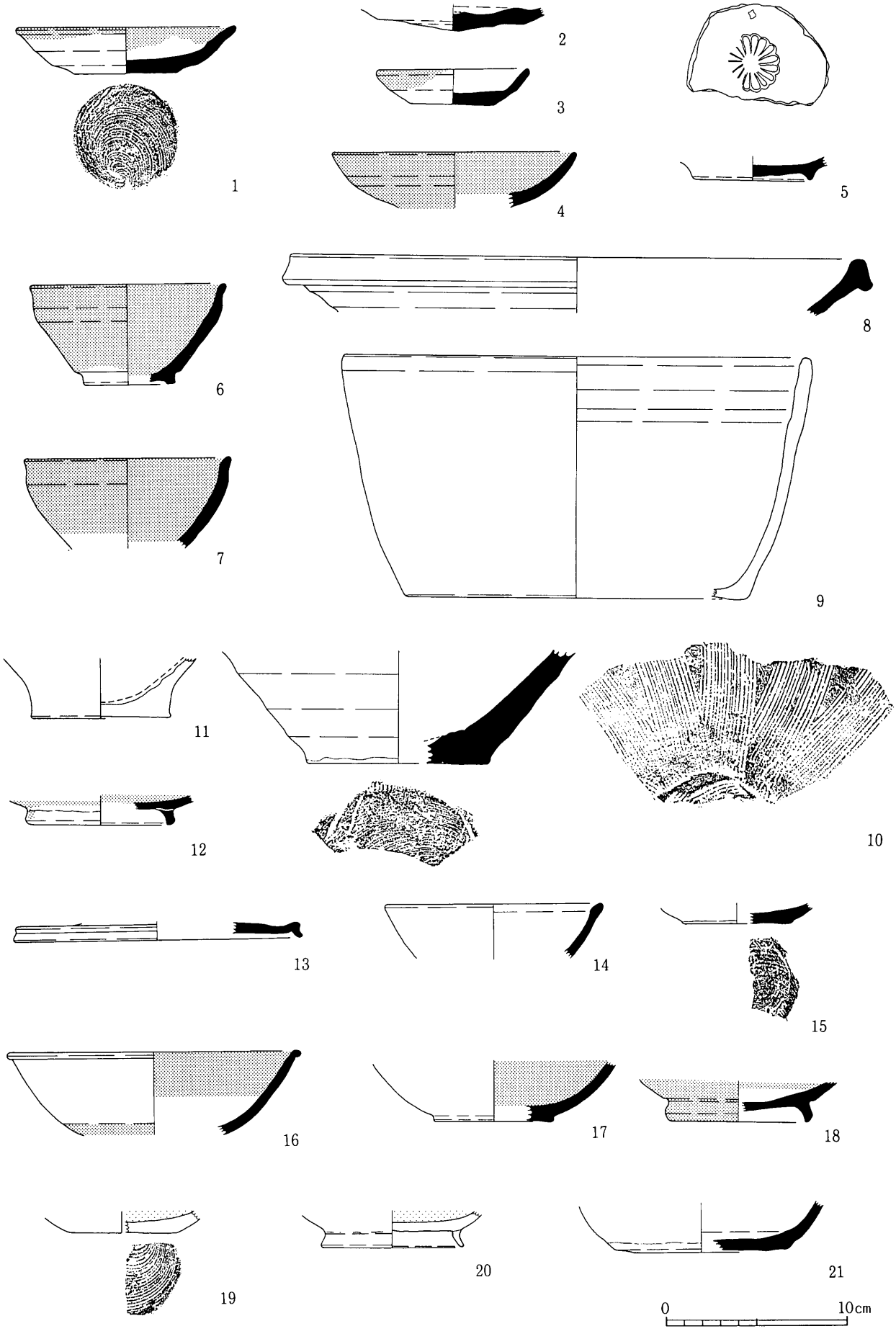
第81図　ＭＧＴ　遺構外



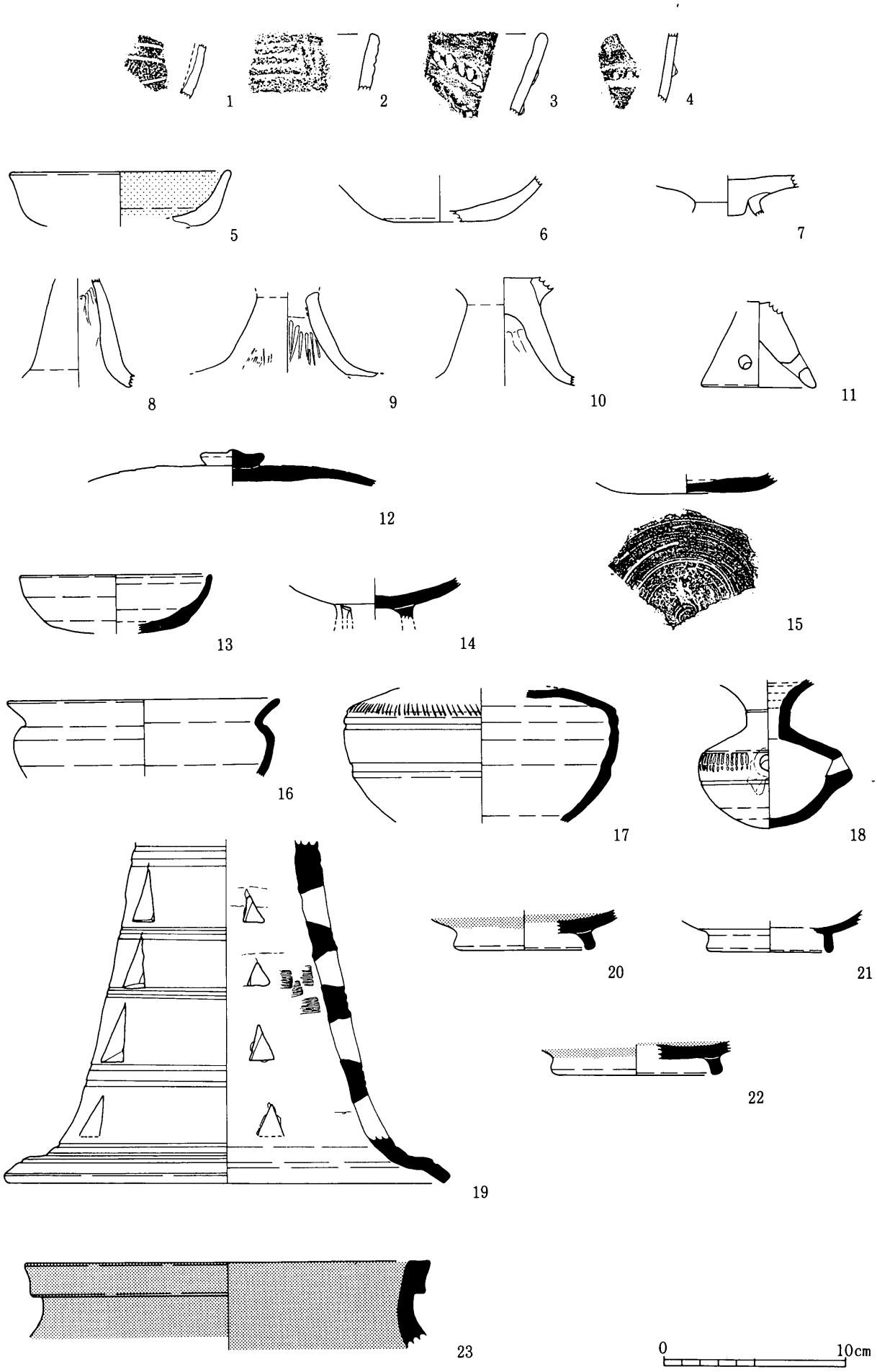
第82図　ＭＧＴ　遺構外



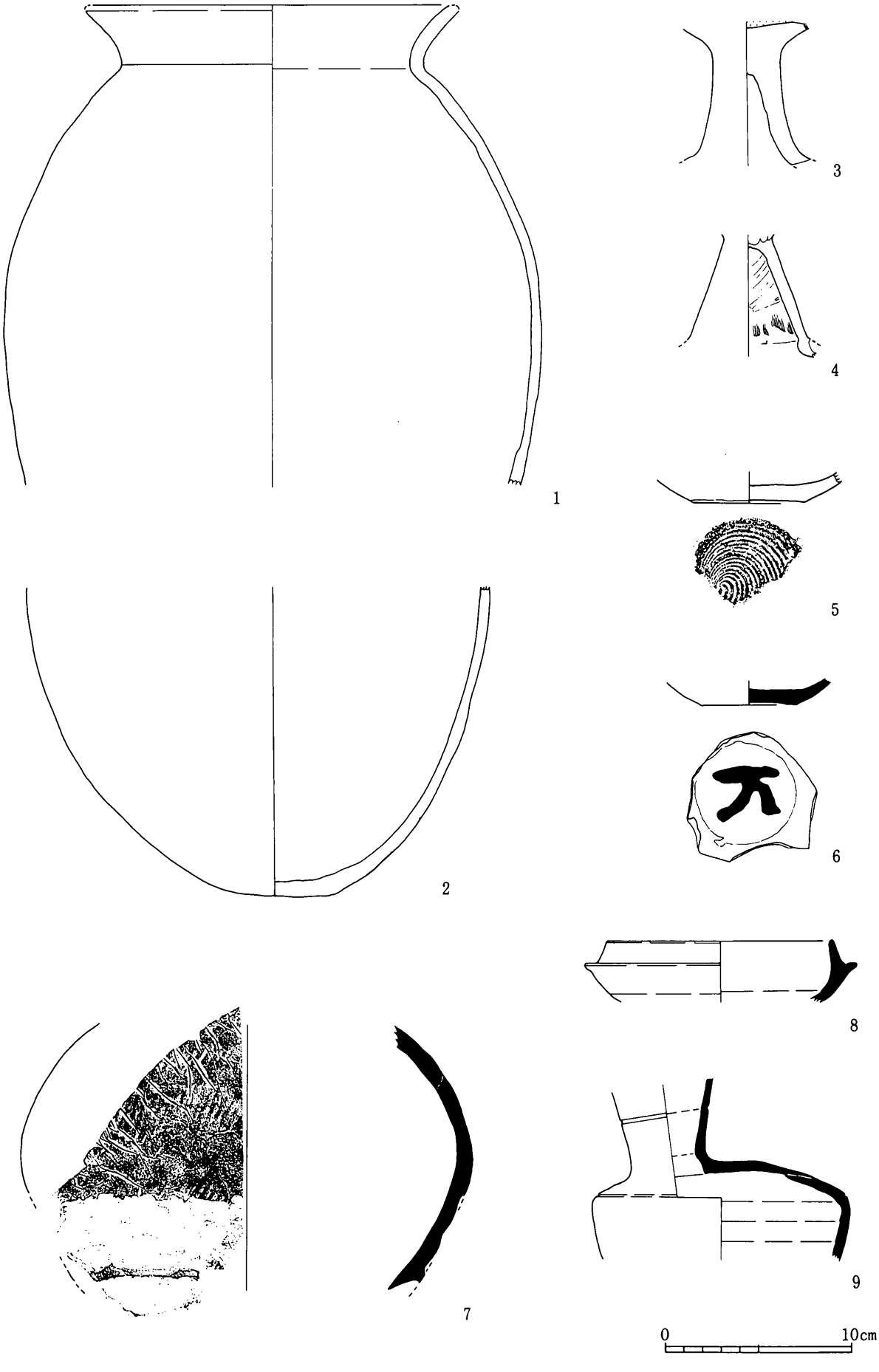
第83図　ＭＧＴ　遺構外



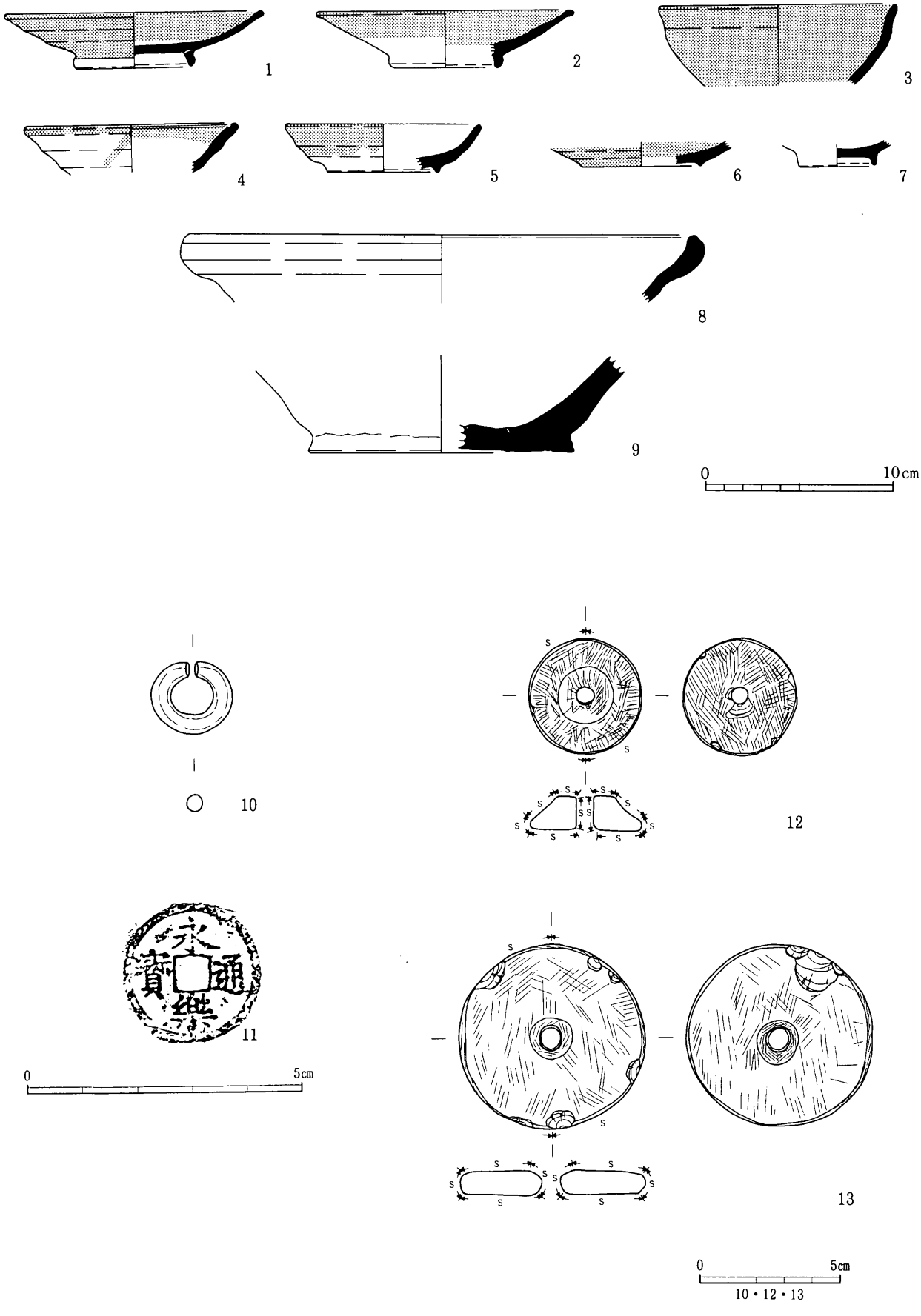
第84図　ＴＫＹ　1 ＳＢ01　2 ＳＫ25　3 ＳＫ29　4 ＳＫ31　5 ＳＫ30　6～10 ＳＢ08
11･12 ＳＭ08　13～20 ＳＤ06　21 ＳＤ11



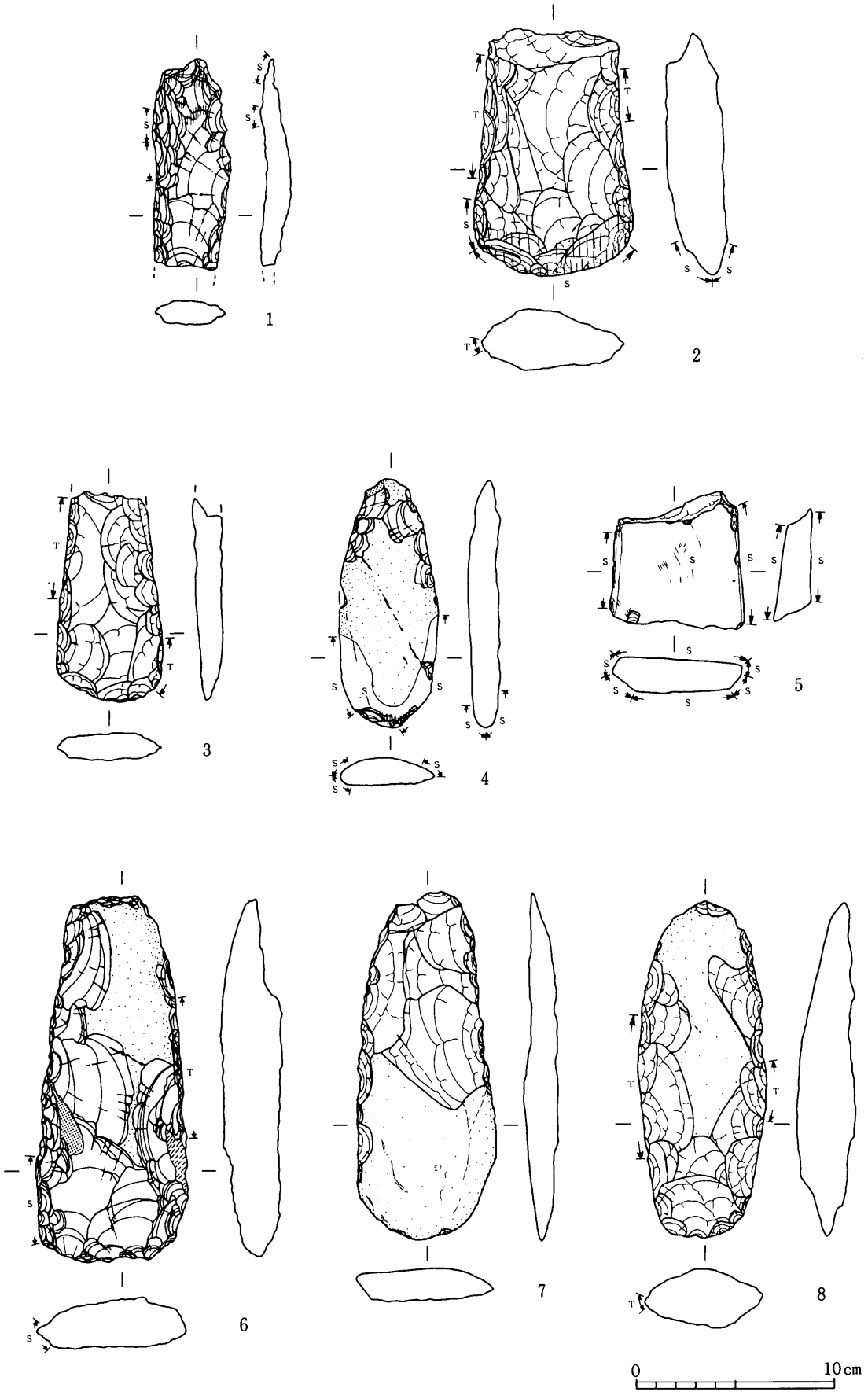
第85図　ＴＫＹ　ＳＤ04



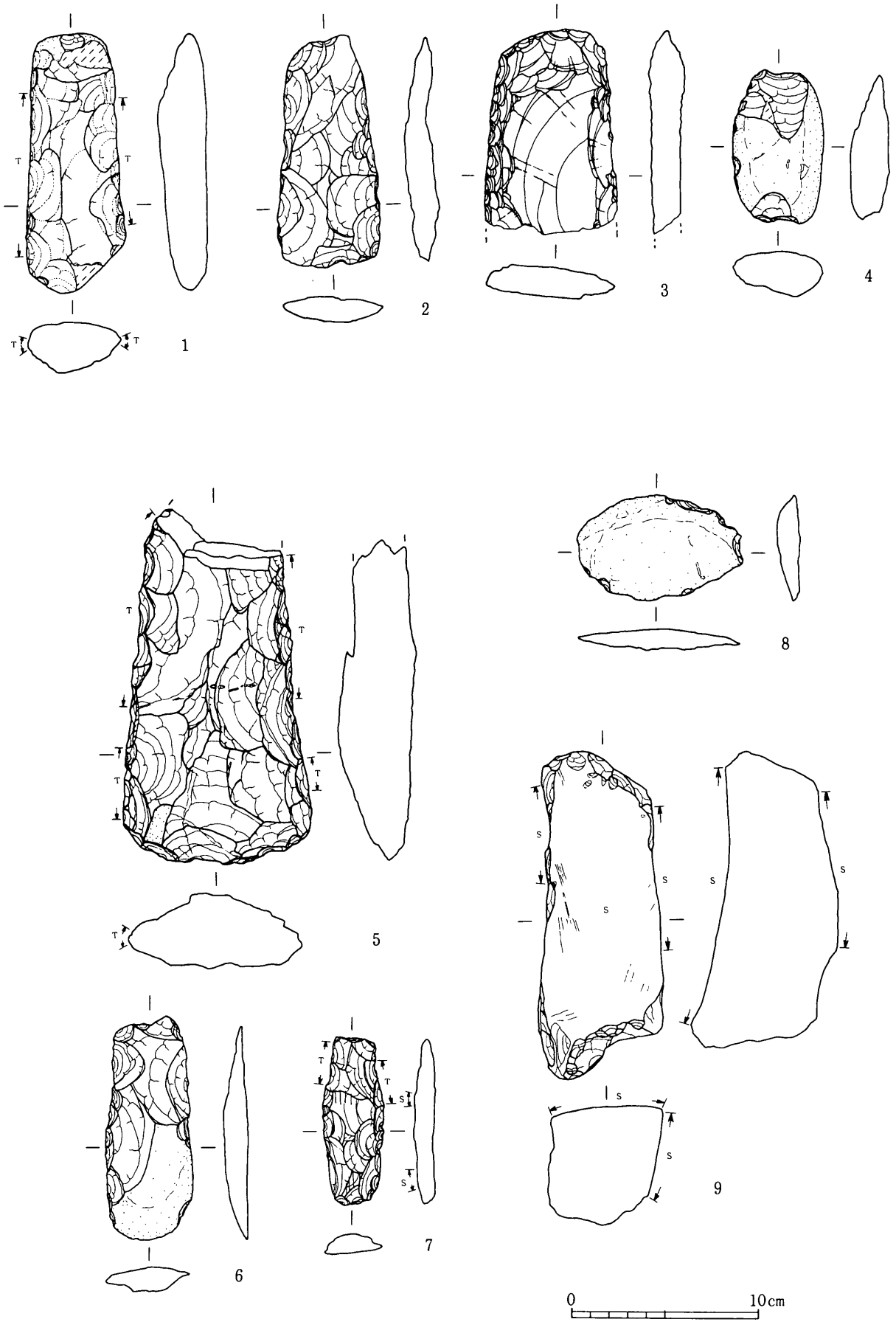
第86図　ＴＫＹ　１・２　ＳＸ01　３～９　遺構外



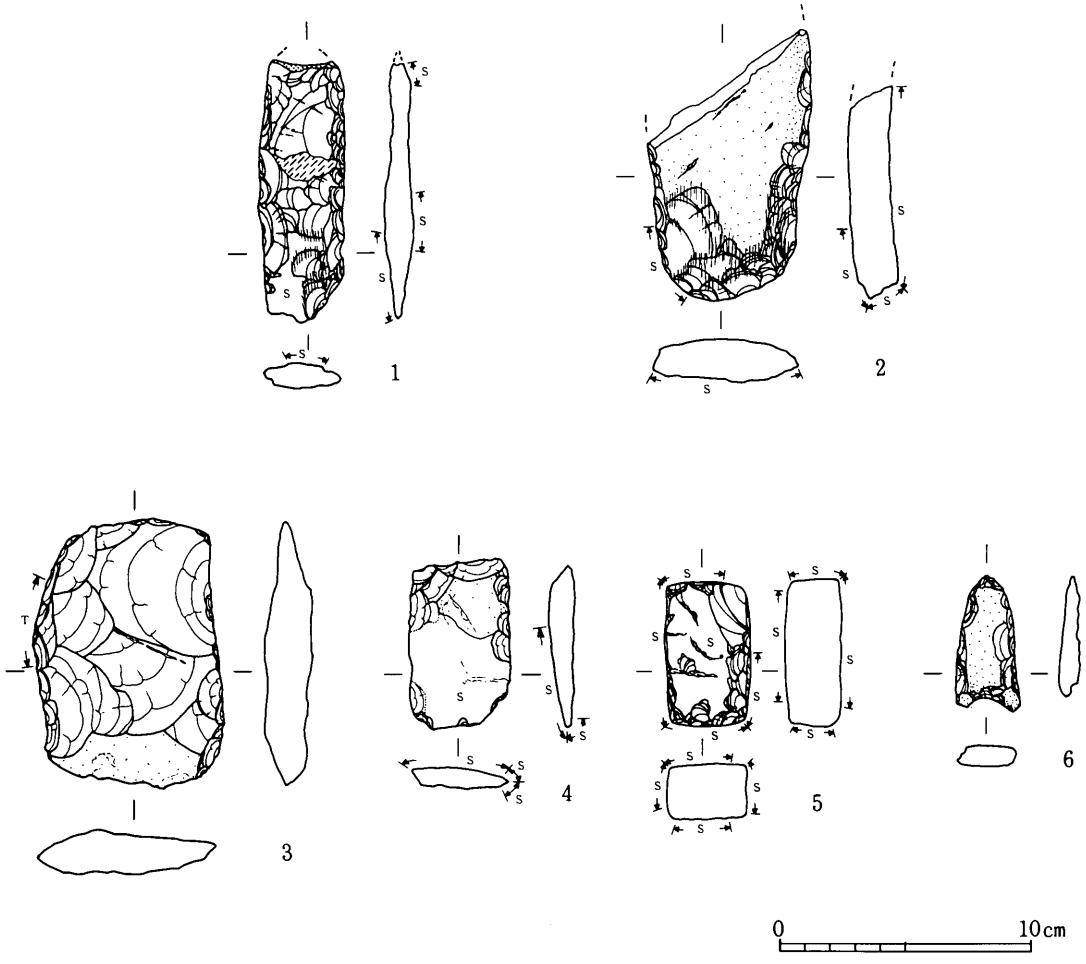
第87図　ＴＫＹ　１～９ 遺構外　10･13 ＳＤ04　11 ＳＢ08　12 ＳＤ06



第88図　ＴＫＹ　1 ＳＭ08　2 ＳＫ21　3 ＳＫ24　4 ＳＫ32　5 ＳＫ36　6～8 ＳＤ04



第89図　ＴＫＹ　１～４　ＳＤ04　５～９　ＳＤ06



第90図　ＴＫＹ　１・６　ＳＤ11　２　ＳＤ12　３～５　遺構外

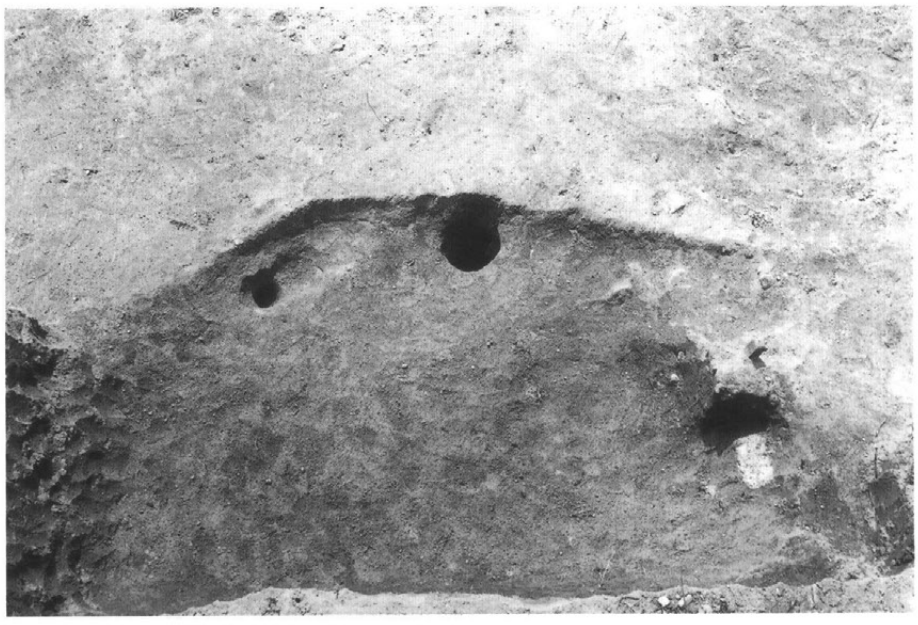
写　真　図　版

上：宮垣外遺跡東側調査区　下：西側調査区

SB02

SB04

SB09

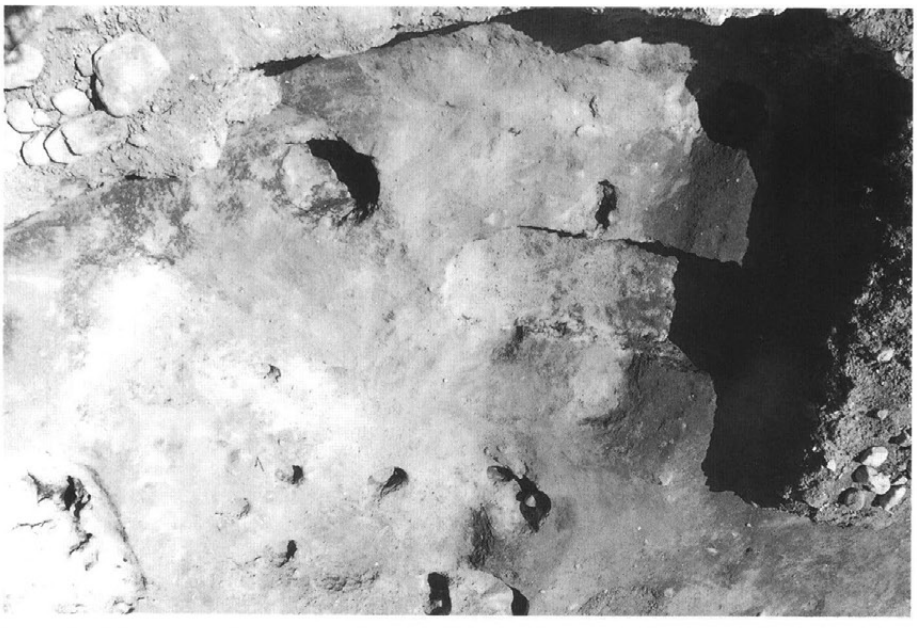


SB10

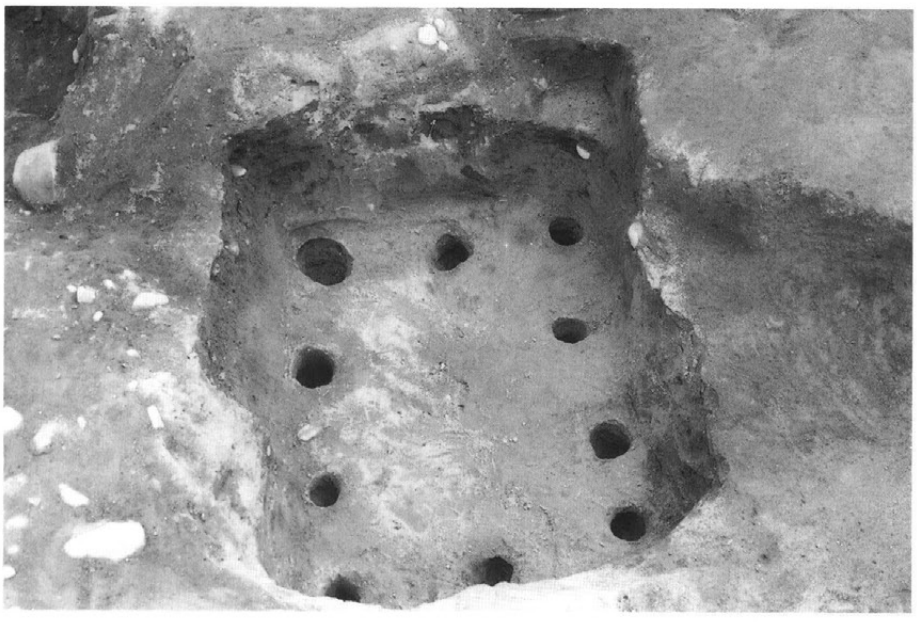
SB12

SB13

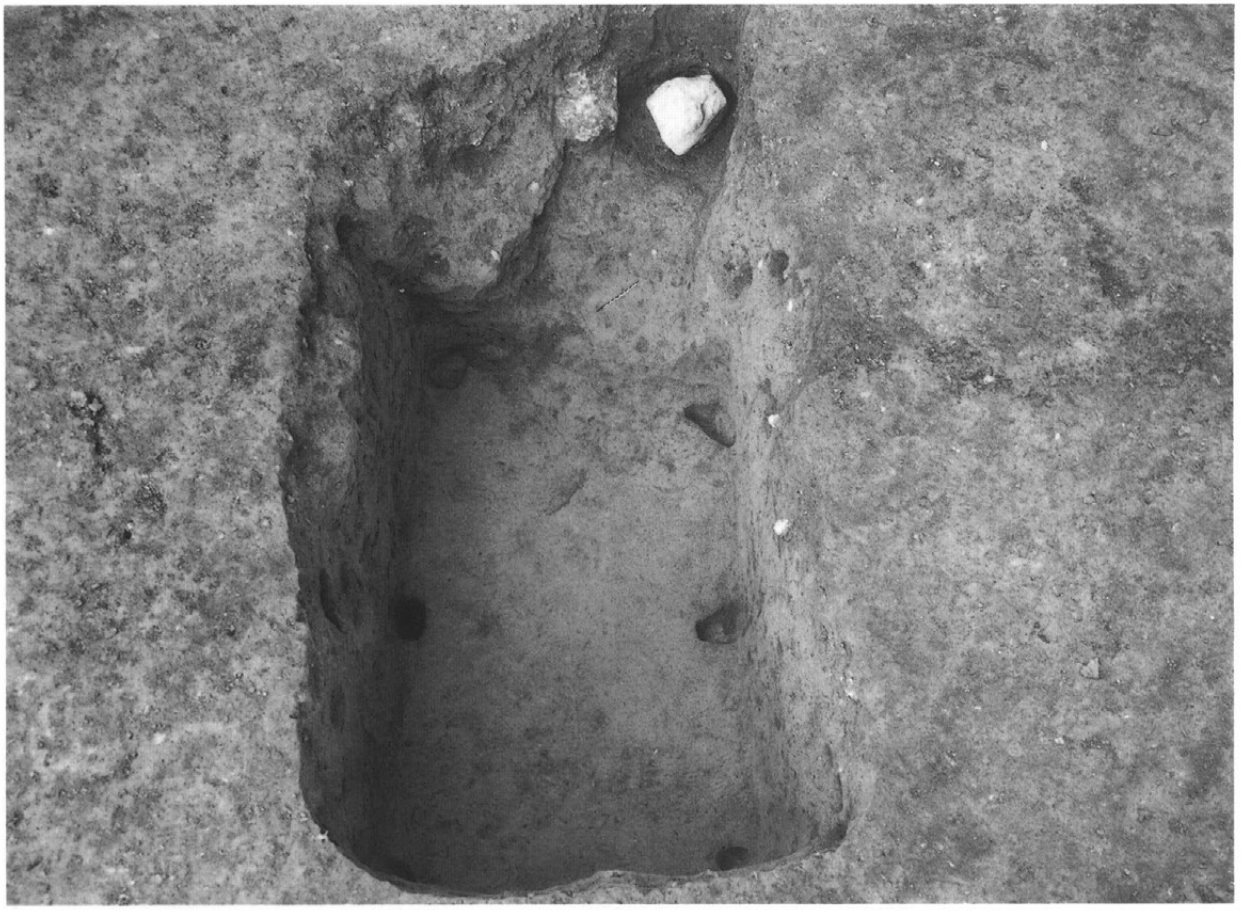
SB14



SB15



SB16



上：SB17
下：SB11

SM03

SM03 東側周溝土層

SM03 出土遺物

ＳＫ64

ＳＫ64 出土馬歯

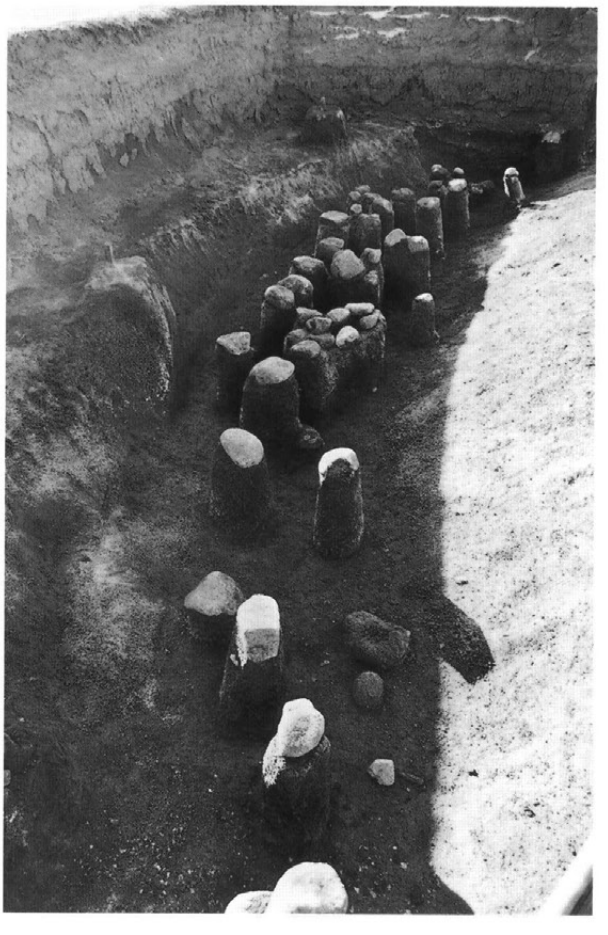
ＳＫ64 出土馬具

左上：ＳＭ04

左中：ＳＭ04 出土遺物 1

左下：ＳＭ04 出土遺物 2

右下：ＳＭ04 南東側

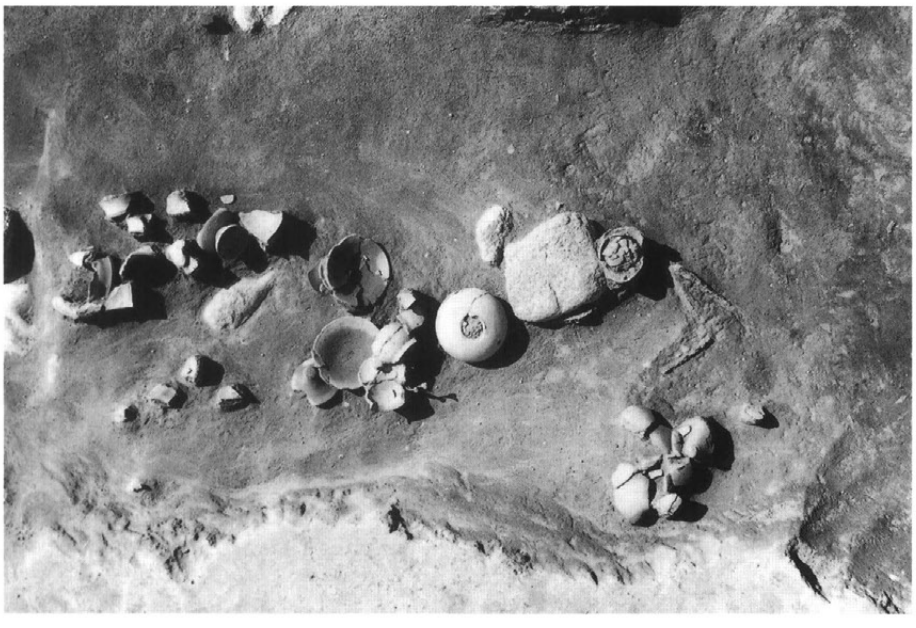


SM06

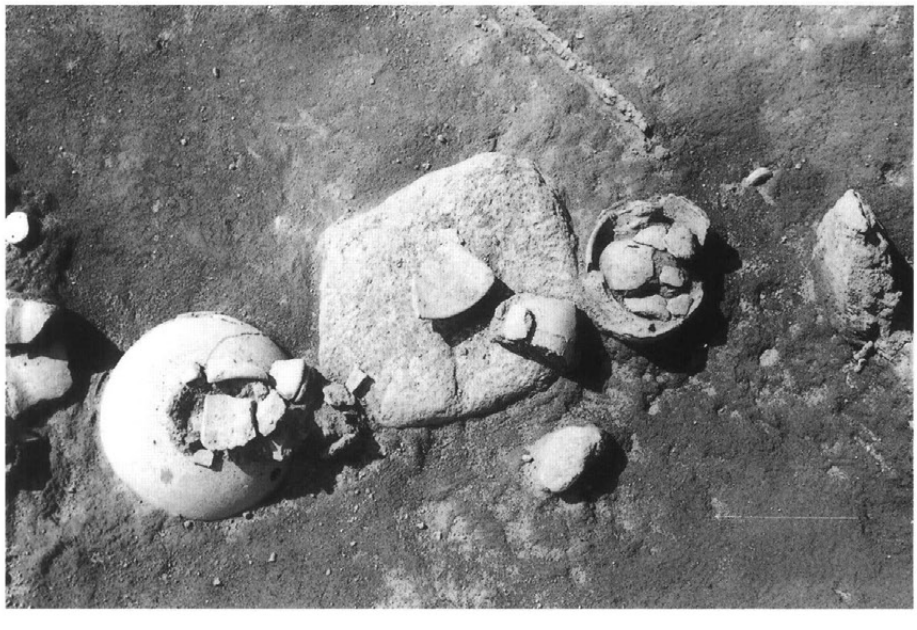
SM08

SM10

SM07



SM07 出土遺物 1

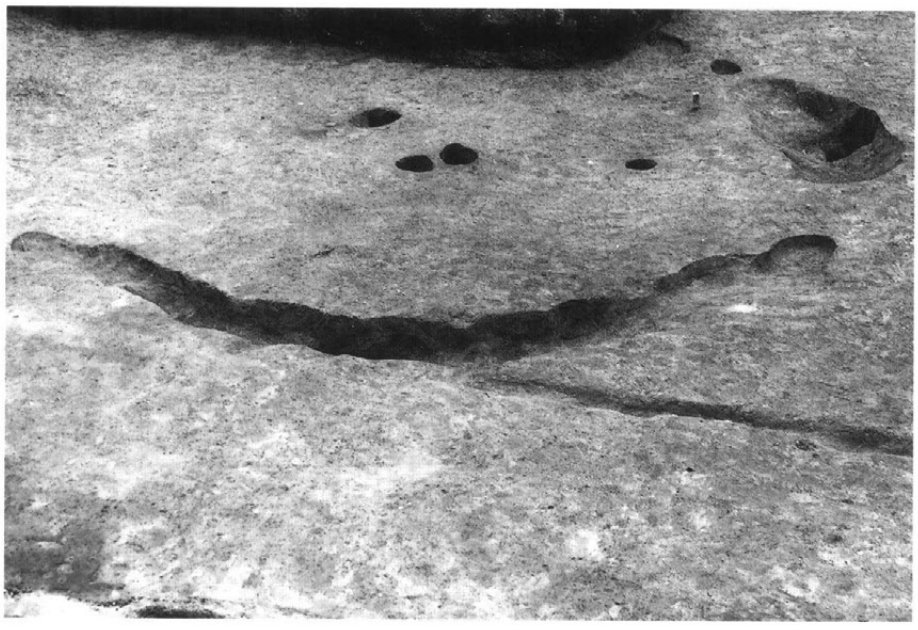


SM07 出土遺物 2

SM07 出土遺物 3

SM07 出土遺物 4

SM07 出土遺物 5

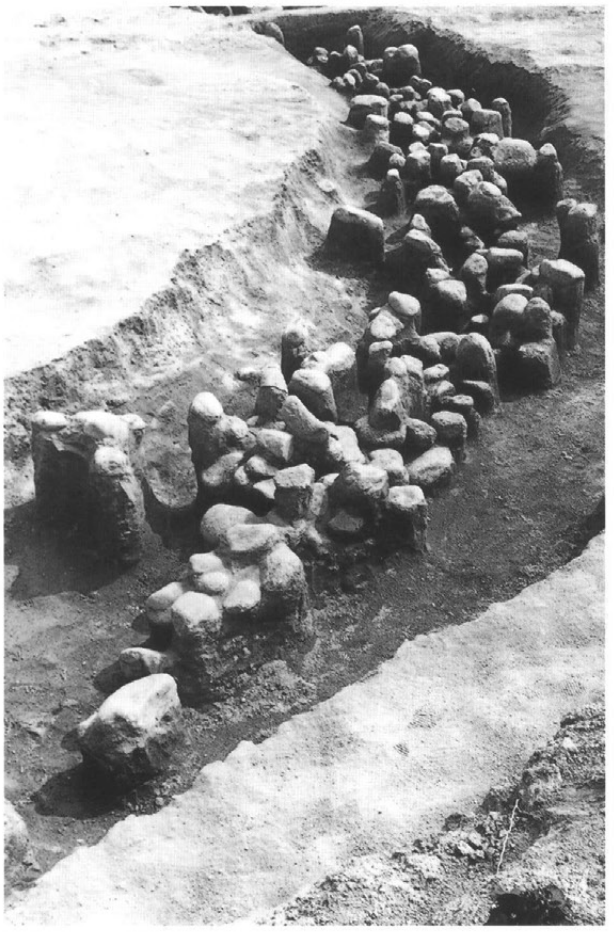


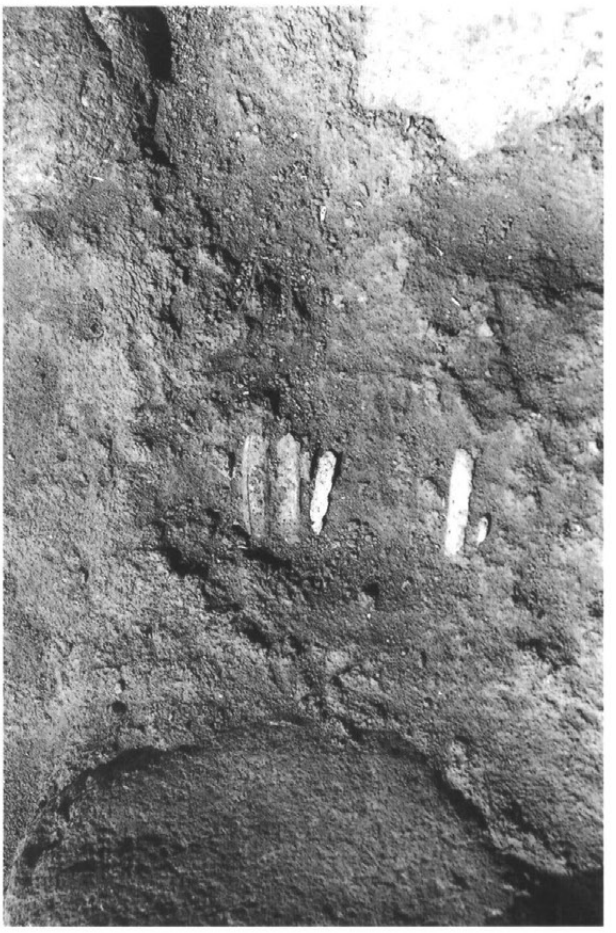
SM11

SM12

SM16

上：SM15　右下：SM15 出土馬歯　左下：SM15 南東側





SM18

SM18 出土遺物 1

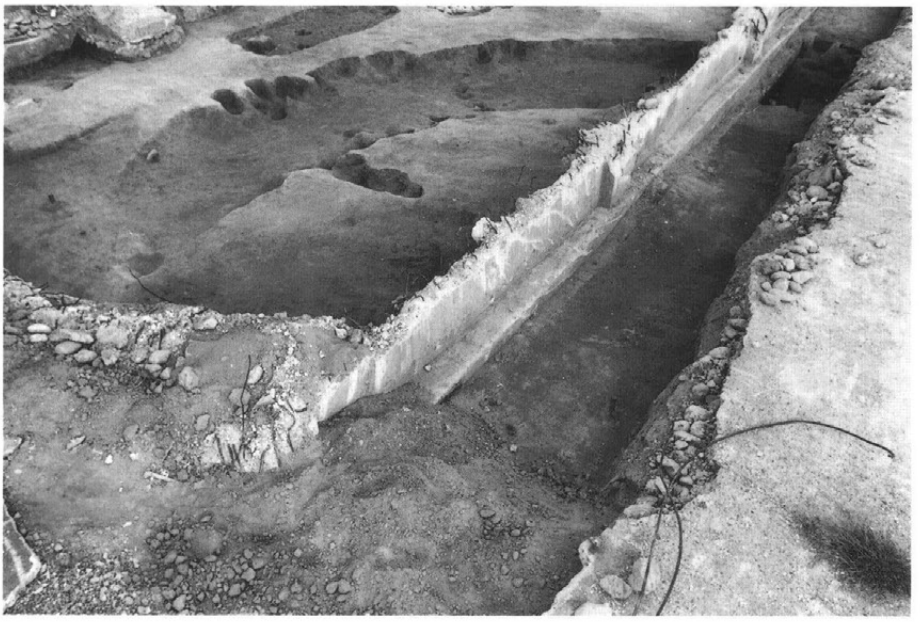
SM18 出土遺物 2

SM17

SM19

SM19 出土遺物

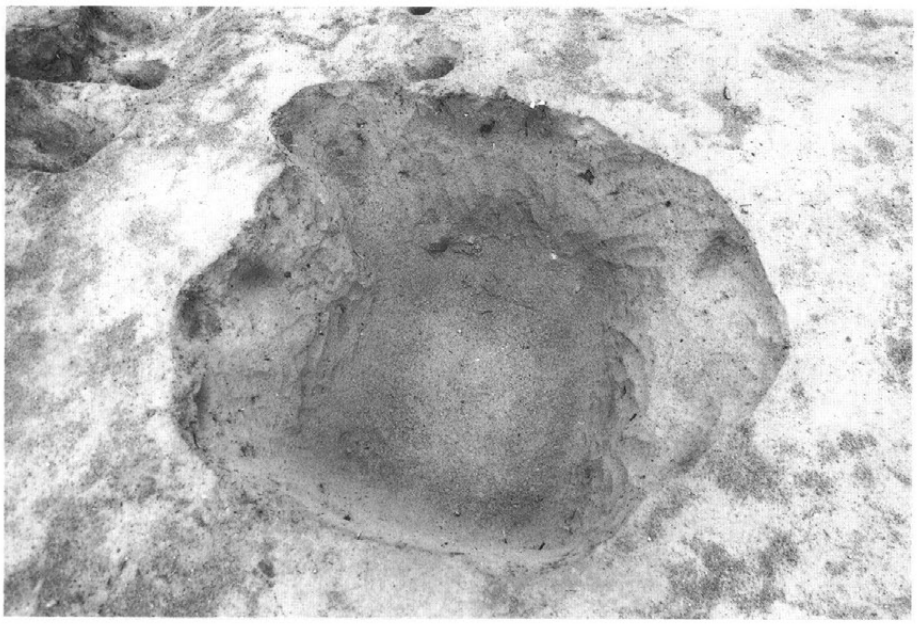
SM20



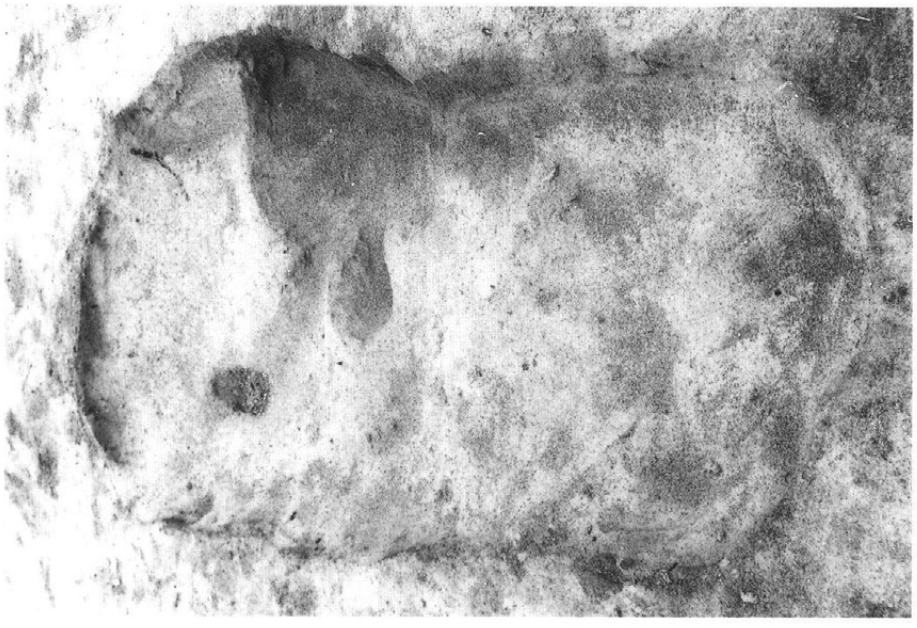
SM21

SM22（つくね塚古墳）

上：SK10 出土馬骨　右下：SK07　左下：SK04



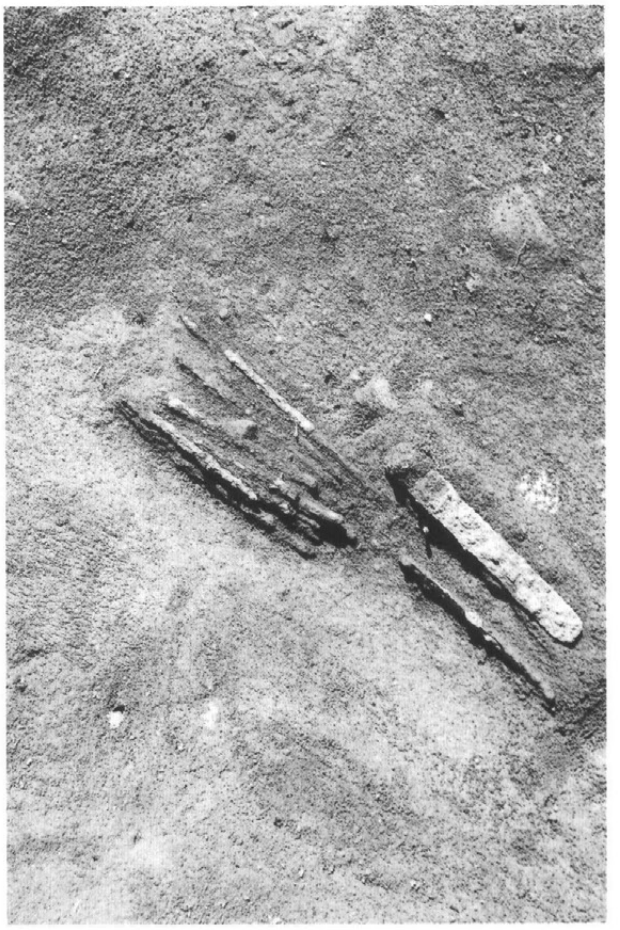
SK12



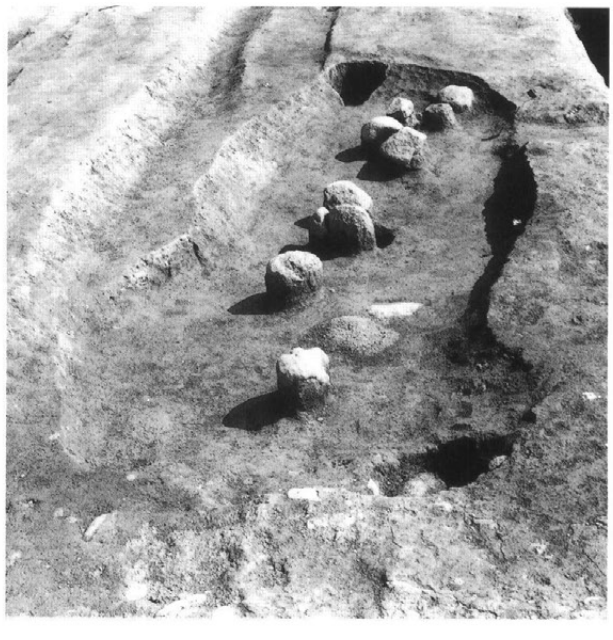
SK13

SK15

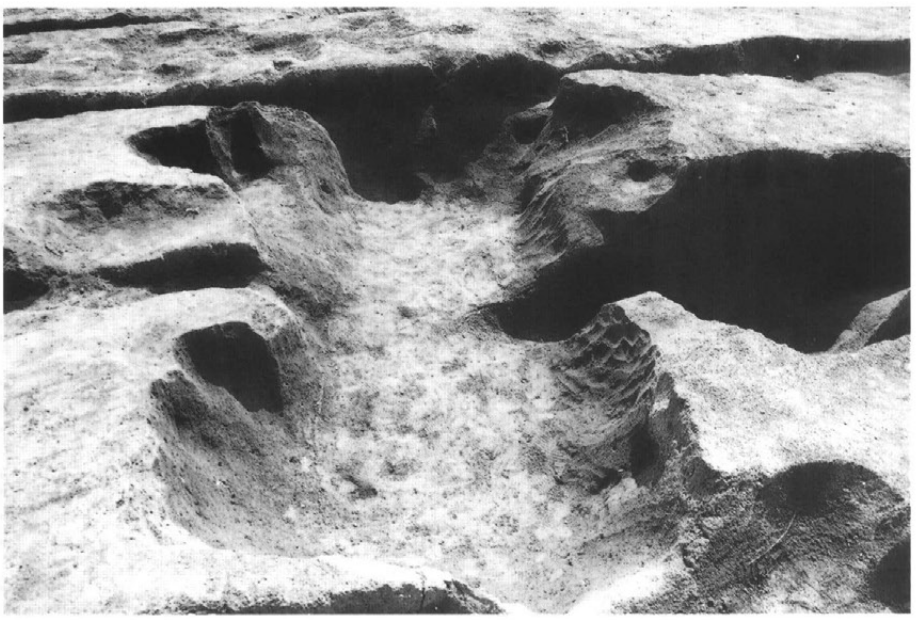
上：ＳＫ11 出土馬歯　右下：ＳＫ18 出土鉄鏃群　左下：ＳＫ18



上：SK19
右下：SK22
左下：SK21



SK23



SK24

SK45

SK46

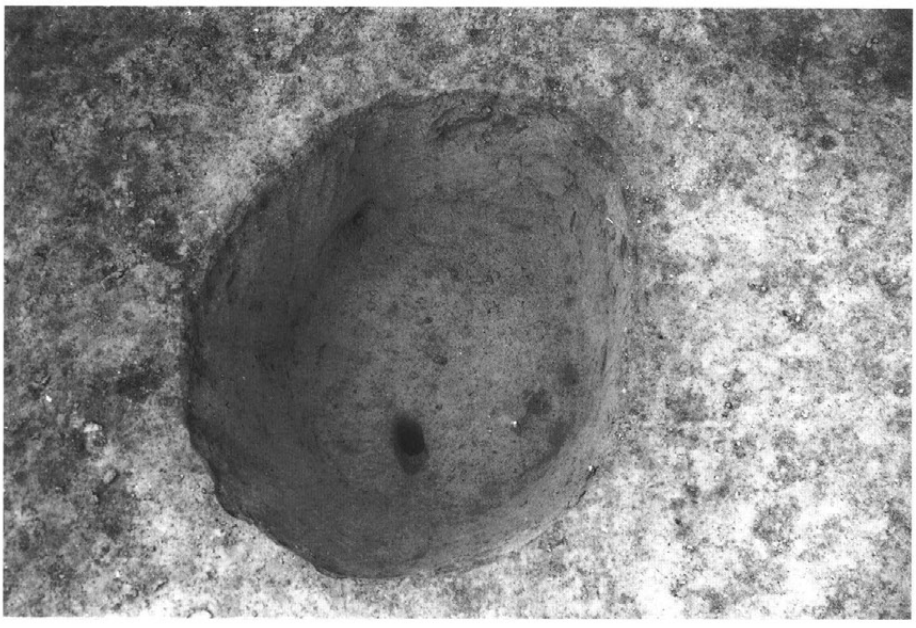
SK47

SK48

SK50

SK55

SK61

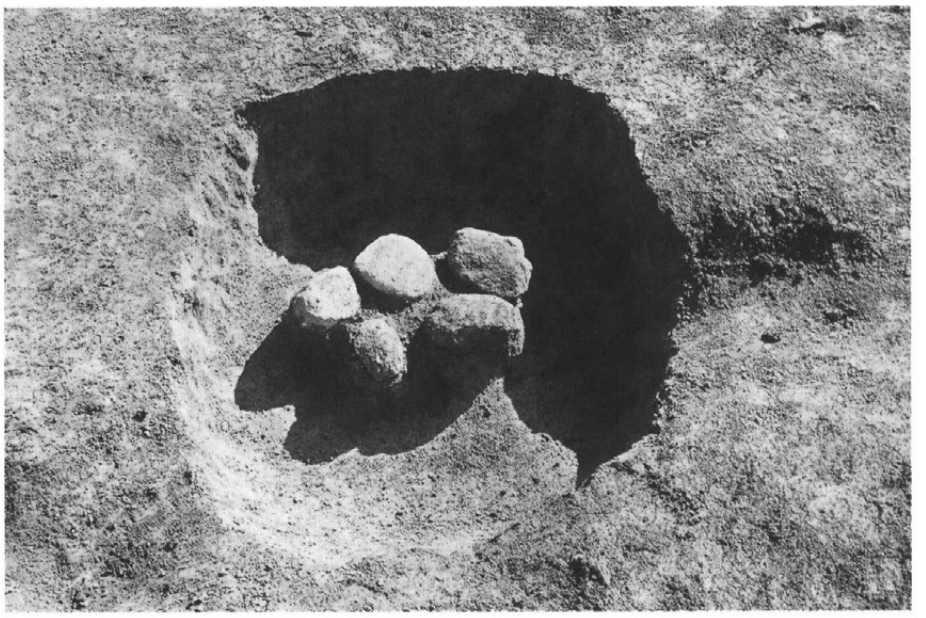


SK65

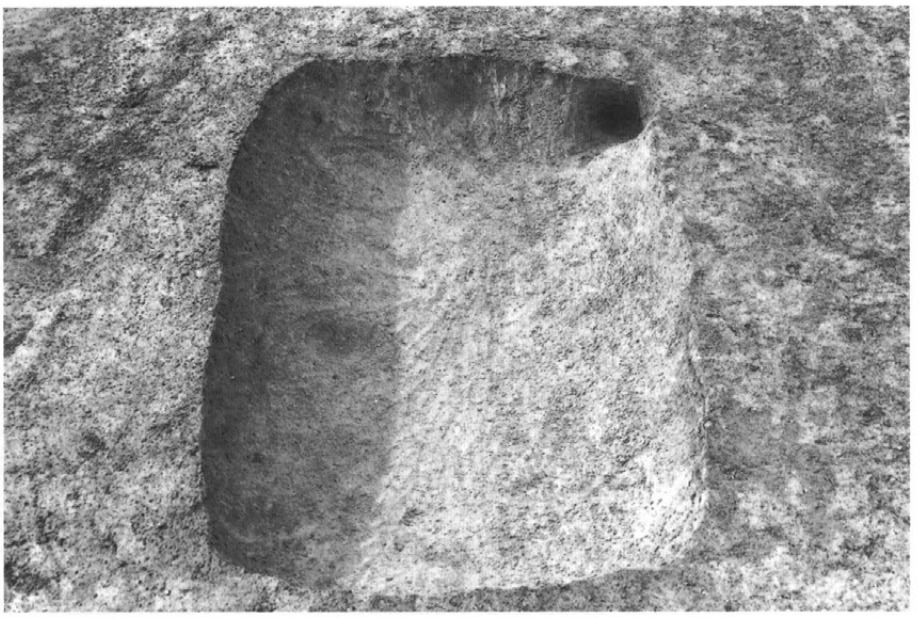
SK66

SK67

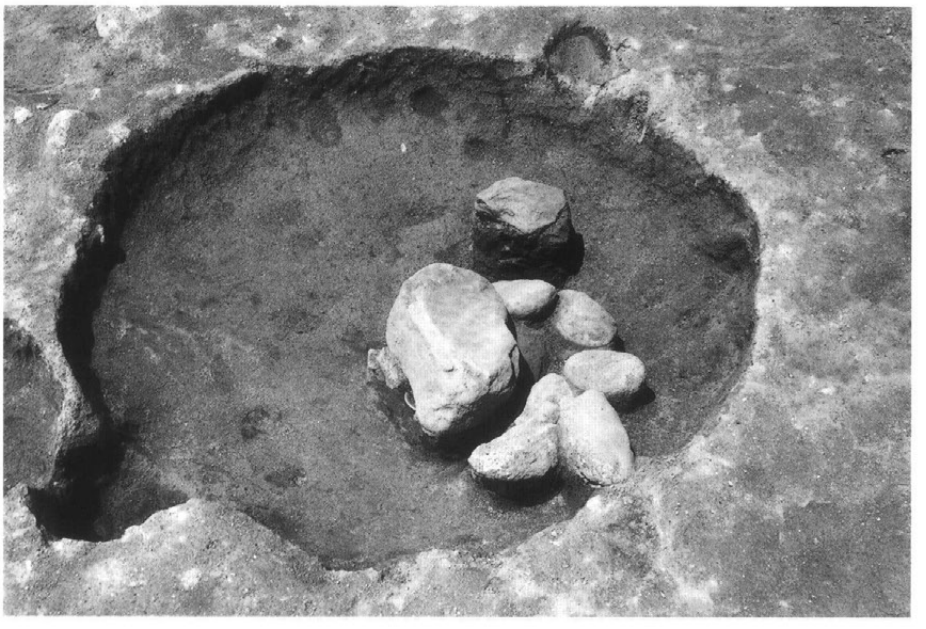
SK68



SK69

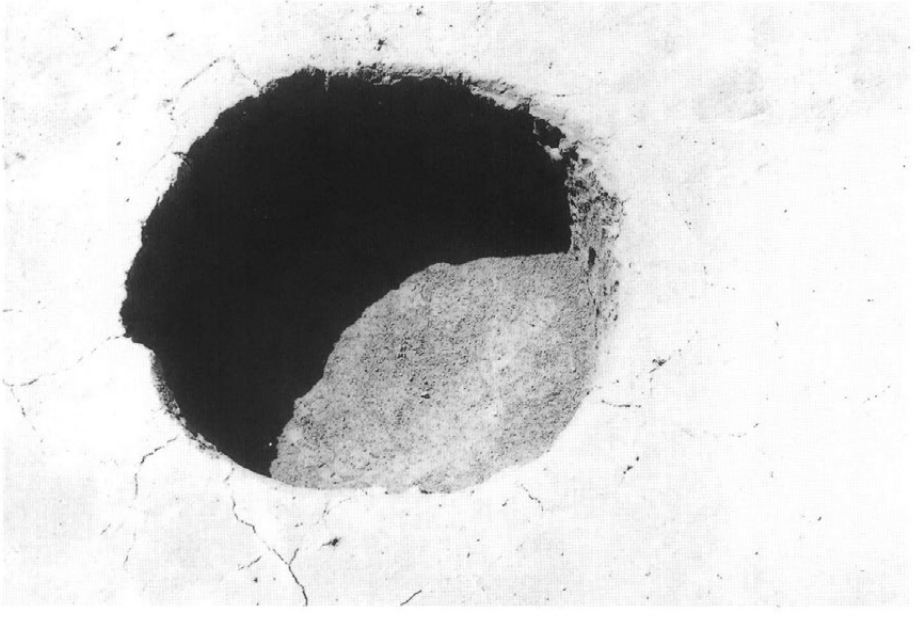


SK74



SK77

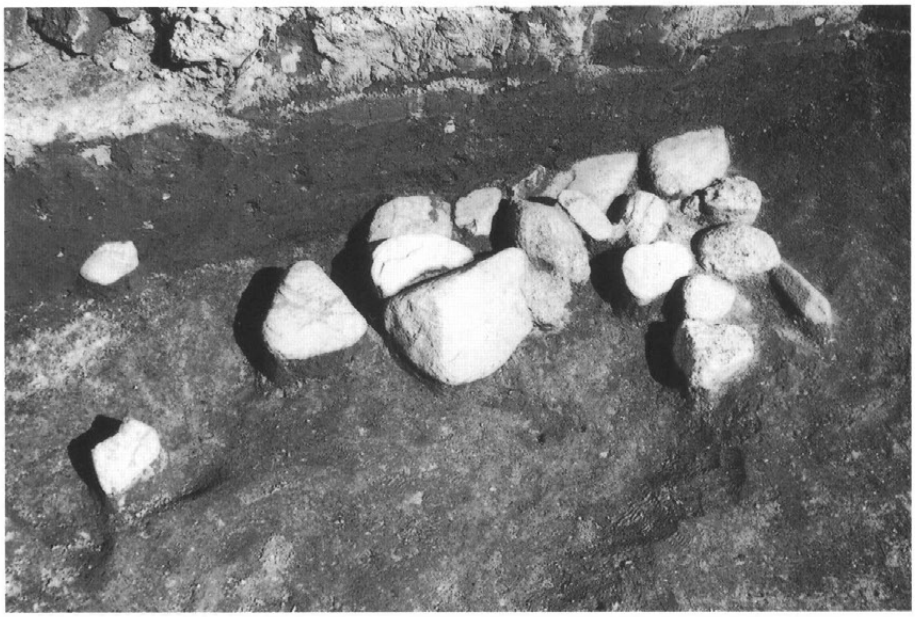
SK77 出土遺物



SK78

SK80

SK81

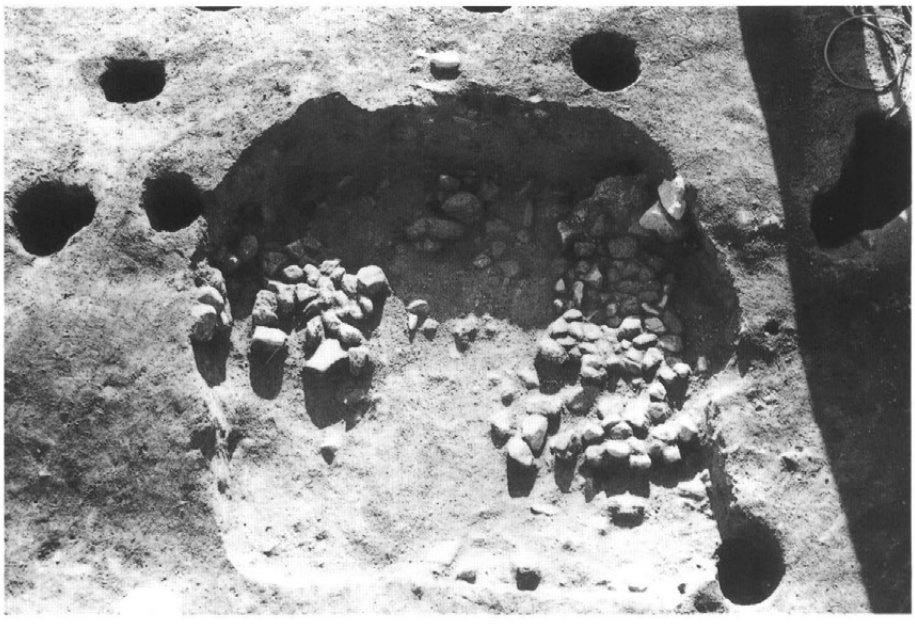


SI01

SD01

SD05

SD09



ＳＢ02

ＳＢ08

ＳＴ04　ＳＴ06　ＳＤ11

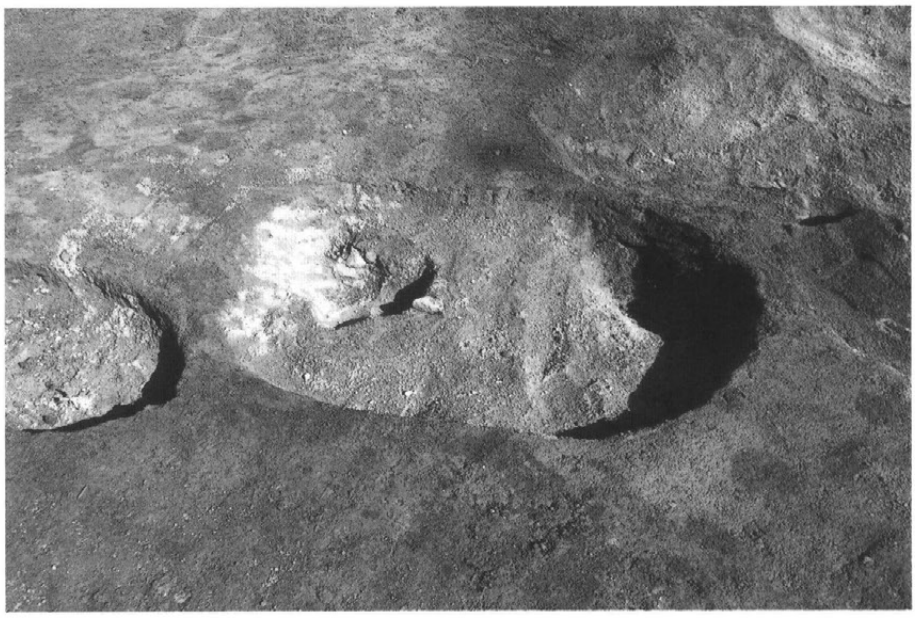
ＳＴ02 近景

ＳＴ02

ＳＭ01　ＳＭ02

ＳＫ01　ＳＫ02　ＳＫ03

ＳＫ01

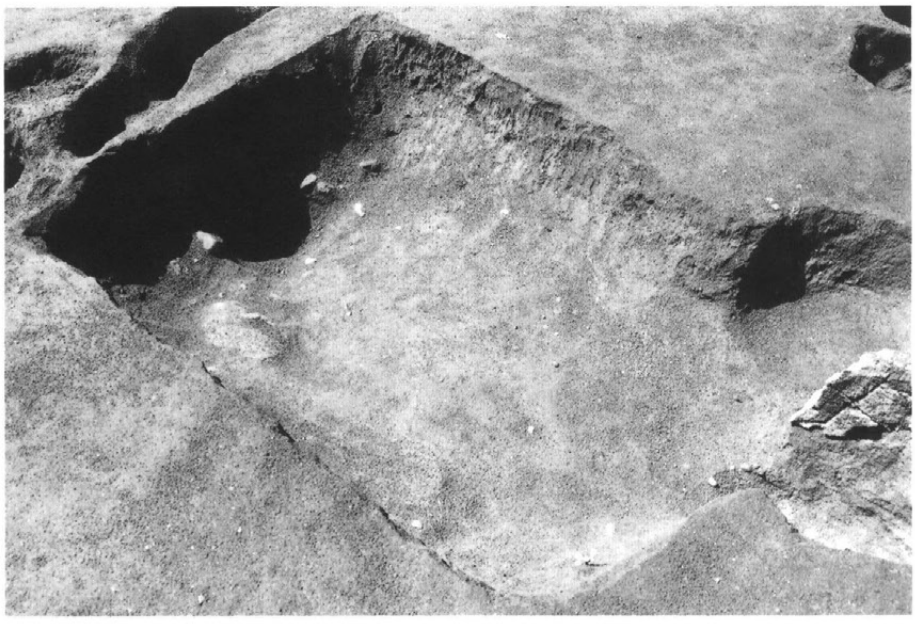


ＳＫ03

SK04

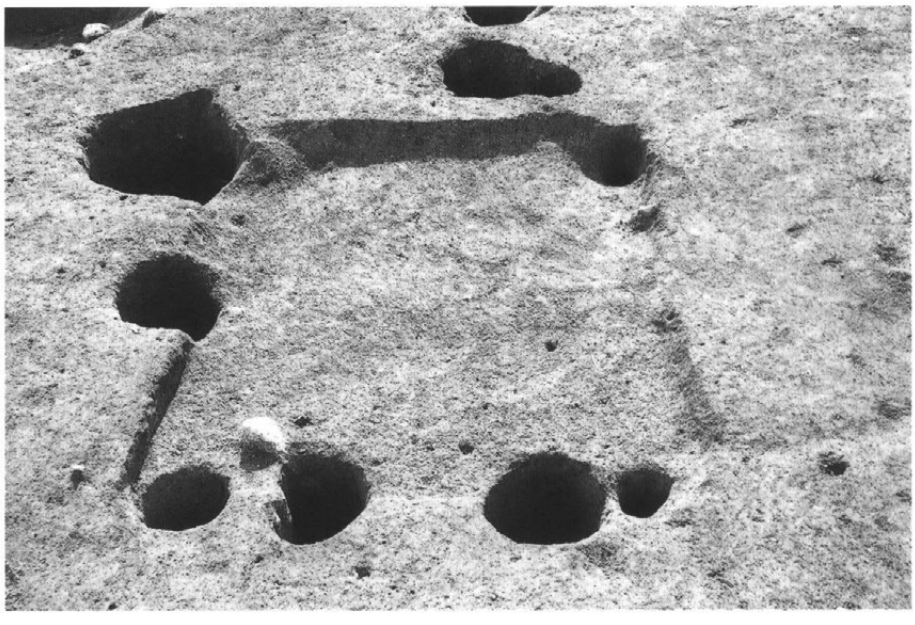
SK09 土層

SK14



SK21

SK27 SK28



SK29